

秋田県文化財調査報告書第513集

ト ク ラ 遺 跡

—成瀬ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

2019・3

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田市白坂（しろざか）遺跡出土の「岩鏡」です。
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7 cm、凝灰岩。

ト ク ラ 遺 跡

—成瀬ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

2019・3

秋 田 県 教 育 委 員 会



1 トクラワ遺跡全景(東側上空から)



1 トクラ遺跡全景(西側上空から)



1 蓋状石器(I類)とその再加工品



1 SQ172配石遺構検出状況(東から)



2 西区遺構外出土土器(X群) 坏と赤彩された高坏

序

本県には、これまでに発見された約 5,000 か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これら埋蔵文化財の保存・継承と積極的活用は、地域社会の歴史や文化に親しみ、理解を深め、ふるさとを愛する人づくりにつながります。

一方、本県を代表する穀倉地帯の雄物川流域では、これまで度重なる洪水被害に見舞われてきたことから、洪水被害の軽減、灌漑用水・水道用水の供給などを目的に、ダム建設や堤防建設などの様々な治水事業が行われています。本教育委員会では、こうした事業との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、成瀬ダム建設事業に先立って平成 27～28 年度に東成瀬村において実施したトクラ遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。調査の結果、縄文時代早期の石器製作跡や後期の配石遺構のほか、縄文時代早～晩期、弥生時代、古代といった幅広い時期の遺物が出土し、栗駒山麓を絶えず人々が行き来した様子が浮かび上がってきました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました国土交通省東北地方整備局成瀬ダム工事事務所、東成瀬村、東成瀬村教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成31年 3 月

秋田県教育委員会

教育長 米 田 進

例言

1 本書は、成瀬ダム建設事業に伴い、平成27～28年度に発掘調査した東成瀬村所在のトクラ遺跡の発掘調査報告書である。調査内容については、すでにその一部が埋蔵文化財センター年報等によって公表されているが、本報告書を正式なものとする。

2 調査要項

遺跡名 トクラ遺跡（とくらいせき）

遺跡略号 9TKR

遺跡所在地 秋田県雄勝郡東成瀬村椿川字トクラ4-1

調査期間 平成27年6月1日～10月29日、平成28年5月16日～10月28日

調査目的 成瀬ダム建設事業

調査面積 9,090㎡（平成27年度 4,540㎡、平成28年度 4,550㎡）

調査主体者 秋田県教育委員会

調査担当者 加藤 朋夏（秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主査） 平成27年度

赤星 純平（秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主事） 平成27・28年度

安田 創（秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主事） 平成28年度

総務担当者 斎藤 憲治（秋田県埋蔵文化財センター総務班 主査）平成27・28年度

調査協力機関 国土交通省東北地方整備局成瀬ダム工事事務所、東成瀬村教育委員会

3 本書に使用した図は、成瀬ダム工事事務所提供の1/1,000工事用図面（第4・9・20・23～25図）、および国土交通省国土地理院発行の25,000分の1地形図「小安温泉」（第2図）、50,000分の1地形図「稲庭」「横手」「焼石岳」「川尻」（第8図）である。

4 遺跡基本層序と遺構土層図中の土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版 標準土色帖」2005年版に拠った。

5 発掘調査においては、掘削作業管理業務を山一建設株式会社に、水準測量・包含杭設置業務を有限会社シビルテックに、空中写真の撮影を株式会社シン技術コンサルに、それぞれ委託した。

6 整理作業においては、石器実測・トレース作業の一部を、株式会社ラング、株式会社アルカに委託した。石器石材鑑定については、9点を株式会社パレオ・ラボに委託した。残りの石器については、委託結果と照合しながら赤星が実体顕微鏡観察を行い、鑑定した。鑑定結果は遺物観察表に示した。その他の理化学的分析は株式会社バリノ・サーヴェイに委託し、その結果報告を掲載した。

7 本報告に関する遺物整理は、東区出土品を加藤が、西区土器を安田が、西区石器を赤星が担当した。

8 本書の編集は加藤が担当した。執筆分担は以下の通りである。

加藤：第1章（第2節平成28年度分を除く）、第3章第1節、第3節、第5章（記名部分）

赤星：第1章第2節（平成28年度分）、第2章第1節、第3章第4節1・2（記名部分）・4（記名部分）、第5章（記名部分）

安田：第2章第2節、第3章第2節、第4節2（記名部分）・3・4（記名部分）、第5章（記名部分）

9 発掘調査及び整理作業において国土交通省東北地方整備局成瀬ダム工事事務所ならびに東成瀬村

教育委員会から御援助・御協力をいただいた。また、本報告書を作成するにあたり御指導・御助言を賜った以下の方々にして感謝申し上げます。

秋田県立博物館 小澤清男 児玉準 小林克 佐々木由香 島田祐悦 高橋静歩 中村由克
根岸洋 米田寛 (五十音順、敬称略)

凡 例

- 1 本報告書に掲載した平面図の方位は、世界測地系平面直角座標第X系座標北である。平成25年の国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所による3級基準点測量成果に基づく。真北との偏角は、西偏0° 03' 47" である。
- 2 遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、検出順に連番とした。これらの中には精査と整理作業の過程で欠番としたものもある。遺構の種類に用いた略記号は下記の通りである。
SB 掘立柱建物跡 SQ 配石遺構 SQN 石囲炉 SK 土坑 SD 溝跡
SN 焼土遺構・地床炉 SXQ 石器集中区 SKP 柱穴様ピット
- 3 土層番号は、遺跡基本層位をローマ数字で、遺構埋土層等を算用数字で表記した。
- 4 遺構図および遺物図の縮尺は、以下のとおりである。ただし、レイアウトの都合上、縮尺を変更したのものもある。各図にはスケールバーを付して縮尺を表示した。
遺構図：SB…1/60 SK…1/40 SN…1/40、1/20 SQ…1/40、1/20 SD…1/60、1/40
遺物図：土器…1/3 剥片石器類・磨製石斧・打製石斧…1/2 石皿…1/4 その他の礫石器類…1/3
土製品・石製品（石棒・石刀・石冠を除く）…1/2
- 5 挿图中的の遺物番号は、各図ごとに土器・石器を問わず通し番号（算用数字）を付した。また、同一個体と考えられる土器等については1a、1bのように数字と小文字アルファベットを合わせて表示した。
- 6 挿图中的の遺物出土状況、付図3の遺物分布図および写真図版に付した番号は挿図番号と一致させ、例えば第1図1を1-1のように表記した。またTPは分布調査の試掘坑を、TRは確認調査のトレンチを表す。
- 7 挿図に使用した網掛け等については、挿図ごとに凡例を付した。土器実測図では、アスファルト付着範囲、赤彩範囲、石器実測図ではアスファルト付着範囲、磨り範囲などに網掛けをしている。なお、本書では、黒色付着物を一括して「アスファルト」と記している。
- 8 土器実測図の断面図端部では、輪積み部で剥がれたと判断できた部分は断面形状をそのまま描き、そうとは判断できない部分にはM字状の記号を用いることで両者を描き分けた。
- 9 土器の破片実測図は、内外面ともに拓本を使用した場合は、左から外面－断面－内面の順に配置した。内面上部に沈線が巡るもの、内面に顕著な輪積み痕跡を確認できるものについては、外面拓本と断面の間に簡略に表現した。
- 10 土器実測図では炭化物の付着範囲を、石錐の実測図では使用による摩耗範囲を、断面図に示した。
- 11 古代の土器実測図では、内面の網掛けで内面黒色処理が施されていることを表現した。
- 12 遺物写真の縮尺は、掲載した挿図のスケールと概ね一致するように調整した。一致していないものには「縮尺不同」などと表記した。

目次

巻頭図版

序

| | |
|-------------------------------|-----|
| 例言 | ii |
| 凡例 | iii |
| 目次 | iv |
| 挿図目次 | v |
| 表目次 | ix |
| 図版目次 | x |
| 第1章 調査の経過 | 1 |
| 第1節 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節 調査の経過 | 3 |
| 第3節 整理作業の経過 | 7 |
| 第2章 遺跡の位置と環境 | 8 |
| 第1節 地理的環境 | 8 |
| 第2節 歴史的環境 | 11 |
| 1 文献にみる周辺の歴史 | 11 |
| 2 周辺の遺跡 | 11 |
| 第3章 調査の方法と成果 | 17 |
| 第1節 調査の方法 | 17 |
| 1 発掘調査 | 17 |
| 2 整理作業 | 18 |
| 3 遺物の分類 | 20 |
| 第2節 基本層序 | 28 |
| 第3節 東区の調査 | 35 |
| 1 概要 | 35 |
| 2 縄文時代の遺構と遺物 | 36 |
| (1) 土坑 | 36 |
| (2) 溝跡 | 38 |
| (3) 石器集中区 | 39 |
| (4) 出土遺物 | 42 |
| 3 所屬時期が不明な遺構 | 82 |
| 4 東区小括 | 86 |
| 第4節 西区の調査 | 95 |
| 1 概要 | 95 |
| 2 縄文～弥生時代の遺構と遺物 | 97 |
| (1) 掘立柱建物跡 | 97 |
| (2) 焼土遺構、地床跡 | 97 |
| (3) 石囲炉 | 99 |
| (4) 配石遺構 | 101 |
| (5) 土坑 | 102 |
| (6) 溝跡 | 114 |
| (7) 柱穴様ビット | 116 |
| (8) 遺構外出土遺物 | 117 |
| 3 古代以降の遺構と遺物 | 205 |
| (1) 焼土遺構 | 205 |
| (2) 遺構外出土遺物 | 205 |
| 4 西区小括 | 207 |
| 第4章 理化学的分析 | 227 |
| 第1節 放射性炭素年代測定 | 227 |
| 1 東区出土試料に対する分析 | 227 |
| 2 西区出土試料に対する分析 | 229 |
| 第2節 火山灰同定 | 232 |
| 1 東区出土試料に対する分析 | 232 |
| 2 西区出土試料に対する分析 | 234 |
| 第3節 古植生に関する分析 (花粉・植物珪酸体分析) | 239 |
| 第4節 白色層の成因に関する分析 | 243 |
| 第5節 土器付着物の安定同位体比分析 | 254 |
| 第6節 黒曜石産地推定分析 | 259 |
| 第5章 総括 | 264 |

報告書抄録

挿 図 目 次

| | | | | | |
|------|----------------------------------|----|------|---|----|
| 第1図 | トクラ遺跡位置図…………… | 1 | 第36図 | 東区出土剥片石器類器種別分布図(3)…… | 50 |
| 第2図 | トクラ遺跡周辺地形図…………… | 2 | 第37図 | 東区：SXQ石器集中区出土剥片石器類(1) 石鏃、有掘石器、小形篋状石器…………… | 51 |
| 第3図 | 成瀬ダム計画貯水池平面図…………… | 3 | 第38図 | 東区：SXQ石器集中区出土剥片石器類(2) 小形篋状石器…………… | 52 |
| 第4図 | トクラ遺跡調査範囲図…………… | 4 | 第39図 | 東区：SXQ石器集中区出土剥片石器類(3) トランシェ様石器、篋状石器ⅠA類…………… | 53 |
| 第5図 | 遺跡周辺の地形区分図…………… | 8 | 第40図 | 東区：SXQ石器集中区出土剥片石器類(4) 篋状石器ⅠA・ⅠB類…………… | 54 |
| 第6図 | 遺跡周辺の地形分類図…………… | 9 | 第41図 | 東区：SXQ石器集中区出土剥片石器類(5) 篋状石器ⅠB類…………… | 55 |
| 第7図 | 遺跡周辺の表層地質図…………… | 10 | 第42図 | 東区：SXQ石器集中区出土剥片石器類(6) 篋状石器ⅠB・ⅠC・ⅡA・ⅡB類…………… | 56 |
| 第8図 | トクラ遺跡と周辺遺跡位置図…………… | 12 | 第43図 | 東区：SXQ石器集中区出土剥片石器類(7) 篋状石器ⅠE・ⅡB・ⅡC類…………… | 57 |
| 第9図 | トクラ遺跡グリッド及び確認調査 トレンチ配置図…………… | 19 | 第44図 | 東区：SXQ石器集中区出土剥片石器類(8) 両面調整石器、両面調整石器未成品…………… | 58 |
| 第10図 | 石鏃分類図…………… | 23 | 第45図 | 東区：SXQ石器集中区出土剥片石器類(9) 両面調整石器未成品、石鏃…………… | 59 |
| 第11図 | 石匙分類図…………… | 24 | 第46図 | 東区：SXQ石器集中区出土剥片石器類(10) スクレイパーⅠ・Ⅱ・Ⅲ類…………… | 60 |
| 第12図 | 小形篋状石器分類図…………… | 24 | 第47図 | 東区：SXQ石器集中区出土剥片石器類(11) スクレイパーⅣ類、UF、素材剥片…………… | 61 |
| 第13図 | 篋状石器分類図…………… | 25 | 第48図 | 東区：SXQ石器集中区出土剥片石器類(12) 石核…………… | 62 |
| 第14図 | 両面調整石器未成品分類図…………… | 25 | 第49図 | 東区：SXQ石器集中区出土剥片石器類(13) 石核、接合資料…………… | 63 |
| 第15図 | 石鏃分類図…………… | 26 | 第50図 | 東区：SXQ石器集中区出土剥片石器類(14) 接合資料…………… | 64 |
| 第16図 | スクレイパー類分類図…………… | 26 | 第51図 | 東区：SXQ石器集中区出土剥片石器類(15) 接合資料…………… | 65 |
| 第17図 | 石核分類図…………… | 27 | 第52図 | 東区：SXQ石器集中区出土剥片石器類(16) 接合資料…………… | 66 |
| 第18図 | 敲磨器類分類図…………… | 27 | 第53図 | 東区：SXQ石器集中区出土剥片石器類(17) 接合資料…………… | 67 |
| 第19図 | トクラ遺跡基本層序模式図…………… | 29 | 第54図 | 東区：遺構外出土剥片石器類(1) 石鏃、石匙、小形篋状石器…………… | 68 |
| 第20図 | トクラ遺跡地形概要及び基本土層図 作成位置…………… | 30 | 第55図 | 東区：遺構外出土剥片石器類(2) トランシェ様石器…………… | 69 |
| 第21図 | 東区基本土層図…………… | 31 | | | |
| 第22図 | 西区基本土層図…………… | 32 | | | |
| 第23図 | トクラ遺跡遺構配置図(全体)…………… | 33 | | | |
| 第24図 | トクラ遺跡東区遺構配置図…………… | 34 | | | |
| 第25図 | 東区：縄文時代の遺構と遺物配置図…………… | 35 | | | |
| 第26図 | 東区：SK15・74土坑、SD93溝跡…………… | 36 | | | |
| 第27図 | 東区：SK82土坑…………… | 37 | | | |
| 第28図 | 東区：SXQ石器集中区遺物 取り上げ状況…………… | 38 | | | |
| 第29図 | 東区：SXQ石器集中区遺物ドット及び 接合状況図…………… | 39 | | | |
| 第30図 | 東区出土土器分布図…………… | 40 | | | |
| 第31図 | 東区：SXQ石器集中区出土土器…………… | 41 | | | |
| 第32図 | 東区：遺構外出土土器…………… | 42 | | | |
| 第33図 | 東区出土剥片石器類器種別分布図…………… | 44 | | | |
| 第34図 | 東区出土剥片石器類器種別分布図(1)…… | 48 | | | |
| 第35図 | 東区出土剥片石器類器種別分布図(2)…… | 49 | | | |

| | | | |
|------|---|-------|---|
| 第56図 | 東区：遺構外出土剥片石器類(3) 篋状石器 I A・I B類……………70 | 第81図 | 西区：SK111・114・115・118・119・120 土坑出土遺物……………112 |
| 第57図 | 東区：遺構外出土剥片石器類(4) 篋状石器 I B類……………71 | 第82図 | 西区：SK120・126土坑出土遺物……………113 |
| 第58図 | 東区：遺構外出土剥片石器類(5) 篋状石器 I B・I C・II B類……………72 | 第83図 | 西区：SK126・153・167・181土坑、 SKP166柱穴様ビット出土遺物……………115 |
| 第59図 | 東区：遺構外出土剥片石器類(6) 篋状石器 I E・II B・II D類……………73 | 第84図 | 西区：SD129溝跡……………116 |
| 第60図 | 東区：遺構外出土剥片石器類(7) 篋状石器 I E類、両面調整石器、石錐……………74 | 第85図 | 西区：SD129溝跡出土遺物……………116 |
| 第61図 | 東区：遺構外出土剥片石器類(8) 石錐、スクレイパー類……………75 | 第86図 | 西区：遺構外出土土器(1) I群 早期……………117 |
| 第62図 | 東区：遺構外出土剥片石器類(9) スクレイパー類、石核……………76 | 第87図 | 西区：遺構外出土土器(2) II群 前期……………118 |
| 第63図 | 東区：遺構外出土剥片石器類(10) 石核、接合資料……………77 | 第88図 | 西区：遺構外出土土器(3) III群 中期～後期初頭……………119 |
| 第64図 | 東区出土礫石器類分布図……………78 | 第89図 | 西区：遺構外出土土器(4) IV群 後期前葉……………121 |
| 第65図 | 東区：SXQ石器集中区出土礫石器類 敲磨器類……………79 | 第90図 | 西区：遺構外出土土器(5) IV群 後期前葉……………122 |
| 第66図 | 東区：遺構外出土礫石器類(1) 敲磨器類……………80 | 第91図 | 西区：遺構外出土土器(6) V群 後期中葉……………123 |
| 第67図 | 東区：遺構外出土礫石器類(2) 磨製石斧片、敲磨器類、砥石……………81 | 第92図 | 西区：遺構外出土土器(7) V群 後期中葉……………124 |
| 第68図 | 東区：SK38・92土坑、SD30溝跡……………83 | 第93図 | 西区：遺構外出土土器(8) V群 後期中葉……………125 |
| 第69図 | 東区：SD39溝跡、SN04・05・14・18・44・ 99焼土遺構、SKX22・45底面が白色化した 窪地……………85 | 第94図 | 西区：遺構外出土土器(9) V群 後期中葉……………126 |
| 第70図 | トクラ遺跡西区遺構配置図……………94 | 第95図 | 西区：遺構外出土土器(10) V群 後期中葉……………127 |
| 第71図 | 西区：SB177・179掘立柱建物跡及び 出土遺物……………96 | 第96図 | 西区：遺構外出土土器(11) V群 後期中葉……………128 |
| 第72図 | 西区：SN149 焼土遺構、 SN151・152地床が……………98 | 第97図 | 西区：遺構外出土土器(12) V群 後期中葉……………129 |
| 第73図 | 西区：SQN134石囲炉、SN183地床が跡……………100 | 第98図 | 西区：遺構外出土土器(13) V群 後期中葉……………130 |
| 第74図 | 西区：SQN134石囲炉出土遺物……………101 | 第99図 | 西区：遺構外出土土器(14) VI群 後期後葉……………132 |
| 第75図 | 西区：SQ172配石遺構及び出土遺物(1)……………103 | 第100図 | 西区：遺構外出土土器(15) VI群 後期後葉……………133 |
| 第76図 | 西区：SQ172配石遺構出土遺物(2)……………104 | 第101図 | 西区：遺構外出土土器(16) VI群 後期後葉……………134 |
| 第77図 | 西区：SQ172配石遺構出土遺物(3)……………105 | 第102図 | 西区：遺構外出土土器(17) VI群 後期後葉……………135 |
| 第78図 | 西区：SK101・111・114・115土坑……………107 | 第103図 | 西区：遺構外出土土器(18) VI群 後期後葉……………136 |
| 第79図 | 西区：SK118・119・120・126・153土坑……………109 | | |
| 第80図 | 西区：SK167・170・181土坑、SKP155・157・ 166・168柱穴様ビット……………111 | | |

| | | | | | |
|---------------------|----------------------|-----------------|--------------------|-------------------|--|
| 第104図 | 西区：遺構外出土土器(19)Ⅶ群 晩期… | 138 | 第133図 | 西区：遺構外出土剥片石器類(10) | |
| 第105図 | 西区：遺構外出土土器(20)Ⅶ群 晩期… | 139 | スクレイパー類 …………… | 173 | |
| 第106図 | 西区：遺構外出土土器(21)Ⅶ群 晩期… | 140 | 第134図 | 西区：遺構外出土剥片石器類(11) | |
| 第107図 | 西区：遺構外出土土器(22)Ⅶ群 晩期… | 141 | スクレイパー類、RF…………… | 174 | |
| 第108図 | 西区：遺構外出土土器(23)Ⅶ群 晩期… | 142 | 第135図 | 西区：遺構外出土剥片石器類(12) | |
| 第109図 | 西区：遺構外出土土器(24) | | 楔形石器、剥片、接合資料、石核 …… | 175 | |
| Ⅶ～Ⅷ群 晩期～弥生 …………… | 143 | 第136図 | 西区：遺構外出土剥片石器類(13) | | |
| 第110図 | 西区：遺構外出土土器(25)Ⅷ群 弥生… | 144 | 石核 …………… | 176 | |
| 第111図 | 西区：遺構外出土土器(26)Ⅸ群 粗製… | 146 | 第137図 | 西区：遺構外出土剥片石器類(14) | |
| 第112図 | 西区：遺構外出土土器(27)Ⅸ群 粗製… | 147 | 石核 …………… | 177 | |
| 第113図 | 西区：遺構外出土土器(28)Ⅸ群 粗製… | 148 | 第138図 | 西区：遺構外出土剥片石器類(15) | |
| 第114図 | 西区：遺構外出土土器(29)Ⅸ群 粗製… | 149 | 石核 …………… | 178 | |
| 第115図 | 西区：遺構外出土土器(30)Ⅸ群 粗製… | 150 | 第139図 | 西区：遺構外出土剥片石器類(16) | |
| 第116図 | 西区：遺構外出土土器(31)Ⅸ群 粗製… | 151 | 石核 …………… | 179・180 | |
| 第117図 | 西区：遺構外出土土器(32)Ⅸ群 粗製… | 152 | 第140図 | 西区：遺構外出土剥片石器類(17) | |
| 第118図 | 西区：遺構外出土土器(33)Ⅸ群 粗製… | 153 | 石核 …………… | 181 | |
| 第119図 | 西区：遺構外出土土器(34) | | 第141図 | 西区：遺構外出土剥片石器類(18) | |
| 赤色顔料、アスファルト付着土器 …… | 154 | 石核 …………… | 182 | | |
| 第120図 | 西区出土剥片石器類分布図 …………… | 155 | 第142図 | 西区：遺構外出土剥片石器類(19) | |
| 第121図 | 西区出土剥片石器類器種別分布図(1)… | 160 | 石核 …………… | 183・184 | |
| 第122図 | 西区出土剥片石器類器種別分布図(2)… | 161 | 第143図 | 西区：遺構外出土剥片石器類(20) | |
| 第123図 | 西区出土剥片石器類器種別分布図(3)… | 162 | 石核 …………… | 185 | |
| 第124図 | 西区：遺構外出土剥片石器類(1) | | 第144図 | 西区：遺構外出土剥片石器類(21) | |
| 石鐮 …………… | 164 | 石核 …………… | 186 | | |
| 第125図 | 西区：遺構外出土剥片石器類(2) | | 第145図 | 西区：遺構外出土剥片石器類(22) | |
| 石鐮、石槍、両面調整石器、両面調整石器 | | | 石核 …………… | 187・188 | |
| 未成品 …………… | 165 | 第146図 | 西区：遺構外出土剥片石器類(23) | | |
| 第126図 | 西区：遺構外出土剥片石器類(3) | | 石核 …………… | 189・190 | |
| 石匙 …………… | 166 | 第147図 | 西区：遺構外出土剥片石器類(24) | | |
| 第127図 | 西区：遺構外出土剥片石器類(4) | | 石核 …………… | 191 | |
| 石匙 …………… | 167 | 第148図 | 西区：遺構外出土剥片石器類(25) | | |
| 第128図 | 西区：遺構外出土剥片石器類(5) | | 石核 …………… | 192 | |
| 石匙、小形篋状石器 …………… | 168 | 第149図 | 西区：遺構外出土剥片石器類(26) | | |
| 第129図 | 西区：遺構外出土剥片石器類(6) | | 石核 …………… | 193 | |
| トランシェ様石器、篋状石器Ⅰ類 …… | 169 | 第150図 | 西区：遺構外出土礫石器類分布図 …… | 195 | |
| 第130図 | 西区：遺構外出土剥片石器類(7) | | 第151図 | 西区：遺構外出土礫石器類(1) | |
| 篋状石器Ⅰ・Ⅱ類 …………… | 170 | 打製石斧、磨製石斧 …………… | 196 | | |
| 第131図 | 西区：遺構外出土剥片石器類(8) | | 第152図 | 西区：遺構外出土礫石器類(2) | |
| 篋状石器Ⅱ類 …………… | 171 | 敲磨器類 …………… | 197 | | |
| 第132図 | 西区：遺構外出土剥片石器類(9) | | 第153図 | 西区：遺構外出土礫石器類(3) | |
| 篋状石器Ⅱ類、石鏟 …………… | 172 | 敲磨器類 …………… | 198 | | |

| | | | | | |
|-------|--|-----|-------|---|-----|
| 第154図 | 西区：遺構外出土礫石器類(4) 敲磨石器類、礫器、砥石、石錘 …………… | 199 | 第175図 | 土壤理化学分析結果 …………… | 247 |
| 第155図 | 西区：遺構外出土礫石器類(5) 石皿 …… | 200 | 第176図 | X線回折チャート(1) …………… | 248 |
| 第156図 | 西区：遺構外出土礫石器類(6) 石皿 …… | 201 | 第177図 | X線回折チャート(2) …………… | 249 |
| 第157図 | 西区出土石製品分布図 …………… | 202 | 第178図 | 試料外観および試料採取位置 …………… | 250 |
| 第158図 | 西区：遺構外出土土製品/石製品(1) 異形石器、有孔石製品、植物化石ほか …… | 203 | 第179図 | 薄片(1) …………… | 252 |
| 第159図 | 西区：遺構外出土土製品(2) 椀形石製品、石棒、石刀、石冠 …………… | 204 | 第180図 | 薄片(2) …………… | 253 |
| 第160図 | 西区：SN122焼土遺構及び出土遺物 …… | 205 | 第181図 | 測定結果と食材の比較 …………… | 256 |
| 第161図 | 西区：遺構外出土土器(35) X群 古代/金属製品 …………… | 206 | 第182図 | 試料採取位置 …………… | 258 |
| 第162図 | 西区遺構外出土土器分布図 (I群～VII群C類) …………… | 208 | 第183図 | 黒曜石産地分布図 …………… | 261 |
| 第163図 | 西区遺構外出土土器分布図 (VII群D類～VIII・X群) …………… | 209 | 第184図 | 黒曜石産地推定結果(1) …………… | 262 |
| 第164図 | 暦年校正結果(1) …………… | 228 | 第185図 | 黒曜石産地推定結果(2) …………… | 262 |
| 第165図 | 暦年校正結果(2) …………… | 231 | 第186図 | 分析試料 …………… | 263 |
| 第166図 | 火山ガラスの屈折率(1) …………… | 233 | 第187図 | 推定される遺構変遷 …………… | 264 |
| 第167図 | テフラ(1) …………… | 233 | 第188図 | I群(早期)からII群A～C類(前期初頭)の 土器分布と場の利用 …………… | 266 |
| 第168図 | 火山ガラスの屈折率(2) …………… | 236 | 第189図 | 筈状石器I類の長幅比と刃角 …………… | 267 |
| 第169図 | 火山灰同定試料 …………… | 237 | 第190図 | 筈状石器I類の長幅比と刃部湾曲度 …… | 267 |
| 第170図 | テフラ(2) …………… | 238 | 第191図 | 東区出土主要剥片石器類の製作・消費過程 …………… | 268 |
| 第171図 | 花粉化石群集 …………… | 240 | 第192図 | 西区空間利用変遷図 …………… | 270 |
| 第172図 | 植物珪酸体含量 …………… | 241 | 第193図 | トクラ遺跡の石材利用 …………… | 272 |
| 第173図 | 花粉化石 …………… | 242 | 第194図 | 土師器出土位置図 …………… | 273 |
| 第174図 | 植物珪酸体 …………… | 243 | 付図1 | 東区遺構配置図(部分) | |
| | | | 付図2 | 西区遺構配置図(部分) | |
| | | | 付図3 | 東区：SXQ石器集中区遺物ドット図 | |

表 目 次

| | |
|--------------------------------------|--------------------------------|
| 第1表 トクラ遺跡と周辺遺跡一覧……………14 | 第20表 西区：遺構外出土剥片石器類観察表…… 221 |
| 第2表 東区出土土器一覧……………40 | 第21表 西区：鉄石英製剥片石器類一覧…………… 224 |
| 第3表 東区出土剥片石器類一覧……………43 | 第22表 西区：玉髓質頁岩製剥片石器類一覧…………… 224 |
| 第4表 東区出土剥片石器類 分類別一覧……………44 | 第23表 西区：玉髓製剥片石器類一覧…………… 225 |
| 第5表 特徴的な両面調整剥片一覧……………47 | 第24表 西区：水晶・石英製剥片石器類一覧…………… 225 |
| 第6表 東区出土礫石器類一覧……………78 | 第25表 西区：遺構外出土礫石器類観察表…… 226 |
| 第7表 東区：出土土器観察表……………88 | 第26表 西区：遺構外出土石製品観察表…………… 226 |
| 第8表 東区：SXQ石器集中区出土剥片石器類 観察表……………89 | 第27表 西区：出土金属製品一覧…………… 226 |
| 第9表 東区：遺構外出土剥片石器類観察表……91 | 第28表 放射性炭素年代測定及び暦年校正結果(1)… 228 |
| 第10表 東区：母岩別資料一覧……………92 | 第29表 放射性炭素年代測定及び暦年校正結果(2)… 230 |
| 第11表 東区：出土礫石器類観察表……………93 | 第30表 テフラ分析結果…………… 235 |
| 第12表 西区検出遺構一覧……………95 | 第31表 花粉分析結果…………… 240 |
| 第13表 西区出土剥片石器類一覧…………… 155 | 第32表 植物珪酸体含量…………… 241 |
| 第14表 西区出土剥片石器類 分類別一覧…………… 157 | 第33表 土壌理化学分析結果…………… 246 |
| 第15表 西区出土礫石器類一覧…………… 193 | 第34表 安定同位体分析結果…………… 255 |
| 第16表 西区出土磨石器類分類別一覧…………… 194 | 第35表 分析試料一覧…………… 259 |
| 第17表 西区：遺構内出土土器観察表…………… 211 | 第36表 黒曜石原産地試料一覧…………… 260 |
| 第18表 西区：遺構内出土土器観察表…………… 211 | 第37表 スペクトル強度と判別指標値…………… 263 |
| 第19表 西区：遺構外出土土器観察表…………… 212 | 第38表 黒曜石産地判定結果…………… 263 |

図 版 目 次

- 巻頭図版1 遺跡全景
 巻頭図版2 遺跡全景
 巻頭図版3 東区出土遺物
 巻頭図版4 西区検出遺構と出土遺物
- 図版1 東区全景
 図版2 東区：基本土層
 図版3 東区：縄文時代の遺構 土坑(SK15・74)
 図版4 東区：縄文時代の遺構 土坑(SK82)
 図版5 東区：縄文時代の遺構 溝跡(SD93)、底面が白色化した窪み(SKX22・34・45)
 図版6 東区：縄文時代の遺構 石器集中区(SXQ)
 図版7 東区：石器集中区(SXQ)出土土器
 図版8 東区：石器集中区(SXQ)出土剥片石器類(1)
 図版9 東区：石器集中区(SXQ)出土剥片石器類(2)
 図版10 東区：石器集中区(SXQ)出土剥片石器類(3)
 図版11 東区：石器集中区(SXQ)出土剥片石器類(4)
 図版12 東区：石器集中区(SXQ)出土剥片石器類(5)
 図版13 東区：石器集中区(SXQ)出土剥片石器類(6)
 図版14 東区：石器集中区(SXQ)出土剥片石器類(7)
 図版15 東区：石器集中区(SXQ)出土剥片石器類(8)
 図版16 東区：石器集中区(SXQ)出土剥片石器類(9)
 図版17 東区：石器集中区(SXQ)出土剥片石器類(10)
 ／礫石器類
 図版18 東区：遺構外出土土器／剥片石器類(1)
 図版19 東区：遺構外出土剥片石器類(2)
 図版20 東区：遺構外出土剥片石器類(3)
 図版21 東区：遺構外出土剥片石器類(4)
 図版22 東区：遺構外出土剥片石器類(5)
 図版23 東区：遺構外出土礫石器類
 図版24 東区：時期不明の遺構 土坑(SK38・92)及び出土遺物
 図版25 東区：時期不明の遺構 溝跡(SD30・39) 焼土遺構(SN04・05)
 図版26 東区：時期不明の遺構 焼土遺構(SN14・18・44・99)
 図版27 西区全景
 図版28 西区近景
 図版29 西区：基本土層
 図版30 西区：縄文時代の遺構 掘立柱建物跡(SB177・179)
 図版31 西区：縄文時代の遺構 焼土遺構(SN149)、地床跡(SN151・152)
 図版32 西区：縄文時代の遺構 石囲炉(SQN134)、地床跡跡(SN183)
 図版33 西区：縄文時代の遺構 配石遺構(SQ172)
 図版34 西区：縄文時代の遺構 土坑(SK101・111)
 図版35 西区：縄文・弥生時代の遺構 土坑(SK114・115・118・119・120)
- 図版36 西区：縄文時代の遺構 土坑(SK126・153・167)、柱穴樫ビット(SKPI68)
 図版37 西区：縄文・弥生時代の遺構 土坑(SK170・181)、溝跡(SD129)
 図版38 西区：遺構内出土遺物(1)
 図版39 西区：遺構内出土遺物(2)
 図版40 西区：遺構内出土遺物(3)
 図版41 西区：遺構内出土遺物(4) ／遺構外遺物出土状況
 図版42 西区：遺構外出土土器(1) I・II群
 図版43 西区：遺構外出土土器(2) II・III群
 図版44 西区：遺構外出土土器(3) IV群
 図版45 西区：遺構外出土土器(4) IV群
 図版46 西区：遺構外出土土器(5) V群
 図版47 西区：遺構外出土土器(6) V群
 図版48 西区：遺構外出土土器(7) V群
 図版49 西区：遺構外出土土器(8) V群
 図版50 西区：遺構外出土土器(9) V群
 図版51 西区：遺構外出土土器(10) V群
 図版52 西区：遺構外出土土器(11) V群
 図版53 西区：遺構外出土土器(12) VI群
 図版54 西区：遺構外出土土器(13) VI群
 図版55 西区：遺構外出土土器(14) VI群
 図版56 西区：遺構外出土土器(15) VI群
 図版57 西区：遺構外出土土器(16) VI・VII群
 図版58 西区：遺構外出土土器(17) VII群
 図版59 西区：遺構外出土土器(18) VII群
 図版60 西区：遺構外出土土器(19) VII群
 図版61 西区：遺構外出土土器(20) VII群
 図版62 西区：遺構外出土土器(21) VII群・VIII群、付着物のある土器
 図版63 西区：遺構外出土土器(22) VIII群
 図版64 西区：遺構外出土土器(23) IX群
 図版65 西区：遺構外出土土器(24) IX群
 図版66 西区：遺構外出土土器(25) IX群
 図版67 西区：遺構外出土土器(26) X群
 図版68 西区：遺構外出土剥片石器類(1)
 図版69 西区：遺構外出土剥片石器類(2)
 図版70 西区：遺構外出土剥片石器類(3)
 図版71 西区：遺構外出土剥片石器類(4)
 図版72 西区：遺構外出土剥片石器類(5)
 図版73 西区：遺構外出土剥片石器類(6) ／礫石器類(1)
 図版74 西区：遺構外出土剥片石器類(7)
 図版75 西区：遺構外出土礫石器類(2)
 図版76 西区：遺構外出土礫石器類(3)
 図版77 西区：遺構外出土土製品・石製品
 図版78 西区：時期不明の遺構 焼土遺構(SN122) ／II層(十和田中興火山灰)堆積状況ほか

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

雄物川は秋田県、山形県境の大仙山に源流をもち、湯沢市、大仙市等を貫流し秋田市を経て日本海に注ぐ総延長133km、流域面積4,710km²の一級河川である。流域に恵みをもたらす一方で、過去には幾度となく洪水が発生し、流域の農地などに甚大な被害を与えてきた。早くも大正6年には、国の直轄事業として雄物川の治水事業に着手されており、いかにこの被害の影響が大きなものだったかを窺わせる。

昭和49年3月に改訂された雄物川水系工事実施基本計画によって、流域に建設したダム群で流量調整をする方針が示され、これに基づき玉川ダム、鍛畑ダム、皆瀬ダムと並び、成瀬ダムが計画された。成瀬ダムは、治水、下流域での水の確保、発電などを目的とする多目的ダムと位置付けられる。

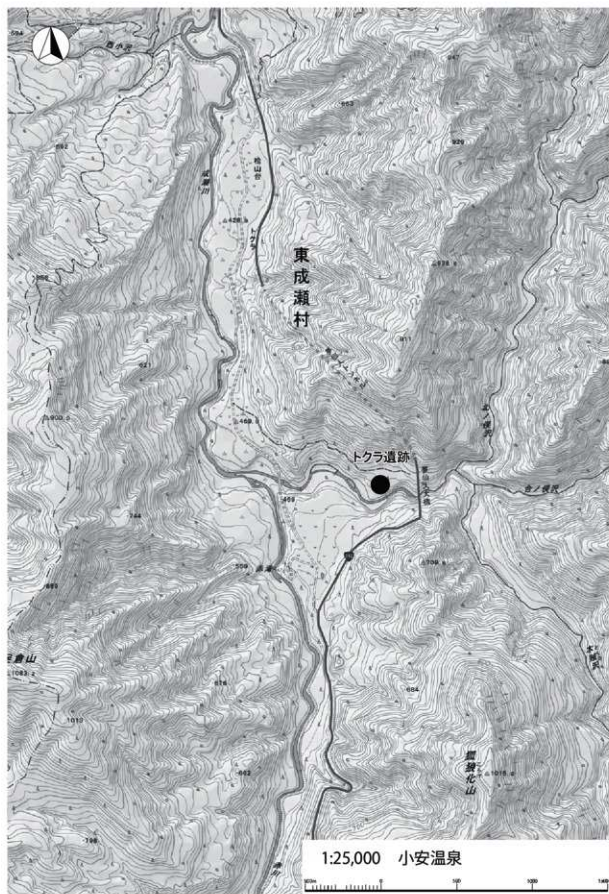
秋田県教育委員会が例年実施している埋蔵文化財保護を目的とした事業照会に、初めて成瀬ダム建設事業に関する回答があったのは平成11年である。当時、事業計画地には周知の埋蔵文化財包蔵地は存在しなかったが、計画による影響が広範囲に及ぶ（第3図）ことなどから、県教育委員会と国土交通省湯沢河川国道事務所との協議の結果、事前の分布調査を実施することとなった。県教育委員会を実施主体とし、平成12年度からは踏査に、平成15年度からは試掘調査に着手した。なお事業計画地を対象とした分布調査は、現在も継続中である。

トクラ遺跡は、平成20年6月4日付け国東整湯開第6号による湯沢河川国道事務所長からの依頼に基づき、平成20年9月に実施された試掘を伴う分布調査によって初めて発見された。この結果を元に県教育委員会は、事業の進捗にあわせた埋蔵文化財の対応が必要との判断を平成20年12月25日付け文書（教生一1945）にて示した。さらに平成25年10～11月、平成26年9～10月、平成27年6月には秋田県埋蔵文化財センターによって内容把握を目的とした確認調査が行われ、遺構・遺物の分布密度が極端に低い中央部分を除いた東区4540m²と西区4550m²で、本発掘調査の実施が必要という判断に至った。

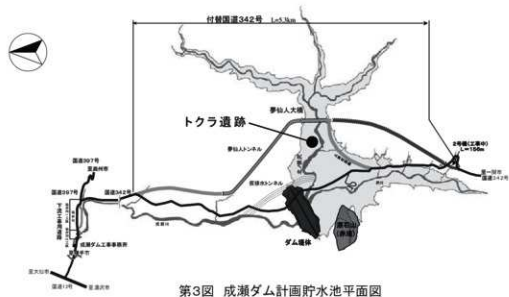
以上の経緯によって、平成27・28（2015・2016）年度の2カ年にわたり、発掘調査を実施した。



第1図 トクラ遺跡位置図



第2図 トクラ遺跡周辺地形図



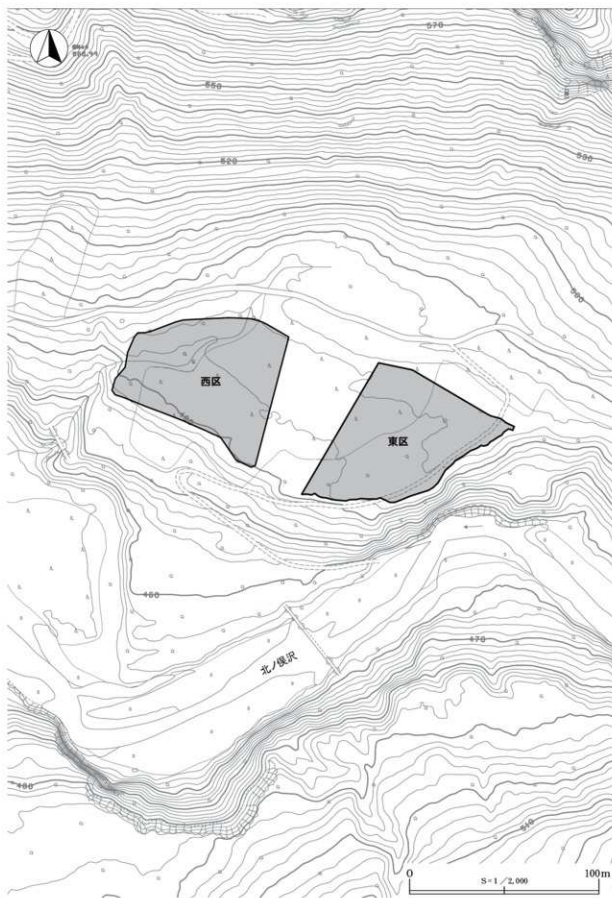
第3図 成瀬ダム計画貯水池平面図

- | | | | |
|----|----------|-------------------------------|-------------|
| 註1 | 秋田県教育委員会 | 「遺跡詳細分布調査報告書」秋田県文化財調査報告書第446集 | 2009（平成21）年 |
| 註2 | 秋田県教育委員会 | 「遺跡詳細分布調査報告書」秋田県文化財調査報告書第491集 | 2014（平成26）年 |
| 註3 | 秋田県教育委員会 | 「遺跡詳細分布調査報告書」秋田県文化財調査報告書第497集 | 2015（平成27）年 |
| 註4 | 秋田県教育委員会 | 「遺跡詳細分布調査報告書」秋田県文化財調査報告書第502集 | 2016（平成28）年 |

第2節 調査の経過

発掘調査は調査員2名の体制で、東区は平成27年6月1日から10月29日、西区は平成28年5月16日から10月28日までそれぞれ実施した。遺跡内に堆積する表土は10cm未満と薄いため、重機の立ち入りによって遺物包含層が損なわれる恐れがあったことから、基本的には表土から人力で掘削することとした。ただし、一部に残されていた伐採木や、この場所が工事用ヤードとして利用された折の盛土が残存している部分についてはバックホウによる除去を行った。バックホウによる作業は東区では平成27年6月1日から5日まで、西区では平成28年5月16日から20日まで実施した。西区ではこの他、調査区外からの落石とみられる3点の巨礫を平成28年5月23日、クラッシャーを用いて除去した。以下に調査の経過を年度ごとにまとめて記す。

平成27年度（東区）【第1週 6月15日（月）～6月19日（金）】 コンテナハウス周辺の環境整備、ベルトコンベアーの設置、調査区南東部の草刈りと枝葉の除去を行い、調査区の沢よりも南側で、東端のグリッドより掘削を開始。グリッド杭の打設は18日で完了。**【第2週 6月22日（月）～6月26日（金）】** 調査区東端のLE～LG52～54付近から剥片等が集中して出土することを確認。SXQ（石器集中）01～03とし、精査を進めた。また、調査区から除外されていた台地縁辺部（北ノ俣沢に設置されていた砂防堰堤工事の作業道部分）にも遺物の分布が広がることが明白となり、関係各機関と調整の末、南東側へ約470m拡張することになった。**【第3週 6月30日（火）～7月3日（金）】** 重機を用いて拡張区の表土除去を実施。遺物包含層の掘削が進むにつれ、沢に向かって傾斜する地形と、流路脇に自然礫が並ぶ状況が明らかになってきた。また、LM47、LN46グリッドではSN（焼土遺構）の分布が確認された。**【第4週 7月6日（月）～7月10日（金）】** SXQ周辺の精査を本格的に開始。拡張区では一部に攪乱を受けており、慎重に確認しながら精査を進めた。SXQ01～03の遺物出土状況掘



第4図 トクラ遺跡調査範囲図

影。一度目の遺物取り上げを実施。また、遺物の分布はIV層上面までと認識していたが、IV層中にも遺物が含まれることが分かった。基本土層記録用のベルトをLPラインに設定。LOラインまでのI～III層掘削を進める。【第5週 7月13日(月)～7月17日(金)】SXQ01～03の精査を継続。IV層上面までの掘り下げを順次進める。【第6週 7月21日(火)～7月24日(金)】SXQ01～03では2度目の遺物取り上げを行い、IV層の掘り下げに入った。4基目の焼土遺構となるSN14を確認。精査を進める。【第7週 7月28日(火)～7月31日(金)】LR、LS51付近の沢際に堆積する砂利層から数点の剥片石器が出土。砂利層の調査も必要であることを認識した。30日、31日には協和小学校石河教諭が教職員10年研修で調査に参加。【第8週 8月3日(月)～8月7日(金)】6日、横手市教育委員会職員と青山学院大学の学生ら28名が見学を訪れる。MC53グリッドより貝殻文を有する土器片がまどまって出土。遺跡の年代が早期中葉まで遡ることが判明。LR51グリッドでは基盤層を載ち割り土層を確認。沢際に露出していた礫が基盤層由来のものであることが判明。【第9週 8月17日(月)～8月20日(木)】LPラインより西側の調査に着手。盛土が厚く堆積している箇所を確認したため、これを重機で除去した。【第10週 8月24日(月)～8月28日(金)】SXQ02、03では土層観察用ベルトを残して掘り下げを完了。LS・LT48グリッドでSD39を確認した。急激に気温が下がり、肌寒くなった。【第11週 9月1日(火)～9月4日(金)】SXQ01も土層観察ベルトを残して包含層の掘り下げを完了。LPラインより西側は地形が比較的平坦で、III層中あるいはIV層上面では幾つかの落ち込みを確認。SKとして遺構Noを付し、取り急ぎ分布状況の把握に努めた。流路北側の調査にも着手。遺物の出土が極端に少ない。【第12週 9月7日(月)～9月11日(金)】天候不順のため、流路北側での粗掘り作業と、調査区南西部の平坦地の包含層掘り下げを中心に作業を進める。10日から11日明け方にかけての豪雨により、事務所ヤードから現場ヤードへ向かう林道の一部が土砂に埋もれ、一時車両の通行が不可能になった。【第13週 9月14日(月)～9月18日(金)】沢に面してSK82を確認。傍らには掘り上げ土も確認できる。土坑覆土及び掘り上げ土の上部にはテフラが堆積している状況を確認。【第14週 9月24日(木)～9月25日(金)】流路南側のIII層掘り下げと遺構プラン確認を一通り終え、プランの載ち割りに着手した。そのほとんどが、底面が白色化した緩やかな落ち込み(SKXとする)。流路北側ではI～III層の掘り下げを急ピッチで進めたが、抜根等による攪乱が多く遺構・遺物の分布は殆ど確認できない。【第15週 9月29日(火)～10月2日(金)】流路北側、LMラインより東側の低地部へと調査が進行する。黒色土より下には白色シルト層が広がっている。30日(水)にはさきがけ新報社の記者が遺跡見学会の事前取材を訪れる。【第16週 10月4日(日)、10月6日(火)～10月9日(金)】4日に作業と並行して遺跡見学会を実施。参加者54名。流路南側の平坦地にSK74を確認。流路北側では、東半部の低地部分を調査。流路にたまった砂利の層から剥片類が出土。東に向かうにつれ、そして流れに近いほど遺物の出土が増える傾向を把握。【第17週 10月13日(火)～10月16日(金)】流路南側の遺構精査は、数カ所の図面を残して完了。LPラインに設定した基本土層を写真、図面で記録。調査終了区域から地形測量を進める。【第18週 10月19日(月)～10月23日(金)】空中写真撮影に向けてベルトコンベアーを撤去。基本土層観察用ベルトの掘削を行う。SXQ南側のいくつかのグリッドで、遺物を包含するIV層がまだ残っていることが発覚。IV層下部(礫層)に当たるところまで遺物が出てくる。急ピッチで掘り方を進める。【第19週 10月27日(火)～10月29日(木)】石器集中南側のIV層掘り下げと、分析用土壌の採取を行った。28日10時より現場引渡し。29日(木)に機材等を撤収し、現場作業を終了した。

平成28年度（西区）【第1週 5月31日（火）～6月3日（金）】機材の搬入、コンテナヤード・調査区周辺の環境整備の後、調査区北西端より1層の掘り下げと遺構検出作業を開始。確認調査で存在を把握していた土坑（SK101）の底面に十和田中振火山灰が堆積しているのを確認した。【第2週 6月6日（月）～6月10日（金）】調査区北西～南西側のⅢ層～Ⅳ層上面で遺構確認を行った。SK101では分析のため火山灰サンプルの採取を行った。【第3週 6月13日（月）～6月17日（金）】調査区中央南側でⅢ層の掘り下げと遺構検出を実施。両端が欠損した石棒が出土した。【第4週 6月20日（月）～6月23日（木）】調査区南東側1層の掘り下げと調査区南西の視乱を掘り上げ、基盤礫層（Ⅴ層）にまで及んでいることを確認。【第5週 6月27日（月）～7月1日（金）】調査区南東側で1層を、中央南側ではⅢ層の掘り下げと、Ⅳ層での遺構確認を行った。Ⅳ層上面で確認される遺構が少なかったため、更に5cmずつ段階的に掘り下げて遺構確認を行った。【第6週 7月4日（月）～7月8日（金）】調査区中央南側と調査区北東のⅣ層で遺構確認。検出遺構の精査を行った。調査区中央1層中から多量の縄文土器、石器が出土。赤彩のある土器高坏も1個体出土した。7日、盛岡大学の学生2名が博物館実習のため調査に参加。【第7週 7月11日（月）～7月15日（金）】直径約2mの土坑2基（SK111、115）を検出し、精査を開始した。調査区南西側では縄文時代晩期後葉の土器が、調査区中央の沢の北岸では透閃石岩製磨製石斧が出土した。12日、県立博物館吉川耕太郎学芸主事と考古ボランティア5名が見学。【第8週 7月19日（火）～7月22日（金）】調査区北東、中央、南西側のⅢ層掘り下げと、Ⅳ層での遺構検出及び遺構精査を行った。調査区中央北側では土坑（SK120）と焼土遺構（SN122）を検出し、精査を開始した。焼土遺構（SN122）は近代のものと思われる鉄製品が出土した。また、調査区中央北側では晩期前葉の鉢や注口土器も出土している。【第9週 7月25日（月）～7月28日（木）】調査区中央東側で土坑（SK126）と隣接する溝（SD129）を検出し、精査を開始した。これまでの調査で、遺構はⅣ層上面だけではなく、10～15cm掘り下げた位置からも検出されている。遺物も同じ高さから出土しているため、Ⅳ層中に生活面が存在しているであろうことが分かってきた。Ⅳ層下部～Ⅴ層の礫層まで掘り下げる必要があると認識した。【第10週 8月1日（月）～8月5日（金）】調査区中央で遺構検出、遺構精査を継続し石囲炉を検出した。周辺に柱穴はなく、屋外炉であったと考えられる。1日、文化財保護室加藤文化財主査、高橋文化財主任、伊豆文化財主事、県立博物館名誉館長富樫泰時氏が来跡。2日、雷雨のため、午後の屋外作業を中止。1日～3日、秋田県立横手高校阿部教諭、教員10年研修のため調査参加。【第11週 8月8日（月）～8月12日（金）】調査区中央で遺構精査と、Ⅳ層掘り下げながらの遺構確認を継続。調査区中央で、Ⅳ層下部の礫が被熱している地点（SN147）を確認。12日、予備日使用し、調査員は図面修正や遺物整理を行った。【第12週 8月22日（月）～8月25日（木）】調査区中央の遺構検出、遺構精査を継続した。調査区北東から石刀が1点出土した。石囲炉（SQ134）から縄文後期の土器出土。23日、台風の影響で現場事務所から現場への経路上で土砂崩れが発生。車両の通行が不可となり、復旧まではこの地点から徒歩で現場へ向かう事となった。【第13週 8月29日（月）～9月2日（金）】調査区中央北側から焼土範囲（SN149）を検出し、精査を開始した。29日、道路の仮復旧により車両の通行が可能となる。30日、台風10号接近のため現場中止。2日、国土交通省谷山工事第一係長が台風による土砂崩れ箇所を視察。【第14週 9月5日（月）・6日（火）・9日（金）】調査区中央でⅣ層掘り下げを継続。南北の基本土層ベルトの写真撮影及び断面図作成を行った。調査区中央の基本土層からブロック状の火山灰を部分的に確認した。【第15週 9月12日（月）～9月16日（金）】基本土層ベルトの観察により、調査区南側はⅠ～Ⅲ層の層厚が徐々に薄くなり、表土上面から10～15cm

程度でIV層が露出する様子が確認された。斜面地ではIV層にもV層（礫層）と同様の垂角礫および亜円礫が多く含まれ、上部のシルト層が薄い。そのため、遺物の出土も希薄な状況である。【第16週 9月20日（火）・21日（水）】調査区中央南側の遺構検出、遺構精査を行った。調査区中央南側で地床炉（SN151、152）を検出し、精査を開始した。サブトレンチを入れ断面も確認したが掘り込みは確認できず、露出していたV層中の礫が被熱したものと考えられる。【第17週 9月26日（月）～30日（金）】IV層掘り下げと遺構確認作業を継続した。IV層上部では木根による攪乱の影響が大きく、遺構検出に時間を要している。調査区東側の平坦地、IV層下部～V層上部で複数の柱穴様ビット（SB177、SB179）を検出し、精査を開始した。【第18週 10月3日（月）・7日（金）・9日（日）】調査区中央～東側の遺構検出、遺構精査を行った。調査区中央で配石遺構（SQ172）を検出し、精査を開始した。配石は人頭大の石が並べられており、一部に石皿が転用されていることが判明した。【第19週 10月12日（水）～14日（金）】配石遺構（SQ172）の周辺の掘り下げを行った。配石の礫はいずれも扁平で、平坦面を上にして配置されている。配石の付近からは縄文時代後期の土器、石器が出土した。地床炉（SN151、152）の半蔵を行い、被熱礫の下の状況を観察した。その結果、礫上部のみが被熱していること、掘り込みがないことを確認した。【第20週 10月17日（月）～21日（金）】石囲炉（SQN134）の周辺を掘り下げたところ、被熱した礫が多数確認された。石囲炉検出面よりも5cmほどレベルが低いことから、石囲炉とは別の遺構となる可能性を考え、時期差の有無を検証するために、石囲炉周辺の炭化物サンプルの採取を行った。配石遺構（SQ172）の周辺を掘り下げたところ、配石の下部にIV層中の礫を抜き取った痕跡を確認した。【第21週 10月24日（月）～28日（金）】配石遺構（SQ172）とその周辺の精査を継続。調査区中央北側に長楕円形の土坑（SK181）を検出し、遺構精査を行った。24日、湯沢河川国道事務所現場を引き渡し。25日、全ての遺構精査が完了。28日、機材等を撤収し、現場作業を終了した。

第3節 整理作業の経過

整理作業は平成27年度の発掘調査終了後から、平成30年度にかけて秋田県埋蔵文化財センターで実施した。作業経過は以下の通りである。

東区出土品については、平成27年10月から12月に洗浄を、同12月から翌平成28年2月には注記を行った。同年2月には土器の、2月から6月には剥片石器類の接合作業を実施した。実測作業は平成28年6月から10月、12月から平成29年2月まで行った。西区出土品については、平成28年10月に洗浄を、10月から翌平成29年1月まで注記を行った。同年1月から7月には土器の接合および復元作業を実施した。平成29年3月から石器の、8月からは土器の実測作業に着手し、平成30年5月まで行った。平成30年5月から平成31年1月までトレース作業を実施した。

調査記録については、平成27年度調査分については平成27年10～11月に写真及び図面台帳の作成、11月から12月には第2原図の作成、平成28年1月から2月にデジタルトレースを行った。平成28年度調査分については平成28年10～11月に写真及び図面台帳の作成、平成29年1～3月に第2原図の作成、平成29年1～6月にデジタルトレースを実施した。

遺構・遺物の原稿作成、遺物観察表などの作成は各担当者が継続的に行った。報告書の版組作業は平成30年度に実施した。

第2章 遺跡の位置と環境

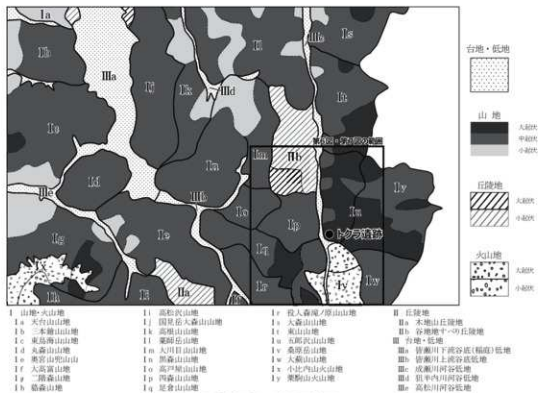
第1節 地理的環境

トクラ遺跡の所在する東成瀬村は秋田県の東南端に位置する(第1図)。東成瀬村は、奥羽脊梁山脈の西側、村内を北流する雄物川支流の成瀬川に沿うように南北に細長い範囲である。東は県境であり、岩手県和賀郡西和賀町、奥州市、一関市、宮城県栗原市に接する。北西は横手市、南西は湯沢市と隣接する。

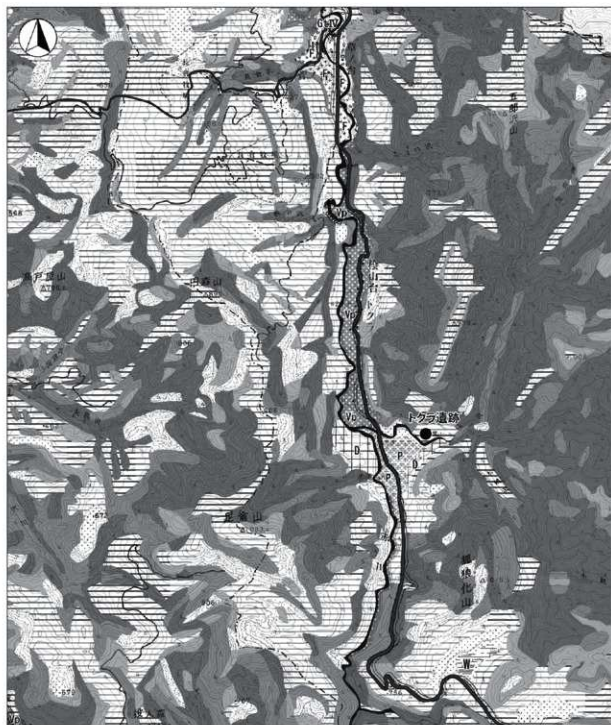
東成瀬村は、山林、原野が総面積の93.9%を占める。成瀬川の両岸にわずかに台地や低地が分布し、その両側には山地が並ぶ。

トクラ遺跡は秋田県雄勝郡東成瀬村楕川字トクラ4-1に所在し、東成瀬村役場から南東約23kmの北緯140度43分54秒、東経39度02分17秒の仁郷山国有林内に位置する。本遺跡は、標高約482mに立地する県内でも最も標高が高い遺跡の1つである。

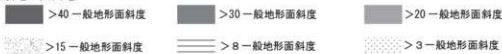
遺跡周辺の地形は、山地、丘陵地、低地によって構成されており、遺跡の北側には五郎沢山山地(Iu)、東山山地(It)、東側に桑原岳山地(Iv)、大薮山山地(Iw)、南側に栗駒山火山地(Iy)がそびえ立ち、西には谷地地すべり丘陵地(IIb)と成瀬川沿いに成瀬川河谷低地(IIIc)が形成されている(第5図)。周辺は急峻な山地、丘陵地に囲まれており、遺跡が確認されている台地および低地は成瀬川流域の川岸に限定されている(第6図)。上流側500mに北ノ保沢と合ノ保沢、木賊沢との分岐点、下流側800mには赤川との合流点が位置する。



第5図 遺跡周辺の地形区分図



山地・丘陵地・火山地



台地・丘陵地

GtIV: 砂礫段丘IV

その他

D: 土石流崩積地

W: 湿地

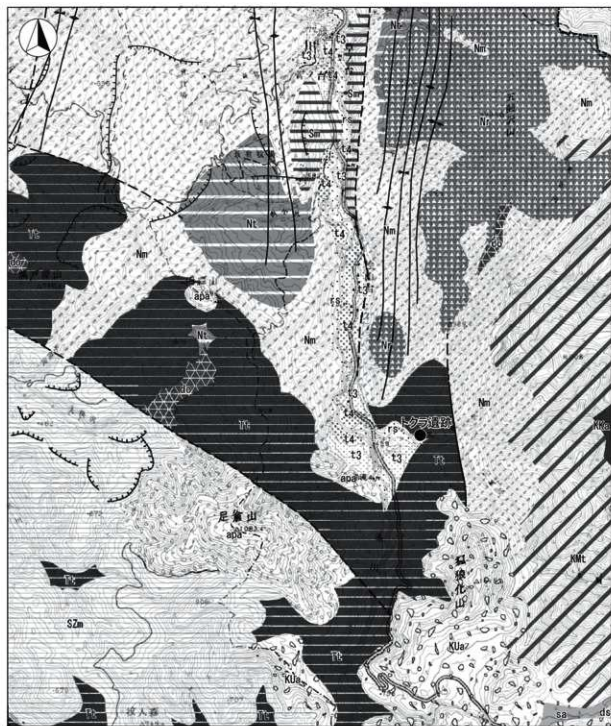
低地

F: 扇状地

Vp: 谷底平野・氾濫平野

P: 山麓及び山麓緩斜面

第6図 遺跡周辺の地形分類図



↑ 向斜 ↑ 背斜 (滑落崖 \ 実在断層 / 推定断層

rs: 現世河川堆積物 sa: 砂がら堆積物 ds: 各種岩片の岩層
t4: 礫、砂を主とし泥を含む t3: 礫、砂を主とし泥を含む

Szm: 凝灰質泥岩・凝灰質砂岩互層、礫岩を伴う Tt: 含黒雲母凝灰岩、溶結凝灰岩、角礫岩を伴う
Gs: 砂岩・シルト岩・礫岩を伴う Sm: 硬質泥岩 Nm: 硬質泥岩・凝灰岩互層、砂岩を伴う
Nt: 軽石凝灰岩 Klt: 砂質凝灰岩、軽石凝灰岩

Kla: 高輝石安山岩 Nr: 流紋岩、同質火砕岩 Kka: 変質安山岩、同質火砕岩、砂質凝灰岩薄層を挟む
do: 粗粒玄武岩 apa: 変質輝石安山岩

第7図 遺跡周辺の表層地質図

遺跡周辺は、栗駒山麓を源流とする成瀬川の支流、北ノ俣沢から比高約30mの南向きの段丘状平坦面に立地する。この平坦面は、高位、中位、低位の3面から構成され、調査を行った高位面の北端側は崖錐性の亜角礫が堆積する緩斜面である。西～南西側には中・下位の平坦面が続き、西端側と南端側はそれぞれ北側から流下する沢と北ノ俣沢に面した崖面である。

遺跡周辺の地質は、新第三紀に形成された虎毛山層（第7図Tt）と西小沢層（同図Nm、Nt、Nr）から構成される。虎毛山層は、石英安山岩および流紋岩の噴出に伴った石英安山岩質火山礫凝灰岩、軽石凝灰岩を主に伴う。これらの石材は全般的に塊状で、石英および黒雲母を普遍的に含有する。西小沢層は、硬質泥岩と凝灰岩の互層の堆積が見られ、下部は黒色硬質泥岩で構成される。本遺跡における主な石器石材も頁岩および泥岩であり、これらの関係性は近隣の地理的環境に由来する可能性がある。

このような地質的要因から泥岩分布地帯に特徴的な断層ならびに褶曲構造が顕著に見られ、遺跡周辺には地滑り地形が多く確認されている。

第2節 歴史的環境

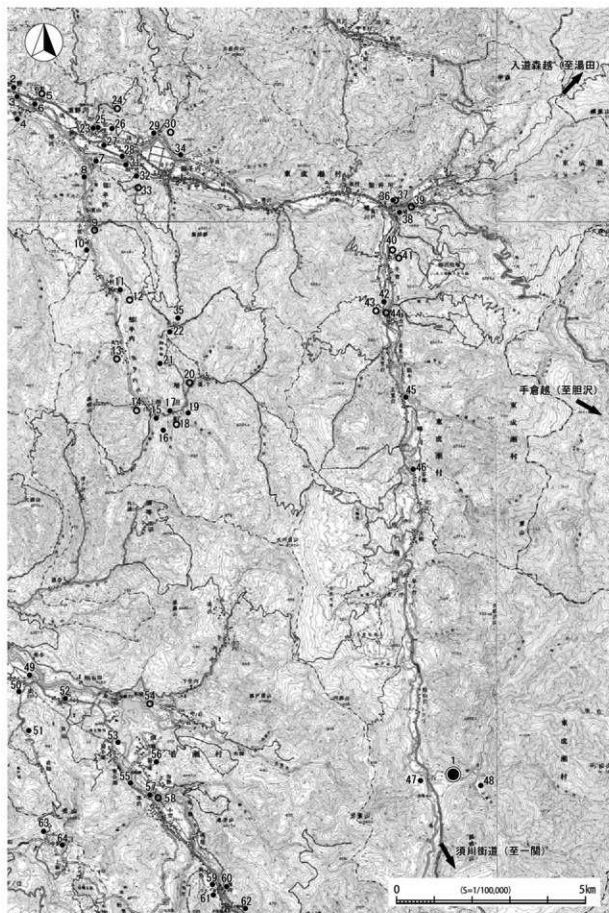
1 文献にみる周辺の歴史

遺跡周辺は栗駒山の一合目にあたる台地で、仁郷と呼ばれている。仁郷の台地は別名「朴ノ木台」ともいわれ、戦前までは朴の木やブナの原生林であった。県境近くの山中ということもあり、文獻上に登場することは少ない。古代、この地から産出する朴の木は良質とされ、万葉歌人の柿本人麻呂の和歌に「栗駒山の朴の木の枕」として登場する。菅江真澄は「駒形日記」のなかで、朴ノ木台の朴の木は薬効のある特別な朴の木で、皮は薬に、幹は木杖にして朝廷に献上したのだからとしている。また、遺跡から2km下流の松山台が成瀬川最上流部の集落であり、この松山台集落が拓かれたのは寛永14（1637）年となっている。遺跡周辺は現在、スギなどの植林地となっているが、昭和15年～30年には旧増田宮林署がブナの伐採と造林のために事業所を設置し、遺跡より上流に約2.5kmの赤川林道が敷設された。それに伴い同地域には開拓農家も入植し、最盛期には20世帯、小中学校の分校も置かれた集落が営まれるなど、戦前～戦後の一時期は人々の生活圏内であったことがわかる。その後、昭和37年の事業所の廃止により再び無住地域となり現在に至る。

岩井川からトクラ遺跡周辺まで、成瀬川は奥羽山脈西麓を北流しているが、これより東側に太平洋へ抜ける峠道が複数確認できる。その中には日本海側と太平洋側を結ぶ重要な交易路・軍事路として古来より使用されていたと考えられる道もある。主要なもので、胆沢へ至る手倉越^(註4)、一関へ至る須川街道^(註5)、湯田に至る入道森越^(註6)がある。どの道も拓かれた正確な時期はわからないが、記録が残るのは手倉越で、後述するように、江戸時代以降番所も設置されていた。遺跡から6.5km上流にある須川温泉は、日本三代実録の貞観15（873）年に「出羽国正六位上須川温泉從五位下」とあるように、その歴史は古く、須川街道のルート自体も古くから利用されていたと考えられる。

2 周辺の遺跡

トクラ遺跡が所在する東成瀬村には計25遺跡が確認されている。図幅には隣接する横手市増田町の



第8図 トクラ遺跡と周辺遺跡位置図

(● 縄文時代含む) ○ その他

一部、湯沢市皆瀬・高松の一部を含む、計64遺跡を図示した。トクラ遺跡のある成瀬川上流域はいずれもダム関連の分布調査で見つかったものである。台地・平地が少ないこともあり、トクラ遺跡から成瀬川を下流に8kmまでは遺跡はないが、開発が少ないため知られていない遺跡が存在する可能性はある。

成瀬川流域で遺跡の分布が集中しているのは成瀬川と岩井川の合流点付近、現在の村役場がある田子内周辺、狙半内川流域である。また、西に約8kmは皆瀬川上流域であり、多くの遺跡が把握されている。

縄文時代の遺跡とみられるものを黒丸(●)で表示した。この地域は発掘調査されている事例が少ないため、ほとんどは表採遺物からその様子を窺うのみだが、その歴史は旧石器時代まで遡ることができる。

旧石器時代の遺跡は、大畑遺跡(16)、矢櫃遺跡(36)が確認されている。大畑遺跡からは米ヶ森型台形石器や石核、削片が、矢櫃遺跡からはナイフ形石器、彫器、搔器、削器、石刃、細石刃、細石刃核が出土している。いずれも後期旧石器時代の遺物である。また詳細な出土地点は不明だが、東成瀬村大柳字大柳沼付近で黒曜石製の細石刃核が見つかった。新旭Ⅰ遺跡(61)では槍先形尖頭器、ナイフ形石器、削器、黒曜石製の剥片などが分布調査で見つかっており、槍先形尖頭器の形態的特徴から後期旧石器時代最終末～縄文時代草創期初頭に帰属するとの見解が示されている。

縄文時代草創期の遺跡は、矢櫃遺跡(36)が確認されており、黒曜石製の有舌尖頭器が出土している。

縄文時代早期の遺跡は、皆瀬川流域の滝向遺跡(60)が確認されており、早期後葉の貝殻圧痕文と沈線が施された土器や石鏃が見つかった。

縄文時代前期の遺跡は、大畑遺跡(16)、外畑牧場遺跡(22)、上捨遺跡(26)、荒砥沢遺跡(35)などが確認されている。荒砥沢遺跡からは竪穴住居跡、土坑、石器製作址(柱穴群含む)が見つかり、前期初頭～大木2b式の土器と石器が出土している。大畑遺跡と外畑牧場遺跡からも同時期の土器が見つかり、いずれの遺跡も狙半内川上流域の丘陵上に位置している。国の重要文化財に指定されている大型磨製石斧が出土した上捨遺跡は、成瀬川の高位段丘上に位置する縄文時代前期中半から後半の集落跡である。近年、継続的に学術調査が行われており、遺構は竪穴建物跡、土坑墓、土坑、柱穴、焼土、溝跡が見つかった。また遺物は大木3～6式の土器、石核、石鏃、石錐、石槍、石匙、篋状石器、削器、搔器、打製石斧、大型磨製石斧、くぼみ石、石錘、すり石、溝状砥石、石皿、台石、岩偶、三脚石器、円盤状石製品、カツオブシ形石製品などが出土しているほか、円筒下層b式類似の土器、半円状扁平打製石器など円筒土器文化圏の遺物も確認されている。さらに大型磨製石斧4点については近年、石材鑑定が行われ、北海道日高地方の沙流川支流の額平川上流を産地とする緑色岩(アオトラ石)であることが明らかになっている。^(註9)2008年～2010年の東成瀬村教育委員会の発掘調査の結果では、「居住域、貯蔵域、墓域、祭祀域、空閑域がセットとなる自己完結型集落であり、さらに成瀬川流域の縄文時代前期の大規模拠点集落でもある」と推定している。

縄文時代中期の遺跡は、皆瀬川流域に羽場遺跡^(註10)(56)と、大木10式の土器片が見つかった上新田Ⅰ遺跡(63)、上新田Ⅱ遺跡(64)がある。

縄文時代後期の遺跡は、皆瀬川流域に桜坂遺跡(51)、貝沼遺跡(52)、寄合畑遺跡(55)が確認されている。桜坂遺跡からは埴跡、組石が見つかり、後期初頭の土器のほか、敲石、搔器、篋

第1表 トクラ遺跡と周辺遺跡一覧

| 番号 | 旧遺跡地図 図録番号 | 遺跡名 | 所在地 | 類別 | 遺構・遺物 | 文献 |
|----|---------------|--------|-------------------|-------|--|------------|
| 1 | 064-68-25 | トクラ | 藤原部東成瀬村柳川字トクラ47外 | 集落跡 | 【縄文時代】 縄文土器・石器 | 5・6・7 |
| 2 | 203-58-24 | 二ノ台 | 横手市柳川町吉野字二ノ台 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 石鏡、石斧、縄文土器、石神槍 | 3 |
| 3 | 203-58-25 | 西野製作所 | 横手市柳川町吉野字木下26 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 石鏡、石鏡、縄文土器片 | 3・18 |
| 4 | 203-58-28 | 千穂ヶ台 | 横手市柳川町萩原字千穂ヶ台 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 縄文土器、歯 | 3 |
| 5 | 203-58-54 | 横山境交差点 | 横手市柳川町吉野字部沢361 | 生活遺跡 | 【古中】 階段状土器式登り窯、竈、焼、釜、小皿、歯、片口鉢、漆鉢、炊道具 | 3・17 |
| 6 | 203-58-26 | 上吉野 | 横手市柳川町吉野字高野 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 石鏡、石鏡 | 3 |
| 7 | 203-58-28 | 大輪 | 横手市柳川町吉野字内田堀 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 石鏡類 | 3 |
| 8 | 203-58-29 | 藁平内(口) | 横手市柳川町藁平字内口 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 打製石斧、縄文土器片 | 3 |
| 9 | 203-58-56 | 藁平内 | 横手市柳川町藁平字小栗山 | 遺物包含地 | 【古縄文時代～奈良時代】 須弥座類、高台付坪(礎) | 3・19 |
| 10 | 203-58-30 | 天下森 | 横手市柳川町藁平字堂虫沢 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 石鏡、縄文土器片 | 3 |
| 11 | 203-58-31 | 藁平内(中) | 横手市柳川町藁平字内中村 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 石鏡 | 3 |
| 12 | 203-58-10 | 鬼越山跡 | 横手市柳川町藁平字鬼越山 | 館跡 | 【中世】 茶釜、陶磁器、焼米 | 3・10 |
| 13 | 203-58-11 | 二階沢跡 | 横手市柳川町藁平字二階沢 | 館跡 | | 3 |
| 14 | 203-58-12 | 城長館跡 | 横手市柳川町藁平字城ノ下 | 館跡 | 【中世】 | 3・10 |
| 15 | 203-58-32 | 上柳町跡 | 横手市柳川町藁平字上柳 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 石鏡 | 3 |
| 16 | 203-58-34 | 大畑 | 横手市柳川町藁平字大畑 | 遺物包含地 | 【旧石器時代】 木ヶ森型台形石器、石核、削片 【縄文時代】 石鏡、縄文土器片 | 3・19・21 |
| 17 | 203-58-33 | 上畑 | 横手市柳川町藁平字上畑 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 石鏡、縄文土器片 | 3・18 |
| 18 | 203-58-13 | 北ヶ沢区境 | 横手市柳川町藁平字北ヶ沢区 藁ヶ沢 | 館跡 | | 3 |
| 19 | 203-58-35 | 古家沢 | 横手市柳川町藁平字古家沢 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 石鏡、縄文土器片 | 3 |
| 20 | 203-58-36 | 堀ノ下 | 横手市柳川町藁平字新堀 | 遺物包含地 | | 3 |
| 21 | 203-58-37 | 火石田 | 横手市柳川町藁平字火石田跡84 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 石鏡 | 3・24 |
| 22 | 203-58-57 | 外堀牧場 | 横手市柳川町藁平字内内 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 縄文土器片 | 3・22 |
| 23 | 203-58-27 | 南野沢 | 横手市柳川町吉野字南野沢 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 石鏡、石斧、石鏡、石鏡 | 3 |
| 24 | 203-58-9 | 熊平 | 横手市柳川町南野沢字熊平 | 館跡 | 古刀 | 3・11 |
| 25 | 064-68-23 | 菅生田 | 藤原部東成瀬村田中内字菅生田 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 石斧、石斧、石鏡、石鏡 | 3 |
| 26 | 064-68-2 | 土輪 | 藤原部東成瀬村田中内字土輪 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 縄文土器片、石鏡、石斧 | 2・3・9 |
| 27 | 064-68-3 | 土木 | 藤原部東成瀬村田中内字土木 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 縄文土器 | 3 |
| 28 | 064-68-4 | 倉瀬 | 藤原部東成瀬村田中内字倉瀬 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 縄文土器、石鏡 | 3 |
| 29 | 064-68-7 | 堀ノ原 | 藤原部東成瀬村田中内字堀ノ原 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 縄文土器、石斧 | 3 |
| 30 | 064-68-6 | 不動館 | 藤原部東成瀬村田中内字御平 | 館跡 | 部分的に確認可 | 3 |
| 31 | 064-68-5 | 下田大輪 | 藤原部東成瀬村田中内字大輪 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 石鏡、石斧 | 3 |
| 32 | 064-68-9 | ガツケ山 | 藤原部東成瀬村田中内字ガツケ山 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 縄文土器、石鏡 | 3 |
| 33 | 064-68-8 | 田子内城 | 藤原部東成瀬村田中内字龍見山 | 館跡 | 【中世】 空堀、宿部 | 3・10・13 |
| 34 | 064-68-11 | 平良小森 | 藤原部東成瀬村田中内字小森 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 縄文土器、石鏡、石斧、石斧、石輪 | 3・21 |
| 35 | 064-68-10 | 高沢沢 | 藤原部東成瀬村田中内字高沢沢 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 竈穴(石房跡)、縄文土器片、石器 | 3・22 |
| 36 | 064-68-13 | 矢瀬 | 藤原部東成瀬村柳川字矢瀬 | 遺物包含地 | 【旧石器時代】 ナイフ形石器、磨石、漆器、削片、石斧、磨石片、磨石石列跡 【縄文時代】 縄文土器片、有壳虫類、石鏡、石輪、石鏡 | 3・13・14・24 |
| 37 | 064-68-12 | 沼井川城 | 藤原部東成瀬村柳川字矢瀬 | 館跡 | 【中世】 郭、空堀 | 3・10・13 |
| 38 | 064-68-14 | 馬場 | 藤原部東成瀬村柳川字馬場 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 縄文土器、石鏡 | 3 |
| 39 | 064-68-15 | 馬場館 | 藤原部東成瀬村柳川字馬場 | 館跡 | 【中世】 郭 | 3・10 |
| 40 | 064-68-17 | 手倉御所 | 藤原部東成瀬村柳川字久保 | 館跡 | 【中世】 古文書、御所看板、尼寺御所跡 | 3・13・15 |
| 41 | 064-68-16 | 手倉館 | 藤原部東成瀬村柳川字久保 | 館跡 | 【中世】 郭、土塀、空堀 | 3・10・13・16 |
| 42 | 064-68-18 | ウミノ | 藤原部東成瀬村柳川字ウミノ | 遺物包含地 | 【縄文時代】 縄文土器、石器 | 3 |
| 43 | 064-68-20 | 古館 | 藤原部東成瀬村柳川字古館 | 館跡 | 【中世】 郭、土塀、空堀 | 3・10・16・25 |
| 44 | 064-68-19 | 椿館 | 藤原部東成瀬村柳川字椿 | 館跡 | 【中世】 郭 | 3・10・16 |
| 45 | 064-68-21 | 五里台 | 藤原部東成瀬村柳川字五里台 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 縄文土器片、石器 | 3 |
| 46 | 064-68-22 | 谷地古館 | 藤原部東成瀬村柳川字谷地古館 | 館跡 | 【中世】 空堀、土塀、石鏡 | 3・10・16・25 |
| 47 | 064-68-24 | 白岩小沢 | 藤原部東成瀬村柳川字白岩小沢73 | 散布地 | 石器 | 3 |
| 48 | 未定 | 北ノ沢段1 | 藤原部東成瀬村柳川字仁積沢 | 散布地 | 石器 | 3・8 |
| 49 | 207-69-5 | 滝沢 | 滝沢市特産字滝沢108 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 縄文土器片、石器、土器片、鉄製品 | 3 |
| 50 | 207-69-6 | 喜蔭 | 滝沢市特産字喜蔭 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 縄文土器片 | 3 |
| 51 | 207-69-7 | 坂根 | 滝沢市特産字坂根8 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 石斧、石斧、縄文土器片(晩期)、磨石石、漆器、磨石、磨石石斧 | 3・20・21 |
| 52 | 207-69-8 | 貝沼 | 滝沢市特産字貝沼108.1.2 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 縄文土器片、石鏡、石鏡、石鏡、漆器、磨石石斧 | 3・20・21 |
| 53 | 207-69-10 | 組小屋 | 滝沢市特産字組小屋 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 縄文土器片 | 3 |
| 54 | 207-69-16 | 八幡館 | 滝沢市特産字八幡館 | 館跡 | 【中世】 | 3・10 |
| 55 | 207-69-11 | 寄合館 | 滝沢市特産字寄合館66 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 縄文土器片 | 3・21 |
| 56 | 207-69-10 | 沼湯 | 滝沢市特産字大林2 | 遺物包含地 | 縄文土器片、石斧、石鏡、石鏡 | 3 |
| 57 | 207-69-12 | 野田 | 滝沢市特産字野田36 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 縄文土器片 【弥生時代】 弥生土器片(田舎倉式古形式) | 3 |
| 58 | 207-69-17 | 館 | 滝沢市特産字館 | 館跡 | 【中世】 空堀 | 3・10 |
| 59 | 207-69-21 | 新館II | 滝沢市特産字新館97.4外 | 散布地 | 【縄文時代】 縄文土器・石器 | 4 |
| 60 | 207-69-24 | 滝向 | 滝沢市特産字滝向19 | 散布地 | 【縄文時代】 縄文土器(早期)、削片石器 | 1・20 |
| 61 | 207-69-20 | 新館I | 滝沢市特産字新館111.1外 | 散布地 | 【旧石器時代】 槍先形尖頭器、ナイフ形石器、削器 | 4 |
| 62 | 207-69-15 | 滝の上 | 滝沢市特産字滝の上 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 縄文土器片 | 3 |
| 63 | 207-7-23 | 上新田I | 滝沢市高松字上新田山35 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 縄文土器片(大木10式) | 3 |
| 64 | 207-7-24 | 上新田II | 滝沢市高松字上新田山42 | 遺物包含地 | 【縄文時代】 縄文土器片(大木10式) | 3 |

状石斧、尖頭器が出土している。貝沼遺跡、寄合畑遺跡からは後期中葉の土器が見つまっている。

縄文時代晩期の遺跡は、湯野沢遺跡(23)、平良小森遺跡(34)、矢櫃遺跡(36)が確認されている。湯野沢遺跡からは凹石、石棒、石匙、石錘、晩期末葉(大洞A1式)の注口土器が、平良小森遺跡からは石鎌、石棒、石斧、石槍、晩期前葉(大洞BC式)の注口土器、晩期中葉(大洞C1式)の壺^(註12)が、矢櫃遺跡からは晩期末葉(大洞A式)の壺^(註13)が見つまっている。またウムシノ遺跡(42)付近の椿川下村から縄文時代晩期の土器が見つまっている^(註14)。

弥生時代の遺跡は、皆瀬川流域に野田遺跡(57)が確認されており、弥生土器片(田舎館式古形式)が見つまっている。

古代の遺跡は、狙半内遺跡(9)が確認されており、7世紀後半の須恵器が見つまっているが、詳細な出土地点は不明である。

中世の遺跡は、いわゆる山城と河岸段丘上の城館がそれぞれ流域内に点在している。成瀬川流域には館平遺跡(24)、不動館(30)、田子内城(33)、岩井川城(37)、手倉館(41)、古館(43)、椿館(44)が、狙半内川流域には鬼越山館(12)、二階沢館(13)、成長根館(14)、北ヶ沢城(18)が、皆瀬川流域には館(58)が確認できる。いずれも発掘調査がなされておらず、遺跡の詳細な時期や性格はわからない。

近世～近代の遺跡は、焼山焼窯跡(5)、手倉関所(40)が確認できる。焼山焼窯跡(5)からは階段状連房式登り窯が1基検出されており、初期の白岩焼の灰軸陶器と鉄軸陶器が出土している。手倉関所(40)は佐竹義宣が秋田へ遷封した慶長7年(1602年)以後に設置された。藩境における通行人の取り調べや、囚人を国外追放する時の立合い藩士の宿などとして利用されたと考えられており、明治2年(1869年)まで続いたとされている。

註1 内田武志・宮本常一「菅江真澄全集」第5巻 未来社 1975(昭和50)年、東成瀬村郷土誌編集委員会『東成瀬村郷土誌資料(10)』東成瀬村教育委員会 1984(昭和59)年

註2 日本森林業振興会秋田支部・青森支部 編『近代化遺産 国有林森林鉄道全データ 東北編』秋田魁新報社 2012(平成24)年

註3 佐藤兎之輔『秋田・消えた分校の記録』無明舎出版 2001(平成13)年

註4 秋田県教育委員会『歴史の道調査報告書XX 手倉街道』秋田県文化財調査報告書第163集 1987(昭和62)年

註5 秋田県教育委員会『歴史の道調査報告書XXI 須川街道』秋田県文化財調査報告書第164集 1987(昭和62)年

註6 仁郷の方から北ノ俣沢を通る峠越えもあったと伝えられている(東成瀬村郷土誌編集委員会『東成瀬村郷土誌資料(10)』東成瀬村教育委員会 1984(昭和59)年)。

註7 黒坂勝美・国史大系編集会『新訂増補 国史大系 日本三代実録 後編』吉川弘文館 1974(昭和49)年

註8 参考文献14

註9 中村由克・吉川耕太郎『秋田県東成瀬村上埴遺跡出土の大型磨製石斧の石材について』『秋田県立博物館研究報告』第41号 秋田県立博物館 2016(平成28)年

註10 参考文献20に縄文時代中期の遺跡として掲載されているが出土遺物などの詳細は不明。

註11 参考文献21に「急須形土器 縄文晩期 西成瀬村湯の沢出土」のキャプションとともに遺物の写真が掲載されている。

註12・14 参考文献21に土器の写真のみ掲載されている。

註13 参考文献21に写真のみ掲載されている。

参考文献 (第1表「文献」欄の番号は以下に対応する)

1 秋田県教育委員会『湯本遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第68集 1980(昭和55)年

2 秋田県教育委員会『秋田の史跡・考古』2004(平成16)年

3 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(湯沢・雄勝地区版)』2005(平成17)年

第2章 遺跡の位置と環境

- 4 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第439集 2008（平成20）年
- 5 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第491集 2014（平成26）年
- 6 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第497集 2015（平成27）年
- 7 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第502集 2016（平成28）年
- 8 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第507集 2017（平成29）年
- 9 秋田県雄勝郡東成瀬村教育委員会 『管生田掬・上掬地区に係る遺跡内容確認調査報告書』 2012（平成24）年
- 10 秋田県文化財保護協会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1983（昭和58）年
- 11 雄勝郡小学校校長会 『雄勝郡郷土史資料』 名著出版 1975（昭和50）年
- 12 富樫泰時 「東成瀬村発見の有舌尖頭器」 『秋田考古学』 第33号 秋田考古学協会 1976（昭和51）年
- 13 戸部正直著・今村義孝校注 『復刻 奥羽永慶軍記』 2005（平成17）年
- 14 奈良修介・豊島昂 『秋田県の考古学』 吉川弘文館 1967（昭和42）年
- 15 東成瀬村郷土誌編集委員会 『東成瀬村郷土誌』 東成瀬村教育委員会 1991（平成3）年
- 16 深沢多市 『小野寺盛衰記』 1959（昭和34）年
- 17 増田町教育委員会 『姥山城跡—秋田県平鹿郡増田町に所在する近世城跡の発掘調査概報—』 2000（平成12）年
- 18 増田町郷土史編纂委員会 『増田町郷土史』 増田町教育委員会 1972（昭和47）年
- 19 増田町史編纂委員会 『増田町史』 増田町 1997（平成9）年
- 20 皆瀬村史編集委員会 『皆瀬村史』 皆瀬村 1993（平成5）年
- 21 山下孫繼 『湯沢市雄勝郡の埋蔵文化財』 秋田県湯沢市教育委員会 1961（昭和36）年
- 22 山下孫繼 『外畑遺跡』 『北方考古』 第10号 増田町教育委員会・北方考古学研究会 1975（昭和50）年
- 23 山下孫繼 『荒砥沢遺跡発掘調査報告書』 『北方考古』 第12号 東成瀬村教育委員会・北方考古学研究会 1977（昭和52）年
- 24 横手市 『横手市史 資料編 考古』 2007（平成19）年
- 25 『長溪山滝泉寺史』 1978（昭和53）年

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1 発掘調査

仮設施設の設営や発掘作業員による掘削業務及びその管理等については掘削作業管理業務とし、一括して外部委託した。また、遺跡の位置や遺物の出土地点等の記録に不可欠な方眼杭打設業務も専門技術者に委託した。作業用のグリッド設定は、調査区付近で世界測地系平面直角座標第X系に整合する任意の点、 $X=-106800.000$ 、 $Y=-8700.000$ （北緯39度2分16.50674秒、東経140度43分58.21812秒）を原点のMA50とし、この点を通る座標北方向のラインをMAライン、これに直交する東西ラインを50ラインとする基準線を定めた。これらに平行するラインを原点から4m間隔で必要数設定し、ラインの交点に杭を打設して4m×4mのグリッドとした。グリッドの表記は、東西方向には西に向かって昇順する2文字のアルファベットを付した。アルファベットは、A～Tまでの20文字を組み合わせて用いた。南北方向には北に向かって昇順する2桁の数字を付した。各グリッドは、南東隅を通過する線の記号を組み合わせ、例えば「MA50」のように呼んだ。

事前の確認調査によって、旧表土の発達が悪く10cm程度掘り下げると遺物包含層に達すること、一部旧表土上に、当該地を夢仙人トンネル掘削工事用ヤードとした際の盛土が残存していることが確認されていた。そこで調査当初には、この盛土残土など旧表土の上部までをバックホーで掘削、調査区域外に搬出した後に、スコップや移植ゴテなどを使用して人力で掘削を進めた。

遺構は、遺構種別を表すアルファベットの記号と検出順を表す通し番号を組み合わせて「SK01」のように呼称した。その後の精査や整理作業で遺構種別が変更となった場合は、記号のみを変更した。（ただし、掘立柱建物跡については、当初は個別の柱穴樫ビットと捉えていたことから、掘立柱建物跡と認識した段階で記号、番号共に振り直している。原因等に旧番号が残っている場合があるため、掘立柱建物跡については新旧対応を第12表に記した）。調査は、基本的に検出状況（確認状況）、土層断面、遺物出土状況、完掘状況等の写真撮影と実測・図化作業を併行して行い、特徴等を遺構調査カードに記述した。

出土遺物は、遺構名やグリッド名、出土層位、出土年月日を記録して取り上げた。密集して出土した場合や、取り上げた位置から遺構が検出される可能性が考えられる場合等には、遺構内出土遺物、包含層出土遺物それぞれに通し番号を付し、適宜写真撮影をしてから出土地点を計測して取り上げた。また東区では、石器群の時期推定材料の一つとするため、基本的に土器の出土地点は計測した。

図面は主にトータルステーションを用いた遺跡測量システムにより作図したが、土層断面、細密な遺物出土状況等はマイラーベースに手作業で実測した。トータルステーションは方眼杭を器械点・後視点にして設置し、測点の平面直角座標第X系の座標値（X、Y、Z）を得て、平面図を作成した。

写真は、記録保存用には約3,630万画素のフルサイズ一眼レフレックスデジタルカメラを使用し、RAWとJPEGの同時撮影を行った。作業過程等のメモ写真撮影には、約1,200万画素のコンパクトデジタルカメラを使用し、JPEG形式で撮影した。

調査区の基本土層は、方眼杭に沿った南北方向を基本として土層観察用ベルトを設定し、記録した。地形の等高線図はトータルステーションを用いた遺跡測量システムを利用し、平均2m間隔で計測したデータを基に作図した。

遺跡の立地や周辺の地形を上空から記録するため、マルチコプターを使用した空中写真撮影を委託

によって実施した。

調査で回収した土壌・火山灰・炭化物等のサンプルについては、当時の周辺自然環境や地山及び遺構の形成年代、遺構の性格解明のため、理化学分析の専門機関に委託し、分析を行った。

2 整理作業

遺構の図面は、発掘調査で作成した図をスキャン、もしくはデータ変換によりデジタルデータ化した上で平面図と断面図を組み合わせ、ドローイングソフトによってトレースを行った。遺構の記述は、遺構調査カードを基に行った。

遺物は、洗浄後に白色ポスターカラーと面相筆を用いて注記を行った。その際、遺構内（石器集中区出土を含む）出土遺物には黄色ポスターカラーでマーキングし、包含層出土遺物との判別が容易にできるようにした。これら注記が消えることを防ぐため、上面をニスでコーティングした。

土器については、出土グリッドとその周辺地区を中心に接合を試み、同一個体と判別できる破片をまとめた。その後、文様、胎土、器形などの特徴から可能な限り早期、前期等の時期毎に分け、特に資料の多い時期については細分類も行った（分類内容は後述する）。報告書掲載遺物の選定にあたっては、作成した遺物管理用台帳を基に、各分類が遺漏なく含まれるようにした。粗製土器などについては、接合によってある程度復元可能なものを選別した。その他の破片資料については、グリッド毎に口縁部、胴部、底部に分けた。

石器については、東区では石器集中区を中心に全点を対象として接合を試みた。母岩別分類を目指したが、主体となる石材が珪質頁岩であるため、見た目上似通ったものが多く困難であった。そのため肉眼で観察できる色調や質感などに特徴を有するものや、接合関係のあるものに限り、出土地点のまとまりや剥片形状の共通点などを考慮しながら、同一母岩である可能性が高いものを抽出し、母岩別資料01～と称した（第10表参照）。なお、母岩分類ができなかった接合資料は便宜的に「母岩別資料00」としてまとめている。西区では、出土遺物の時期幅が広く、また明確な集中域も確認できなかったことから、出土が少ない石材（石英、鉄石英、玉髓質頁岩、玉髓）についてのみ接合を行った。その後、定形石器やその未成品を中心に分類した（分類内容は後述する）。これらは、器種ごとに台帳を作成した上で掲載遺物を選別した。選別にあたっては、遺物全体の様相が反映できるように心掛けた。礫石器は、形態や使用痕跡などの特徴を基に分類し、管理用の遺物台帳を作成した後に、各分類の特徴が把握しやすいものを中心に掲載遺物として選別した。

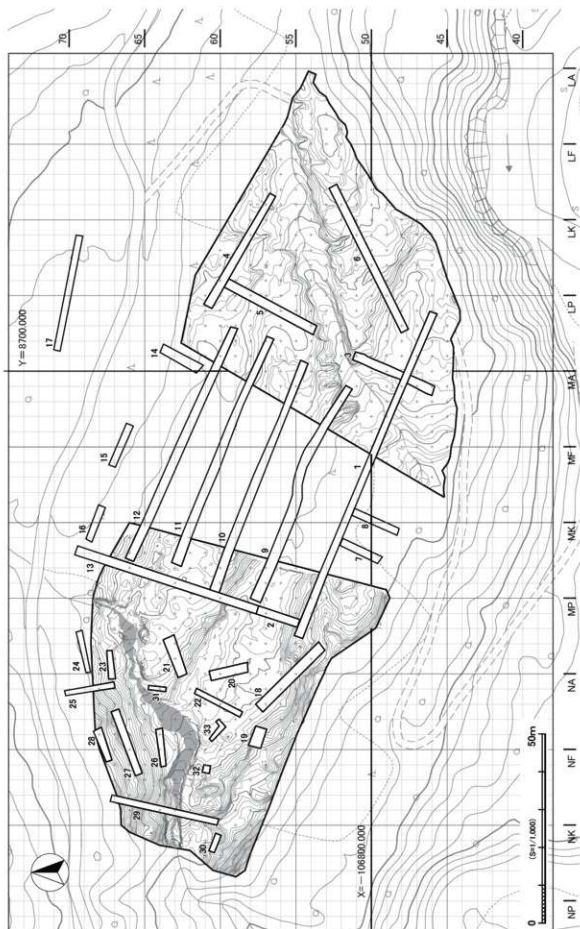
遺物の図化については、土器は拓本と実測図を、石器は実測図を等倍で作成した。拓本はスキャニング後、画像処理ソフトで調整した。実測図はスキャニング後、ドローイングソフトによってトレースを行った。

写真については、撮影したRAWデータを現像し、フルサイズで非圧縮のTIFFデータを生成して保存用とした。報告書掲載の写真は基本的にはこの中から選定したが、一部にコンパクトデジタルカメラで撮影したデータも使用している。

遺構・遺物の実測図及び写真は、ドローイングソフトによってレイアウトを行った。

本発掘調査に関する資料群の収納・保管については、報告書に掲載した出土品は、挿図番号と実測図のコピーを添付し、個別にポリエチレン袋に収納した。その後、素材別に概ね挿図順になるようにプラスチック製コンテナボックスに収納した。遺構原図などのマイラーベース、遺物実測図類はA2版のボックスファイルに収納した。遺構や遺物のトレースデータ、写真などのデジタルデータ類は、光ディスクに記録しメディア用ファイルに収納した。

出土品及び図面、デジタルデータなどの関連資料は、秋田県埋蔵文化財センターに保管する。



第9図 トグラ遺跡グリッド及び確認調査トレンチ配置図

3 遺物の分類

出土品の整理にあたっては、次のような基準で分類を行った。

(1) 土器の分類

出土した土器は縄文時代早期から晩期、弥生時代前期から終末期、古代のものまでが含まれる。そこで、縄文～弥生時代の資料についてはⅠ～Ⅸ群、古代のものはⅩ群に大別した。比較的資料数の多かった後期は前～後葉に三区区分した。また、縄文～弥生時代の範囲には納まるものの、文様要素に乏しく時期を特定しかねる資料についてはⅨ群としてまとめた。以下にその分類基準を記す。

Ⅰ群 縄文時代早期

A類 貝殻腹線文や沈線文で文様を描くもの。

A1 く字状有節沈線を主描線とするもの。明神裏Ⅲ式に相当する。

A2 沈線を主描線とし、文様が横に展開するもの。物見台式などに相当する。

A3 沈線を主描線とし、文様が縦に展開するもの。物見台式などに相当する。

A4 貝殻腹線文を面的に施し、文様帯を刺突列で区画するもの。寺の沢式などに相当する。

B類 貝殻によるとみられる条痕が確認できるもの。

B1 絡縄体圧痕による直線的な文様がみとめられるもの。常世式に相当する。

B2 地文の条痕文以外に確認できないもの。

C類 細線線によってモチーフを描くもの。榎木Ⅰ式やムシリⅠ式などに相当する。

Ⅱ群 縄文時代中期

A類 縄圧痕で文様を構成するもの。花積下層式や上川名Ⅲ式などに相当する。

B類 口縁部文様帯と胴部文様帯を区画する段がみとめられるもの。0段多条の斜行縄文が確認できる。

C類 結束羽状縄文を全面に施すもの。

D類 口唇部や装飾的に貼り付けた粘土紐の上に刻み目や刺突がみとめられるもの。大木2 b式に相当する。

E類 爪形や円管状の連続刺突文を有するもの。大木3式に相当する。

F類 粘土紐や沈線で鋸歯状のモチーフを描くもの。大木4～5式に相当する。

G類 粘土の貼付による装飾や大きく口縁が開く器形などから、大木6式に相当すると考えうるもの。

Ⅲ群 縄文時代中期～後期初頭

A類 口縁部文様帯を粘土紐で区画するもの。円筒上層式に似る。

B類 地文縄文に3本1組の沈線で施文するもの。垂下する蛇行沈線も確認できる。大木8 b式に相当する。

C類 隆帯で描いたU字やJ字の文様内部に磨り消しを施すもの。大木10式に相当する。

D類 内傾する口縁部に2本1対の沈線でモチーフを描くもの。ボタン状貼り付けを有する。中期末から後期初頭に位置づけられる可能性が高い。

Ⅳ群 縄文時代後期前葉…深鉢の器形と文様要素で分類した。

A類 口縁直下で外反する器形で、胴部には縦に展開する文様を沈線で描くもの。

A1 沈線文に磨り消しが施されないもの。

A2 沈線文に磨り消しが施されるもの。

B類 器形はA類に似るが、胴部には横に展開する文様を沈線で描くもの。沈線文には磨り消しが施される。

C類 口縁部で強く外反する器形のもの。多重沈線文や連続刺突文を有する。

V群 縄文時代後期中葉…深鉢の器形と文様要素で分類し、他の器種は文様要素の共通するものとした。

A類 平口縁で、胴部に曲線的な入組磨消縄文を描くもの。

A1 頸部にくびれの認められないもの。

A2 頸部で強くくびれるもの。

B類 口縁部に精巧な裝飾把手を有するもの。所謂、華燭土器が含まれる。

C類 大波状口縁を有するもの。

C1 頸部でゆるやかにくびれる器形で、口縁部は無文となり、胴部には平行沈線文を有するもの。

C2 頸部で強くくびれる器形で、口縁部は無文となり、胴部には縄文帯を有するもの。

C3 口縁部と頸部に刻目帯を有するもの。

C4 口縁部と頸部に縄文帯を有するもの。

C5 口縁部全面に縄文が確認できるもの。

D類 地文の上に多重沈線文が施されるもの。

VI群 縄文時代後期後葉…深鉢の器形と文様要素で分類し、他の器種は文様要素の共通するものとした。

A類 内面が肥厚する口唇を有し、器面には沈線による区画やモチーフが描かれるもの。区画内は矢羽状に縄文が充填される。概ね小林圭一氏の瘤付土器第1段階^(註1)に相当する。

A1 比較的幅の狭い縄文帯で襷掛けなどのモチーフを描くもの。

A2 横走する幅の狭い縄文帯によって無文帯が形成されるもの。

A3 口縁直下や頸部にのみ僅かに無文帯を残し、器面全体に羽状縄文を施すもの。

B類 貼瘤が多用されるもの。小林圭一氏の瘤付土器第2段階に相当する。

B1 大波状口縁を有するもの。

B2 平口縁を有し、器面に描かれた入組帯状文などのモチーフ内に貼瘤を多用するもの。

B3 平口縁を有し、器面に描かれた入組文内部に櫛歯状沈線が確認できるもの。

B4 平口縁を有し、器面には格子目状沈線が確認できるもの。

C類 入組み文等のモチーフに刻目を充填するもの。平口縁に小振りの突起が施されるものが主となる。小林圭一氏の瘤付土器第3段階に相当する。

D類 口縁に頂部が肥厚する台形突起を有し、器面には入組帯状文が描かれるもの。小林圭一氏の瘤付土器第4段階に相当する。

E類 入組帯状文が分離、あるいは縦や横と連結しているもの。

F類 その他、後期後葉に属すると目されるもの。

VI群 縄文時代晩期…主に文様要素で分類した。

A類 深鉢の括れ部に短沈線を有するもの。口縁には大小の突起が交互に配置される。突起はVI群段階に比しやや薄手となる。

B類 小波状口縁あるいは平口縁に控えめな突起を有するもの。口縁部や頸部には三叉文や、やや崩れた入組帯状文が描かれる。大洞B式に相当する。

C類 羊歯状文や羊歯状文が形骸化した刺突列、平行沈線を有するもの。大洞BCに相当する。

D類 口縁部から頸部に刺突列や細かな刻み目を有する。胴部には雲形文なども描かれる。大洞C1～C2式に相当する。

E類 工字文や四字文が描かれるもの。大洞A～A'式に相当する。

F類 口唇に刻み、口縁内面に沈線を有するもの。平行沈線文が描かれるが、他の文様要素が少なく時期決定の決め手に欠けるものも含めた。弥生時代前期の資料も含まれている可能性がある。

Ⅳ群 弥生時代

A類 小波状口縁で口縁部に無文帯を有するもの。胴部には細く、摺りの弱い弱い原体による地文縄文が施される。弥生時代前期に位置づけられる。

B類 口唇に刻みを施し、口縁部内外面に巡らせた幅広の平行沈線で立体的な仕上がりととなっているもの。弥生時代前期に位置づけられる。

C類 沈線文や刺突でモチーフを描くもの。弥生時代中期後半に位置づけられる。

D類 地文のみが施される深鉢で、胴部がやや張るもの。器壁は薄手で、輪積み痕跡が明瞭に残る。弥生時代終末期に位置づけられる。

Ⅴ群 粗製土器（縄文～弥生）…文様要素が少なく、時期の特定に至らなかったもの。

A類 器形や文様に特徴のあるもの。

A1 縄圧痕が施され、口縁部あるいは頸部に無文帯を有するもの。

A2 頸部のくびれが強く、口縁部が直線的に外反するもの。

A3 小波状口縁を有するもの。

A4 沈線が巡るもの。口唇に刻みを有するものもある。

A5 口縁部に無文帯を有し、頸部がくびれるもの。胴上半部がやや張る。

A6 その他（口唇部に縄文が施され、内面に強い稜を有するもの、口縁外面に肥厚、ほか）。

B類 地文に櫛歯状工具による沈線文が施されるもの。

C類 無文のもの。

D類 地文縄文のみ施されるもの。

D1 羽状縄文が施されるもの。

D2 付加条の縄文が縦位に施されるもの。

D3 斜行縄文が施されるもの。

E類 底部資料

E1 上げ底となるもの。

E2 敷物圧痕のあるもの。

Ⅵ群 古代

註1 小林圭一 「東北地方後期（櫛付土器）」『縄文時代』第10号（第1分冊） 縄文時代文化研究会 1999（平成11）年

（2）石器の分類

剥片石器類は、次の手順で分類を行った。まず形態から分類が可能な定形石器、スクレイパー類、石核、楔形石器などを選別した。残りの資料を観察し、二次加工が認められないもの（剥片・碎片）、刃部に微細な剥離痕が連続する剥片（UF）を選別した。剥片、碎片については更に、両面調整石器の調整加工によって生じたとみられる剥片（所謂ポイントフレイク、本報告では両面調整剥片と呼称する）を抽出した。こうして残された何らかの二次加工が認められる資料（RF）についても、形態上の特徴などから定形石器の製作途上あるいは失敗品と認識可能なものを極力抜き出し、各

石器の未成品として扱った。

礫石器類については、形態や使用痕跡を基に分類した。「磨り」と「敲き」は一つの礫に重複して認められることの多い使用痕跡であったため、所謂「磨石」「敲石」「凹石」は敲磨器類としてまとめて扱った。以下に分類基準を記す。

〔剥片石器類〕

石鏃（第10図）茎部の有無や全体の形状から次のように分類した。また、概ね3cm以下の剥片素材に二次加工が認められたものは便宜上、石鏃の未成品としてここで扱い、加工の度合いによって分類した。

I類 無茎鏃で、基部が凹むもの。

I a類 基部に最大幅があり、基部から先端に向かって側縁が直線的なもの。

I b類 基部に最大幅があり、側縁は直線的だが、先端付近で特徴的に角度を変えるもの。

I c類 基部の凹みが浅く、器体中央付近に最大幅があるもの。

I d類 基部に最大幅があり、凹みは僅かで、基部から先端に向かって側縁が直線的なもの。

I e類 基部の凹みが深く、器体中央付近に最大幅があるもの。

II類 無茎鏃で、基部がほぼ平坦なもの。

II a類 基部が平坦なもの。

II b類 基部がゆるやかに外反するもの。

III類 茎部を作出するもの。

III a類 基部が平坦で側縁が直線的なもの。

III b類 基部が凸状で側縁と基部の境が角をなすもの。

III c類 基部が凸状で側縁と基部の境が丸みを帯びるもの。

III d類 基部が凹むもの。

III e類 基部が凸状で茎部が短い小形のもの。

III f類 基部は凸状で、基部と側縁の境が丸みを帯び、全体形が木葉形に近いもの。

III g類 基部と茎部の境が不明瞭で、鏃身が細身となるもの。

III h類 基部が凸状で、基部と側縁の境が角張っているもの。

III i類 基部はやや凸状で、側縁が丸みを帯び、鏃身が幅広いもの。

III j類 所謂アメリカ式石鏃。

IV類 茎部と体部の区別が不明瞭なもの。

IV a類 幅が狭く、柳葉形となるもの。

IV b類 比較的幅が広く、木葉形となるもの。

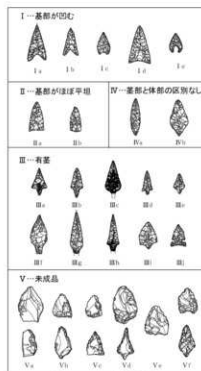
V類 未成品。

V a類 一側縁のみに加工がみとめられるもの。

V b類 二側縁以上に加工がみとめられるもの。

V c類 薄い素材を使用し、加工は縁辺のみに施されているものの平面形が概ね整っているもの。

V d類 やや厚手の素材を使用しており、周縁に加えられた加工により平面形が概ね整っているもの。



第10図 石鏃分類図

Ve類 やや厚手の素材を使用し、両面共に深くまで剥離加工が施されているもの。

Vf類 完成品に近いが、一部加工が整っていないもの。

石匙 (第11図) つまみ部分を水平にした時の平面形や刃部の位置等を基に分類した。また、二次加工のある剥片のうち、つまみ部が作出されているものを石匙未成品と捉えた。

I類 縦型となるもの。

Ia類 比較的幅が狭く、側縁に刃部が形成されるもの。

Ib類 比較的幅が広く、側縁から端部にかけて刃部が形成されるもの。

Ic類 二側縁に刃部が形成されており、尖った端部となるもの。

Id類 端部に直線的な刃部を有するもの。

II類 横型となるもの。

IIa類 幅広の素材を使用し、緩やかにカーブを描く刃部が形成されるもの。

IIb類 端部で丸みを帯びる刃部を有するもの。

IIc類 一方の端部が鋭く尖るもの。

IId類 つまみが一方に偏り、平面形が長方形となるもの。

IIe類 つまみがほぼ中央に位置し、平面形が三角形となるもの。

IIf類 平面形が四角いもの。

III類 つまみ部分を水平にした際に、刃部が斜めにカーブを描くもの。

IV類 未成品。

IVa類 つまみの作出を意図した剥離調整のみが認められるもの。

IVb類 つまみが作出されるほか、縁辺の一部に加工が認められるもの。

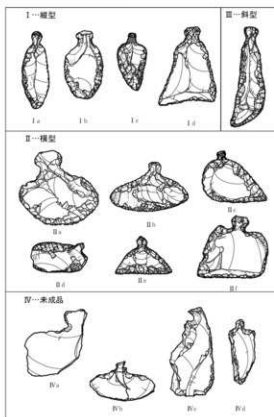
IVc類 つまみが作出されており、剥片周縁に成形加工が認められるもの。

IVd類 完成形に近いが、一部に加工の整っていない部分があるもの。

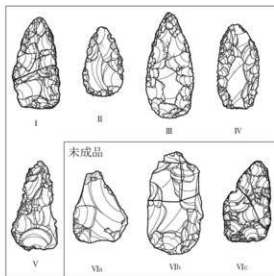
小形籠状石器 (第12図) 薄手で長さが概ね7cm以下となる小形の籠状石器である。両面調整による刃部を有する。平面形によって分類した。

I類 基部より刃部の幅が広い撥形で左右非対称となるもの。直線的な刃部を有する。

II類 基部より刃部の幅が広い撥形でほぼ左右対称



第11図 石匙分類図



第12図 小形籠状石器分類図

のもの。直線的な刃部を有する。

Ⅲ類 基部より刃部の幅が広い楕形で、側縁から刃部にかけて丸みを帯びるもの。

Ⅳ類 基部と刃部の幅がほぼ同じ短冊形となるもの。

Ⅴ類 基部と刃部の間に明瞭なくびれを有するもの。

Ⅵ類 未成品。

Ⅵa類 一部に周縁加工が施されるもの。

Ⅵb類 全面に周縁加工が施されるもの。

Ⅵc類 ほぼ完成形だが、一部に整っていない部分が確認できるもの。

Ⅶ類 破損品。

トランシェ様石器 一次剥離面を利用した、鋭く直線的な刃部を有するものを分類した。

錠状石器 (第13図) 平面形が錠状となる石器である。両面調整による刃部を有するものと、片面加工のものに大別した後、全体の平面形により細分し、更に刃部平面形による分類(a~c)を組み合わせて表記した。

I類 両面調整加工による刃部を有するもの。

I A類 長さが幅の2.5倍以上となるもの。

I B類 長さが幅の2倍以上で2.5倍未満のもの。

I C類 長さが幅の2倍よりも小さいもの。

I D類 破損品。

I E類 未成品。

II類 片面加工による刃部を有するもの。

II A類 長さに対して幅が広く丸みを帯びた平面形となるもの。

II B類 側面が丸みを帯び、平面形が楕円に近くなるもの。

II C類 側面が直線的で、刃部が幅広い楕形となるもの。

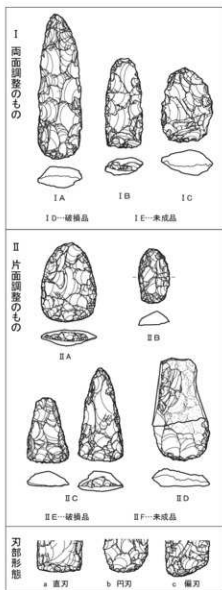
II D類 その他、平面形態がいびつなもの。

II E類 破損品。

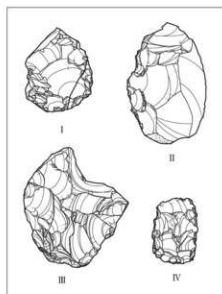
II F類 未成品。

両面調整石器 両面調整によって全体の成形および刃部の作出が行われているが、他の定形石器に分類できなかったものを一括して扱った。

両面調整石器未成品 (第14図) 両面調整により成形されてい



第13図 錠状石器分類図



第14図 両面調整石器未成品分類図

るが、未成品のため器種分類が不可能だったものである。形状から以下の通り分類した。

- I類 厚みのある素材で、幅と長さが同程度になっており、一端が尖っているもの。
- II類 横長剥片を素材としており、主剥離面のバルブ除去および成形のための剥離が確認できるもの。
- III類 厚みのある素材で、両面の周縁から粗めの剥離が入り、平面が亀甲形を呈するもの。
- IV類 その他、I～IIIに分類できなかったもの。

石錐 (第15図) 細かな剥離加工で突出した機能部を作出するもの。主に使用による摩耗痕が認められるものを石錐と認定した。

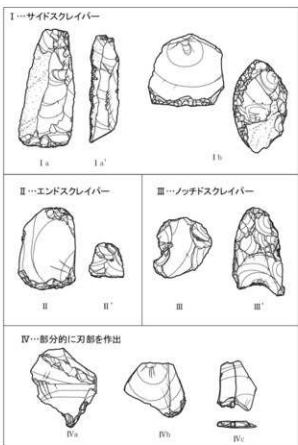
- I類 細くて長い機能部を有するもの。
 - IA類 機能部の先端から根本までの太さがほぼ一定となるもの。
 - IB類 機能部先端は狭く、中央部で幅が広がるもの。
- II類 短い機能部を有するもの。
 - IIA類 剥片を素材とし、端部を加工して機能部を作出するもの。素材の折れ面を利用して機能部を作出するものをb種とし、区別した。
 - IIB類 厚手の素材を利用し、断面が三角形を呈するもの。
 - IIC類 その他の石器(あるいは未成品)の転用品。籠状石器の転用をa種、その他をb種とした。



第15図 石錐分類図

スクレイパー類 (第16図) 素材となる剥片を成形せず、刃部を作出することで石器としたものをまとめた。作出される刃部の形態や規模によって分類した。

- I類 サイドスクレイパーに相当するもの。
 - Ia類 縦長剥片を素材とし側縁に刃部を作出するもの。石刃状の縦長剥片を素材としているものにはダッシュ (') を付して区別した。
 - Ib類 横長剥片の端部に刃部を作出するもの
- II類 エンドスクレイパーに相当するもの。一側縁に片面調整による急角度の刃部を作出するもので、特に折れ面を利用して刃部を作出しているものにはダッシュ (') を付して区別した。



第16図 スクレイパー類分類図

Ⅲ類 ノッチドスクレイパーに相当するもの。特に筥状石器の転用品にはダッシュ（'）を付して区別した。

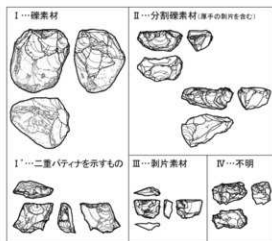
Ⅳ類 部分的に刃部を作出するもの。

Ⅳa類 突出した刃部を有するもの。

Ⅳb類 丸みを帯びた刃部を有するもの。

Ⅳc類 折り取りなどで作った幅の狭い素材の一端に、幅1.5cm程度の直線的な刃部を形成するもの。

楔形石器 両極打法による剥片剥離の痕跡と思しき特徴の認められるものを分類した。点あるいは線状の打面で、打面の潰れや階段状剥離が認められるものもある。



第17図 石核分類図

石核 (第17図)

I類 礫素材を素材として剥片剥離が行われたもの。原礫面とネガ面で構成される。

II類 分割礫や縦ね3cm以上の厚みを持った剥片を素材として剥片剥離がおこなわれたもの。

III類 剥片を素材とし、剥片剥離が行われたもの。

IV類 主剥離面が確認できず、素材の元の形状が不明なもの。

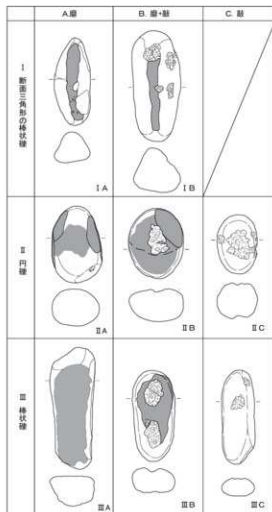
Ⅳa類 全てネガ面で構成されるもの。

Ⅳb類 礫面（1面）とネガ面で構成されるもの。

素材剥片 東区出土石器の中に、厚手の剥片の端部に折り取り加工を施した特徴的な剥片が少量確認されたため、他の剥片と区別するためにこう呼称し、分類した。

二次加工のある剥片 (RF) 二次加工が認められる石器を一括した。成形段階の粗い剥離のみが認められるもの、刃部調整のような細かな剥離加工が施されているもの、成品の小破片などが含まれる。なお、本文中ではRFと表記する。

微細剥離痕を有する剥片 (UF) 連続する微細な剥離痕を有するものを便宜的に分類した。摩耗など、使用の痕跡と積極的に評価できるものもあり、臨機的



敲打タイプ 浅い(平相)/深い(凹)
 磨面タイプ ●...片磨/○...裏面/◇...側面(幅狭)

第18図 敲磨器類分類図

な石器として利用されたものが含まれている見込みである。なお、本文中ではUFと表記する。

剥片・砕片 概ね1cm以下のものを砕片、これより大きなものを剥片とした。

両面調整剥片 打面と主剥離面の成す角度が急で、両面調整体に対する調整加工によって生じたとみられる特徴的な剥片を分類した。一般にポイントフレイクなどと呼ばれるものを含む。

[礫石器類]

打製石斧 剥離による両面加工の刃部を有する、大形の石斧を分類した。

礫器 自然礫を素材とし、一部に剥離による刃部が作出されたもの

磨製石斧 全面に磨き加工が施され、鋭い刃部を有するもの

敲磨器類 素材の形状と使用痕跡の状態から分類し、その組み合わせでI A-aなどと表記した

素材による分類 I：断面三角形となる棒状礫、II：円礫、III：棒状礫

使用痕跡による分類 A：磨り B：磨り+敲き C：敲き

磨り面タイプ a：側面（幅狭） b：片面 c：両面

敲打痕タイプ イ：浅い（平坦） ロ：深い（凹）

石皿 平坦もしくは緩やかに凹む使用面を有し、磨り痕跡が確認できるもの。片手に余る大きさで、重量も重いことから、地面に設置し、敲打磨器類とセットで使用したことが想定される。

砥石 小形の礫を素材とし、使用面が摩耗により凹状となるものを分類した。溝状の使用痕跡が確認できるものと、やや凹んだ使用面に磨り痕や線状の擦痕がみとめられるものがある。対象物の研磨加工での使用が想定される。

石錘 切り目石錘と、アスファルトによって紐掛け痕跡が残る小礫がある。錘としての使用が想定される。

[石製品]

異形石器、石棒、石刀、有孔石製品、椀形石製品、石冠、植物化石などを石製品として扱った。

第2節 基本層序

遺跡内の地形は大きく平地、沢を含む低地、傾斜地に分けることができ（第20図）、それぞれの地形で異なる堆積状況が確認された（第19図）。東区、西区にはそれぞれ沢が流れており、降雨時には水量が増した沢水が東区の低地や西区の窪地にもあふれる。そのような水の影響下にある範囲ではグライ化層が認められる。西区北側は五郎沢山山地に連続する急傾斜地であり、崖錐性堆積物である破碎礫が堆積しているが、この範囲の土層は他の地点と完全に異なる。

基本土層図の作成位置は地形の変化を横断するように意識し、第20図に示した地点で作図した。遺跡内の傾斜地を除く範囲では土の堆積や浸食がわずかで堆積環境が安定しているため、粒径や含有物の変化に乏しい。そこで、特に表土及び遺物包含層の分層は色調を基準に行った。つまり本層序は土壌層位であり、後述するように同じ層位でも地点ごとに出土遺物の時期幅が異なる場合がある。これは地点によって土壌生成作用の影響に違いがみられるためである。そのため本層序では各地点での上

下関係は把握できるが、遺跡全体での層位的な遺物・遺構の比較検討は難しい。以下、順に詳述する。

I層 黒褐色 (10YR2/2) シルト しまり中 粘性やや弱 表土～遺物包含層

急傾斜地を除く調査区全体に堆積する表土である。腐植土層（あるいはその影響を強く受けたとみられる色調の暗い土層）で、II層（火山灰）より上層をまとめて扱った。東区の層厚は2～28cmで遺物はほとんど含まれなかった。西区では2～26cmで、特に堆積の厚い平坦面1では遺物の出土量も多かった。西区では主に縄文時代後期～晩期、弥生、奈良・平安時代の遺物を含む。

II層 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト しまりやや強 粘性やや弱 十和田中振火山灰再堆積層

火山灰同定分析の結果、十和田中振火山灰と認定された。くぼ地や沢状地形、沢岸のみに分布しており、再堆積層と思われる。層厚は2～10cmである。

III層 にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト しまり中 粘性やや弱 漸位層 遺物包含層

急傾斜地を除く調査区全域に分布する。層厚は1～27cmで、I層からの土壌生成作用を受けた漸移層である。西区では主に縄文時代前期～晩期、弥生、奈良・平安時代の、東区では縄文時代早期～前期初頭の遺物を含む。

IV層上部 褐色 (10YR4/6) シルト しまりやや強 粘性やや弱 遺物包含層

調査区全域に分布し、層厚は9～40cmである。西区では平坦面1の東部で厚く堆積しており、縄文時代早期～晩期の遺物が含まれる。東区では早期～前期初頭の遺物を含む。

IV層下部 褐色 (10YR4/6) シルト しまりやや強 粘性やや弱 礫多含

無遺物層であり、今回の調査では本土層に到達した時点で掘削を終了している。そのため層厚の詳細は不明だが、確認できた部分では最大44cmである。東区では微高地に、西区では平坦面2に主に分布し、V層由来の礫を多く含む。なお、西区では本土層上面で縄文時代早期後葉の地床が検出されている。

IV'層 褐灰色 (10YR6/1) シルト しまり中 粘性やや強 IV層の色調変化(白色化)層

窪地などに分布するIV層が水の影響で色調変化した同時異相である。

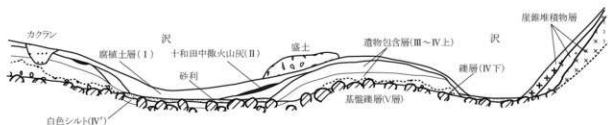
V層 礫層 しまりやや強 粘性やや強 黄褐色 (10YR5/6) 砂質粘土含む 基盤層

急傾斜地および調査区際の傾斜地は、いずれの層も礫を多く含む崖錐性の堆積層である。色調で分類し、便宜的にIb層、IIIb層、IVb層と付けたが、平坦地の層序とは対応しない。

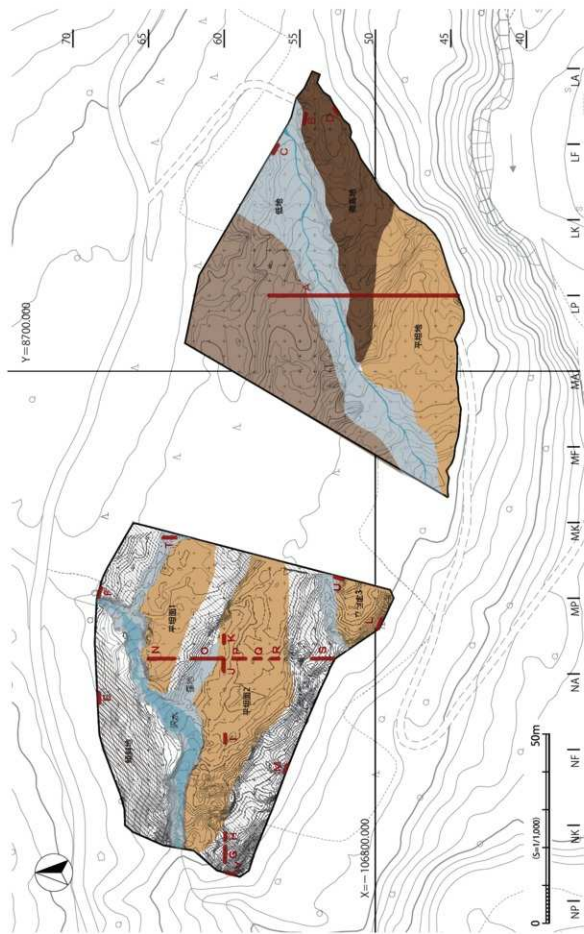
Ib層 暗褐色 (10YR3/4) シルト しまり中 粘性中 礫多含 崖錐性堆積物

IIIb層 褐色 (10YR4/6) シルト しまりやや弱い 粘性中 礫多含 崖錐性堆積物

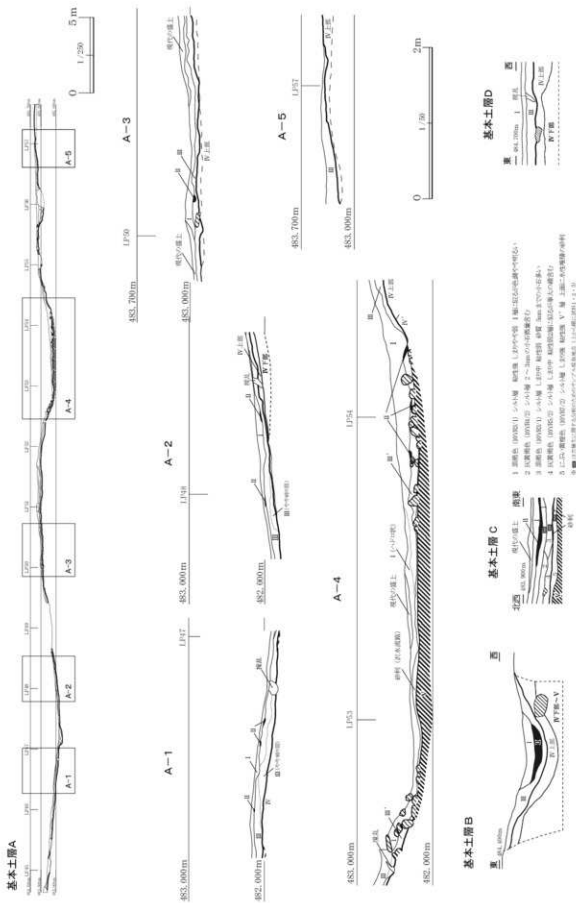
IVb層 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質シルト しまりやや強 粘性中 礫多含 崖錐性堆積物



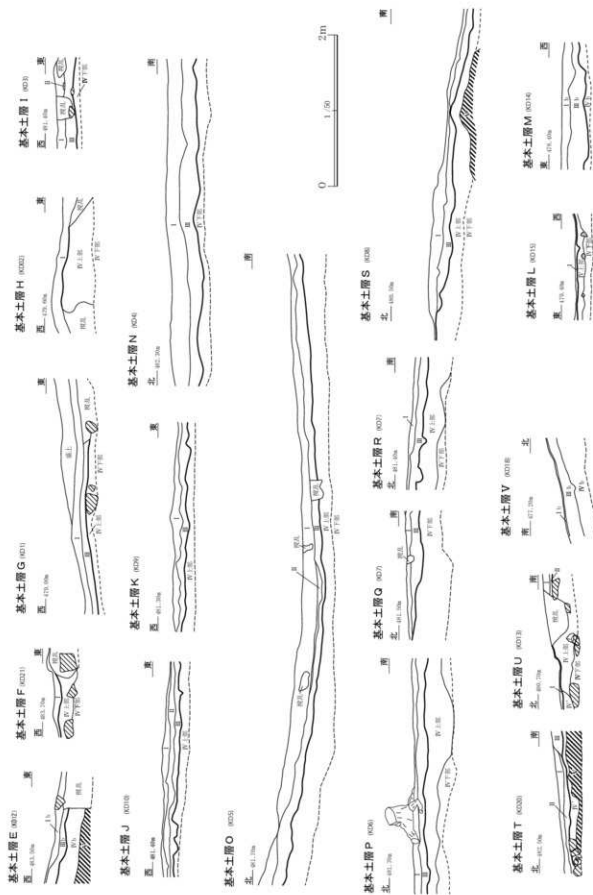
第19図 トクラ遺跡基本層序模式図



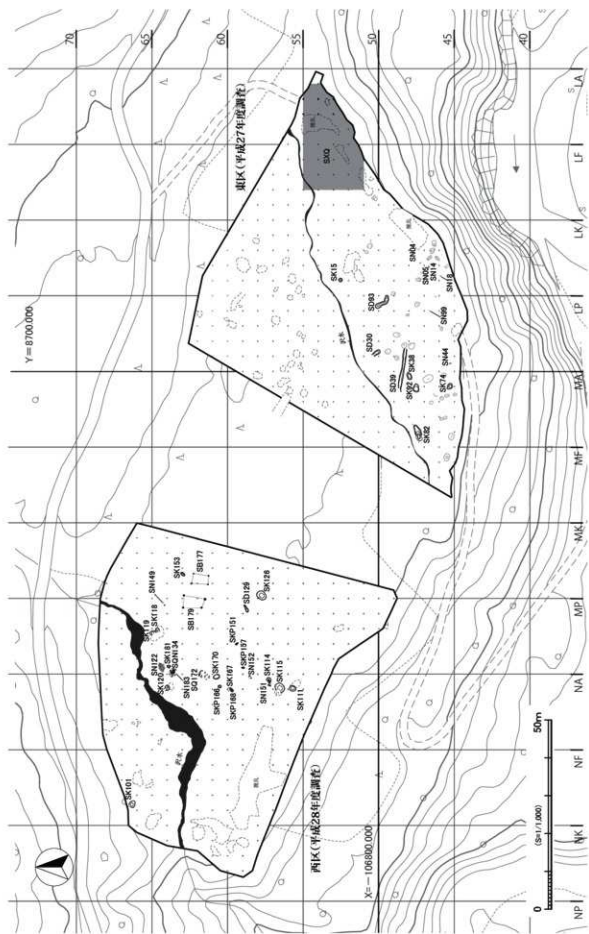
第20図 トクラ遺跡地形概要および基本土層図作成位置



第21圖 東区基本土層圖



第22図 西区基本土層図



第23図 トクラ遺跡遺構配置図(全体)



第24図 トクラ遺跡東区遺構配置図

第3節 東区の調査

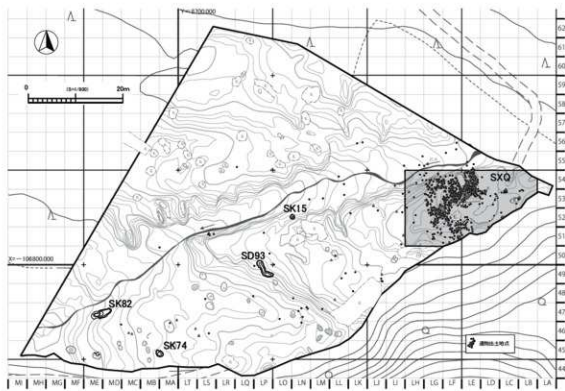
1 概要

調査区はトクラ遺跡として周知されている範囲の東端部にあたり、ほぼ中央を北東から南西方向に向かって沢が流れている。沢の南では、東側に馬の背状の微高地が、西側に平坦地が広がる（第20図）。調査の結果、人為的に構築されたと判断可能な遺構はごく限られており、そのほとんどは沢の南に分布することが確認された。沢の北側には、遺物がわずかに分布するのみであった。

東区で検出された遺構は、土坑5基、溝跡3条、焼土遺構6基である。このうち土坑3基、溝跡1条は覆土上部にⅡ層（十和田中振火山灰）の堆積が認められたため、縄文時代の遺構と捉えた。その他の遺構は表土直下で確認され、剥片石器類以外の遺物が出土しなかったため、所属時期を明確にすることはできなかった。なお、焼土遺構のうち2基から検出された炭化物については放射性炭素年代を測定した結果、近世から近代の遺構である可能性が指摘されている。

微高地東側には剥片を主とした遺物群が集中することが確認された（第25図）。接合関係が認められること、微細な碎片も分布する事などから、剥片石器類の加工等を行った「場」と捉えることが可能と判断し、石器集中区（SXQ）として遺構に準ずるものとして扱った。

この他、調査段階には遺構の可能性を考慮して記録を作成したものに、底面が白色化した窪み（SKX）がある。合計33か所を把握し、このうち2か所について土壌サンプルの分析を行い、自然地形と判断するに至ったため、これらについては平面位置を遺構配置図に掲載し、詳述は省いている。



第25図 東区：縄文時代の遺構と遺物配置図

2 縄文時代の遺構と遺物

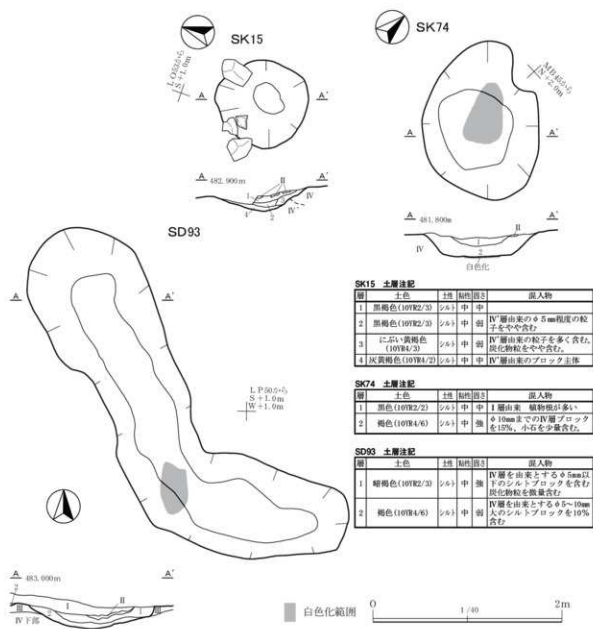
(1) 土坑

SK15 (第26図、図版3-1~3)

〔位置・検出状況〕 LN52グリッドに位置する。沢に向かう緩斜面上で、地形に沿うようにIV層上面まで掘り下げたところで、II層及び黒褐色土からなる円形のプランを確認した。截ち割ったところ、斜面下方にも壁の立ち上がりが明瞭に確認できたため、人為的な掘り込みと判断した。

〔概要〕 平面は長径1.0m、短径0.92mの円形で、確認面から底面までの深さは0.25mである。底面から壁は緩やかに立ち上がる。

〔堆積土〕 確認面にはII層が堆積する。これより下位の覆土を4層に分層した。レンズ状堆積を示しており、下位の土層ほどIV層を由来とする灰褐色シルトブロックの混入度が増す。自然堆積と判



第26図 東区：SK15・74土坑、SD93溝跡

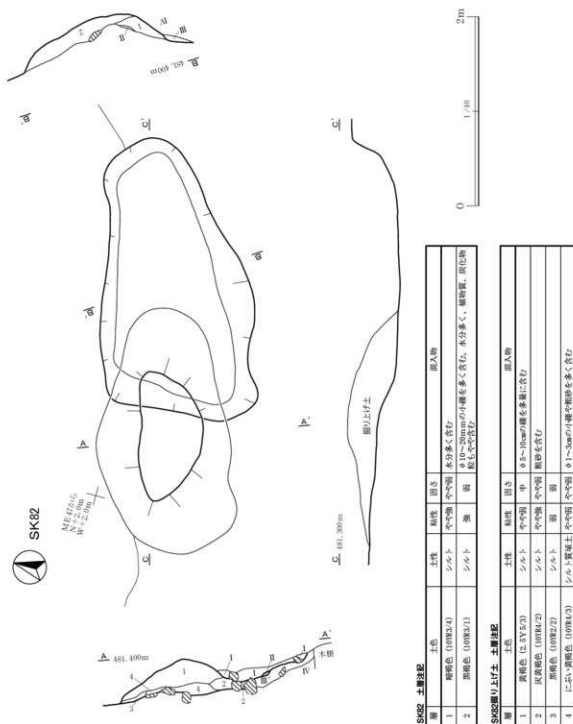
断した。

〔出土遺物〕Ⅳ層下部由来の自然礫が数点出土したのみで、遺物は出土しなかった。

〔時期〕覆土上部にⅡ層（十和田中振火山灰）の堆積が認められることから、この降下時期と目される縄文時代前期前葉にはすでに埋まっていたとみられる。周辺から出土した遺物の時期から、構築時期は縄文時代早期中葉から末葉に収まるものと推定される。

SK74（第26図、図版3-4・5）

〔位置・検出状況〕MA・MB45グリッドに位置する。Ⅳ層上面にて、Ⅰ層由来の黒色土とⅢ層由来



第27図 東区：SK82土坑

の褐色土がドーナツ状に見える円形のプランを確認した。壁の立ち上がりが明瞭であったことから、人為的な掘り込みと判断した。

【概要】平面は長径1.68m、短径1.22mの略楕円形で、確認面から底面までの深さは0.26mである。底面は比較的平坦で、壁はやや開き気味に立ち上がる。底面の一部が白色化しているが、これはボドゾル化等の化学的風化作用によるものとみられる（第4章第4節）。

【堆積土】2層に分層した。1層は基本土層Ⅰ層に対応する。2層はⅢ層由来土を主体とし、Ⅳ層ブロックや小礫が含まれる。自然堆積である可能性が高い。

【出土遺物】2層より剥片2点が、底面からUF1点と剥片2点が出土した。

【時期】覆土上部にⅡ層（十和田中振火山灰）の堆積が認められることから、この降下時期と目される縄文時代前期前葉にはすでに埋まっていたとみられる。周辺から出土した遺物の時期から、縄文時代早期後葉から前期初頭に収まるものと推定される。

SK82（第27図、図版4）

【位置・検出状況】MD・ME47グリッドに位置する。同グリッドの平坦地では遺構確認のためにⅢ層まで掘り下げを完了しており、沢に向かって緩やかに傾斜する部分のみ未着手だったため、地形に沿う形で1層の除去を開始したところ、Ⅱ層の堆積状況に一部不自然な部分を確認した。Ⅱ層上面を追うように掘り下げたところ、急激に落ち込んでいる部分があることを確認したため、土坑状の遺構があるものと認識した。また、土坑西に砂礫土の盛り上がりを確認した。この砂礫土の上部にはⅡ層が堆積しており、土坑と同時期と判断されたため、土坑の掘り上げ土と認識した。

【概要】土坑部は長径2.9m、短径0.9～1.65mの不整長方形で、確認面から底面の比高は最大で0.48mである。掘り上げ土は長軸2.6m、短軸1.4mの範囲で、最も厚い部分で約0.4mを測る。

【堆積土】土坑覆土を2層に、掘り上げ土を4層に分層した。土坑覆土は植物質を多く含んで腐食土に近い様相を呈している。土坑内部に掘り上げ土の一部が崩落し流れ込んだような状況を示している。こうしたことから、土坑は埋め戻しされず開口した状態で放棄されたものと考えられる。

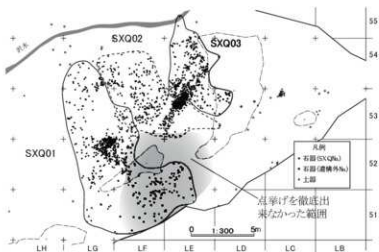
【出土遺物】遺物は出土しなかった。

【時期】遺構壁面にⅡ層（十和田中振火山灰）が堆積している。周辺で出土する遺物の時期を考慮すれば、縄文時代早期中葉から前期初頭に属すると考えるのが妥当と思われる。

（2）溝跡

SD93（第68図、図版5-1・2）

【位置・検出状況】LP49・50グリッドに位置する。Ⅳ層上面で、やや色の暗いL字に曲がる帯状プランを確認した。50ラインに残っていた土層観察ベルトに沿ってサブトレンチを入れて確認したところ、立ち上



第28図 東区：SXQ石器集中区遺物取り上げ状況

がりが明瞭に確認できたため遺構と捉えた。

〔概要〕北西から南東方向に伸びる幅0.88m～1.23m、総延長4.7mのやや屈曲した溝状を呈する。検出面であるⅣ層上面からの深さは10cm程度と浅いが、本来は15cm程度であったことが土層断面から判断される。

〔堆積土〕覆土上面にⅡ層（十和田中振火山灰）の堆積が確認された。これより下を遺構覆土とし、2層に分層した。いずれもⅣ層由来の褐色シルト粒を含む。

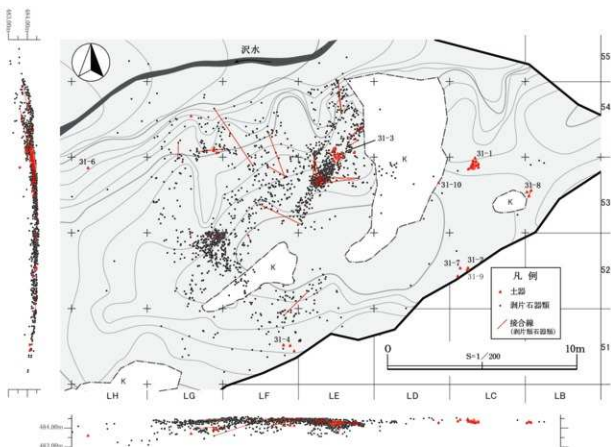
〔出土遺物〕両面調整剥片2点、剥片1点が出土した。

〔時期〕覆土上部にⅡ層（十和田中振火山灰）の堆積が認められることから、この降下時期と目される縄文時代前期前葉にはすでに埋まっていたとみられる。周辺から出土した遺物の時期から、縄文時代早期後葉から前期初頭に収まるものと推定される。

（3）石器集中区

〔調査の経過〕調査区東端でⅢ層の掘り下げに着手したところ、LE54、LF52・53、LG52・53グリッド付近に頁岩の剥片類が集中して出土することに気付いた。可能な限り剥片類の出土位置を残しながら精査を進めたところ集中域が明確になってきたため、見た目のまとまりごとに遺構番号SXQ01・02・03とし、概ね1cmを超える大きさの遺物は出土地点を記録した上で取り上げることとした。作業効率を考慮し、取り上げ作業と掘り下げ作業は並行して行った。

ところが調査を進めると、遺物の分布が当初の認識よりも広がるのが分かってきた。また、時



第29図 東区：SXQ石器集中区 遺物ドット及び接合状況図

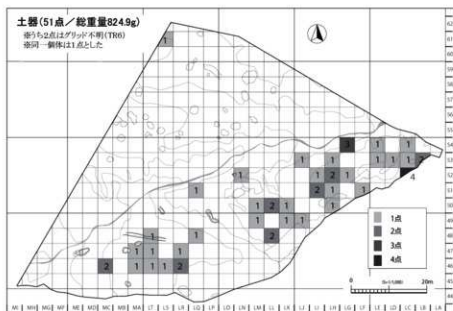
間的な制約から、調査終盤にはやむなくグリッド・層位一括で遺物を取り上げた部分もある（第28図）。

そこで本報告書の作成にあたっては、取り上げ時の扱い方によらず、出土品すべてを対象としてグリッド毎の出土量を再度検討した。その結果、沢より南側、LBラインより西、LHラインより東に遺物出土量の顕著な偏りが読み取れると判断したため、この範囲を単一の「石器集中区（SXQ）」とし、遺構に準じたものとして取り扱い、この範囲から出土した遺物を石器集中区出土遺物として取り扱うこととした（第25図）。これらにはSXQ01～03それぞれの通し番号で取り上げたもの、包含層出土遺物の通し番号で取り上げたもの、グリッド・層位で一括して取り上げたものが含まれる。作業が煩雑になることが予測されたことから、遺物の取り上げ番号は当初のままとした。取り上げ番号は挿図や観察表にも併記している。

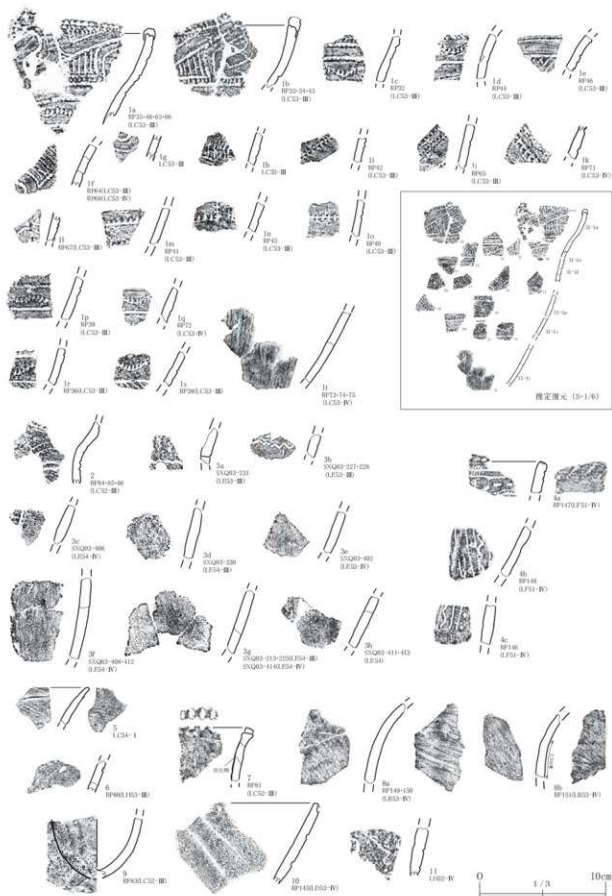
〔遺物分布状況〕石器集中区からは、土器20個体（破片99点）、剥片石器類7,557点、礫石器類4点が出土した。このうち土器破片79点、剥片石器類1,942点、礫石器類1点について、出土地点を記録して取り上げた（第28・29図、付図3）。ドットが特に集中する地点はLG53杭付近と、LE53グリッド北部の2か所確認できる。前者がSXQ01、後者がSXQ02及び03に概ね該当する。出土層位はⅢ～Ⅳ層上部である。遺物の垂直分布（第29図）を確認すると、石器群と同一レベルで土器が出土している様子がうかがえる。また、同図からは石器群に明確な時期差を認めることはできない。同図には石器接合線（32例）も示した。接合は、地点を記録して取り上げた遺物以外との接合も含めると124例を確認した。試みにLG53グリッドⅢ層の土層を1mmと2mmの篩にかけたところ、微細な破片が検出された（図版6-4）。石器集中区出土遺物については、遺構外出土遺物と一括して次項で触れることとする。

第2表 東区出土土器一覧 空白欄は1点としてカウントした

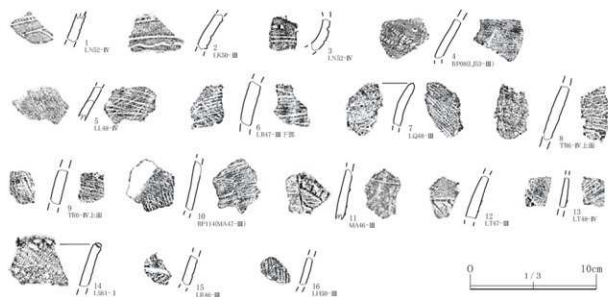
| | I群 | | | | | | II群 | VI V群 | 不明 | 合計 |
|-------|----|----|----|----|----|---|-----|----------|----|----|
| | A1 | A2 | A3 | B1 | B2 | C | 不明 | 不明 | | |
| 石器集中区 | 1 | 2 | 1 | | 3 | 1 | 10 | 1 | 1 | 29 |
| 遺構外 | 3 | | 1 | 1 | 13 | 3 | 5 | 1 | 1 | 31 |
| 合計 | 1 | 5 | 1 | 1 | 16 | 4 | 15 | 1 | 2 | 51 |
| | 43 | | | | | | 3 | | | |



第30図 東区出土土器分布図



第31図 東区: SXQ石器集中区出土石器



第32図 東区：遺構外出土土器

(4) 出土遺物

東区の調査では、遺構内外を合わせて縄文土器51個体（破片数133点、総重量824g）、剥片石器類10,422点、礫石器類17点が出土した。遺物の出土層位はⅢ層を主とし、一部はⅣ層上部にも及んでいた。基本層序で述べているように両土層は肉眼での色調の差で分層したこともあり、時期差とは捉え難い。同一あるいは隣接のグリッドなど狭い範囲に限り、出土レベルを判断する目安となる。以下、種別ごとに記載する。

①土器（第31～32図、図版7、18-1）

出土点数を第2表に、分布状況を第30図に示した。東区で出土した土器は51個体と少なく、1点を除く全てが沢の南側で出土している。また、出土土器のほとんどがⅠ群に分類され、この他にはⅡ群が3点、Ⅵ～Ⅶ群に相当するとみられるものが2点、判断が全くつかない小破片が3点出土したのみである。

本報告では文様や器表面の特徴等が確認でき、掲載に耐えうる大きさの27点を図化し、石器集中区（以下、SXQと表記する）の資料を第31図に、遺構外の資料を第32図に掲載した。以下、分類順に記す。

I群 縄文時代早期に属する土器

A類 貝殻腹縁圧痕と沈線により施文する土器で、縄文時代早期中葉に属する。

A1類（第31図1）「く」字状有節沈線でモチーフを描くもので、一個体が破片となってSXQ範囲内東側、Ⅲ層～Ⅳ層上部にまとまっていた（図版7-1）。1a、1bは口縁部破片で、「く」字状有節沈線で区画した中を貝殻腹縁文で充填している様が見える。口唇部にも施文がある。接合が進まず、破片毎の実測図となったが、可能な範囲で器形復元を試みた（第31図推定復元）。文様帯が多段構成となっていることが確認できる。

A2類 (第31図2・3、第32図1～3) 5点を掲載した。横走する沈線が確認できる小破片である。第31図2は頸部破片で、沈線で区画した内側に貝殻腹縁圧痕が添えられている。3はわずかに横走する波状沈線と貝殻腹縁圧痕が確認できる。3aには補修孔と思しき貫通孔が確認できる。第32図1は一本引き沈線の結節点に刺突が、2は蛇行する沈線が、3では横走する刺突列が確認できる。

A3類 (第31図4) SXQから一群体(破片3点)が出土した。口唇部に刺突列がめぐり、口縁部内面には貝殻腹縁圧痕が確認できる。縦に伸びる文様展開で、岩井堂洞窟に類似資料が確認できる。

B類 器表面に貝殻によると思われる条痕が確認できる土器で、縄文時代早期後葉に属する。

B1類 (第32図4) 1点のみを確認した。器表面に絡条体圧痕とみられる直線的な文様が描かれる。表裏とも横方向に細かな条痕が認められるが、文様というより器表面の調整の痕跡と思われる。

B2類 (第32図5～10) 貝殻による条痕が確認できるものを一括した。6点を掲載した。

C類 (第31図7、第32図11～13) 器表面に貼り付けた細い粘土紐で文様を描く土器で、縄文時代早期後葉に属する。第30図7はSXQでI層から出土した。第32図11は特徴的なはしご状の文様が明瞭に確認できる。

その他I群と判断したもの (第31図6～10) 文様要素などの特徴が乏しく細分はできなかったものの、胎土や焼成具合から早期に属するものと判断した。第31図10は外反する口縁部破片で、口唇には太い刻み加えられている。内面には炭化物が付着している。

II群 縄文時代前期に属する土器

C類 (第32図14) やや外反する口縁部破片で、器表面に非結束羽状縄文が施される。口唇にも施文される。胎土には繊維痕が確認できる。

その他 (第32図15・16) いずれも小破片で詳細は不明であるが、15は縄文と、緩やかにカーブする沈線文が確認でき、VI群の可能性がある。16は薄手で細い原体による地紋縄文が確認できることから、VII群の可能性がある。

②剥片石器類 (第37～63図、図版8～22)

出土総点数を第3表に、器種別分類の一覧を第4表にまとめた。また、その分布状況を第33図

第3表 東区出土剥片石器類一覧

| | 石鏃 | 石鏃未成品 | 有籠石器 | 石鏃 | 石鏃未成品 | 小形鹿状石器 | 小形鹿状石器破片 | 小形鹿状石器未成品 | トウシを模した石器 | 鹿状石器(I類) | 鹿状石器未成品(I類) | 鹿状石器(II類) | 鹿状石器未成品(II類) | 両面調整石器 | 両面調整未成品 | 石鏃 | スクレイパー類 | 石鏃 | 骨打剥片 | Ⅱ | Ⅲ | 剥片 | 両面調整剥片 | 合計 |
|---------------|----|-------|------|----|-------|--------|----------|-----------|-----------|----------|-------------|-----------|--------------|--------|---------|----|---------|----|------|-----|-----|-------|--------|--------|
| 遺構内(SR、SD) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 10 | 16 | 34 | 4 | 64 |
| 石路集中区 | 17 | 51 | 1 | 5 | 2 | 17 | 14 | 19 | 4 | 31 | 1 | 15 | 1 | 6 | 25 | 24 | 61 | 12 | 14 | 550 | 480 | 5,823 | 384 | 7,557 |
| 遺構外(ワグナI期未含む) | 9 | 38 | 0 | 9 | 7 | 3 | 7 | 5 | 9 | 26 | 7 | 9 | 2 | 1 | 15 | 31 | 49 | 19 | 1 | 260 | 356 | 1,883 | 59 | 2,805 |
| | 26 | 89 | 1 | 14 | 9 | 20 | 21 | 24 | 13 | 57 | 8 | 24 | 3 | 7 | 40 | 55 | 110 | 31 | 15 | 820 | 852 | 7,740 | 447 | 10,426 |

第4表 東区出土土制石器類 分類別一覧

4-1 石鏢分類別一覧

| | 成品 | | | | | | | 合計 | 未成品 | | | | | | 合計 |
|-------|-----|-----|-----|-----|------|-------|------|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|
| | I a | I b | I c | I d | II a | III d | IV a | | V a | V b | V c | V d | V e | V f | |
| 石器集中区 | 4 | 4 | 7 | 1 | 0 | 1 | 17 | 22 | 12 | 6 | 5 | 5 | 1 | 51 | |
| 遺構外 | 3 | 3 | 0 | 1 | 2 | 0 | 9 | 12 | 17 | 2 | 0 | 4 | 3 | 38 | |
| 合計 | 7 | 7 | 7 | 2 | 2 | 1 | 26 | 34 | 29 | 8 | 5 | 9 | 4 | 89 | |

4-2 石匙分類別一覧

| | 成品 | | | | | | | | | | 合計 | 未成品 IV a |
|-------|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|------|------|-----|----|-------------|
| | I | | | | | II | | | | | | |
| | I a | I b | I c | I d | III | II a | II b | II c | II d | III | | |
| 石器集中区 | 2 | 1 | 0 | 0 | 1 | 4 | 0 | 1 | 1 | 0 | 5 | 2 |
| 遺構外 | 3 | 0 | 1 | 2 | 0 | 6 | 1 | 0 | 1 | 2 | 9 | 7 |
| 合計 | 5 | 1 | 1 | 2 | 1 | 10 | 1 | 1 | 2 | 2 | 14 | 9 |

4-3 小形鏟状石器分類別一覧

| | 成品 | | | | | 合計 | 未成品 | | | | 合計 | 破損品 VII |
|-------|----|----|-----|----|---|----|------|------|------|------|----|------------|
| | I | II | III | IV | V | | VI a | VI b | VI c | VI d | | |
| 石器集中区 | 8 | 1 | 4 | 2 | 2 | 17 | 6 | 7 | 6 | 19 | 14 | |
| 遺構外 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 3 | 3 | 2 | 0 | 5 | 7 | |
| 合計 | 10 | 2 | 4 | 2 | 2 | 20 | 9 | 9 | 6 | 24 | 21 | |

4-4 トランシェ様石器、鏟状石器分類別一覧

| | I類 | | | | | II類 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|----|----|----|----|----|---------|----|---------|----|-----|-----|-----|-----|----------|----------|----|----|---|---|---|---|----|---|---|---|--|
| | IA | | IB | | IC | ID (破片) | | IE (破片) | | IIA | IIB | IIC | IID | IIE (破片) | IIF (破片) | | | | | | | | | | | |
| | -a | -b | -a | -b | | -c | -a | -b | -c | | | | | | | -a | -b | | | | | | | | | |
| 石器集中区 | 4 | 3 | 3 | 6 | 2 | 6 | 2 | 10 | 1 | 1 | 0 | 2 | 13 | 1 | 2 | 1 | 0 | 1 | 6 | 1 | 2 | 9 | 2 | 1 | 1 | |
| 遺構外 | 9 | 1 | 1 | 2 | 6 | 2 | 4 | 12 | 0 | 4 | 1 | 5 | 7 | 7 | 0 | 1 | 1 | 2 | 3 | 1 | 2 | 6 | 0 | 1 | 2 | |
| 合計 | 13 | 4 | 4 | 8 | 8 | 8 | 6 | 22 | 1 | 5 | 1 | 7 | 20 | 8 | 2 | 2 | 1 | 3 | 9 | 2 | 4 | 15 | 2 | 2 | 3 | |
| | | | | | | | | 57 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

4-5 両面調整石器分類別一覧

| | 成品 | 未成品 | | | | 合計 |
|-------|----|-----|----|-----|----|----|
| | | I | II | III | IV | |
| 石器集中区 | 6 | 8 | 6 | 3 | 8 | 25 |
| 遺構外 | 1 | 2 | 8 | 2 | 3 | 15 |
| 合計 | 7 | 10 | 14 | 5 | 11 | 40 |

4-6 石鏢分類別一覧

| | II A | | II B | | II C | | 合計 |
|-------|------|----|------|----|------|----|----|
| | -a | -b | -a | -b | -a | -b | |
| 石器集中区 | 8 | 8 | 4 | 1 | 3 | 24 | |
| 遺構外 | 10 | 11 | 5 | 4 | 1 | 31 | |
| 合計 | 18 | 19 | 9 | 5 | 4 | 55 | |
| | 37 | | 9 | | 9 | | |

4-8 石鏢分類別一覧

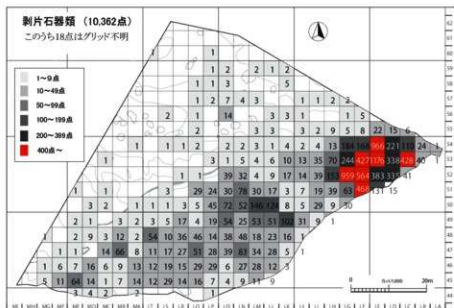
| | 未成品 | | | | 合計 |
|-------|-----|----|-----|------|----|
| | I | II | III | IV a | |
| 石器集中区 | 0 | 7 | 5 | 0 | 12 |
| 遺構外 | 0 | 3 | 15 | 1 | 19 |
| 合計 | 0 | 10 | 20 | 1 | 31 |

4-7 スクレイパー分類別一覧

| | I類 | | | II類 | | | III類 | | | IV類 | | | |
|-------|-----|------|-----|------|------|---|-------|-------|---|------|------|------|---|
| | I a | I a' | I b | II a | II b | 計 | III a | III b | 計 | IV a | IV b | IV c | |
| 石器集中区 | 15 | 4 | 4 | 23 | 6 | 2 | 8 | 11 | 1 | 12 | 7 | 9 | 2 |
| 遺構外 | 5 | 4 | 6 | 15 | 4 | 3 | 7 | 13 | 0 | 13 | 4 | 7 | 3 |
| 合計 | 20 | 8 | 10 | 38 | 10 | 5 | 15 | 24 | 1 | 25 | 11 | 16 | 5 |

4-9 両面調整剥片一覧

| | 両面調整剥片 (石鏢) (RF) | | | (IF) | (BF) | 合計 |
|-------------|------------------|-----|----|------|------|----|
| | 造構内 (S, SB) | 造構外 | 合計 | | | |
| 造構内 (S, SB) | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 |
| 石器集中区 | 383 | 1 | 6 | 2 | 392 | |
| 造構外 | 59 | 0 | 2 | 0 | 61 | |
| 合計 | 446 | 1 | 8 | 2 | 457 | |



第33図 東区出土土制石器類分布図

に、器種別の分布状況を第34～36図に示した。全体の7割の資料がSXQから出土している。また第33図からは、SXQほどの点数はないものの、LL～LM50グリッドを中心とするまとまりや、LT48グリッドやMB47グリッドを中心とするまとまりを見出すことができる。以下では、まず器種別に資料の内容や分布傾向を記載する。続いて、被熱痕が認められたものや接合資料について記載する。

石鏃（第37図1～10、第54図1～4）総数26点が出土し、このうちSXQ出土の10点と、遺構外出土の4点を図示した。分類別では、無茎で基部の抉りの深いⅠ類が殆どで、基部が平坦なⅡ類は2点、有茎のⅢ類は1点が確認されたのみである。分布を第34図1に示した。SXQやその隣接グリッドへの集中が顕著である。

石鏃未成品（第37図11～20、第54図5・6）本遺跡で確認された定形石器の内、石鏃に次いで小さいものは小形筥状石器だった。そのため、小形筥状石器よりも小さな剥片に連続する剥離調整加工が確認できたものは便宜的に石鏃未成品として分類した。89点を確認した。分布を第34図2に示した。SXQに集中している。石鏃の分布と比較すると、石鏃は沢に向かって傾斜する斜面部に集中しているのに対し、未成品はより南側の平坦面に分布が偏る。

有掘石器（第37図20）SXQから1点が出土した。

石匙（第54図7～13）合計14点が出土し、このうち遺構外出土の7点を図示した。縦形のⅠ類が10点と大半を占める。Ⅱ類（横形）は1点、Ⅲ類（斜形）も2点を確認したのみである。分布を第34図3に示した。特に集中域はなく、沢北側も含め広範囲に点在している。

石匙未成品 石匙の未成品として9点を分類した。つまみ部の作出を意図したような対向する剥離は確認できるが、いずれも破損品で全体の形状が不明であったため図化していない。分布を第34図4に示した。LL～LM48～50グリッドにややまとまるが、意味のある状態かは判断できない。

小形筥状石器（第37図21～25、第38図1～7、第54図14・15）、**小形筥状石器未成品**（第38図8～13、第54図16・17）出土点数は第4表3に、分布を第34図5・6に示した。全体形に分かる成品が20点、未成品が24点、破損品が21点出土した。破損品には未成品が含まれている可能性もあるが、細かな調整まで施されており成品の破損品とも十分に考えられる。分布図では成品を含めて表示した。Ⅰ類とした片側側縁に特徴的な屈曲のある形態のものが多く、未成品にも同様の特徴が見受けられる。分布では、成品、未成品ともにSXQに顕著な偏りを示す。成品には、中ほどで折れたものが複数見受けられる。折れた後の調整痕がないことから、故意の折り取りと言うよりも意図していない部分で折れたものと想定できる。

トランシェ様石器（第39図1～3、第55図）出土点数は第4表7に、分布は第34図7に示した。第39図2には一部に被熱によるハジケが確認できる。同図3はLF54グリッドで出土した基部とLR47グリッドで出土した刃部とが接合した。破断後に、刃部破片の利用を試みたとみられる。分布をみると、沢の南側に広く点在する様子が見える。刃部の形態のみで分類しているため、石器に大小がある。

筥状石器Ⅰ類（第39図4・5、第40図、第41図、第42図1～3、第56・57図、第58図1～5）

全体に分かるものとしては37点（破損後の再調整が伺える資料も含む）が出土し、このうちSXQ出土の16点、遺構外出土の17点の合計33点を掲載した。また、破損品も20点確認されており、東区の器種構成では主要な位置を占めている様子が窺える。分類別ではⅠB類が最も多く22点確認された。ま

た、ⅠA類はSXQからの出土が多い。平面形態は短冊形のものが主で、第41図1・2・4のように丸みを帯びた形のものも例外的に含まれる。第41図1については、全体を両面調整で形作っていたことからⅠ類としたが、素材や刃部の形状からするとⅡA類と共通しているように思われる。分布には破損品も含めて表示した(第34図8)。SXQに最も集中するが、LL~LM49~50グリッド付近にも比較的多くまとまっている様子が窺える。

笠状石器Ⅱ類(第42図4~7、第43図1~6、第58図6・7、第59図1~4)出土点数を第4表4に、分布を第35図1に示した。全体で22点、破片も含めると24点が出土している。このうちSXQ出土の10点、遺構外出土の6点を掲載した。分類別ではⅡC類が最も多い。基部や側面に礫面や折れ面が確認できるものも多い。分布は、SXQに集中し、沢北側を含めた周辺部にも点在する。

笠状石器未成品(第43図7、第59図5・6、第60図1)出土点数は第4表4に、分布は第35図2に示した。笠状石器の未成品と認定できたものはⅠ類未成品が8点、Ⅱ類の未成品が3点である。このうちⅠ類未成品の4点を掲載した。分布では、成品とやや異なりSXQにはほとんど確認できない。LM49~50グリッドにややまとまる傾向にある。

両面調整石器(第44図1~4、第60図2)出土点数は第4表5に、分布は第35図3に示した。全体で7点を確認し、このうちSXQ出土の4点、遺構外出土の1点を掲載した。分布では、1か所を中心にまとまるのではなく、SXQの周辺部に点在するという特徴がある。第60図2は接合資料だが、折れ面からの再調整も確認できる。剝離調整がまだ粗く、成品というよりは第44図3のような形状の石器の未成品と考えた方が良いかもしれない。

両面調整石器未成品(第44図5~11、第45図1~5、第60図3~5)RFの中から、両面調整が行われており、形状の似通ったものや同様の加工パターンが読み取れるもの(Ⅰ~Ⅲ)、形状としてのまとまりはないが調整加工が進み、何らかの両面調整石器を作ろうとしていた意図が明確と判断したもの(Ⅳ)を抜き出した。出土点数は第4表5に、分布は第35図4に示した。全体で40点を分類したが、このうちⅠ類3点、Ⅱ類6点、Ⅲ類3点、Ⅳ類3点の合計15点を掲載した。分布では、Ⅰ類のみがSXQにまとまる傾向を示した。東区調査で出土した定形石器と照合し、検討した。Ⅰ類はその大きさから小形笠状石器を意図した可能性も考えられるが、断定はできない。Ⅱ類については、第37図24・25などと共通点が見受けられることから小形笠状石器を意図したものである可能性が高い。

石錐(第45図6~13、第53図7a・7b、第60図6~11、第61図1~3、第63図3)出土点数は第4表6に、分布は第35図5に示した。全体で55点を確認したが全てⅡ類で、基部から先端までの幅が一定なⅠ類は確認できなかった。このうちSXQ出土の10点、遺構外出土の10点、を掲載した(接合資料として掲載されているものを含む)。不定形の剝片素材の角に機能部を作り出しており、折れ面を利用するⅡb類が半数程度含まれる。第53図7がⅡb類の好例である。また、他の定形石器やその未成品を利用した石錐もある。中でも笠状石器Ⅰ類を転用したⅡC-a類は5点確認され、特筆される。分布ではSXQに最も密集しており、SXQ範囲内の南よりに偏る傾向がみられる。このほか、LL・LM49・50グリッド、SN47グリッド周辺のほか、MD・ME45・46グリッド周辺にもまとまりが見られる。他の定形石器にはなかった傾向と言える。

スクレイパー類(第46図、第47図1~3、第61図4~8、第62図1)出土点数は第4表7に、分布を第35図6に示した。Ⅰ類：サイドスクレイパー38点、Ⅱ類：エンドスクレイパー15点、Ⅲ類：ノッチ

ドスクレイパー25点、Ⅳ類：不定形石器32点の、合計110点を確認した。このうちⅠ類12点、Ⅱ類2点、Ⅲ類1点、Ⅳ類4点を掲載した。Ⅱ類には、折れ面に調整を加えることで急角度の刃部を作り出したもの（b種）が5点含まれる。Ⅲ類には篋状石器Ⅰ類の転用品1点が存在する。分布ではSXQに集中を示すほか、LN47グリッド付近にもやや集中する。ただし集中域はあるものの、全体の傾向としては広く散漫に分布する。ME・MF45・46グリッド付近にも分布が認められる。

RF 出土点数を第3表、分布を第36図1に示した。総出土量（SK・SD出土は除く）は、810点（重量6770.5g）である。分布状況ではSXQの他、これより点数は少ないもののLL・LM49・50グリッド付近や、LN47グリッド周辺にもまとまりも見出すことができる。ME45グリッドでもやや分布密度が高い。RFには、素材の成形段階とみられる粗い剥離のみが確認できるものと、刃部に調整が加えられ、一部に摩耗が認められるなど、不定形石器として使用されたと想定可能なものがあった。時間的な制約から、RFの詳細な分析はできなかったが、SXQ周辺のRFではその多くに刃部調整と思しき加工痕が認められ、臨時的な石器として利用されたものが一定量含まれている可能性がある。

UF（第47図4～7、第62図2）出土点数を第3表に、分布を第36図2に示した。総出土量は825点（重量8395.5g）である。このうち素材となった剥片全体の形状が残されていたものとして、SXQ出土の4点、遺構外出土の1点を図示した。分布はRFと似るが、LT47・48グリッドやMB・MC47グリッドにややまとまる点に差が認められる。

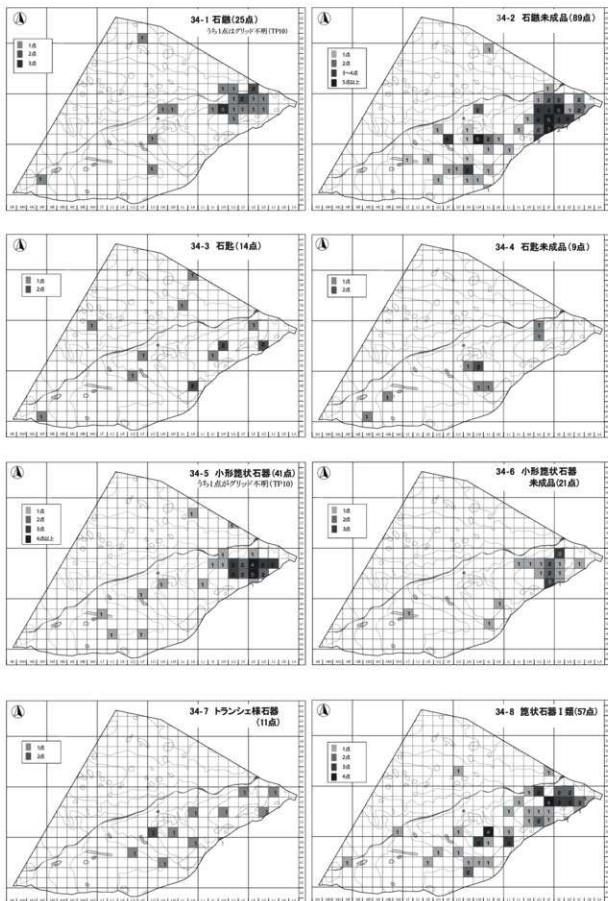
素材剥片（第47図8、第50図2）やや厚手の剥片に折り取り加工を施したもので、似通った大きさのものがまとまって確認されたことから分類した。この際、折れ面よりも新しい調整痕があるもののみを意図的な折り取りと判断し、抽出した。15点を確認し、このうち2点を掲載した。出土点数は第3表に、分布は第34図8に示した。分布ではSXQに極端に偏る傾向がうかがえる。母岩別資料01に4点が含まれる。第42図7のように、折れ面を利用して急角度の刃部を作出したと考えられる成品があることから、これらは篋状石器Ⅱ類の素材だった可能性が高い。

石核（第48図、第49図1・2、第62図3～5、第63図1）出土点数を第4表8に、分布を第35図7に示した。全体で31点を確認し、SXQ出土の5点と遺構外出土の4点を掲載した。Ⅰ類（礫素材）は出土していない。第48図1～3の石核は同一母岩の可能性が高い（図版12～3）。2・3はそれぞれ接合資料である。分布では、SXQとLN47グリッド付近に偏る傾向が確認できる。

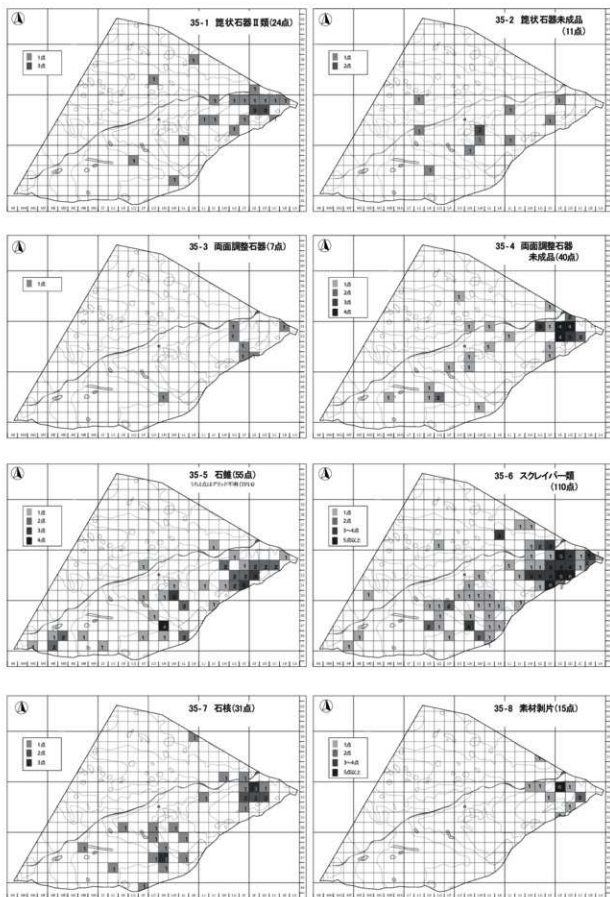
両面調整剥片（第51図2・3）両面調整石器類の調整加工によって生じたとみられる特徴的な剥片で、東区では合計457点を確認した（第4表9）。このうち接合関係が認められたもののみを実測図で示した。中には刃部再生加工を示すとみられる刃部を取り込んだ剥片も5点確認できた（巻頭図版3）。また、石錐（第45図13）の素材や、RF、UFとなっているものも確認できる（第5表）。分布状況を第36図3に示した。沢より南では広範囲に分布している様子がうかがえるが、中でもSXQへの集中は顕著である。SXQでの作業内容を強く示唆する出土品と言えよう。

第5表 特徴的な両面調整剥片一覧

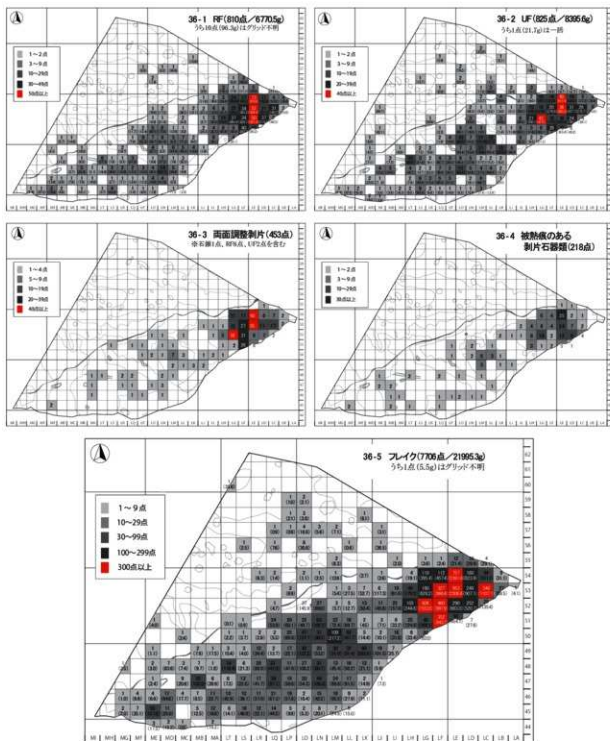
| No. | ゾナ | 層位 | 採り出し番号 | 年月日 | 重量(g) | 特徴 | 掲載位置 |
|-----|------|----|-----------|--------|-------|---------------|-------|
| 1 | LF51 | Ⅲ | — | 190731 | 2.9 | 刃部を含む/UFとして利用 | 巻頭図版3 |
| 2 | LF53 | Ⅳ | — | 156722 | 5.1 | 刃部を含む | 巻頭図版3 |
| 3 | LF54 | Ⅰ | — | 156619 | 0.3 | 刃部を含む | 巻頭図版3 |
| 4 | LF53 | Ⅳ | — | 133023 | 3.3 | 刃部を含む | 巻頭図版3 |
| 5 | LF51 | Ⅰ | — | 156709 | 2.2 | 刃部を含む | 巻頭図版3 |
| 6 | LF53 | Ⅲ | — | 156729 | 1.5 | 砂として利用 | — |
| 7 | LF54 | Ⅲ | — | 156713 | 5.5 | 砂として利用 | — |
| 8 | LF53 | Ⅲ | — | 156617 | 2.6 | 砂として利用 | — |
| 9 | LF50 | Ⅲ | — | 156624 | 2.6 | 砂として利用 | — |
| 10 | LF50 | Ⅲ | — | 133029 | 2.6 | 砂として利用 | — |
| 11 | LF54 | Ⅲ | SN802-300 | 156717 | 27.8 | 砂として利用 | 図3 |
| 12 | LF54 | Ⅲ | SN903-270 | 156722 | 9.8 | 砂として利用 | 図2 |
| 13 | LF54 | Ⅲ | SN903-273 | 156722 | 6.5 | UFとして利用 | 図2 |



第34図 東区出土剥片石器類器種別分布図(1)



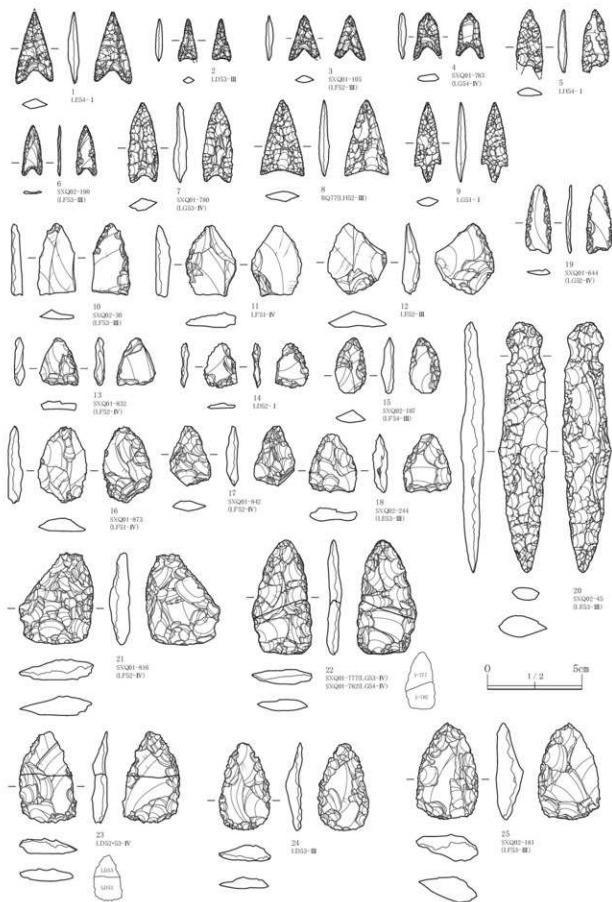
第35図 東区出土剥片石器類器種別分布図(2)



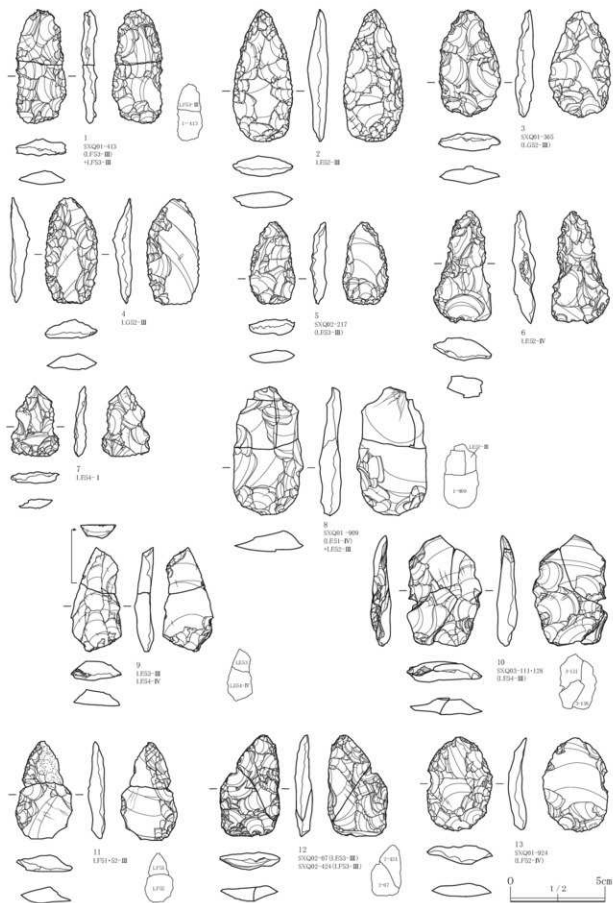
第36図 東区出土剥片石器類器種別分布図(3)

被熱痕のある剥片石器類 上記の剥片石器類には、被熱によるものとみられる痕跡が認められるものが含まれた。集計の結果、218点に被熱痕跡を確認することができた。分布を第36図4に示した。これによると、沢南側では広範囲に分布すること、SXQに顕著な偏りを見せるほか、LL・LM49・50グリッド付近にもやや集中することが確認できた。

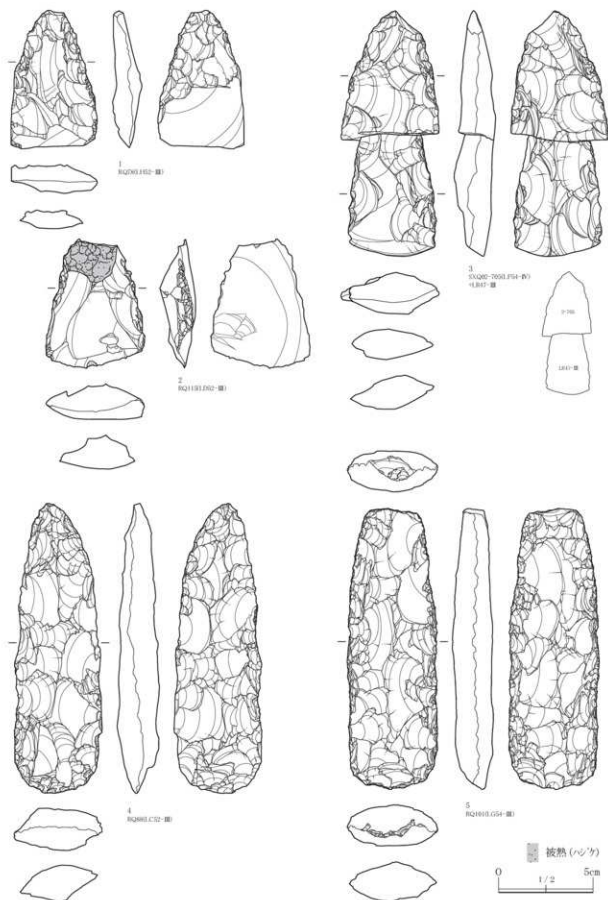
接合資料(第49図3、第50～53図、第63図2～4) 整理作業を通して、133例の接合を確認した。中には接合した結果、本報告で分類した石器成品や未成品と認定された15例が含まれる。単純な折



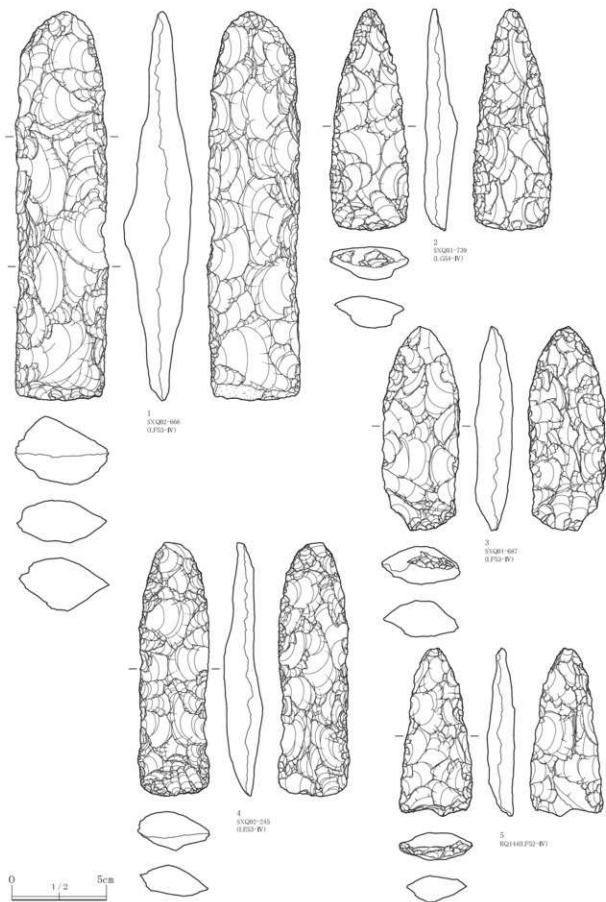
第37圖 東区：SXQ石器集中区出土剥片石器類（1）石鏃、有撮石器、小形筈状石器



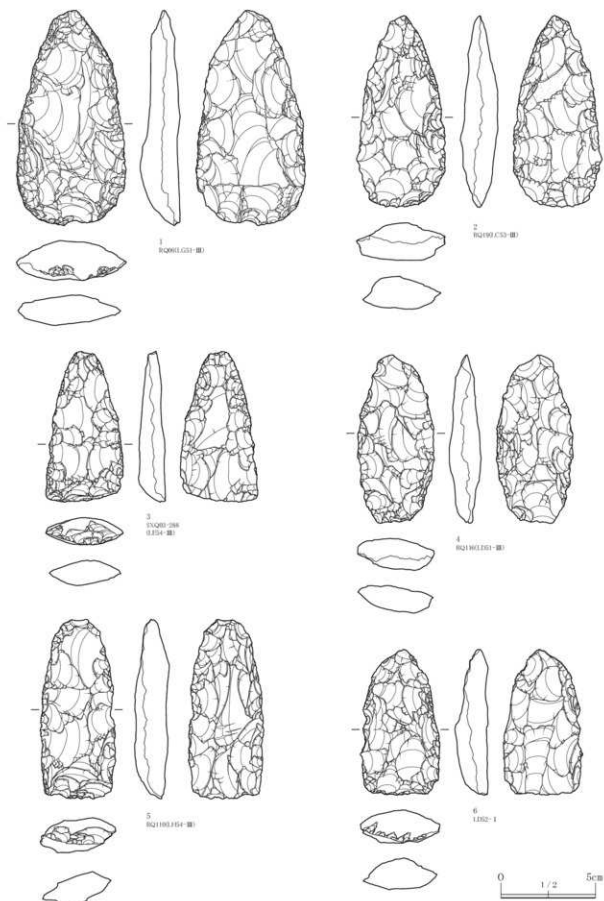
第38図 東区: SXQ 石器集中区出土剥片石器類 (2) 小形筈状石器



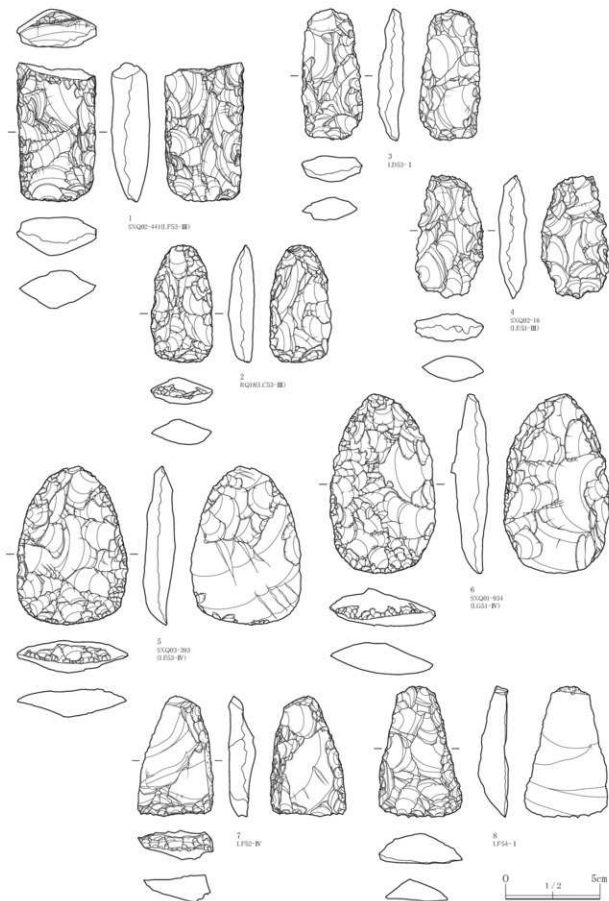
第39図 東区: SXQ 石器集中区出土剥片石器類 (3) トランシェ様石器、錠状石器 IA 類



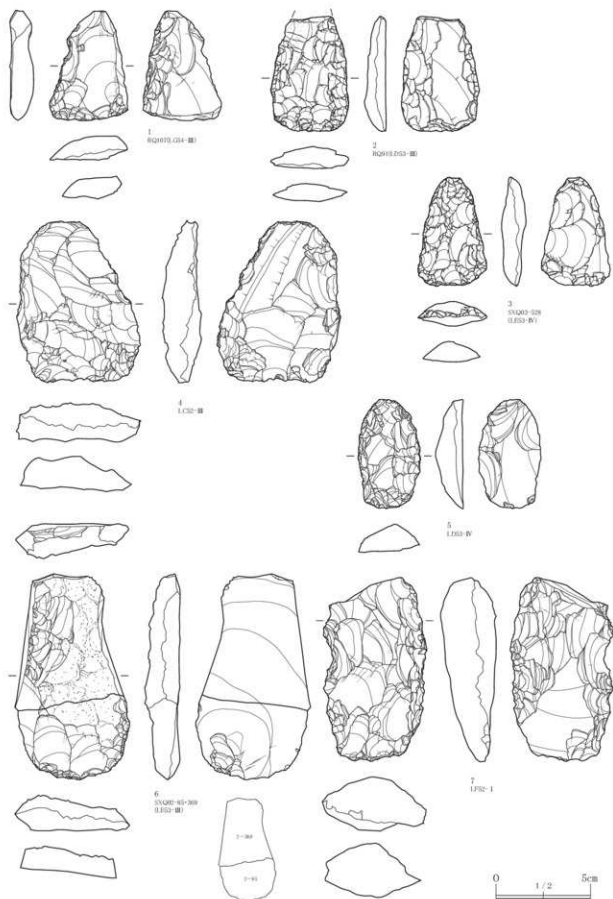
第40図 東区: SXQ 石器集中区出土剥片石器類 (4) 筈状石器 IA・IB 類



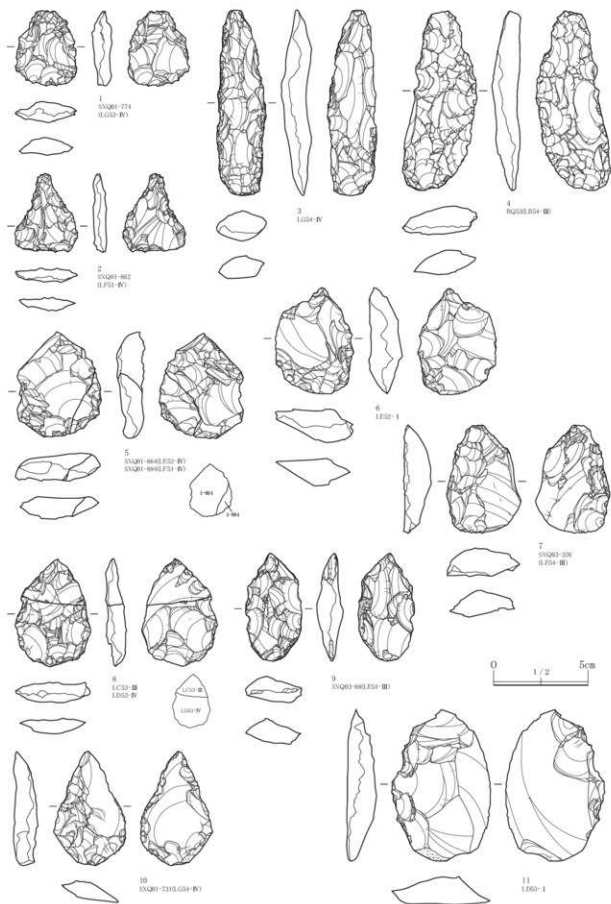
第41図 東区：SXQ石器集中区出土剥片石器類（5） 籠状石器IB類



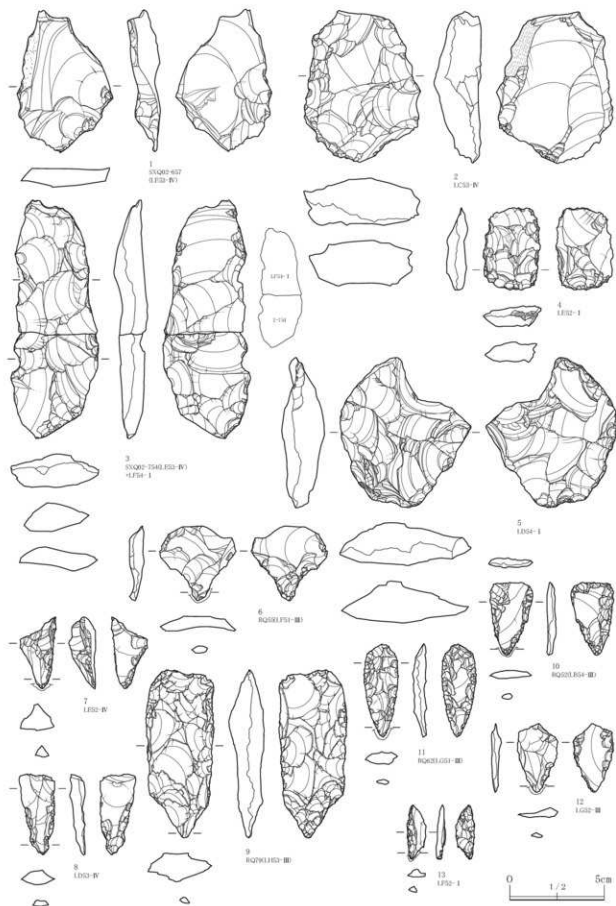
第42図 東区: SXQ 石器集中区出土剥片石器類 (6) 鹿状石器 IB・IC・IIA・IIB類



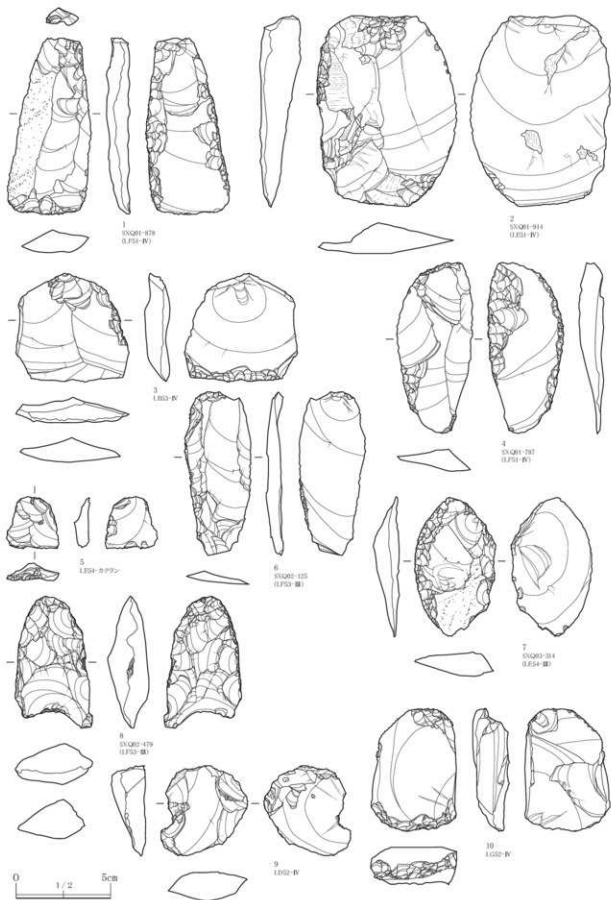
第43図 東区: SXQ 石器集中区出土剥片石器類 (7) 鹿状石器 I E・II B・II C 類



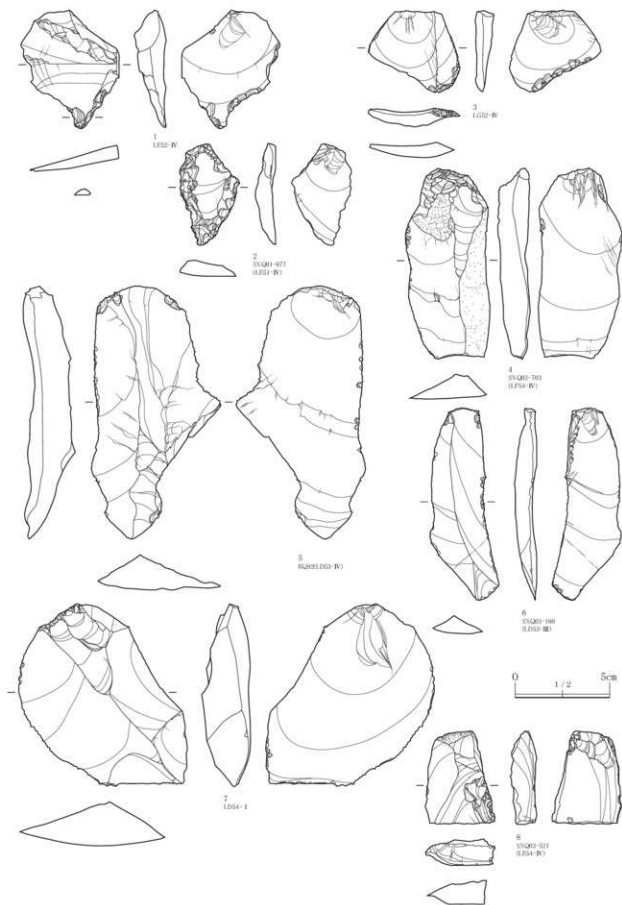
第44図 東区: SXQ 石器集中区出土剥片石器類 (8) 両面調整石器、両面調整石器未成品



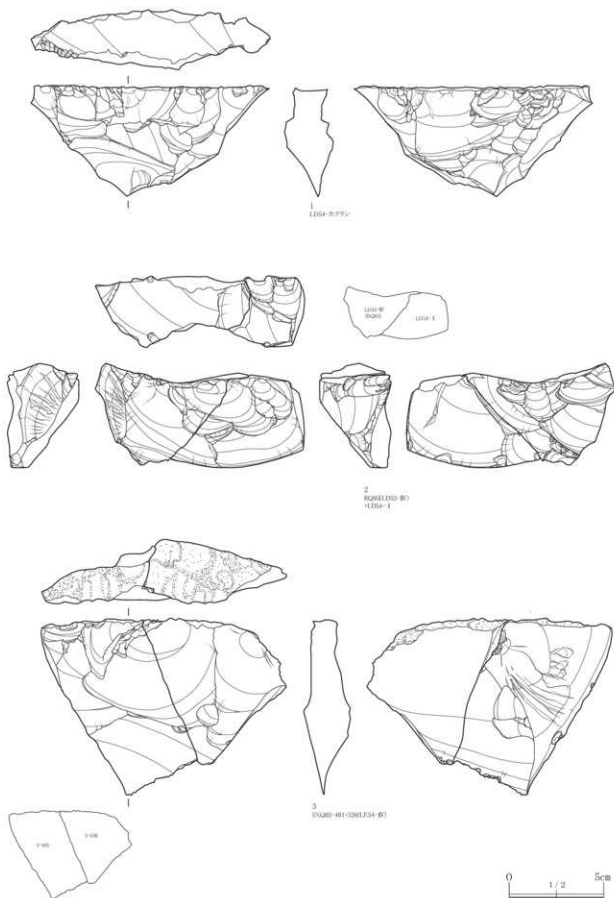
第45図 東区：SXQ 石器集中区出土剥片石器類 (9) 両面調整石器未成品、石錐



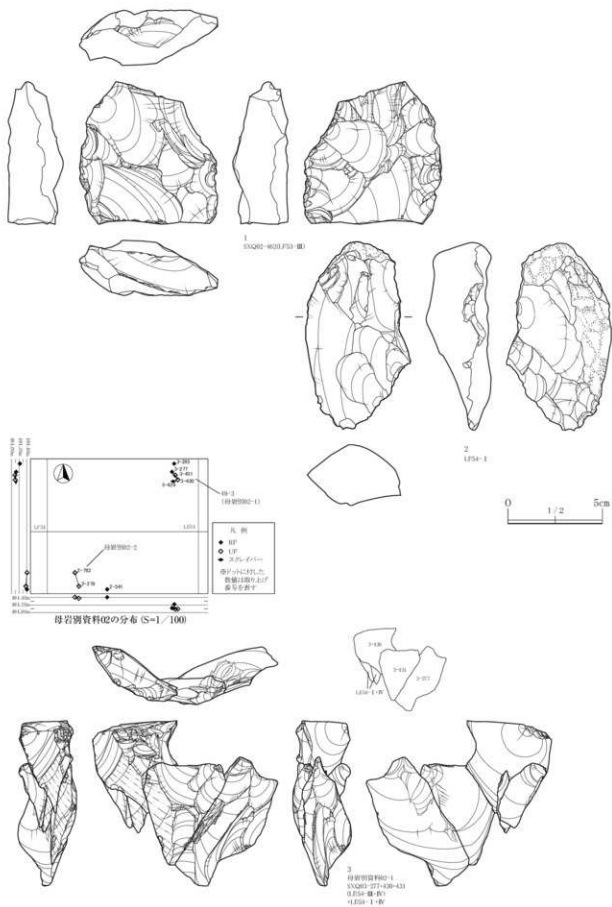
第46図 東区: SXQ 石器集中区出土土片石器類 (10) スクレイパーⅠ・Ⅱ・Ⅲ類



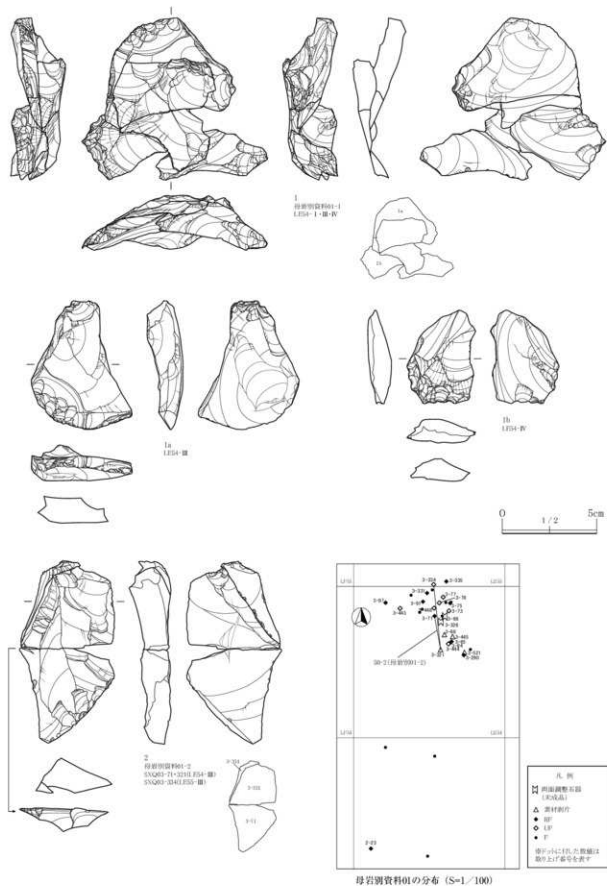
第47図 東区：SXQ 石器集中区出土剥片石器類(11) スクレイパーIV類、UF、素材剥片



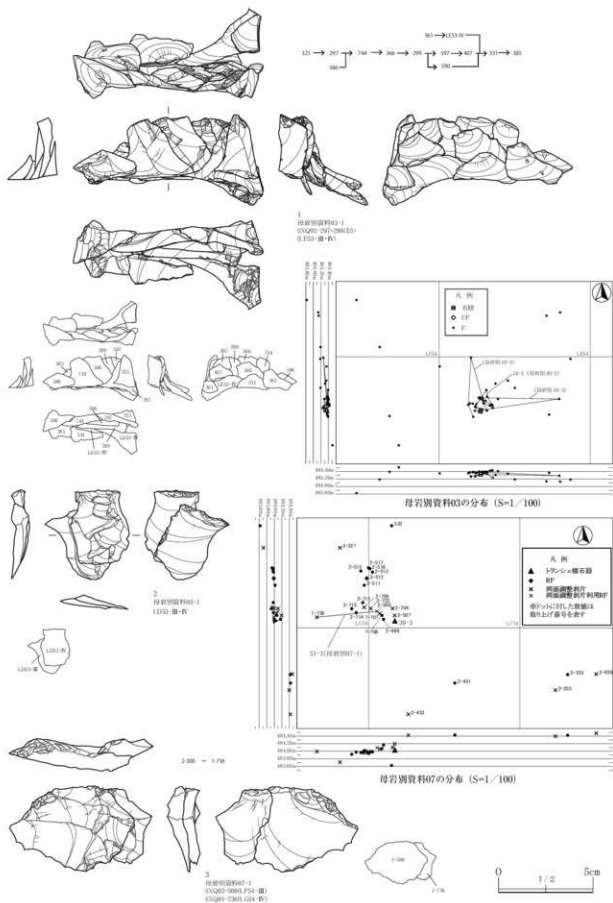
第48図 東区：SXQ 石器集中区出土剥片石器類 (12) 石核



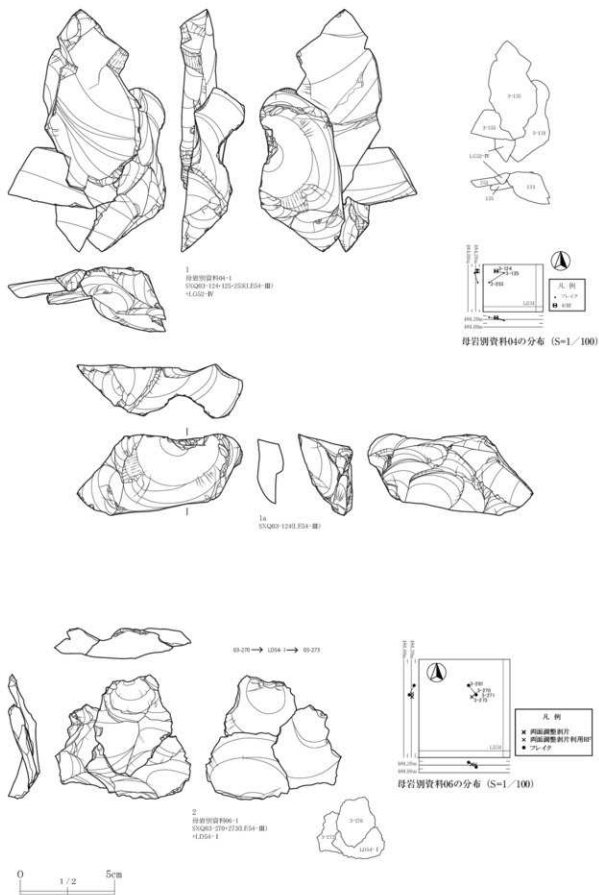
第49図 東区: SXQ 石器集中区出土剥片石器類 (13) 石核、接合資料



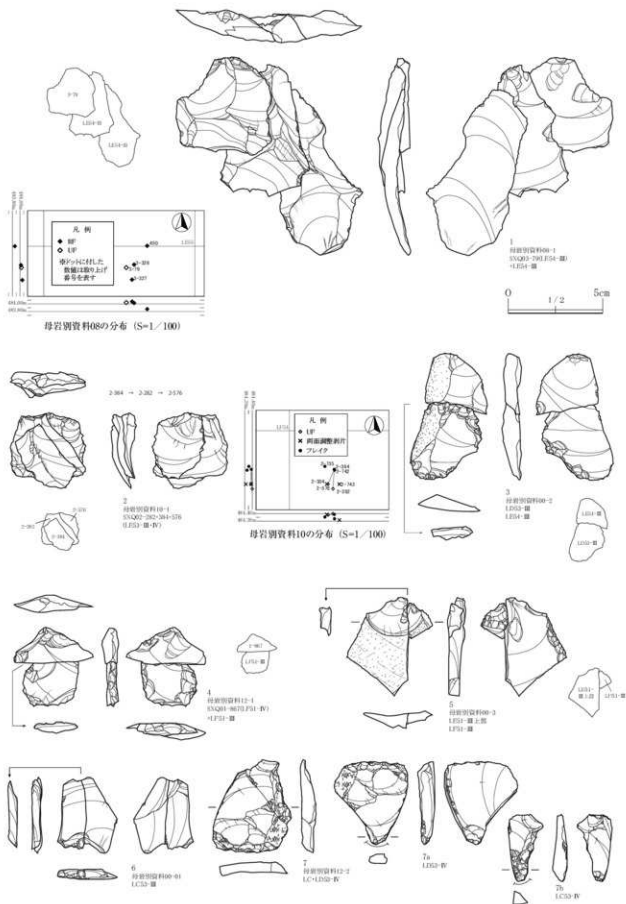
第50図 東区: SXQ 石器集中区出土剥片石器類 (14) 接合資料



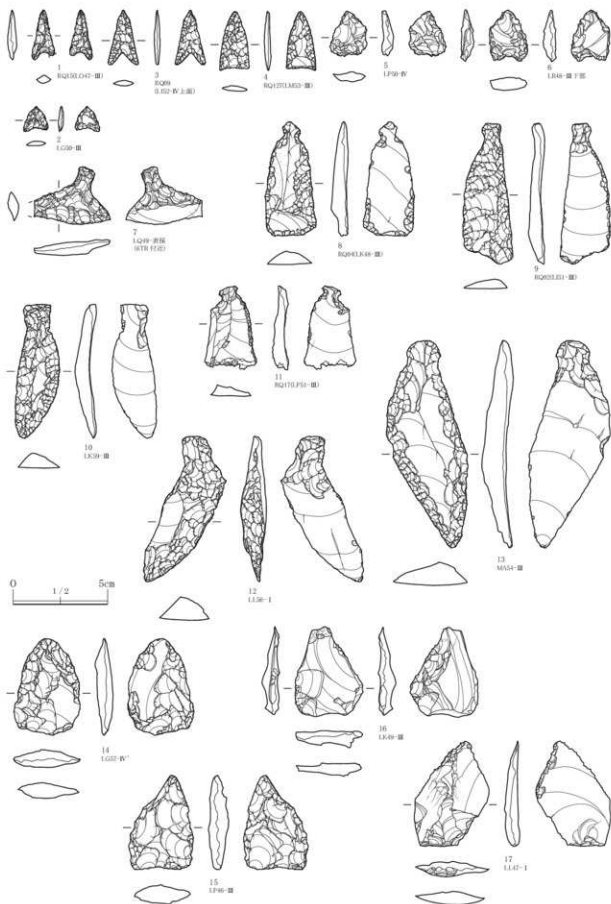
第51図 東区：SXQ石器集中区出土剥片石器類(15)接合資料



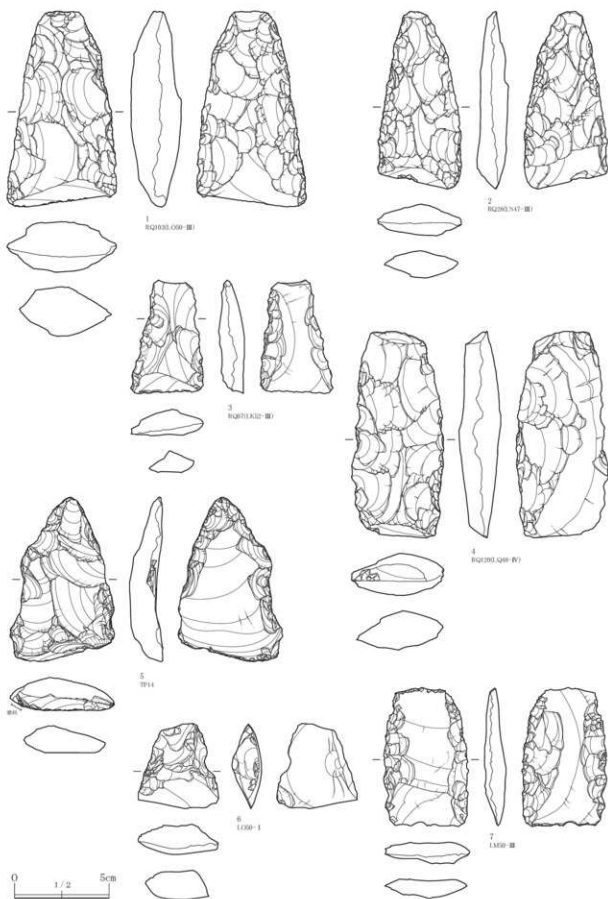
第52図 東区: SXQ 石器集中区出土剥片石器類 (16) 接合資料



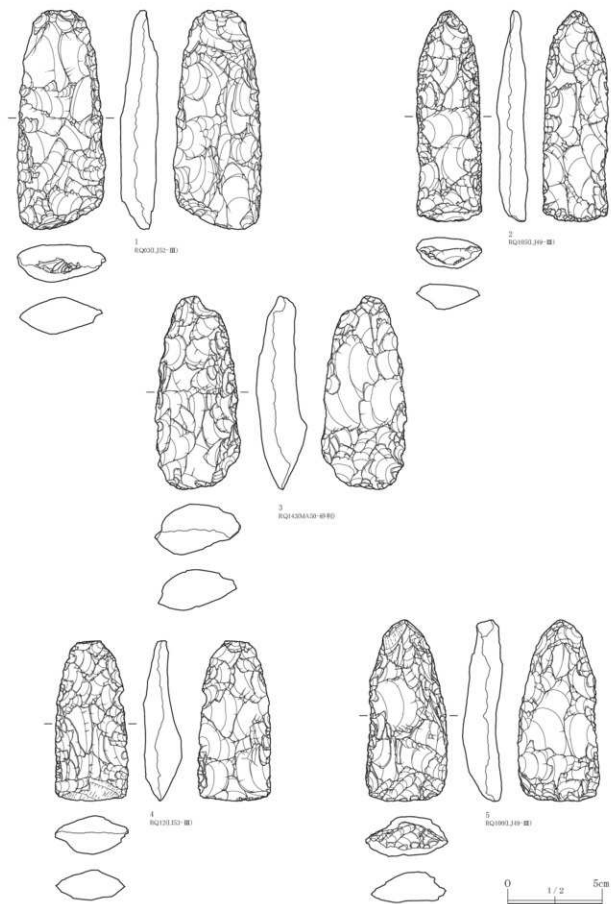
第53図 東区：SXQ石器集中区出土剥片石器類(17) 接合資料



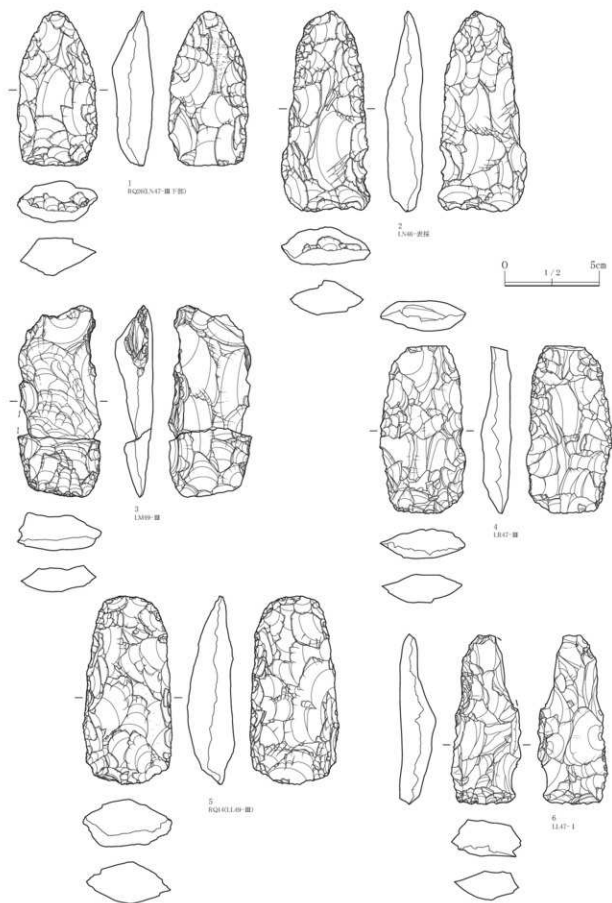
第54図 東区：遺構外出土剥片石器類(1) 石鏃、石匙、小形筈状石器



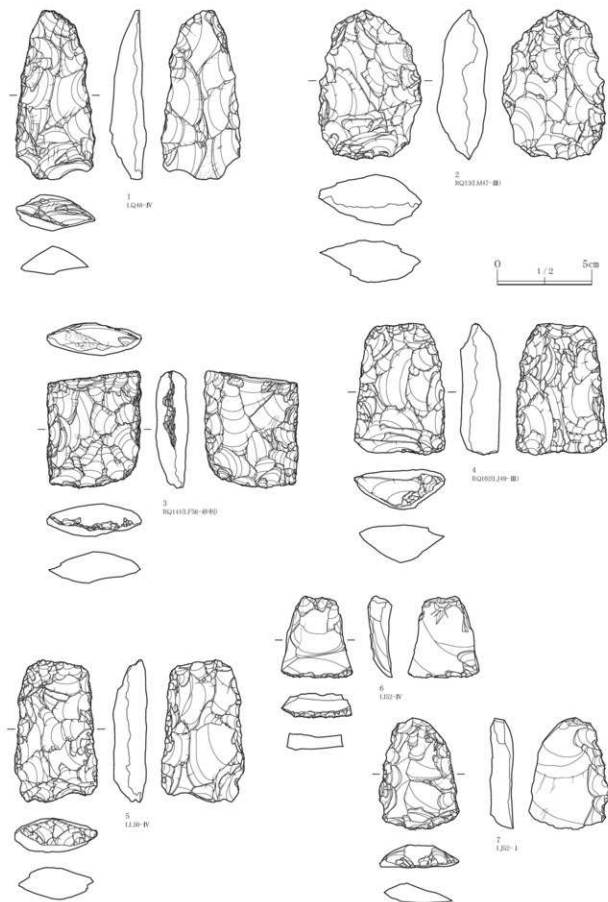
第55図 東区：遺構外出土剥片石器類（2）トランシェ様石器



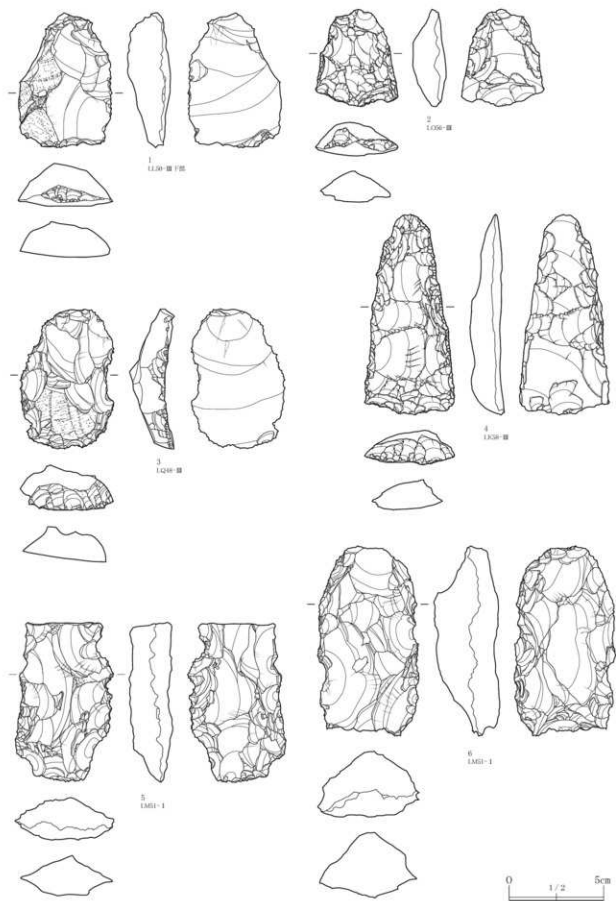
第56図 東区：遺構外出土剥片石器類(3) 鹿状石器IA・IB類



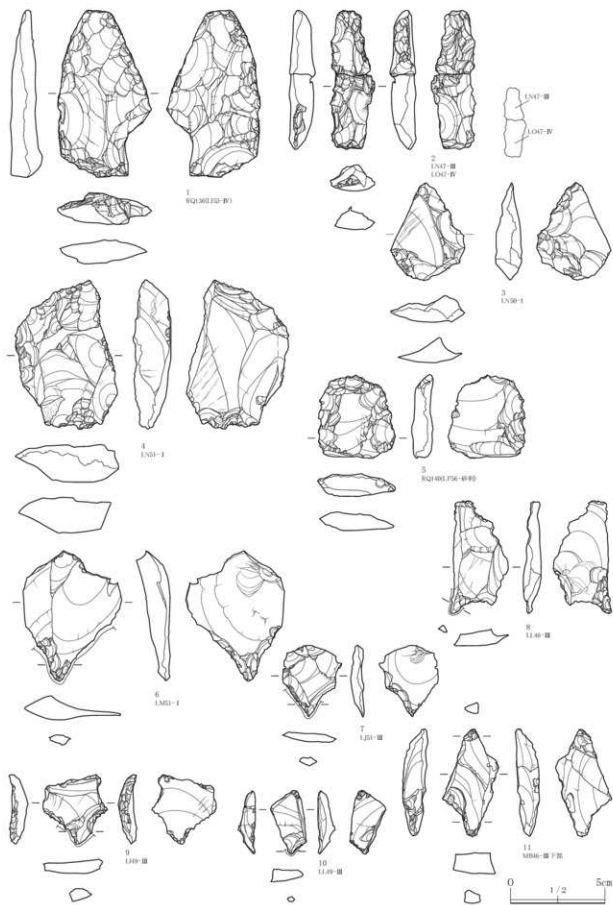
第57図 東区：遺構外出土剥片石器類(4) 腔状石器IB類



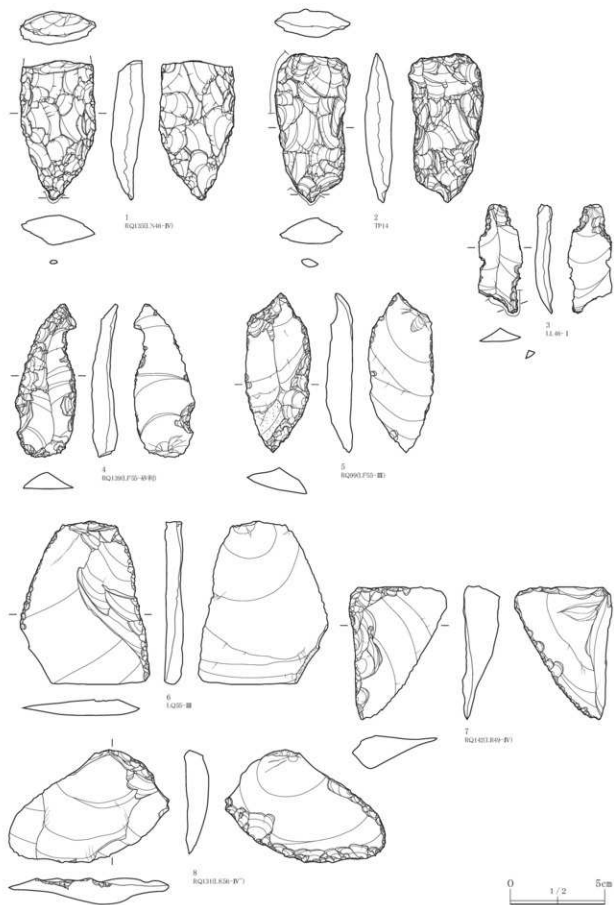
第58図 東区：遺構外出土剥片石器類 (5) 鹿状石器 IB・IC・IIB類



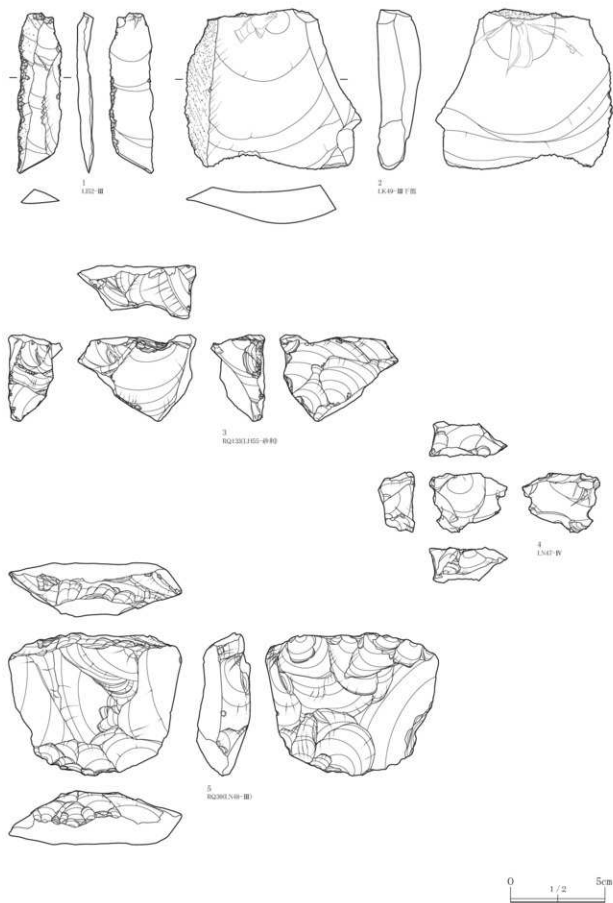
第59図 東区：遺構外出土剥片石器類 (6) 筒状石器IE・II B・IID類



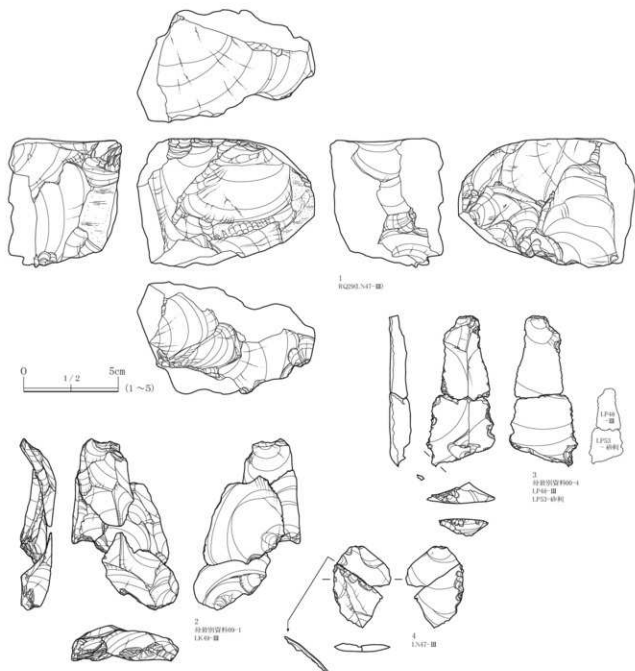
第60図 東区:遺構外出土剥片石器類(7) 筒状石器 I E 類、両面調整石器、石錐



第61図 東区：遺構外出土剥片石器類(8) 石錘、スクレイパー類



第62図 東区：遺構外出土剥片石器類(9) スクレイパー類、石核



第63図 東区：遺構外出土剥片石器類(10) 石核、接合資料

れ面での接合（接合タイプⅢ）を示した34例を除き、主剥離面で接合したもの（接合タイプⅠ）、意図的な折り取り加工である可能性がある資料（接合タイプⅡ）の中で特徴的なものを抽出し、実測図を掲載した。また、特に接合資料を中心として、母岩別分類を試みた。肉眼で観察できる、石材表面の色調や油脂光沢の程度などに特徴のあるものや、接合関係のあるものに限って、出土地点のまとまりや剥片形状の共通点などを考慮しながら、同一母岩である可能性の高いものをまとめて報告した。母岩別資料の内訳は第10表に、分布状況についてはそれぞれ挿図中に示した。掲載資料の一部について以下に記載する。

第50図1・2は母岩別資料01で、1は打面を転位させながらランダムに剥片剥離を行っている。

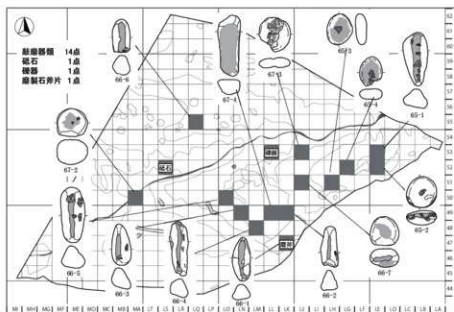
本接合資料中には筵状石器Ⅱ類の未成品（第50図1a）、小形筵状石器の未成品（同1b）が含まれる。2は厚手の縦長剥片に折り取り加工が施されたもので、3-7には折れ面への調整加工と折れ面からの連続する調整加工が確認できる。3-321は素材剥片に分類したもので、折れ面角には調整がほどこされており、最終的には先端部を利用したものと思われる。母岩別資料01にはこの他、両面調整石器未成品2点、素材剥片3点（第47図8および未掲載）が含まれており、厚さ1.5cmほどの剥片を目的としていたと推察される。第51図1は母岩別資料03で、14点の剥片が接合した。角礫状の素材から連続的に剥片剥離が行われた様子を読み取れる。母岩別資料03にはRFがほとんど含まれないことから、目的剥片の剥離作業を示す可能性は低い。同図2・3、第52図2は、両面調整剥片間の接合例である。第51図2や第52図2には、側縁からの調整加工や連続する微細な剥離も確認できる。臨機的な石器として使用されたものかもしれない。第52図1は、母岩別資料04で、石核1点（1a）が含まれる。節理面から板状に割れている第53図1・2は剥片剥離が連続して行われた様子を伺うことができる。同図3～7は折れ面からの調整加工が認められる資料である。6は折り取り加工後の剥離調整でスクレイパー類Ⅳc類を作り出している。7は小形筵状石器の未成品だが、折損後には2点の石錐とされている。第63図3・4も折り取り加工の認められる資料で、3は縦長剥片を折り取った後、縁辺に調整が加えられている。また端部側の破片は石錐として利用されている。4は石錐の製作過程を表す資料で、ハルブ側を折り取りによって除去したものと考えられる。

③ 礫石器類（第65～67図、図版17-2、22-5、23）

出土点数を第6表にまとめた。また、その分布状況を第64図に示した。礫石器類としたものは合計17点である。その全てを掲載した。以下、器種別に記載する。

第6表 東区出土礫石器類一覧

| | 磨製石斧片 | 散磨器類 | | | | | | 砥石 | 礫器 |
|----------|-------|------|----|-----|-----|------|------|----|----|
| | | IA | IB | IIA | IIB | IIIC | IIIA | | |
| 石器集中区遺構外 | 1 | 2 | 4 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 合計 | 1 | 2 | 5 | 1 | 4 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| | | 7 | | 6 | | | | | |



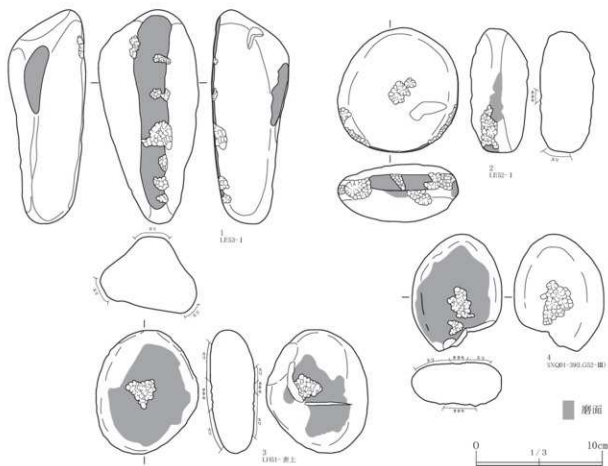
第64図 東区出土礫石器類分布図

敲磨器類（第65・66図、第67図1～3）14点を確認した。第65図1は3つの稜線全てに磨面が確認できる。第65図2は円礫を素材としているが、側面が磨面として使用されている。第66図1は磨面に僅かに敲打痕が見て取れる。磨面を平坦化するための加工の痕跡と判断した。同図4は砂質シルト岩裂で、側面に数条の線刻が認められる。同図7は円礫を素材としているが、側面も磨面に使用されている。第67図3は敲打痕のみが確認されたもので、深く窪んだ敲打痕が表裏とも列状に並んでいる。同図4は磨面が僅かに凸状であったため、本分類とした。素材の形状別に出土傾向を確認すると、点数ではⅠ類が7点と最も多く、円礫を使用したⅡ類が6点と次ぐ。棒状礫を素材としたⅢ類はわずかに1点が分類されたのみである。分布状況では、Ⅰ類はLK～LP48～50グリッド付近にやや集中する（第64図）。これに対しⅡ類は、SXQ周辺から微高地に比較的まとまるようである。

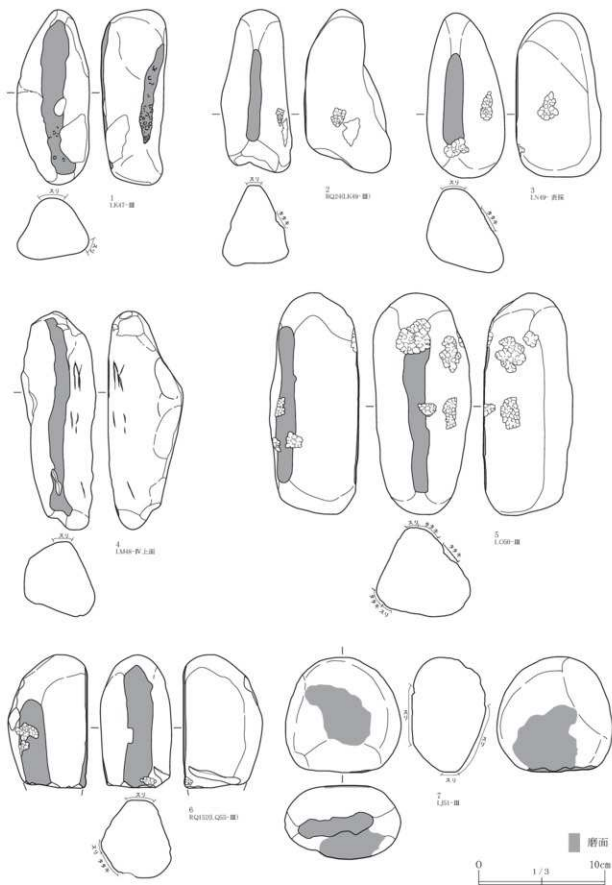
磨製石斧片（第64図5）LK47グリッドⅢ層より1点が出土した。剥離した磨製石斧表面とみられ、整形に伴う細かな擦痕が認められる。縞状文様の見える緑色の石材で、北海道類平川上流を産地とする緑色岩（アオトラ石）とみられる。

砥石（第64図6）1点が出土した。板状の礫を素材とし、使用面はわずかに凹面となる。使用によるものか、斜め方向の線状痕あり。

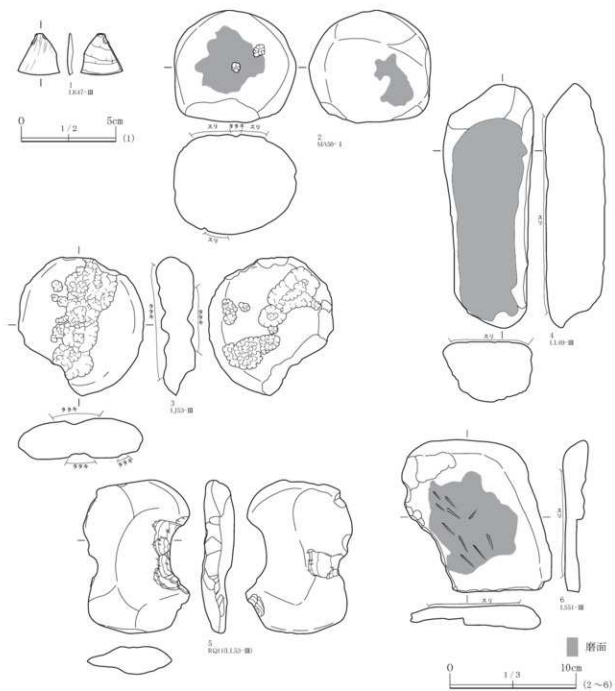
礫器（第64図7）1点が出土した。扁平な礫を素材とし、側縁に剥離を加えて刃部を作出している。沢岸に分布した大きな礫の間に挟まった状態で出土した。刃部の摩耗が著しい。



第65図 東区：SXQ 石器集中区出土礫石器類 敲磨器類



第66図 東区：遺構外出土礫石器類（1）敲磨器類



第67図 東区：遺構外出土礫石器類(2) 磨製石斧片、敲磨器類、砥石

3 所属時期が不明な遺構

(1) 土坑

SK38 (第68図、図版23-1・2)

〔位置・検出状況〕 MA47・48グリッドに位置する。確認調査で把握されていたもので、トレンチ底面となっていたⅢ層を精査したところ、黒褐色土と黄褐色土の混じった不整形プランを確認した。

〔平面形・規模〕 平面は長径1.0m、短径0.92mの円形で、確認面から底面までの深さは0.25mである。底面から壁は緩やかなカーブを描いて立ち上がる。

〔堆積土〕 覆土を6層に分層した。覆土上部の1～4層は黒褐色土と黄褐色土が互層となっている。6層はⅣa層に土質、土色ともに似通っており、最初は覆土であると気付かなかったが、しまりが弱かったことから、截ち割ってみたところ遺物が出土した。

〔出土遺物〕 (図版23-5) RF 5点、UF12点、剥片21点が出土した。同一母岩と考えられる2つのグループとその他の石器に分けられる。写真左下の褐色のグループは本遺構の確認面から、その他は6層から出土した。写真右上のグループではUFの一部が接合している。

〔時期〕 覆土上部にⅡ層(十和田中振火山灰)の堆積が認められないことから、Ⅱ層が確認された遺構よりも新しいものと判断した。比較的まとまった量の剥片石器類が出土していることを考えると縄文時代、前期前葉以降のいずれかの時期に構築された遺構である可能性も考えられる。

SK92 (第68図、図版23-3・4)

〔位置・検出状況〕 MA・MB47グリッドに位置する。確認調査で把握されていたもので、トレンチ底面となっていたⅢ層を精査したところ、黒褐色土と黄褐色土の混じった不整形プランを確認した。

〔平面形・規模〕 平面は長径1.68m、短径1.22mの楕円形で、確認面から底面までの深さは0.26mである。底面は比較的平坦で、壁はやや開き気味に立ち上がる。底面の一部が白色化しているが、これはポドゾル化等の化学的風化作用によるものとみられる。

〔堆積土〕 3層に分層した。1層は基本層序1層に、2層はⅢ層にそれぞれ対応する。3層はⅢ層由来土を主体とし、Ⅳ層ブロックや小礫が含まれる。自然堆積である可能性が高い。

〔出土遺物〕 RF 3点、UF 2点、剥片 2点を出土した。

〔時期〕 覆土上部にⅡ層(十和田中振火山灰)の堆積が認められないことから、Ⅱ層が確認された遺構よりも新しいものと判断した。詳細な時期は不明だが、SK38とは場所も近く、覆土にも共通点が見受けられることから、SK38と同時期の遺構である可能性が考えられる。

(2) 溝跡

SD30 (第68図、図版25-1・2)

〔位置・検出状況〕 LS49・50グリッドに位置する。南西に向かう斜面の中ほどで、Ⅲ層を削りながら遺構確認を行っていたところ、等高線に沿うように帯状のプランを確認した。プランを横断するようにサブトレンチを設定して確認したところ、斜面下方でも立ち上がりがあることを確認できたため遺構と判断した。

〔平面形・規模〕 西端は確認調査トレンチに切られている。残存部で長さ2.23m、幅1.3m、確認面か

らの深さは0.13mである。

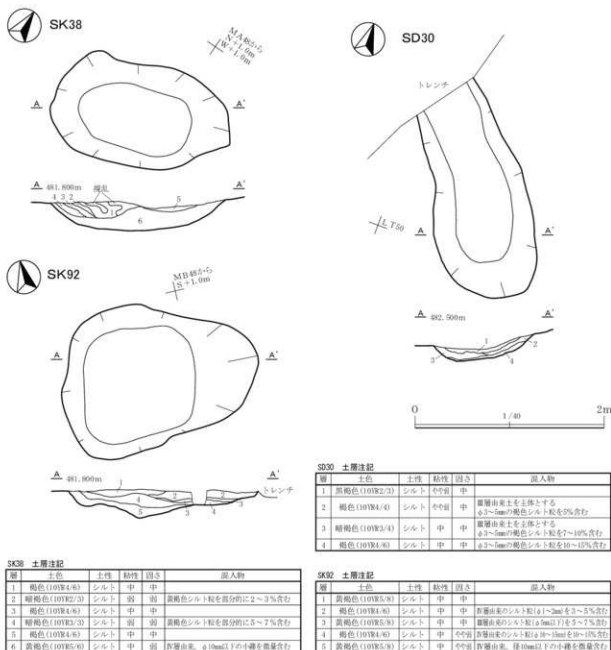
〔堆積土〕 4層に分層した。レンズ状堆積を示しており、自然堆積と判断した。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔時期〕 覆土にⅡ層を伴っておらず、上部にⅡ層が堆積する遺構群よりも新しいものと判断した。しかし遺物も出土しておらず、所属時期については不明である。

SD39 (第69図、図版24-5~7)

〔位置・検出状況〕 LS~MB48グリッドに位置する。Ⅲ層上面でのプラン確認を実施したところ、東西に長い帯状のプランを確認した。プランを横断するように複数のサブトレンチを設定して確認した



第 68 図 東区：SK38・92 土坑、SD30 溝跡

ところ、明瞭な立ち上がりを確認することができたため遺構と判断した。

〔平面形・規模〕東西の端部では立ち上がりがなく、確認面となだらかに連続する。

〔堆積土〕単層である。

〔出土遺物〕RF 1点、UF 2点、剥片3点が出土した。

〔時期〕Ⅲ層上面でプランが検出されていることから、比較的新しい時期の遺構と推察されるが、詳細な時期は不明である。

(3) 焼土遺構

調査区南西側の平坦地に、複数の焼土遺構を確認した。いずれも1層を除去した段階で確認されている。被熱層が確認できるもののみを遺構とし、番号を付けて精査した。確認層位や規模が似通っており、地点も集中していたことから、ほぼ同時期に構築されたものと考えられる。SN14とSN99から採取された炭化物で放射性炭素年代測定を行った。その結果、古くても近世から近代との結果が出ている(第4章第1節)。

SN04 (第69図、図版25-5・6)

〔位置・検出状況〕LM47グリッドに位置する。遺物包含層の厚さを確認しようとLN47グリッドとの境界部分にサブトレンチを設定し、掘り進めたところ、Ⅲ層上面に焼土と炭化物の分布を確認した。周辺を広く確認したところ、焼土ブロックの点在する一部に被熱層を伴っている範囲を確認したため、SN04とした。

〔平面形・規模〕26cm×28cmの不整形で、焼土の厚さは2cm、被熱層は約1cmで薄い。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

SN05 (第69図、図版25-7・8)

〔位置・検出状況〕LN46グリッドに位置する。1層を除去し始めたところ、Ⅲ層上面に焼土ブロックの広がりを確認。精査したところ一部に被熱層を伴っていることを確認し、この範囲をSN05とした。

〔平面形・規模〕50cm×40cmの不整形で、焼土の厚さが4cm、被熱層の厚さが1~1.5cmである。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

SN14 (第69図、図版26-1・2)

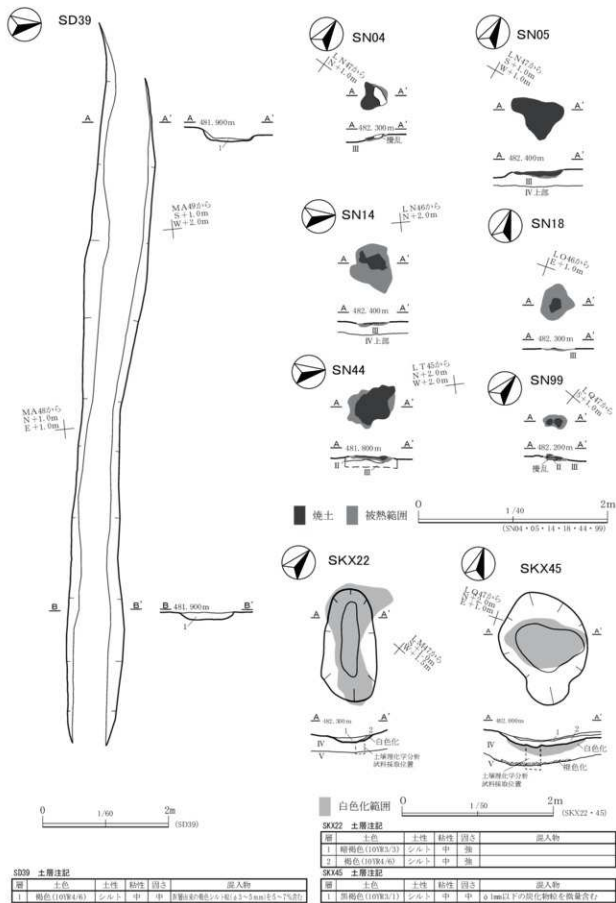
〔位置・検出状況〕LM46グリッドに位置する。旧作業道部分に残存していた灰混じりの1層を除去したところ、焼土のまとまりが確認された。精査したところ、平面的にも被熱層の広がりが確認できたため、これをSN14とした。

〔平面形・規模〕45cm×45cmの不整形で、焼土層は一部に残るのみである。焼土は厚さ5mm程、被熱層は厚い部分で2cmほど確認できる。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

SN18 (第69図、図版26-3・4)

〔位置・検出状況〕LN45グリッドに位置する。1層を除去したところ、Ⅲ層上面に焼土のまとまりを確認した。周辺に被熱層や炭化物が確認できたことから、この場所で火を焚いたものと認識。



第 69 図 東区：SD39 溝跡、SN04・05・14・18・44・99 焼土遺構、SKX22・45 底面が白色化した窪地

SN18とした。

〔平面形・規模〕36cm×34cmの不整形で、焼土と被熱層を合わせても1cmに満たないほど痕跡が弱い。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

SN44（第69図、図版26-5・6）

〔位置・検出状況〕LT45グリッドに位置する。I層を除去したところIII層上面に焼土のまとまりを確認した。平面で被熱痕跡も確認できたことから、この場所で火を焚いたものと認識し、SN44とした。

〔平面形・規模〕48cm×33cmの不整形で、焼土が厚い部分で2cm、被熱層は1.5cmを測る。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

SN99（第69図、図版26-7・8）

〔位置・検出状況〕LP・LQ46グリッドに位置する。I層を除去したところ、焼土のまとまりと長さ3cmほどの炭化材を確認した。

〔平面形・規模〕25cm×12cmの不整形で、焼土が厚さ1.5cm、被熱層が厚さ5mm程である。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

4 東区小括

出土遺物の年代と分布傾向

東区の出土土器はそのほとんどがI類に分類可能で、その帰属時期は早期中葉から後葉と考えられる。2点のみではあるがII類土器も出土していることを考慮するならば、東区の利用は早期中葉から後葉を主体とし、一部は前期初頭まで継続して利用された可能性もある。

土器分布図（第30図）と剥片石器類分布図（第33図）を比較してみると、剥片石器類の分布の濃淡が土器の分布と符合するように見える。剥片石器類はSXQのほか、LL～LN48～51グリッド付近やLR～MA46～48グリッドを中心とした平坦地にもやや分布が集中している。土器を確認すると、SXQのある微高地では早期中葉に帰属するIA類が、平坦地では早期後葉に帰属するIB類がまわっており、若干の時期差が認められる。なお、IC類は1点のみがSXQのI層から出土しているが、他は平坦地（LT～MAライン付近）からの出土である。

こうした状況を念頭に剥片石器類の器種別分布状況を確認すると、SXQに分布の偏りが確認できたのは石鏃、小形筥状石器、筥状石器、石錐、両面調整石器未成品、スクレイパー類、素材剥片、石核、両面調整剥片である。早期中葉の活動内容に大きくかわる石器類とみられる。また、被熱痕のある剥片石器類もSXQにまわっている。

LL～LN48～51グリッド付近にもある程度まわって出土した器種には筥状石器I類、石錐、スクレイパー類、石核、両面調整剥片がある。被熱痕のある石器も比較的まわっている。早期中葉～後葉にはSXQから活動の場所をややずらしながらも、これら石器を使った作業は継続されていたという事かもしれない。

特に分布の偏りが認められなかったのはトランシェ様石器である。SXQからLL～LN48～51グリッド付近にまで偏りなく疎らに分布するが、その分布範囲は筥状石器I類と重なっている点に注目したい。こうした分布状況から、両者には時期差が無い可能性がある。

遺構、遺物の特徴と遺跡の性格

確認された遺構は少なく、居住に関わる施設と推定されるものはなかった。SK15、SK82土坑は沢に面して構築されていることから、沢水の利用に関わる施設であった可能性もある。また、被熱痕跡のある剥片石器がSXQやLL～LN48～51グリッドに集中して分布することを確認した。遺構としては把握できなかったが、これらの場所で火の利用があったことを示すものとして特筆される。

東区剥片石器類の特徴として、折り取り加工の多用が挙げられる。掲載した資料の中でも、接合資料（第50図1、第53図3～6、第63図3・4）、素材剥片（第47図8、第50図1）、石錐（第53図7、第60図10・11）、スクレイパー類（第46図5）など、折れ面を利用した加工が確認できる。

石器組成の中では筥状石器1類が目立つ。成品や破損品のみならず、破損後の再加工、転用品も存在する。東区での早期縄文人の活動内容を考える上で、注目すべきものと言える。東区出土の剥片石器類については、第5章総括で改めて取り扱う。

第7表 東区：出土土器観察表

| 検出番号 | 図版番号 | 器種 | 部位 | 分類 | グリップ | 出土層位 | 取り上げ番号 | 観察内容(断面・調整等) | 胎土 | 付着物等 | |
|-------|------------|-------------------|------------|---------|------|-------|---------------|--|----------------|------------------|--------|
| 31-1 | 7-1・2 | 深鉢 | 胴部 | I群A2 | LC33 | III | BP35・48・63・66 | 白帯に黒目ノ「く」字状有柄沈線によるモチーフ/モチーフ内に貝殻製練圧痕文化志道 | 中～細粒砂 | 表面に炭化物 | |
| | | | | | | | BP33・34・43 | | | 表面に炭化物 | |
| | | | | | | | BP32 | | | 表面に炭化物 | |
| | | | | | | | BP44 | | | 表面に炭化物 | |
| | | | | | | | BP46 | | | 表面に炭化物 | |
| | | | | | | | III・IV | | | BP64・69 | 表面に炭化物 |
| | | | | | | | --- | | | --- | 表面に炭化物 |
| | | | | | | | --- | | | --- | 表面に炭化物 |
| | | | | | | | III | | | BP42 | 表面に炭化物 |
| | | | | | | | BP65 | | | 表面に炭化物 | |
| | | | | | | | IV | | | BP71 | 表面に炭化物 |
| | | | | | | | BP67 | | | 表面に炭化物 | |
| | | | | | | | BP41 | | | 表面に炭化物 | |
| | | | | | | | III | | | BP45 | 表面に炭化物 |
| BP40 | 表面に炭化物 | | | | | | | | | | |
| BP39 | 表面に炭化物 | | | | | | | | | | |
| IV | BP72 | 表面に炭化物 | | | | | | | | | |
| III | BP36 | 表面に炭化物 | | | | | | | | | |
| BP38 | 表面に炭化物 | | | | | | | | | | |
| IV | BP73・74・75 | 表面縦方向に磨き痕明顯 | 粗～中粒砂/赤色鉱物 | | | | | | | | |
| 31-2 | 7-3 | 深鉢 | 口縁～頸部 | I群A2 | LC32 | III | BP84・85・86 | 貝殻製練圧痕/頸部に横走する沈線2条 | 粗～中粒砂/赤色鉱物 | | |
| 31-3 | 7-3 | 深鉢 | 胴上半部 | I群A2 | LE53 | III | SSQ03-231 | 沈線で細密状モチーフ/補修孔あり | 中～細粒砂/黒色光沢粒 | 表面に炭化物 | |
| | | | | | | | SSQ03-227・228 | | | 表面に炭化物 | |
| | | | | | | | SSQ03-496 | | | 縦方向の沈線と貝殻製練圧痕 | |
| | | | | | | | SSQ03-230 | | | | |
| | | | | | | | SSQ03-492 | | | | |
| | | | | | | | SSQ03-408・412 | | | 無文 | |
| LE54 | III・IV | SSQ03-213・225・414 | | | | | | | | | |
| | | SSQ03-411・413 | | | | | | | | | |
| 31-4 | 7-3 | 深鉢 | 口縁部 | I群A3 | LF31 | IV | BP147 | 地文に貝殻製練圧痕/口縁部直下に横走する沈線と刺突列/角ばった口縁で、白帯に刺突列/内面に斜位の貝殻製練圧痕/頸部に垂下する点線と刺突状沈線、筒に刺突列 | 中粒砂/赤色鉱物 | 表面に炭化物 | |
| | | | | | | | BP148 | | | | |
| | | | | | | | BP146 | | | | |
| 31-5 | 7-3 | 深鉢 | 口縁部 | I群C | LC34 | I | --- | 口縁直下に細降線 | 細粒砂 | | |
| 31-6 | 7-3 | 深鉢 | 胴部 | I群 | LE53 | III | BP90 | 外面横方向に刺突/湾曲強い/底部近く凸 | 細粒砂 | 表面は一薄に、内面は全面に炭化物 | |
| 31-7 | 7-3 | 深鉢 | 口縁部 | I群 | LC32 | III | BP81 | 白帯に黒目 | 細粒砂 | | |
| 31-8 | 7-3 | 深鉢 | 胴部 | I群 | LE53 | IV | BP149・150 | 外面無文/内面に整形痕らし斜方向の条痕/輪郭不明瞭 | 細粒砂/黒色光沢粒 | 表面にスス状炭化物 | |
| | | | | | | | BP151 | | | | |
| 31-9 | 7-3 | 深鉢 | 先端部 | I群 | LC32 | III | BP93 | 無文/磨成良好 | 細粒砂 | | |
| 31-10 | 7-3 | 深鉢 | 口縁部 | I群 | LE53 | IV | BP145 | 全体に厚灰/外面に垂下する2条の沈線 | 粗～中粒砂 | | |
| 31-11 | 7-3 | 深鉢 | 胴部 | II群 | LE52 | IV | --- | 器壁やや厚手/縦線磨き著しく、器面粗い | 粗～中粒砂/赤色鉱物/織目痕 | | |
| 32-1 | 18-1 | 深鉢 | 胴部 | I群A2 | LE52 | III | --- | 沈線(押引き)でモチーフ | 粗～細粒砂 | | |
| 32-2 | 18-1 | 深鉢 | 胴部 | I群A2 | LE50 | III | --- | 並行沈線と1条の点状文 | 粗～中粒砂/赤色鉱物 | | |
| 32-3 | 18-1 | 深鉢 | 胴部 | I群A2 | LE52 | IV | --- | 沈線(押引き)でモチーフ | 中～細粒砂 | | |
| 32-4 | 18-1 | 深鉢 | 胴部 | I群B1 | LE53 | III | BP98 | 厚手/磨成良好/外面に兩端体圧痕文/内面に横方向の条痕 | 中～細粒砂 | | |
| 32-5 | 18-1 | 深鉢 | 胴部 | I群B2 | LE48 | IV | --- | 内外とも条痕 | 細粒砂 | | |
| 32-6 | 18-1 | 深鉢 | 胴部 | I群B2 | LE47 | III下部 | --- | 内外ともに横位の条痕/器壁やや厚手 | 細粒～細粒砂 | 表面に炭化物 | |
| 32-7 | 18-1 | 深鉢 | 口縁～頸部 | I群B2 | LE48 | III | --- | 外面は無文か/内面に斜行する刷毛目状の条痕 | 細粒砂 | | |
| 32-8 | 18-1 | 深鉢 | 胴部 | I群B2 | 786 | IV上面 | --- | 内外に横位の条痕(裏面に磨き)/器面に小凸の縦筋磨き | 粗～細粒砂/黒色光沢粒 | | |
| 32-9 | 18-1 | 深鉢 | 胴部 | I群B2 | 786 | IV上面 | --- | 外面は縦方向、内面は横方向に条痕 | 中～細粒砂 | 表面にスス状炭化物 | |
| 32-10 | 18-1 | 深鉢 | 胴部 | I群B2 | 847 | III | BP114 | 外面に条痕、内面に斜行する条痕 | 細粒砂 | | |
| 32-11 | 18-1 | 深鉢 | 胴部 | I群C | M46 | III | --- | 細降線による無文/ほしご状モチーフ | 細粒砂 | | |
| 32-12 | 18-1 | 深鉢 | 胴部 | I群C | LE47 | III | --- | 細降線による無文 | 中～細粒砂 | | |
| 32-13 | 18-1 | 深鉢 | 胴部 | I群C | LE48 | IV | --- | 外面は細降線/内面は条痕 | 中～細粒砂/黒色光沢粒 | | |
| 32-14 | 18-1 | 深鉢 | 口縁部 | II群C | LE61 | I | --- | 口縁直下まで赤褐色羽状刺突文(0段多葉)/白帯に押圧無文 | 織目痕 | 表面にスス状炭化物 | |
| 32-15 | 18-1 | 深鉢 | 口縁部 | VI? | LE46 | III | --- | 地文無文と横走沈線 | 粗粒～細粒砂 | | |
| 32-16 | 18-1 | 鉢? | 胴部 | VI～VII? | LE50 | III | --- | 筋の細かな刺突/厚手、内面平滑 | 細粒砂 | | |

第8表 東区：SXQ石器集中区出土剥片石器類観察表(1)

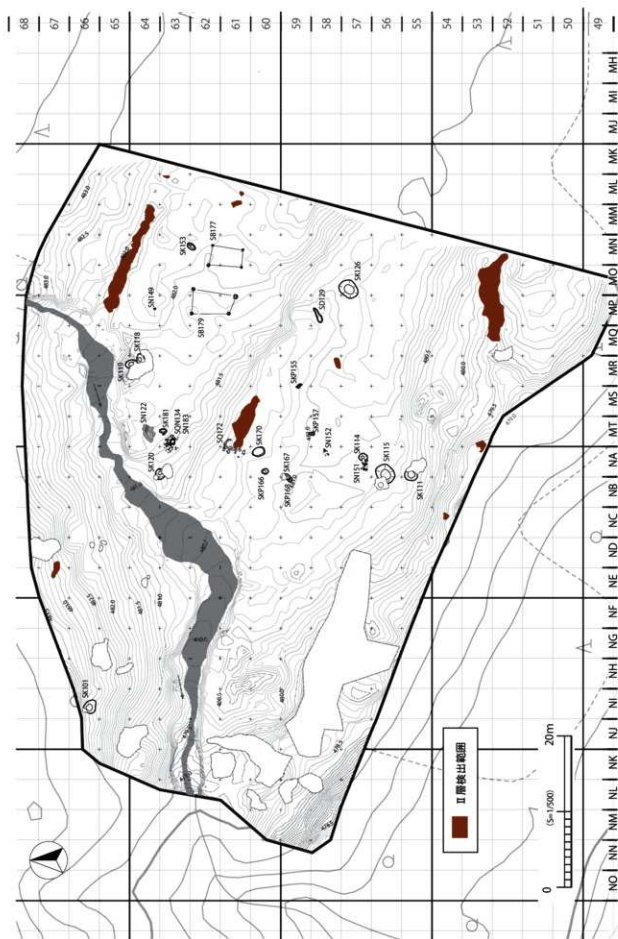
| 標頭番号 | 図版番号 | 器種 | 分類 | 出土グリッド番地 | 取上番号 | 石材 | 長さ (mm) | 幅 (mm) | 厚さ (mm) | 重量 (g) | 備考 |
|-------|---------|-------------|--------|-------------------|--------------|------|------------|-----------|------------|-----------|--|
| 37-1 | 8-1 | 石鏃 | I-a | LF54-I(177) | — | 珩質頁岩 | 29 | 20 | 6 | 2.6 | |
| 37-2 | 8-1 | 石鏃 | I-b | LD53-II | — | 珩質頁岩 | 23 | 19 | 4 | 0.6 | |
| 37-3 | 8-1 | 石鏃 | I-b | LF52-III | S301-195 | 珩質頁岩 | 24 | 16 | 4 | 0.9 | |
| 37-4 | 8-1 | 石鏃 | I-b | LG54-IV | S301-783 | 珩質頁岩 | 25 | 15 | 5 | 1.1 | |
| 37-5 | 8-1 | 石鏃 | I-c | LD54-I | — | 珩質頁岩 | 29 | 14 | 5 | 1.9 | |
| 37-6 | 8-1 | 石鏃 | I-c | LF52-III | S302-190 | 珩質頁岩 | 27 | 11 | 2 | 0.8 | |
| 37-7 | 8-1 | 石鏃 | I-c | LG54-IV | S301-780 | 珩質頁岩 | 29 | 16 | 7 | 3.5 | |
| 37-8 | 8-1 | 石鏃 | I-d | LD52-III | R077 | 珩質頁岩 | 37 | 23 | 5 | 3.2 | |
| 37-9 | 8-1 | 石鏃 | III-d | LG54-I | — | 珩質頁岩 | 42 | 14 | 5 | 2.1 | |
| 37-10 | 8-1 | 石鏃(未成品) | V-a | LF52-III | S302-030 | 珩質頁岩 | 38 | 29 | 6 | 6.0 | |
| 37-11 | 8-1 | 石鏃(未成品) | V-a | LF51-IV | — | 珩質頁岩 | 38 | 27 | 8 | 6.8 | |
| 37-12 | 8-1 | 石鏃(未成品) | V-b | LF52-III | — | 珩質頁岩 | 37 | 32 | 9 | 6.7 | |
| 37-13 | 8-1 | 石鏃(未成品) | V-b | LF52-IV | S301-632 | 珩質頁岩 | 25 | 21 | 5 | 1.2 | |
| 37-14 | 8-1 | 石鏃(未成品) | V-c | LD52-I | — | 珩質頁岩 | 24 | 18 | 4 | 1.4 | |
| 37-15 | 8-1 | 石鏃(未成品) | V-d | LF54-III | S302-187 | 珩質頁岩 | 29 | 16 | 7 | 2.8 | |
| 37-16 | 8-1 | 石鏃(未成品) | V-d | LF51-IV | S301-873 | 珩質頁岩 | 41 | 26 | 8 | 7.2 | |
| 37-17 | 8-1 | 石鏃(未成品) | V-e | LF52-IV | S301-842 | 珩質頁岩 | 32 | 22 | 6 | 3.6 | |
| 37-18 | 8-1 | 石鏃(未成品) | V-e | LF53-III | S302-244 | 珩質頁岩 | 31 | 26 | 8 | 5.1 | |
| 37-19 | 8-1 | 石鏃(未成品) | V-f | LG52-IV | S301-644 | 珩質頁岩 | 37 | 14 | 3 | 1.6 | |
| 37-20 | 8-2 | 有稜石器 | — | LF53-III | S302-045 | 珩質頁岩 | 131 | 25 | 12 | 35.0 | |
| 37-21 | 8-3 | 小形鋭状石器 | I | LF52-IV | S301-816 | 珩質頁岩 | 49 | 39 | 11 | 19.5 | |
| 37-22 | 8-3 | 小形鋭状石器 | I | LG53-IV/LG54-IV | S301-777・782 | 珩質頁岩 | 61 | 32 | 8 | 12.2 | ほぼ中央で折損 |
| 37-23 | 8-3 | 小形鋭状石器 | I | LD52-IV/LD53-IV | — | 珩質頁岩 | 48 | 39 | 8 | 10.4 | ほぼ中央で折損 |
| 37-24 | 8-3 | 小形鋭状石器 | III | LD53-III | — | 珩質頁岩 | 46 | 27 | 9 | 8.4 | |
| 37-25 | 8-3 | 小形鋭状石器 | I | LF53-III | S302-181 | 珩質頁岩 | 51 | 33 | 14 | 17.7 | |
| 38-1 | 8-3 | 小形鋭状石器 | IV | LF53-III | S301-413 | 珩質頁岩 | 60 | 26 | 9 | 10.8 | 中央で折損したため、折れ面からの測線調整あり |
| 38-2 | 8-3 | 小形鋭状石器 | III | LF52-III | — | 珩質頁岩 | 70 | 31 | 11 | 19.1 | |
| 38-3 | 8-3 | 小形鋭状石器 | III | LG52-III | S301-365 | 珩質頁岩 | 57 | 33 | 10 | 14.0 | |
| 38-4 | 8-3 | 小形鋭状石器 | IV | LG52-III | — | 珩質頁岩 | 56 | 27 | 10 | 13.1 | |
| 38-5 | 8-3 | 小形鋭状石器 | III | LF53-III | S302-217 | 珩質頁岩 | 43 | 24 | 8 | 7.7 | |
| 38-6 | 8-3 | 小形鋭状石器 | V | LF52-IV | — | 珩質頁岩 | 59 | 31 | 12 | 15.3 | |
| 38-7 | 8-3 | 小形鋭状石器 | V | LF54-I | — | 珩質頁岩 | 37 | 28 | 6 | 4.6 | |
| 38-8 | 8-3 | 小形鋭状石器(未成品) | Vb | LF51-IV/LF52-III | S301-909 | 珩質頁岩 | 68 | 37 | 12 | 24.0 | 3点で接合 |
| 38-9 | 8-3 | 小形鋭状石器(未成品) | Vb | LF53-III/LF54-IV | — | 珩質頁岩 | 55 | 27 | 10 | 9.8 | ほぼ中央で折損 |
| 38-10 | 8-3 | 小形鋭状石器(未成品) | Vb | LF54-III | S303-111・128 | 珩質頁岩 | 59 | 40 | 11 | 21.8 | 3点で接合 |
| 38-11 | 8-3 | 小形鋭状石器(未成品) | Vb | LF51-III/LF52-III | — | 珩質頁岩 | 52 | 39 | 9 | 9.5 | 修理により中央で折損 |
| 38-12 | 8-3 | 小形鋭状石器(未成品) | Vd | LF52-III/LF53-III | S302-07・424 | 珩質頁岩 | 54 | 32 | 10 | 13.9 | 中央で折損 |
| 38-13 | 8-3 | 小形鋭状石器(未成品) | Vd | LF52-IV | S301-924 | 珩質頁岩 | 49 | 34 | 10 | 14.3 | |
| 39-1 | 9-1 | トランシェ=楕石器 | — | LD52-III | R078 | 珩質頁岩 | 73 | 46 | 30 | 3 | 方向43° |
| 39-2 | 9-1 | トランシェ=楕石器 | — | LD52-III | R0115 | 珩質頁岩 | 68 | 53 | 19 | 44.4 | 方向43°・微塵あり |
| 39-3 | 9-1 | トランシェ=楕石器 | — | LF54-IV/LB17-II | S302-705 | 珩質頁岩 | 130 | 52 | 22 | 120.3 | 方向40°/S30出土の基部とS30出土との部分で接合/折損後、再成形 |
| 39-4 | 9-1 | 鋭状石器 | I-a-b | LC52-III | R088 | 珩質頁岩 | 153 | 46 | 21 | 139.2 | 方向50°/刃部湾曲度41/4 |
| 39-5 | 9-1 | 鋭状石器 | I-a-b | LG54-IV | R019 | 珩質頁岩 | 148 | 47 | 21 | 182.2 | 方向64°/刃部湾曲度48/2 |
| 40-1 | 6-3,9-1 | 鋭状石器 | I-a-b | LF53-IV | S302-666 | 珩質頁岩 | 206 | 48 | 35 | 222.0 | 方向50°/刃部湾曲度49/2 |
| 40-2 | 9-1 | 鋭状石器 | I-a-b | LG54-IV | S301-739 | 珩質頁岩 | 117 | 42 | 17 | 71.8 | 方向54°/刃部湾曲度36/2 |
| 40-3 | 9-1 | 鋭状石器 | I-a-b | LF53-IV | S301-687 | 珩質頁岩 | 107 | 41 | 19 | 90.2 | 方向58°/刃部湾曲度25/2 /刃部左側に欠損らしき顆粒調整あり |
| 40-4 | 9-1 | 鋭状石器 | I-a-b | LF53-IV | S302-245 | 珩質頁岩 | 134 | 38 | 19 | 79.8 | 方向50°/刃部湾曲度36/2 |
| 40-5 | 9-1 | 鋭状石器 | I-b-c | LF52-IV | R0144 | 珩質頁岩 | 88 | 38 | 14 | 42.4 | 方向45°/刃部湾曲度36/6 /刃部欠損後、再調整 |
| 41-1 | 10-1 | 鋭状石器 | I-b-b | LG51-III | R0606 | 珩質頁岩 | 112 | 58 | 20 | 117.8 | 方向54°/刃部湾曲度57/9 /刃部中央付近に欠損らしき顆粒調整あり |
| 41-2 | 10-1 | 鋭状石器 | I-b-b | LC52-III | R0119 | 珩質頁岩 | 101 | 47 | 19 | 78.5 | 方向50°/刃部湾曲度40/4 |
| 41-3 | 10-1 | 鋭状石器 | I-b | LF54-III | S302-298 | 珩質頁岩 | 79 | 40 | 14 | 44.3 | 方向72°/刃部湾曲度40/6 |
| 41-4 | 10-1 | 鋭状石器 | I-b-b | LD53-III | R0116 | 珩質頁岩 | 88 | 40 | 17 | 50.2 | 方向65°/刃部湾曲度29/2 |
| 41-5 | 10-1 | 鋭状石器 | I-b | LF54-III | R0110 | 珩質頁岩 | 94 | 39 | 17 | 60.7 | 方向65°/刃部湾曲度30/6 |
| 41-6 | 10-1 | 鋭状石器 | I-b-a | LD52-I | — | 珩質頁岩 | 77 | 42 | 17 | 55.8 | 方向69°/刃部湾曲度41/7 |
| 42-1 | 10-1 | 鋭状石器 | I-c-a | LF53-III | S302-441 | 珩質頁岩 | 74 | 42 | 21 | 71.8 | 方向53°/刃部湾曲度42/5 /基部欠損後、折れ面から調整あり |
| 42-2 | 19-1 | 鋭状石器 | I-b-b | LC52-III | R0018 | 珩質頁岩 | 62 | 33 | 13 | 29.2 | 方向71°/刃部湾曲度32/4 |
| 42-3 | 10-1 | 鋭状石器 | I-b-b | LD53-I | — | 珩質頁岩 | 70 | 32 | 14 | 28.8 | 方向52°/刃部湾曲度32/6 |
| 42-4 | 10-1 | 鋭状石器 | I-b | LF53-III | S302-018 | 珩質頁岩 | 65 | 36 | 14 | 32.4 | 方向56°/刃部湾曲度24/4 /全体に調整あり |
| 42-5 | 10-2 | 鋭状石器 | II-a-b | LF53-IV | S303-393 | 珩質頁岩 | 83 | 58 | 15 | 75.3 | 方向50° |
| 42-6 | 10-2 | 鋭状石器 | II-a-b | LG51-IV | S301-934 | 珩質頁岩 | 95 | 56 | 20 | 90.2 | 方向54° |
| 42-7 | 10-2 | 鋭状石器 | II-c | LF52-IV | — | 珩質頁岩 | 64 | 40 | 15 | 37.0 | 方向75°/右側面に鈍面 |
| 42-8 | 10-2 | 鋭状石器 | II-c | LF54-I | — | 珩質頁岩 | 69 | 45 | 17 | 38.9 | 方向50°/基部上面に鈍面 |
| 43-1 | 19-2 | 鋭状石器 | III-c | LG54-III | R0107 | 珩質頁岩 | 58 | 42 | 13 | 28.8 | 方向70° |
| 43-2 | 10-2 | 鋭状石器 | III-c | LD52-III | R0091 | 珩質頁岩 | 61 | 40 | 11 | 29.7 | 方向50°/基部端部に欠損 |
| 43-3 | 10-2 | 鋭状石器 | III-c | LF53-IV | S303-528 | 珩質頁岩 | 57 | 36 | 13 | 23.3 | 方向58° |
| 43-4 | 10-2 | 鋭状石器 | III-c | LC52-III | — | 珩質頁岩 | 86 | 66 | 21 | 113.4 | 方向68°/全体に調整あり |
| 43-5 | 10-2 | 鋭状石器 | III-b | LD53-IV | — | 珩質頁岩 | 58 | 33 | 15 | 28.5 | 方向46° |
| 43-6 | 10-2 | 鋭状石器 | III-b | LF53-III | S302-085・309 | 珩質頁岩 | 109 | 69 | 19 | 108.8 | 方向58°/背面に端部が鈍面 |
| 43-7 | 11-1 | 鋭状石器(未成品) | I | LF52-I | — | 珩質頁岩 | 97 | 55 | 29 | 133.7 | |
| 44-1 | 11-2 | 両面調整石器 | — | LG53-IV | S301-724 | 珩質頁岩 | 42 | 33 | 7 | 7.6 | |

第8表 東区：SXQ石器集中区出土剥片石器顕微観察表（2）

| 標記番号 | 図版番号 | 器種 | 分類 | 出土ゾーン・層位 | 取上番号 | 石材 | 長さ (mm) | 幅 (mm) | 厚さ (mm) | 重量 (g) | 備考 |
|-------|----------|-------------|--------|---------------------|---|------|------------|-----------|------------|-----------|-------------------|
| 44-2 | 11-2 | 両面調整石器 | — | IF51-V | SM01-862 | 珩質頁岩 | 49 | 32 | 11 | 13.7 | 母岩別資料17-1 |
| 44-3 | 11-2 | 両面調整石器 | — | IG54-V | — | 珩質頁岩 | 48 | 26 | 16 | 33.5 | |
| 44-4 | 11-2 | 両面調整石器 | — | IG54-III | RQ953 | 珩質頁岩 | 93 | 35 | 14 | 43.2 | |
| 44-5 | 11-3 | 両面調整石器(未成品) | I | IE52-IV/IF51-IV | SM01-864・894 | 珩質頁岩 | 56 | 45 | 15 | 30.0 | 折れた後、一部に調整加工 |
| 44-6 | 11-3 | 両面調整石器(未成品) | I | IE52-I | — | 珩質頁岩 | 56 | 42 | 18 | 33.4 | |
| 44-7 | 11-3 | 両面調整石器(未成品) | II | IE54-III | SM003-326 | 珩質頁岩 | 57 | 39 | 15 | 28.0 | |
| 44-8 | 11-3 | 両面調整石器(未成品) | I | IC53-III/IG54-IV | — | 珩質頁岩 | 52 | 40 | 11 | 19.7 | 中央で折損 |
| 44-9 | 11-3 | 両面調整石器(未成品) | II | IE54-III | SM003-668 | 珩質頁岩 | 57 | 30 | 14 | 18.6 | |
| 44-10 | 11-3 | 両面調整石器(未成品) | II | IG54-IV | SM001-731 | 珩質頁岩 | 60 | 39 | 13 | 20.6 | |
| 44-11 | 11-3 | 両面調整石器(未成品) | II | IG53-I | — | 珩質頁岩 | 80 | 53 | 16 | 62.8 | |
| 45-1 | 11-3 | 両面調整石器(未成品) | II | IE53-IV | SM002-657 | 珩質頁岩 | 75 | 51 | 17 | 38.7 | |
| 45-2 | 11-3 | 両面調整石器(未成品) | III | IC53-IV | — | 珩質頁岩 | 86 | 62 | 25 | 119.4 | |
| 45-3 | 11-3 | 両面調整石器(未成品) | IV | IE53-IV/IF54-I | SM002-754 | 珩質頁岩 | 126 | 66 | 18 | 74.0 | 中央で折損後、折れ面から調整加工 |
| 45-4 | 11-3 | 両面調整石器(未成品) | IV | IE52-I | — | 珩質頁岩 | 44 | 31 | 11 | 15.3 | |
| 45-5 | 11-3 | 両面調整石器(未成品) | III | IG54-I | — | 珩質頁岩 | 80 | 70 | 23 | 87.1 | |
| 45-6 | 12-1 | 石鏃 | IIA-a | IF51-III | RQ955 | 珩質頁岩 | 40 | 40 | 7 | 8.5 | |
| 45-7 | 12-1 | 石鏃 | II-B | IE52-IV | — | 珩質頁岩 | 38 | 19 | 14 | 5.9 | |
| 45-8 | 12-1 | 石鏃 | II-B | IG53-IV | — | 珩質頁岩 | 43 | 18 | 8 | 4.5 | |
| 45-9 | 12-1 | 石鏃 | II-C-a | IE53-III | RQ979 | 珩質頁岩 | 87 | 36 | 18 | 43.1 | 溝状石器転用 |
| 45-10 | 12-1 | 石鏃 | II-C-b | IE54-III | RQ952 | 珩質頁岩 | 38 | 23 | 5 | 4.1 | 石鏃未成品転用 |
| 45-11 | 12-1 | 石鏃 | II-C-b | IG51-III | RQ962 | 珩質頁岩 | 49 | 18 | 7 | 5.7 | 石鏃転用 |
| 45-12 | 12-1 | 石鏃 | II-C-b | IG52-III | — | 珩質頁岩 | 36 | 22 | 5 | 2.7 | 石鏃未成品転用 |
| 45-13 | 12-1 | 石鏃 | II-a | IF52-I | — | 珩質頁岩 | 29 | 11 | 5 | 0.8 | 刃部を転り込んだ両面調整剥片が素材 |
| 46-1 | 12-3 | スクレイパー類 | I-a' | IF51-IV | SM01-878 | 珩質頁岩 | 93 | 45 | 12 | 50.6 | 一部に縁面のこすり |
| 46-2 | 12-3 | スクレイパー類 | I-a | IE51-IV | SM01-914 | 珩質頁岩 | 102 | 74 | 22 | 132.3 | |
| 46-3 | 12-3 | スクレイパー類 | I-b | IE53-IV | — | 珩質頁岩 | 58 | 61 | 14 | 40.1 | |
| 46-4 | 12-3 | スクレイパー類 | I-a' | IF51-IV | SM01-797 | 珩質頁岩 | 91 | 49 | 15 | 33.9 | |
| 46-5 | 12-3 | スクレイパー類 | II' | IE54-977a | — | 珩質頁岩 | 27 | 28 | 9 | 5.3 | |
| 46-6 | 12-3 | スクレイパー類 | I-a' | IF52-III | SM002-125 | 珩質頁岩 | 86 | 36 | 9 | 18.4 | |
| 46-7 | 12-3 | スクレイパー類 | I-b | IE54-III | SM003-514 | 珩質頁岩 | 74 | 43 | 14 | 34.1 | |
| 46-8 | 12-3 | スクレイパー類 | III | IF53-III | SM002-479 | 珩質頁岩 | 70 | 41 | 22 | 49.9 | 溝状石器の縁部削片を転用 |
| 46-9 | 12-3 | スクレイパー類 | III | IG52-IV | — | 珩質頁岩 | 47 | 46 | 18 | 33.6 | |
| 46-10 | 12-3 | スクレイパー類 | II | IG52-IV | — | 珩質頁岩 | 65 | 46 | 19 | 66.3 | 右側面に折れ面 |
| 47-1 | 12-3 | スクレイパー類 | IV-a | IE52-IV | — | 珩質頁岩 | 63 | 52 | 17 | 27.8 | |
| 47-2 | 12-3 | スクレイパー類 | IV-a | IE51-IV | SM01-877 | 珩質頁岩 | 54 | 32 | 11 | 11.2 | |
| 47-3 | 12-3 | スクレイパー類 | IV-b | IG52-IV | — | 珩質頁岩 | 43 | 49 | 10 | 15.9 | |
| 47-4 | 13-1 | IF | — | IF54-IV | SM002-703 | 珩質頁岩 | 101 | 44 | 17 | 67.7 | 一部に縁面 |
| 47-5 | 13-1 | IF | I | IG53-IV | RQ992 | 珩質頁岩 | 134 | 68 | 27 | 131.9 | |
| 47-6 | 13-1 | IF | — | IG53-III | SM003-180 | 珩質頁岩 | 102 | 36 | 12 | 25.6 | |
| 47-7 | 13-1 | IF | I | IG54-I | — | 珩質頁岩 | 96 | 89 | 26 | 168.3 | |
| 47-8 | 13-1 | 素材削片 | II | IE54-IV | SM003-521 | 珩質頁岩 | 49 | 37 | 14 | 27.8 | 下側に折れ面 |
| 48-1 | 13-3 | 石核 | II | IG54-977a | — | 珩質頁岩 | 99 | 126 | 34 | 165.1 | |
| 48-2 | 13-3 | 石核 | II | IG53-IV/IG54-I | RQ995 | 珩質頁岩 | 55 | 111 | 28 | 185.9 | |
| 48-3 | 13-3 | 石核 | II | IE54-IV | SM003-401・526 | 珩質頁岩 | 93 | 130 | 24 | 269.1 | |
| 49-1 | 13-2 | 石核 | III | IF53-III | SM002-462 | 珩質頁岩 | 76 | 73 | 29 | 143.4 | |
| 49-2 | 13-2 | 石核 | II | IF54-I | — | 珩質頁岩 | 99 | 56 | 38 | 148.7 | |
| 49-3 | 15-2 | 接合資料 | I | IE54-I・III・IV | SM003-277・430・431 | 珩質頁岩 | 88 | 98 | 31 | 92.1 | 母岩別資料02-1 |
| 50-1 | 15-1 | 接合資料 | II | IE54-I・III・IV | — | 珩質頁岩 | 86 | 98 | 29 | 110.1 | 母岩別資料01-1 |
| 50-1a | 15-1 | 溝状石器(未成品) | III-F | IE54-III | — | 珩質頁岩 | 68 | 54 | 19 | 47.3 | 母岩別資料01-1a |
| 50-1b | 15-1 | 小形溝状石器(未成品) | VIa | IE54-IV | — | 珩質頁岩 | 50 | 37 | 13 | 19.0 | 母岩別資料01-1b |
| 50-2 | 15-1(17) | 接合資料 | III | IE54-III/IE55-III | SM003-071・321・334 | 珩質頁岩 | 96 | 50 | 22 | 66.7 | 母岩別資料01-2 |
| 50-2a | 15-1(17) | 素材削片 | II | IE54-III | SM003-321 | 珩質頁岩 | — | — | — | 33.1 | 母岩別資料01-2a |
| 51-1 | 14-1・2 | 接合資料 | I | IE53-III・IV | SM003-297・299・325・331・361・366・385・407・586・590・597・744 | 珩質頁岩 | 48 | 101 | 47 | 50.5 | 母岩別資料03-1 |
| 51-2 | 16-3 | 接合資料 | I | IG53-III・IV | — | 珩質頁岩 | 47 | 45 | 10 | 9.3 | 母岩別資料05-1 |
| 51-3 | 16-4 | 接合資料 | I | IG54-IV/IF54-III | SM001-726, SM003-500 | 珩質頁岩 | 45 | 75 | 18 | 32.3 | 母岩別資料07-1 |
| 52-1 | 15-4 | 接合資料 | II | IE54-III/IG52-IV | SM003-124・125・253 | 珩質頁岩 | 128 | 84 | 34 | 151.2 | 母岩別資料04-1 |
| 52-1a | 15-4 | 石核 | II | IE54-III | SM003-124 | 珩質頁岩 | 43 | 88 | 29 | 73.6 | 母岩別資料04-1 |
| 52-2 | 16-2 | 接合資料 | I | IG54-I/IE54-III | SM003-270・273 | 珩質頁岩 | 66 | 72 | 16 | 29.1 | 母岩別資料06-1 |
| 53-1 | 16-1 | 接合資料 | II | IE54-III | SM003-079 | 珩質頁岩 | 104 | 99 | 17 | 71.6 | 母岩別資料08-1 |
| 53-2 | 15-3 | 接合資料 | II | IE53-III・IV | SM003-282・361・576 | 珩質頁岩 | 45 | 40 | 14 | 14.1 | 母岩別資料10-1 |
| 53-3 | 17-1 | 接合資料 | III | IG53-III/IE54-III | — | 珩質頁岩 | 67 | 41 | 10 | 20.0 | 母岩別資料09-2 |
| 53-4 | 17-1 | 接合資料 | III | IF51-III・IV | SM001-867 | 珩質頁岩 | 42 | 42 | 9 | 11.7 | 母岩別資料10-1 |
| 53-5 | 17-1 | 接合資料 | III | IE51-III上部/IF51-III | — | 珩質頁岩 | 52 | 45 | 10 | 13.3 | 母岩別資料09-3 |
| 53-6 | 17-1 | 接合資料 | III | IC53-III | — | 珩質頁岩 | 40 | 32 | 6 | 7.3 | 母岩別資料08-1 |
| 53-6a | 17-1 | スクレイパー類 | IV-c | IC53-III | — | 珩質頁岩 | 37 | 15 | 5 | 4.0 | 母岩別資料08-1a |
| 53-7 | 17-1 | 接合資料 | III | IC53-III/IE53-IV | — | 珩質頁岩 | 49 | 41 | 9 | 17.0 | 母岩別資料12-2 |
| 53-7a | 17-1 | 石鏃 | IIA-b | IG53-IV | — | 珩質頁岩 | 44 | 30 | 9 | 14.2 | 母岩別資料12-2a |
| 53-7b | 17-1 | 石鏃 | IIA-b | IC53-IV | — | 珩質頁岩 | 41 | 19 | 8 | 3.2 | 母岩別資料12-2b |

第9表 東区：遺構外出土土刻片石器類観察表

| 種別番号 | 調査番号 | 器種 | 分類 | 出土位置 | 取上番号 | 石材 | 長さ (mm) | 幅 (mm) | 厚さ (mm) | 重量 (g) | 備考 |
|-------|------|-------------|-------|------------------|-------|-------|------------|-----------|------------|-----------|-------------------------------|
| 54-1 | 18-2 | 石鏃 | I-a | L047-III | R015 | 珪英岩質 | 27 | 12 | 5 | 0.9 | |
| 54-2 | 8-1 | 石鏃 | I-b | L1259-II | --- | 珪英岩質 | 13 | 13 | 3 | 0.3 | |
| 54-3 | 18-2 | 石鏃 | I-b | L1152-上層 | R0099 | 珪英岩質 | 25 | 16 | 3 | 1.0 | |
| 54-4 | 18-2 | 石鏃 | II-a | L063-II | R0177 | 珪英岩質 | 30 | 16 | 3 | 1.6 | |
| 54-5 | 18-2 | 石鏃(未成品) | Va | L1756-IV | --- | 珪英岩質 | 24 | 20 | 6 | 3.2 | |
| 54-6 | 18-2 | 石鏃(未成品) | Vc | L1848-下部 | --- | 珪英岩質 | 27 | 21 | 7 | 3.4 | |
| 54-7 | 18-2 | 石鏃 | II | L049-表層 | --- | 珪英岩質 | 21 | 41 | 9 | 23.6 | 細部欠損 |
| 54-8 | 18-2 | 石鏃 | I-a | L1848-III | R0004 | 珪英岩質 | 60 | 38 | 8 | 12.1 | |
| 54-9 | 18-2 | 石鏃 | I-b | L1151-II | R0002 | 珪英岩質 | 74 | 26 | 8 | 15.2 | |
| 54-10 | 18-2 | 石鏃 | II | L859-III | --- | 珪英岩質 | 20 | 22 | 8 | 10.7 | |
| 54-11 | 18-2 | 石鏃 | II | L1751-II | R0017 | 珪英岩質 | 44 | 27 | 8 | 6.8 | |
| 54-12 | 18-2 | 石鏃 | III | L156-I | --- | 珪英岩質 | 63 | 29 | 14 | 24.7 | |
| 54-13 | 18-2 | 石鏃 | III | M04-II | --- | 珪英岩質 | 96 | 29 | 13 | 44.1 | |
| 54-14 | 18-2 | 小明瓦状石器 | I | L1057-IV | --- | 珪英岩質 | 51 | 33 | 8 | 13.8 | |
| 54-15 | 18-2 | 小明瓦状石器 | I | L1746-III | --- | 玉髓質珪岩 | 49 | 24 | 10 | 15.0 | |
| 54-16 | 18-2 | 小明瓦状石器(未成品) | Va | L849-III | --- | 珪英岩質 | 48 | 25 | 9 | 11.4 | |
| 54-17 | 18-2 | 小明瓦状石器(未成品) | Va | L147-I | --- | 珪英岩質 | 56 | 29 | 8 | 12.9 | |
| 55-1 | 20-1 | トランシェ鑛石器 | --- | L050-III | R0183 | 珪英岩質 | 101 | 57 | 26 | 142.2 | 刃角60° |
| 55-2 | 20-1 | トランシェ鑛石器 | --- | L347-III | R0029 | 珪英岩質 | 99 | 54 | 15 | 27.4 | 刃角55° |
| 55-3 | 20-1 | トランシェ鑛石器 | --- | L1848-III | R0007 | 珪英岩質 | 62 | 28 | 14 | 29.1 | 刃角55° |
| 55-4 | 20-1 | トランシェ鑛石器 | --- | L1449-IV | R0139 | 珪英岩質 | 108 | 49 | 22 | 104.8 | 刃角60° |
| 55-5 | 20-1 | トランシェ鑛石器 | --- | TP14 | --- | 珪英岩質 | 67 | 55 | 18 | 62.5 | 刃角62°/刃部曲度1° |
| 55-6 | 20-1 | トランシェ鑛石器 | --- | L050-I | --- | 珪英岩質 | 45 | 43 | 16 | 25.4 | 刃角55° |
| 55-7 | 20-1 | トランシェ鑛石器 | --- | L300-III | --- | 珪英岩質 | 73 | 46 | 12 | 38.7 | 刃角30° |
| 56-1 | 19-1 | 狭状石器 | I-b | L110-II | R0093 | 珪英岩質 | 115 | 46 | 20 | 114.8 | 刃角27°/刃部曲度42°/刃部欠損後、再調整 |
| 56-2 | 19-1 | 狭状石器 | I-b | L149-III | R0105 | 珪英岩質 | 111 | 34 | 15 | 64.2 | 刃角60°/刃部曲度34°/刃部欠損後、再調整 |
| 56-3 | 19-1 | 狭状石器 | I-b | M050-砂利 | R0143 | 珪英岩質 | 102 | 44 | 24 | 104.8 | 刃角55°/刃部曲度42° |
| 56-4 | 19-1 | 狭状石器 | I-b | L1151-II | R0112 | 珪英岩質 | 85 | 38 | 20 | 36.2 | 刃角60°/刃部曲度38°/刃部欠損後、再調整 |
| 56-5 | 19-1 | 狭状石器 | I-b | L149-III | R0100 | 珪英岩質 | 96 | 43 | 18 | 77.2 | 刃角61°/刃部曲度41° |
| 57-1 | 19-1 | 狭状石器 | I-b | L347-III | R0026 | 珪英岩質 | 82 | 42 | 21 | 65.4 | 刃角27°/刃部曲度42° |
| 57-2 | 19-1 | 狭状石器 | I-b | L1848-表層 | --- | 珪英岩質 | 105 | 45 | 18 | 86.4 | 刃角60°/刃部曲度47° |
| 57-3 | 19-1 | 狭状石器 | I-b | L049-III | --- | 珪英岩質 | 102 | 44 | 20 | 77.4 | 刃角27°/刃部曲度42°/刃部欠損後、再調整 |
| 57-4 | 19-1 | 狭状石器 | I-b | L047-III | --- | 珪英岩質 | 49 | 45 | 16 | 59.6 | 刃角48°/刃部曲度45° |
| 57-5 | 19-1 | 狭状石器 | I-b | L149-III | R0014 | 珪英岩質 | 99 | 47 | 24 | 107.3 | 刃角60°/刃部曲度45° |
| 57-6 | 19-1 | 狭状石器 | I-b | L147-I | --- | 珪英岩質 | 90 | 37 | 19 | 53.8 | 刃角60°/刃部曲度21°/基部細部欠損 |
| 58-1 | 19-1 | 狭状石器 | I-b | L048-IV | --- | 珪英岩質 | 90 | 42 | 19 | 51.3 | 刃角60°/刃部曲度42°/刃部欠損後、再調整 |
| 59-2 | 19-1 | 狭状石器 | I-c | L047-III | R0013 | 珪英岩質 | 76 | 54 | 36 | 191.6 | 刃角57°/刃部曲度32° |
| 59-3 | 19-1 | 狭状石器 | I-c | L1756-砂利 | R0141 | 珪英岩質 | 62 | 50 | 17 | 66.3 | 刃角57°/刃部曲度40°/基部欠損後、折れ面から調整調整 |
| 59-4 | 19-1 | 狭状石器 | I-c | L149-III | R0002 | 珪英岩質 | 49 | 48 | 20 | 73.7 | 刃角57°/刃部曲度40°/基部欠損後、折れ面から調整調整 |
| 59-5 | 20-2 | 狭状石器 | II-c | L152-IV | --- | 珪英岩質 | 75 | 44 | 17 | 64.2 | 刃角60°/刃部曲度44°/刃部欠損後、再調整 |
| 59-6 | 20-2 | 狭状石器 | II-c | L152-IV | --- | 珪英岩質 | 44 | 36 | 13 | 19.5 | 刃角60°/側面に折れ面 |
| 59-7 | 20-2 | 狭状石器 | II-c | L852-I | --- | 珪英岩質 | 59 | 43 | 13 | 31.0 | 刃角60° |
| 59-8 | 20-2 | 狭状石器 | II-c | L1150-下部 | --- | 珪英岩質 | 71 | 50 | 23 | 70.6 | 刃角17° |
| 59-9 | 20-2 | 狭状石器 | II-c | L050-III | --- | 珪英岩質 | 51 | 43 | 17 | 32.2 | 刃角60° |
| 59-10 | 20-2 | 狭状石器 | II-b | L048-III | --- | 珪英岩質 | 74 | 50 | 24 | 65.5 | 刃角57° |
| 59-11 | 20-2 | 狭状石器 | II-c | L156-III | --- | 珪英岩質 | 105 | 47 | 18 | 79.2 | 刃角17° |
| 59-12 | 20-2 | 狭状石器(未成品) | IF | L061-I | --- | 珪英岩質 | 84 | 52 | 25 | 106.0 | 基部欠損 |
| 59-13 | 20-2 | 狭状石器(未成品) | IF | L061-I | --- | 珪英岩質 | 100 | 53 | 23 | 105.6 | |
| 60-1 | 20-3 | 狭状石器(未成品) | IF | L153-IV | R0136 | 珪英岩質 | 49 | 50 | 17 | 56.5 | 刃部右側欠損 |
| 60-2 | 21-1 | 両面磨製石器 | --- | L347-III/L047-IV | --- | 珪英岩質 | 74 | 24 | 14 | 19.9 | 中央で折損 |
| 60-3 | 21-1 | 両面磨製石器(未成品) | II | L350-I | --- | 珪英岩質 | 51 | 39 | 14 | 16.6 | |
| 60-4 | 21-1 | 両面磨製石器(未成品) | II | L352-I(カケラン) | --- | 珪英岩質 | 79 | 45 | 20 | 52.7 | |
| 60-5 | 21-1 | 両面磨製石器(未成品) | IF | L1756-砂利 | R0140 | 珪英岩質 | 44 | 41 | 12 | 36.1 | |
| 60-6 | 21-2 | 石鏃 | II-a | L061-I | --- | 珪英岩質 | 69 | 53 | 17 | 27.1 | |
| 60-7 | 21-2 | 石鏃 | II-a | L151-II | --- | 珪英岩質 | 27 | 22 | 7 | 3.2 | |
| 60-8 | 21-2 | 石鏃 | II-a | L146-III | --- | 珪英岩質 | 66 | 31 | 10 | 11.9 | |
| 60-9 | 21-2 | 石鏃 | II-a | L146-III | --- | 珪英岩質 | 27 | 34 | 10 | 6.7 | |
| 60-10 | 21-2 | 石鏃 | II-a | L146-III | --- | 珪英岩質 | 24 | 18 | 9 | 4.2 | |
| 60-11 | 21-2 | 石鏃 | II-a | M048-III | --- | 珪英岩質 | 56 | 30 | 13 | 13.8 | |
| 61-1 | 21-2 | 石鏃 | II-c | L586-IV | R0135 | 珪英岩質 | 73 | 39 | 16 | 45.9 | 狭状石器転用 |
| 61-2 | 21-2 | 石鏃 | II-c | TP14 | --- | 珪英岩質 | 79 | 40 | 15 | 48.8 | 狭状石器転用 |
| 61-3 | 21-2 | 石鏃 | II-c | L146-I | --- | 珪英岩質 | 57 | 23 | 9 | 8.3 | 石鏃と差込部転用 |
| 61-4 | 21-3 | ヌケナイバー類 | I-a | L1756-砂利 | R0139 | 珪英岩質 | 81 | 33 | 14 | 27.6 | |
| 61-5 | 21-3 | ヌケナイバー類 | I-a | L1756-III | R0099 | 珪英岩質 | 84 | 37 | 14 | 29.7 | |
| 61-6 | 21-3 | ヌケナイバー類 | --- | L1425-II | --- | 珪英岩質 | 96 | 48 | 10 | 56.1 | |
| 61-7 | 21-3 | ヌケナイバー類 | I-b | L1849-IV | R0142 | 珪英岩質 | 70 | 52 | 20 | 41.8 | |
| 61-8 | 21-3 | ヌケナイバー類 | I-b | L1836-IV | R0131 | 珪英岩質 | 60 | 65 | 14 | 47.4 | |
| 62-1 | 21-3 | ヌケナイバー類 | I-a | L152-II | --- | 珪英岩質 | 65 | 24 | 9 | 15.6 | |
| 62-2 | 22-1 | 刀 | I | L048-III | --- | 珪英岩質 | 65 | 93 | 25 | 144.8 | |
| 62-3 | 22-3 | 石鏃 | III | L155-砂利 | R0133 | 珪英岩質 | 45 | 63 | 18 | 43.0 | |
| 62-4 | 22-3 | 石鏃 | III | L347-III | --- | 珪英岩質 | 32 | 41 | 19 | 20.6 | |
| 62-5 | 22-3 | 石鏃 | III | L548-III | R0090 | 珪英岩質 | 76 | 92 | 29 | 173.9 | |
| 63-1 | 22-2 | 石鏃 | II | L347-III | R0029 | 珪英岩質 | 40 | 94 | 60 | 262.8 | |
| 63-2 | 22-4 | 組合資料 | II | L349-III | --- | 珪英岩質 | 91 | 57 | 19 | 36.7 | 器首部資料F09-1 |
| 63-3 | 21-5 | 組合資料 | III | L149-III/L151-砂利 | --- | 珪英岩質 | 80 | 36 | 12 | 24.1 | 器首部資料F09-4 |
| 63-4 | 21-5 | 石鏃 | III-b | L1756-砂利 | --- | 珪英岩質 | 26 | 36 | 12 | 14.3 | 器首部資料F09-4a |
| 63-4 | 31-4 | 石鏃(未成品) | V-a | L347-III | --- | 珪英岩質 | 42 | 31 | 5 | 4.3 | 組合資料 |



第70図 トクラ遺跡西区遺構配置図

第4節 西区の調査

1 概要

西区は周知の遺跡範囲内の西側に当たる。調査区内には水量豊富な沢が北東から南西方向へ流れており、沢を挟んで北側は急傾斜地となっている。南側は比較的平坦な地形が広がっており、標高差のある3つの平坦面からなる。上段から平坦面1、平坦面2、平坦面3に分けられ(第20図)、平坦面1と平坦面2では約0.7m、平坦面2と平坦面3では約0.8mの標高差があり、各平坦面の間には沢状地形が介在する。東区同様に、沢状地形の縁や窪地などでⅡ層(十和田中振火山灰)の再堆積が確認できる。

西区では、縄文時代早期～晩期、弥生時代、古代、近現代までの遺構・遺物が確認されているが、急傾斜地からは土坑1基と遺物が少量見つかっただけで、ほとんどの遺構・遺物は沢より南側の範囲でみつかった。検出された遺構は、掘立柱建物跡2棟、焼土遺構2基、地床炉3基、石囲炉1基、配石遺構1基、土坑12基、溝跡1条、柱穴様ビット4基である(第12表)。特に平坦面の中でも最も標高の高い平坦面1では多くの遺物が出土している。遺構の時期決定は主に遺構内出土土器を判断材料として行った。ただし、遺物は全てが覆土からの出土であり、床面直上出土などのように確実に遺構に伴う時期のものと判断できる資料はなかった。

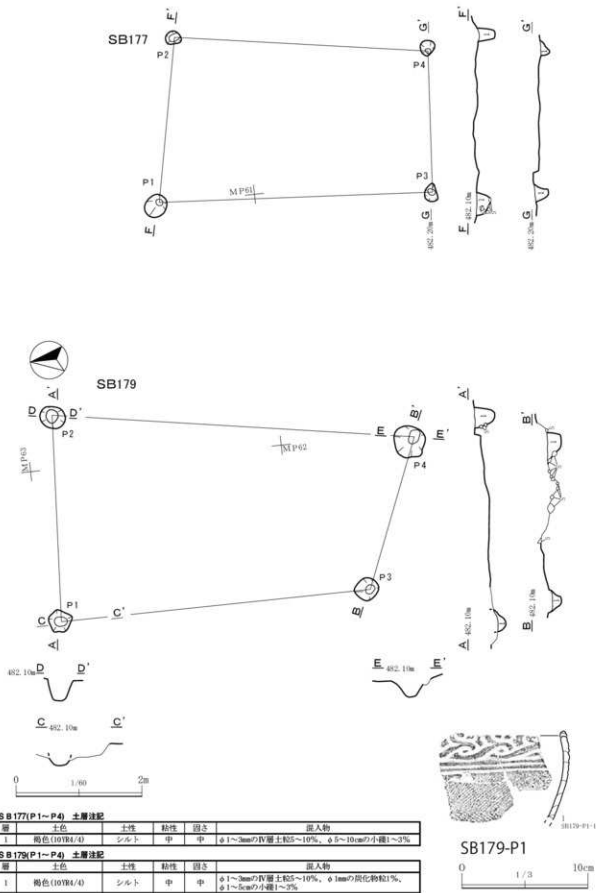
第12表 西区検出遺構一覧

| 遺構種別 | 記号 | グリッド | 検出層位 | 所属時期 | 押印掲載位置 | 図版掲載位置 | |
|--------|--------|------------|---------|---------------|--------|--------------|----------|
| 掘立柱建物跡 | SB177 | MN・M061・62 | IV層上面 | 縄文晩期前葉以降 | 第71図 | 図版30-1・2 | |
| | SB179 | MO・M061・62 | IV層上面 | 縄文晩期前葉以降 | 第71図 | 図版30-1・2 | |
| 焼土遺構 | SN149 | MP64 | Ⅲ層 | 縄文晩期初頭以降 | 第72図 | 図版31-1・2 | |
| | SN122 | MT64 | I層 | 近現代 | 第160図 | 図版78-1・2 | |
| 地床炉 | SN151 | NA57 | IV層 | 縄文早期中葉 | 第72図 | 図版31-3 | |
| | SN152 | NA58 | IV層 | 縄文早期後半 | 第72図 | 図版31-4・5 | |
| | SN183 | MT63 | Ⅲ層 | 縄文後期前葉～晩期初頭 | 第73図 | 図版32-5 | |
| 石囲炉 | SQ134 | MT63 | Ⅲ層 | 縄文晩期初頭 | 第73図 | 図版32-1～4 | |
| 配石遺構 | SQ172 | MT・NA61 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | 第75図 | 巻頭4、図版33-1～4 | |
| 土坑 | SK101 | N166 | IV層 | 縄文前期(大木2式期)以前 | 第78図 | 図版34-1～3 | |
| | SK111 | NA・NB55 | IV層上面 | 縄文晩期末葉 | 第78図 | 図版34-4・5 | |
| | SK114 | NA57 | IV層上面 | 縄文早期中葉 | 第78図 | 図版35-1・2 | |
| | SK115 | NA・NB56 | IV層 | 縄文後期中葉～後葉 | 第78図 | 図版35-3・4 | |
| | SK118 | MB64 | IV層上面 | 弥生中期後半 | 第79図 | 図版35-5・6 | |
| | SK119 | MB64・65 | IV層上面 | 弥生中期後半 | 第79図 | 図版35-5・6 | |
| | SK120 | NA63・64 | IV層上面 | 縄文晩期末葉 | 第79図 | 図版35-7・8 | |
| | SK126 | MP57 | Ⅲ層 | 縄文前期中葉 | 第79図 | 図版36-1～3 | |
| | SK153 | M062・63 | IV層上面 | 縄文後期後半 | 第79図 | 図版36-4・5 | |
| | SK167 | NA・NB59 | IV層上面 | 縄文前期初頭 | 第80図 | 図版36-6～8 | |
| | SK170 | NA60 | IV層上面 | 縄文 | 第80図 | 図版37-1・2 | |
| | SK181 | MT63 | IV層 | 縄文後期以降 | 第80図 | 図版37-3・4 | |
| | 溝 | SD129 | M058 | IV層上面 | 縄文 | 第84図 | 図版37-5～7 |
| | 柱穴様ビット | SKP155 | MR・MS59 | IV層 | 縄文 | 第80図 | |
| SKP157 | | MT58・59 | IV層 | 縄文 | 第80図 | | |
| SKP166 | | NA60 | IV層 | 縄文前期以降 | 第80図 | | |
| SKP168 | | NB59 | IV層 | 縄文前期初頭以前 | 第80図 | 図版36-6～8 | |

掘立柱建物跡構成柱穴の名称新旧対応関係

SB177 (SKP175→P1、SKP160→P2、SKP162→P3、SKP171→P4)

SB179 (SKP178→P1、SKP161→P2、SKP176→P3、SKP154→P4)



第71図 西区：SB177・179 掘立柱建物跡及び出土遺物

2 縄文～弥生時代の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

SBI77 (第71図、図版30-1・2)

〔位置・検出状況〕 MN61・62、MO61・62グリッドに位置する。Ⅳ層上部で褐色シルトの柱穴様ピット4基が確認され、柱穴の位置と堆積土の共通性から掘立柱建物跡と判断した。

〔概要〕 4本柱で構成される長方形の掘立柱建物跡と推測され、東西方向に2.5m、南北方向に4.4mの規模をもつ。

〔堆積土〕 単層で、褐色粘土質シルトにⅣ層土塊、小礫を含む。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔時期〕 詳細な時期は不明であるが、建物の構成や配置、埋土の特徴から隣接するSBI79と同一の時期(縄文時代晩期前葉以降)の可能性がある。 (赤星)

SBI79 (第71図、図版30-1・2)

〔位置・検出状況〕 MO61・62、MP61・62グリッドに位置する。Ⅳ層上部で褐色シルトの柱穴様ピット4基が確認され、柱穴の位置と堆積土の共通性から掘立柱建物跡と判断した。

〔概要〕 4本柱で構成される台形の掘立柱建物跡と推測され、東西方向に3.2m、南北方向に5.6mの規模をもつ。

〔堆積土〕 単層で、褐色粘土質シルトにⅣ層土塊、炭化物、小礫を含む。

〔出土遺物〕 P1からⅦ群C類土器1個体(第71図1)、縄文土器片4点、P2からUF1点、剥片1点、P4からUF1点が出土した。

〔時期〕 出土土器から縄文時代晩期前葉以降と考えられる。 (赤星)

(2) 焼土遺構、地床炉

後述する石囲炉以外に、火を使用した痕跡がみられる遺構として焼土遺構と地床炉を確認した。その形態の違いから、土に被熱範囲が確認できるものを焼土遺構、Ⅳ層下部の自然礫に被熱が認められたことで火の使用範囲が確認できたものを地床炉とした。

SN149 (第72図、図版31-1・2)

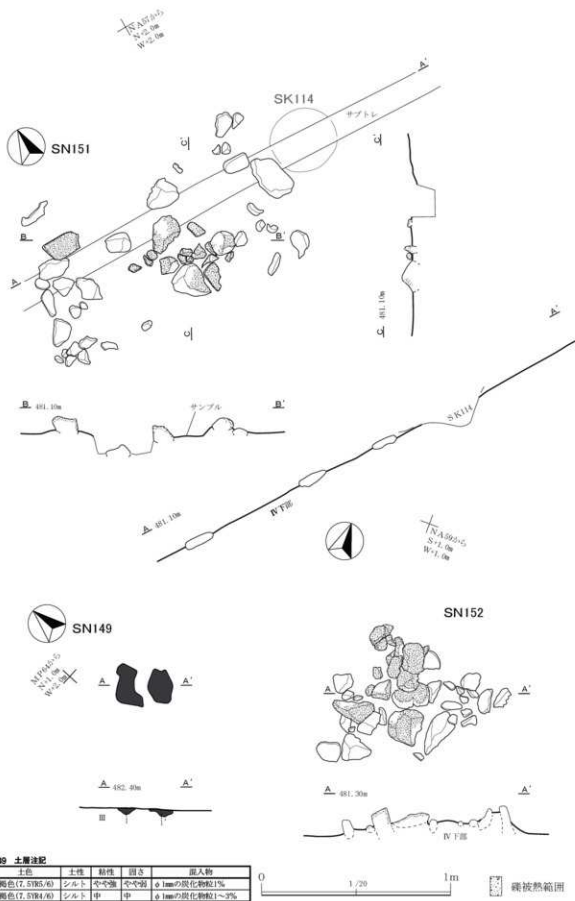
〔位置・検出状況〕 MP64グリッドに位置する。Ⅲ層精査中に明褐色で不定形の被熱範囲を2か所確認したが、色調と出土位置から一連の行為によるものであると判断し、合わせて一つの焼土遺構とした。

〔概要〕 被熱範囲は0.27m×0.11mと0.2m×0.13mの不整形で、どちらも厚さ4cmと薄い。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。同一グリッドのⅢ層では、遺構検出面より上からⅦ群B類、Ⅶ群土器が、検出面より下のⅢ～Ⅳ層ではⅣ群からⅦ群B類までの土器が出土した。

〔時期〕 遺構周辺の出土土器から、縄文時代晩期初頭以降と判断される。なお、検出面から採取した炭化物の年代測定ではcalBP 3,166-2,989(縄文時代晩期前葉～中葉頃)という結果がでている。

(安田)



第72図 西区：SN149 焼土遺構、SN151・152 地床炉

SN151 (第72図、図版31-3)

〔位置・検出状況〕NA57グリッドに位置する。Ⅳ層下部の上面で複数の焼礫を確認したため遺構と判断した。

〔概要〕Ⅳ層上部構築のSK114と隣接し、これより古い。半径0.5mの範囲に、被熱した拳大の礫が複数確認できる。また、礫の被熱範囲はいずれも上面である。周辺には被熱していないⅣ層由来の礫が露出している。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕遺構の新旧関係から、縄文時代早期中葉と考えられる。なお、検出面から採取した炭化物の年代測定からcalBP 7,560-7,431(縄文時代早期後半頃)という結果が出ている。

〔所見〕掘り込みがないことと、遺構の検出面にⅣ層下部の拳大礫がいたるところに露出していることから、本遺構の被熱した礫も同様のものと考えられる。よって地床炉と思われる。(安田)

SN152 (第72図、図版31-4・5)

〔位置・検出状況〕NA58グリッドに位置する。Ⅳ層下部で複数の焼礫を確認したため遺構と判断した。遺構北側の木根の影響で一部浮き上がっている可能性がある。

〔概要〕半径0.3mの範囲に、被熱した拳大の礫が複数確認できる。また、礫の被熱範囲はいずれも上面である。周辺には被熱していないⅣ層下部の礫が露出している。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕検出面から採取した炭化物の年代測定からcalBP 7,414-7,181(縄文時代早期後半頃)という結果が出ている。このことから本遺構の時期は縄文時代早期後半頃の可能性がある。

〔所見〕SN151と同様に地床炉と思われる。(安田)

SN183 (第73図、図版32-5)

〔位置・検出状況〕MT63グリッドに位置する。SQN134検出面から5~10cm下のⅢ層掘り下げ中に、複数の焼礫を確認した。SQN134よりも古い炉跡であると判断した。焼礫の検出レベルは5~10cmと差があったことから、焼礫を残しながら掘り下げる形で調査を進め、すべての礫を検出した後に記録を行った。

〔概要〕半径2.5mの範囲に、直径0.3~0.25cmの被熱した礫が複数確認できる。焼礫の被熱面は方向や角度が一律ではなく、礫の配置にも規則性はみられない。前述のとおり検出レベルも幅がある。

〔出土遺物〕周辺のⅢ層からは、主にⅣ~Ⅶ群の土器片が出土した。

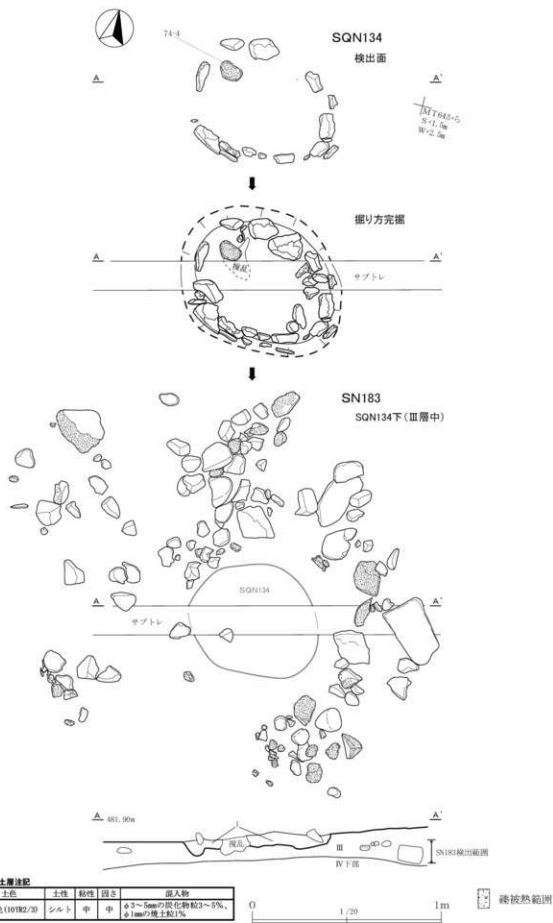
〔時期〕Ⅲ層出土土器とSQN134の推定時期から、縄文時代後期前葉~晩期初頭と考えられる。

〔所見〕焼礫は被熱面が一律ではなく、規則的な配置が確認できないことから、原位置を保っていないと考えられる。また、焼礫のレベルに幅があることから複数回作り替えられた炉跡の可能性がある。(安田)

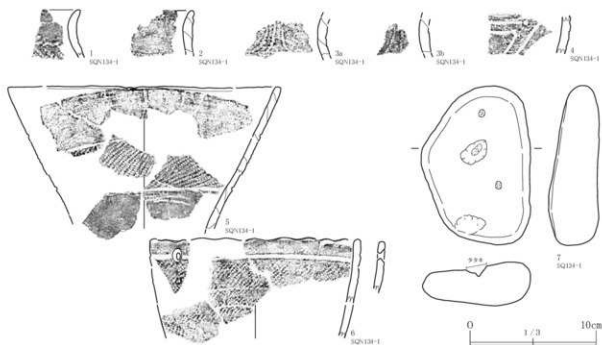
(3) 石囲炉

SQN134 (第73図、図版32-1~4)

〔位置・検出状況〕MT63グリッドに位置する。Ⅲ層を掘り下げ中に環状に並んだ配石を確認した。配石の一部には被熱した痕跡があり、環内側だけでなく周辺にも炭化物粒と焼土粒が平面で確認でき



第73図 西区：SQN134石囲炉、SN183地床炉跡



第74図 西区：SQN134石囲炉出土遺物

ることから石囲炉と判断した。掘り込みの有無を確認するためにサブトレンチを設定した後、土層断面の観察を行った。

〔概要〕SN183の上に構築されている。配石は長軸0.85m、短軸0.65mの環状に配置されている。配石南側は礫が二重列状に配置されているのが確認でき、本来は北側も同様に配置されていたと思われる。使用されている礫は扁平なものが多く、短軸を立てて配置されている。一部に砥磨器類（第74図7）や、被熱痕のあるものが確認できる。掘り方は不明瞭で平面では確認することができないが、断面観察から、配石よりやや大きめの楕円形と推定される。

〔堆積土〕炭化物粒と焼土粒を含む黒褐色の単一層であり、礫を配置するための掘り方を埋めた時の人為的な土上であると考えられる。Ⅲ層との境界は不明瞭である。

〔出土遺物〕既述した砥磨器類のほかに、Ⅰ層からⅨ群AⅠ類土器3個体（第74図1～3）、Ⅳ群B類土器1個体（同図4）、Ⅴ群土器1個体（同図5）、Ⅶ群B類土器1個体（同図6）、Ⅸ群D類1個体、縄文土器片11点、剥片3点が出土した。

〔時期〕出土土器から遺構の時期は縄文時代晩期初頭と考えられる。なお、Ⅰ層から採取した炭化物の年代測定ではcalBP 3,156～2,966（縄文時代晩期前葉～中葉頃）という結果が出ている。

〔所見〕周辺に柱穴や建物の痕跡が確認できなかったことから、屋外炉と考えられる。（安田）

（4）配石遺構

SQ172（第75図、巻頭図版4-1、図版33-1～4）

〔位置・検出状況〕MT・NA61グリッドに位置する。Ⅲ層を掘り下げている時に、同レベルで列状に並ぶ人頭大の礫を確認したため、配石遺構と判断し、断面観察のためのベルトを残して掘り下げを行った。

〔概要〕北側部分の礫は東西方向に列状に配置されているが、それ以外は礫と礫の間隔が約20～50cm空き、不規則な配置となっている。礫の大きさは長軸10cm程度のものから50cmほどのものまでである。形は扁平なものがほとんどだが、柱状のものも確認できる。礫はすべて長軸が地面と水平になるよう寝かせて配置しており、長軸はほとんどが東西方向を向いている。配石の素材には石皿（第76図1～3、第77図1・2）が含まれる。石皿は磨面が上を向いているものと下を向いているもの両方がある。配石から0.15mほど掘り下げると、拳大の大きさの深さ4cmほどの穴を複数検出した。穴は調査当初は気づかず掘りすぎてしまったため、土層ベルトの範囲でしか確認・記録ができていない。この穴は後述する盛土層（堆積土1層）によって埋まっていたことから、配石構築時の一連の作業の痕跡と推察される。本遺跡のIV層下部には拳大の礫が多く含まれているものの、配石の周辺には礫が確認できないことから、これら複数の拳大の穴は配石構築時に礫を抜き取った跡であると考えられる。

〔堆積土〕配石の下には、沢状地形を埋めるようににぶい黄褐色土が堆積していたが、IV層由来の粘土粒の混入が顕著に確認できることと、近接する同様の沢状地形で確認した自然堆積層（第22図 基本土層O）と土層が異なることから、人為的な堆積（盛土層）であると判断した。

〔出土遺物〕1層からIV群B類土器1個体（第75図2）、V群C類土器2個体（同図1）が出土し、うち1個体は遺構外出土土器と接合した（第96図7）。そのほかに縄文土器片10点が出土した。石器は配石の素材となった石皿の他に、1層から石鏃（同図3）、スクレイパー類（同図4）、UF2点、剥片1点が出土した。

〔時期〕出土土器から、縄文時代後期中葉に構築されたものと思われる。なお、配石直下の1層から採取した炭化物の年代測定ではcalBP 3,829～3,641（縄文時代後期中葉頃）という結果が得られている。

〔所見〕本遺構から南西へ5mの地点から石棒（第159図3）が出土した。このことから、祭祀場としての性格が推測できる。配石に使用されている石材は遺跡近隣の北ノ俣沢でも多く採取できるものである。（安田）

（5）土坑

SK101（第78図、図版34-1～3）

〔位置・検出状況〕N166グリッドに位置する。確認調査時、トレンチ29内のIVb層で灰黄褐色土の平面プランを確認した。立ち上がりを確認するためにサブトレンチを入れ、土層断面の観察を行った。断面観察からIVb層を掘り込んでいるのが確認できたため遺構と判断した。

〔概要〕平面は長径1.82m、短径1.33mの不整形円形である。深さ0.38mで、底面は平坦である。北壁は急角度で立ち上がり、南壁は緩やかに立ち上がる。北西側の一部が攪乱によって失われている。

〔堆積土〕4層に分層した。4層は淡黄色火山灰ブロックを主体とする層、1～3層はIVb層由来の黄褐色シルト層である。いずれもレンズ状に堆積しているため自然堆積と判断した。4層検出の火山灰は、分析の結果、十和田中振火山灰であるとの結果が得られている。

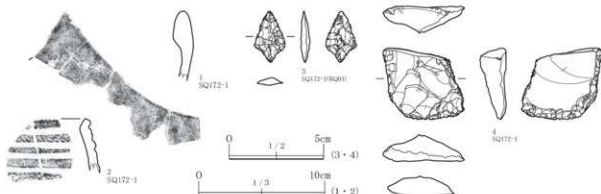
〔出土遺物〕遺構検出面からUF1点が出土した。

〔時期〕遺構底面にII層（十和田中振火山灰）が自然堆積していることから火山灰降下時期（縄文時

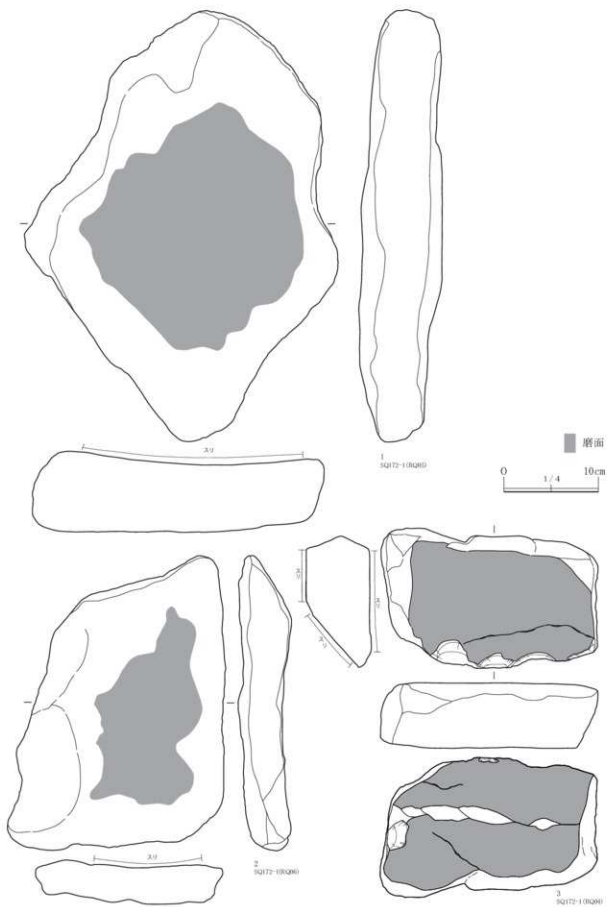


SQ172 土層注記

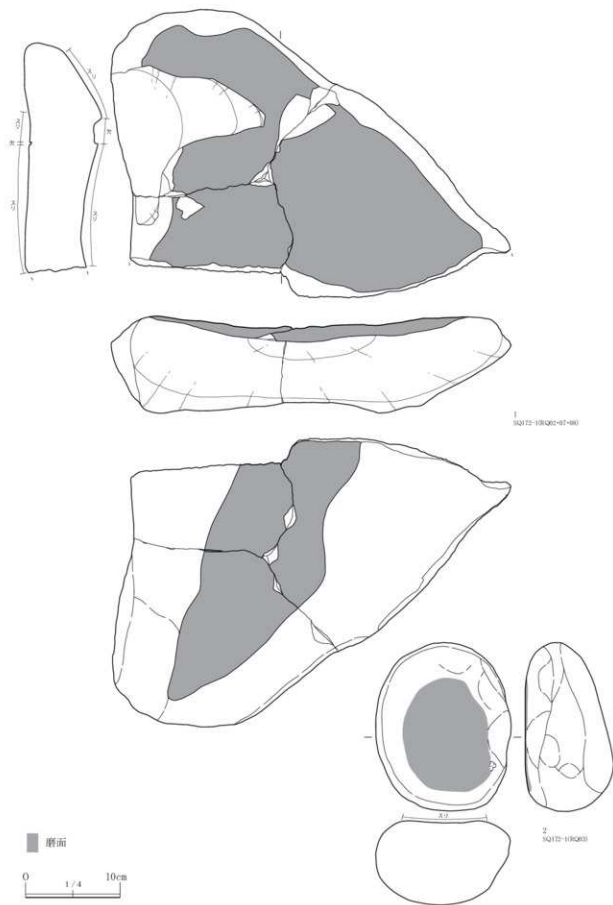
| 層 | 土色 | 土性 | 粘性 | 割合 | 遺人物 |
|---|-----------------|--------|----|-----|---|
| 1 | にぶい黄褐色(10YR4/3) | シルト質粘土 | 強 | 中々強 | φ1~10mmのIV層土粒10~20%、φ2~10mmの炭化物粒5~10%、φ1~3mm焼土粒1% |



第75図 西区：SQ172 配石遺構及び出土遺物（1）



第76図 西区:SQ172 配石遺構出土物(2)



第77図 西区:SQ172 配石遺構出土遺物(3)

代前期前葉)より古い時期に構築された遺構と考えられる。(赤星)

SK111 (第78図、図版34-4・5)

〔位置・検出状況〕NA・NB55グリッドに位置する。IV層上部で黄褐色の不明瞭なプランを確認した。正確なプランを把握するために5cm段下げをしたところ円形プランが確認できたため、サブトレンチを入れて土層断面を観察した。断面観察から立ち上がりを確認できたため遺構と判断した。

〔概要〕平面は、長径1.6m、短径1.45mの円形で、確認面からの深さは0.27mである。底面は平坦で、IV層下部の礫が露出し、壁面は緩やかに立ち上がる。東側の一部が攪乱によって失われている。

〔堆積土〕2層に分層した。1層は炭化物粒、焼土粒を含み、2層は黄褐色シルトに小礫を含む。不明瞭な人為堆積の痕跡が認められないため、自然堆積と捉えた。

〔出土遺物〕1、2層からⅦ群土器1個体(第81図1)、Ⅶ群E類土器2個体(同図2・3)、縄文土器片5点、石鏃(同図4)、RF3点、UF3点(内1点に被熱痕)、剥片2点が出土した。

〔時期〕出土土器から縄文時代晩期末葉と考えられる。(赤星)

SK114 (第78図、図版35-1・2)

〔位置・検出状況〕NA57グリッドに位置する。Ⅲ層を掘り下げた後、IV層上部にて褐色土の不明瞭なプランを確認した。正確なプランを確認するためにサブトレンチを入れ、土層断面の観察を行った。断面観察から、IV層下部を掘り込んでいるのが確認できたため遺構と判断した。

〔概要〕SN151と隣接し、これより新しい。平面は長径1.18m、短径1mの円形である。確認面からの深さは0.31mで、底面は湾曲し、壁は緩やかに立ち上がる。西側は攪乱によって失われている。

〔堆積土〕2層に分層した。2層はIV層上部由来の黄褐色ブロックと、IV層下部由来と思われる亜円礫を含んでおり、人為堆積の可能性が高い。1層は薄く面的に堆積しており自然堆積と思われる。

〔出土遺物〕2層からI群A類土器1個体(第81図5)、1層から剥片3点が出土した。

〔時期〕出土土器から縄文時代早期中葉と考えられる。(安田)

SK115 (第78図、図版35-3・4)

〔位置・検出状況〕NA・NB56グリッドに位置する。確認調査時、トレンチ18断面で確認されたもので、本調査時に正確なプランを確認するためにサブトレンチを入れ、土層断面を観察したところ、IV層上部を掘り込んでいることが確認できたため、遺構と判断した。

〔概要〕平面は、長径2.52m、短径2.18mの楕円形である。深さ0.42mで、底面は丸く、中央部がやや深い。壁面は西方向が緩やかに立ち上がり、東方向はやや急に立ち上がる。北西側の一部が攪乱によって失われている。

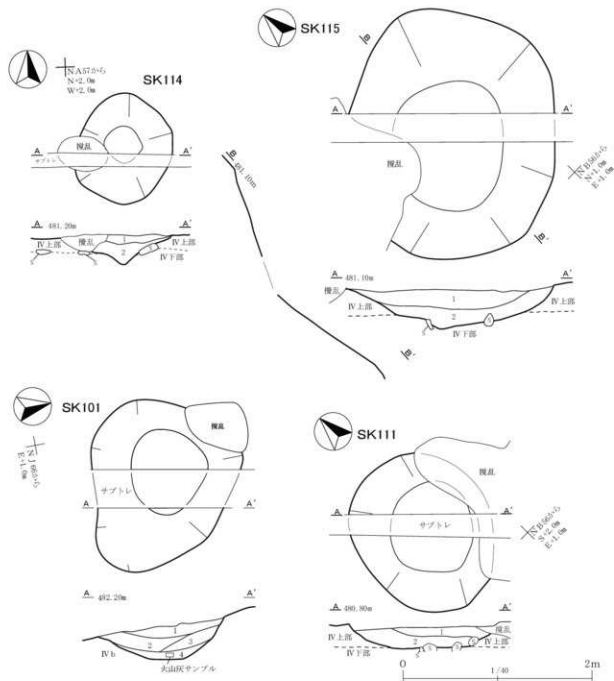
〔堆積土〕2層に分層した。1、2層ともに黄褐色シルトに偽礫、炭化物、小礫の混入が認められたため人為堆積と判断した。

〔出土遺物〕1、2層からⅡ群D類土器1個体(第81図7)、Ⅳ群B類土器1個体、Ⅴ群土器1個体、Ⅵ群土器1個体(同図6)、縄文土器片7点、1層からRF1点、剥片1点が出土した。

〔時期〕出土土器から縄文時代後期中葉～後葉と考えられる。(赤星)

SK118 (第79図、図版35-5・6)

〔位置・検出状況〕MR64グリッドに位置する。IV層上部で灰黄褐色土の楕円形プランを確認した。立ち上がりを確認するためにサブトレンチを入れ、土層断面の観察を行った。断面観察からIV層上部



SK114 土層注記

| 層 | 土色 | 土性 | 粘性 | 固さ | 遺人物 |
|---|--------------|--------|-----|-----|------------------------------------|
| 1 | 褐色(10YR4/6) | シルト | 中 | やや弱 | φ1cmの小礫1%, 炭化物微量 |
| 2 | 黄褐色(10YR5/3) | シルト質粘土 | やや強 | 中 | φ2~3cmの小礫10%, φ5mmのIV層土粒10%, 炭化物微量 |

SK101 土層注記

| 層 | 土色 | 土性 | 粘性 | 固さ | 遺人物 |
|---|--------------|-------|-----|-----|-----------------------------|
| 1 | 褐色(10YR4/4) | シルト | 中 | やや強 | φ1~2mmのIV層土粒15%, φ1cmの小礫を含む |
| 2 | 褐色(10YR4/4) | シルト | 中 | やや強 | φ1cmの小礫1% |
| 3 | 褐色(10YR4/6) | 砂質シルト | やや弱 | やや強 | φ1cmのIV層土粒10% |
| 4 | 黄褐色(10YR5/4) | シルト | 弱い | 強 | 火山灰主体 |

SK111 土層注記

| 層 | 土色 | 土性 | 粘性 | 固さ | 遺人物 |
|---|--------------|-----|-----|----|---------------------------------|
| 1 | 黄褐色(10YR5/6) | シルト | やや弱 | 中 | φ1mm未満の炭化物粒1%未満, φ1mm未満の焼土粒1%未満 |
| 2 | 黄褐色(10YR5/6) | シルト | 中 | 中 | φ3~5mmの小礫2~3% |

SK115 土層注記

| 層 | 土色 | 土性 | 粘性 | 固さ | 遺人物 |
|---|--------------|-----|-----|----|--------------------------------|
| 1 | 黄褐色(10YR5/6) | シルト | やや弱 | 中 | φ1~10mmの炭化物粒1%, φ1~3cmの小礫1% |
| 2 | 黄褐色(10YR5/6) | シルト | 中 | 中 | φ1~5mmの炭化物粒1%未満, φ1~5cmの小礫3~5% |

第78図 西区: SK101・111・114・115土坑

を掘り込んでいるのが確認できたため遺構と判断した。

〔概要〕SK119と重複し、本遺構の方が新しい。平面は長径1.22m、短径1.10mの楕円形である。確認面からの深さは0.2mで、底面は丸底で中央部が深い。壁は緩やかに立ち上がる。南側は攪乱によって失われている。

〔堆積土〕単層で、灰黄褐色シルトに炭化物、小礫を含むが、明瞭な人為堆積の痕跡が認められないため自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕1層からⅥ群土器1個体(第81図8)、Ⅷ群C類土器1個体(同図9)、Ⅸ群D類土器1個体、縄文土器片16点、石鏃(同図11)、小形甕状石器(同図12)、UF2点が出土した。

〔時期〕出土土器から弥生時代中期後半と考えられる。(赤星)

SK119(第79図、図版35-5・6)

〔位置・検出状況〕MR64・65グリッドに位置する。Ⅳ層上部で灰黄褐色土の楕円形プランを確認した。サブトレンチを入れ、土層断面の観察を行ったところ立ち上がりを確認できたため遺構と判断した。

〔概要〕SK118と重複し、本遺構の方が古い。平面は、長径1.56m、短径1.04mの楕円形である。確認面からの深さは0.29mで、底面は丸く、中央部がやや深い。残存する北側の壁面は緩やかに立ち上がる。西側と南側は攪乱によって失われている。

〔堆積土〕2層に分層した。1、2層ともに褐色シルトに炭化物、小礫を含むが、明瞭な人為堆積の痕跡が認められないため自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕1、2層からⅤ群土器1個体(第81図10)、Ⅷ群C類土器1個体(同図9)、Ⅸ群D類土器2個体、縄文~弥生土器片61点、石鏃(同図11)、小形甕状石器(同図12)、RF4点、UF1点、剥片3点が出土した。

〔時期〕出土土器から弥生時代中期後半と考えられる。(赤星)

SK120(第79図、図版35-7・8)

〔位置・検出状況〕NA63・64グリッドに位置する。確認調査時、トレンチ31内のⅣ層上部で灰黄褐色土の円形プランを確認した。本調査時、サブトレンチを入れて土層断面の観察を行ったところ立ち上がりを確認できたため遺構と判断した。

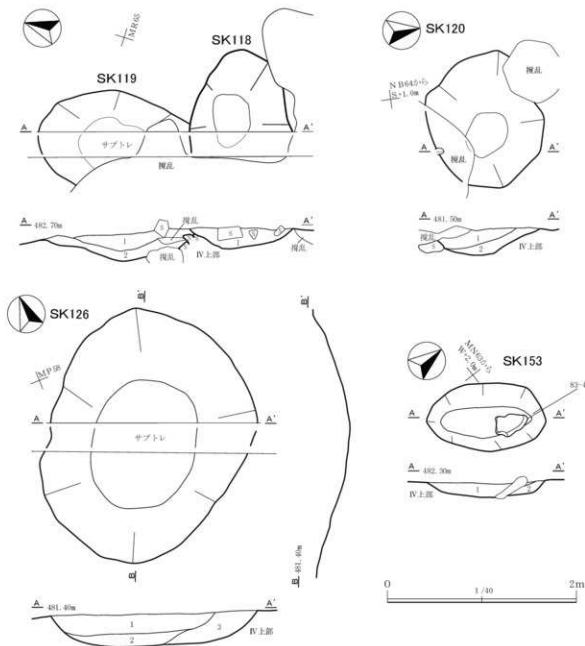
〔概要〕平面は長径1.45m、短径1.24mの円形である。確認面からの深さは0.27mで、底面は丸く、中央部がやや深い。残存する北側の壁面は、やや緩やかに立ち上がる。北西側と南東側は一部攪乱によって失われている。

〔堆積土〕2層に分層した。1層は褐色シルト、2層は黄褐色シルトに炭化物、小礫を含むが、明瞭な人為堆積の痕跡が認められないため自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕1、2層からⅣ群B類1個体(同図16)、Ⅳ群C類1個体(同図15)、Ⅶ群E類土器1個体(同図14)、縄文土器片54点、小形磨製石斧(第82図2)、石鏃(第81図17~20)、スクレイパー類(同図21)、RF4点、UF1点、剥片9点が出土した。

〔時期〕出土土器から本遺構の年代は縄文時代晩期末葉と考えられる。なお、2層から採取した炭化物の年代測定ではcalBP3,063-2,892(縄文時代晩期前葉~中葉頃)という結果が得られている。

(赤星)



SK118 土層注記

| 層 | 土色 | 土性 | 粘性 | 固さ | 混入物 |
|---|------------------|-----|-----|----|------------------|
| 1 | にじみ・黄褐色(10YR4/3) | シルト | やや弱 | 中 | φ5~10mmの小礫15~20% |

SK119 土層注記

| 層 | 土色 | 土性 | 粘性 | 固さ | 混入物 |
|---|-------------|-----|-----|-----|------------------------------|
| 1 | 褐色(10YR4/4) | シルト | やや弱 | 中 | φ1~2mmの炭化物粒3%, φ1~2cmの小礫1% |
| 2 | 褐色(10YR4/6) | シルト | やや弱 | やや強 | φ2~3mmの炭化物粒1%未満, φ1~2cmの小礫1% |

SK120 土層注記

| 層 | 土色 | 土性 | 粘性 | 固さ | 混入物 |
|---|--------------|-----|-----|-----|-------------------------------|
| 1 | 褐色(10YR4/6) | シルト | やや強 | やや強 | φ1~5mmの炭化物粒7%, φ5~10mmの小礫3% |
| 2 | 黄褐色(10YR5/6) | シルト | 中 | やや強 | φ1~5mmの炭化物粒10%, φ5~10mmの小礫10% |

SK126 土層注記

| 層 | 土色 | 土性 | 粘性 | 固さ | 混入物 |
|---|---------------|-----|-----|----|--------------------------------|
| 1 | 明褐色(7.5YR5/6) | シルト | 中 | 中 | φ1~5mmの炭化物粒3~5%, φ1~2cmの小礫1%未満 |
| 2 | 黄褐色(10YR5/6) | シルト | 中 | 中 | φ1~2mmの炭化物粒1%未満 |
| 3 | 明褐色(7.5YR5/6) | シルト | やや弱 | 中 | φ1~2mmの炭化物粒1%, φ1~2cmの小礫1% |

SK153 土層注記

| 層 | 土色 | 土性 | 粘性 | 固さ | 混入物 |
|---|--------------|-----|-----|-----|-------------------------------|
| 1 | 暗褐色(10YR3/4) | シルト | 中 | 中 | φ1~5mmのIV層土粒3%, φ1cmの小礫1% |
| 2 | 褐色(10YR4/4) | シルト | やや弱 | やや弱 | φ1~2mmのIV層土粒10%, φ5~10mmの小礫3% |

第79図 西区：SK118・119・120・126・153土坑

SK126 (第79図、図版36-1~3)

〔位置・検出状況〕MP57グリッドに位置する。確認調査時、トレンチ9で黄褐色土の円形プランおよび断面で立ち上がりを確認したため、遺構と判断した。

〔概要〕平面は長径2.7m、短径2.1mの楕円形である。確認面からの深さは0.33mで、底面は平坦であり、壁面はやや急に立ち上がる。

〔堆積土〕3層に分層した。1、3層は明褐色シルト、2層は黄褐色シルトに炭化物、小礫を含むが、明瞭な人為堆積の痕跡が認められないため自然堆積と考えられる。なお平成27年度確認調査時には遺構上面にⅡ層が自然堆積しているのが確認されている。

〔出土遺物〕1~3層からⅡ群F類土器2個体(第82図3・4)、石鏃(同図5)、小形篋状石器(同図6・8)、石匙(同図9)、スクレイパー類(同図1・7・10)、楔形石器(同図11)、磨石(同図12、第83図1)、RF27点、UF12点、剥片34点(うち2点が被熱痕)が出土した。

〔時期〕出土土器から遺構の時期は縄文時代前期中葉と考えられる。遺構上面に堆積しているⅡ層(十和田中興火山灰)の降灰時期は前期前葉と言われているため、甕船が生じている。なお、3層から採取した炭化物の年代測定ではcalBP3,364-3,234(縄文時代後期中葉および後期後葉頃)という結果が得られている。(赤星)

SK153 (第79図、図版36-4・5)

〔位置・検出状況〕MN62・63グリッドに位置する。Ⅳ層上部で暗褐色土の楕円形プランを確認した。立ち上がりを確認するため半載したところ、Ⅳ層上部を掘り込んでいることが観察されたため遺構と判断した。

〔概要〕平面は長径1.26m、短径0.72mである。確認面からの深さは0.15mであり、底面は平坦で、壁面はやや緩やかに立ち上がる。磨面が下で斜方向に配置された状態の石皿が出土した。

〔堆積土〕2層に分層した。1層は暗褐色シルト、2層は褐色シルトにⅣ層土塊、小礫を含む。1層は人為堆積と考えるが、2層は木の根による攪乱を受けた可能性がある。

〔出土遺物〕1層からⅠ群A2類土器1個体(第83図2)、IX群C類土器1個体(同図3)、石皿(同図4)、剥片1点が出土した。

〔時期〕出土土器から縄文時代後期後半~晩期前葉と考えられる。

〔所見〕遺構の規模、底面が平坦であること、石皿が出土していることから、抱石葬を想定した土坑墓の可能性も考えられる。(赤星)

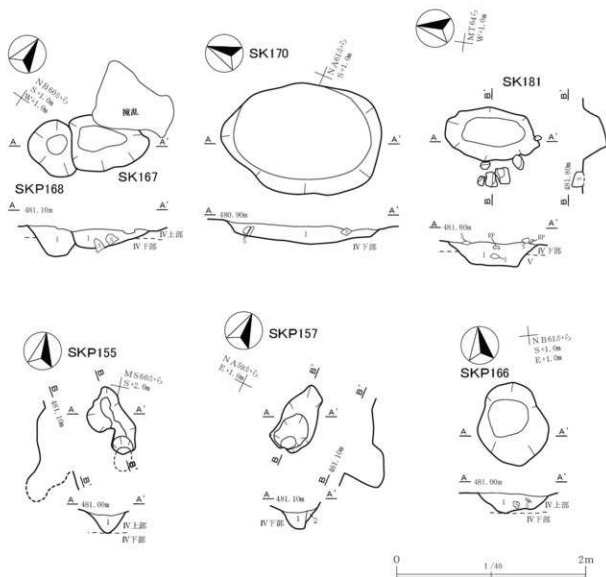
SK167 (第80図、図版36-6~8)

〔位置・検出状況〕NA・NB59グリッドに位置する。Ⅳ層上部で褐色土の楕円形プランを確認した。立ち上がりを確認するため半載したところ、Ⅳ層上部を掘り込んでいることが観察されたため遺構と判断した。

〔概要〕SKP168と重複し、本遺構の方が新しい。平面は長径0.84m、短径0.6mである。確認面からの深さは0.2mで、底面は丸く、南西側がやや深い。壁面は北東側が緩やかに立ち上がり、南西側は急に立ち上がる。

〔堆積土〕単層で、褐色粘土質シルトに小礫を含む。人為堆積か自然堆積かは判断ができない。

〔出土遺物〕1層からⅡ群A類土器1個体(第83図5)、剥片1点が出土した。



SKP167 土層注記

| 層 | 土色 | 土性 | 粘性 | 固さ | 混入物 |
|---|-------------|--------|-----|----|-----------|
| 1 | 褐色(10TR4/4) | 粘土質シルト | やや強 | 中 | φ15cmの縄5% |

SKP170 土層注記

| 層 | 土色 | 土性 | 粘性 | 固さ | 混入物 |
|---|-------------|--------|----|-----|--|
| 1 | 褐色(10TR4/6) | 粘土質シルト | 強 | やや強 | φ1~5mmのIV層土粒10%、 φ1mmの炭化物粒1~3%、 φ5~10mmの縄15% |

SK181 土層注記

| 層 | 土色 | 土性 | 粘性 | 固さ | 混入物 |
|---|-------------|-----|----|-----|--|
| 1 | 褐色(10TR4/4) | シルト | 中 | やや弱 | φ1~5mmのIV層土粒10~15%、 φ1mmの炭化物粒1%、 φ10~20mmの小縄5~7% |

SKP155 土層注記

| 層 | 土色 | 土性 | 粘性 | 固さ | 混入物 |
|---|--------------|-----|----|----|------------------------------------|
| 1 | 暗褐色(10TR3/4) | シルト | 中 | 中 | φ1~2mmのIV層土粒5%、 φ1mm未満の炭化物粒1%未満 |

SKP157 土層注記

| 層 | 土色 | 土性 | 粘性 | 固さ | 混入物 |
|---|--------------|-----|----|-----|-------------------------------|
| 1 | 暗褐色(10TR3/4) | シルト | 中 | やや弱 | φ1mmの炭化物粒1%未満、 φ1~5mmの小縄1% |
| 2 | 褐色(10TR4/6) | シルト | 中 | やや弱 | φ5~8cmの小縄3% |

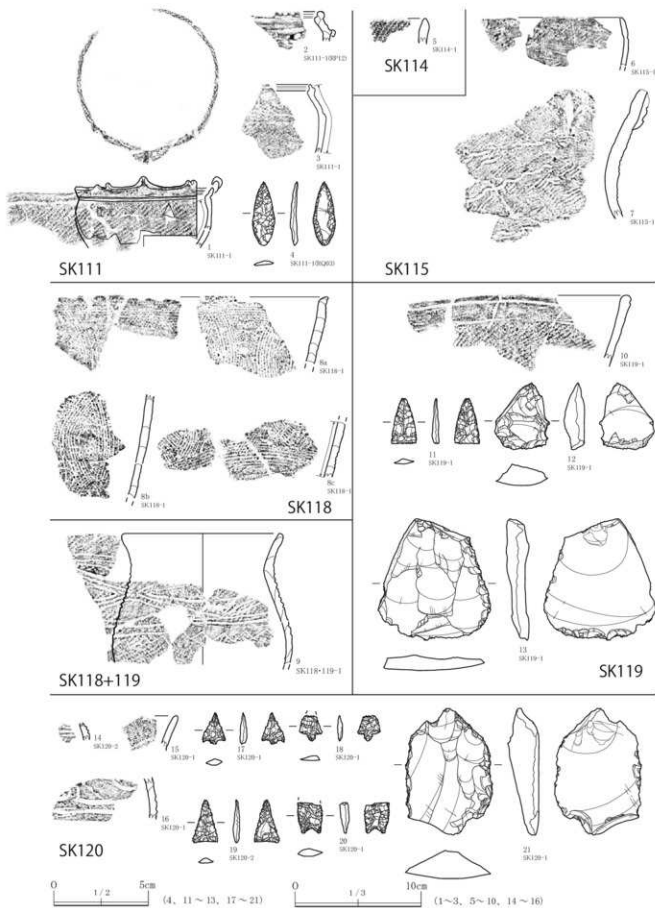
SKP166 土層注記

| 層 | 土色 | 土性 | 粘性 | 固さ | 混入物 |
|---|-------------|--------|----|-----|-------------------------------|
| 1 | 褐色(10TR4/4) | 粘土質シルト | 中 | やや強 | φ1~5mmのIV層土粒10%、 φ10cmの縄5% |

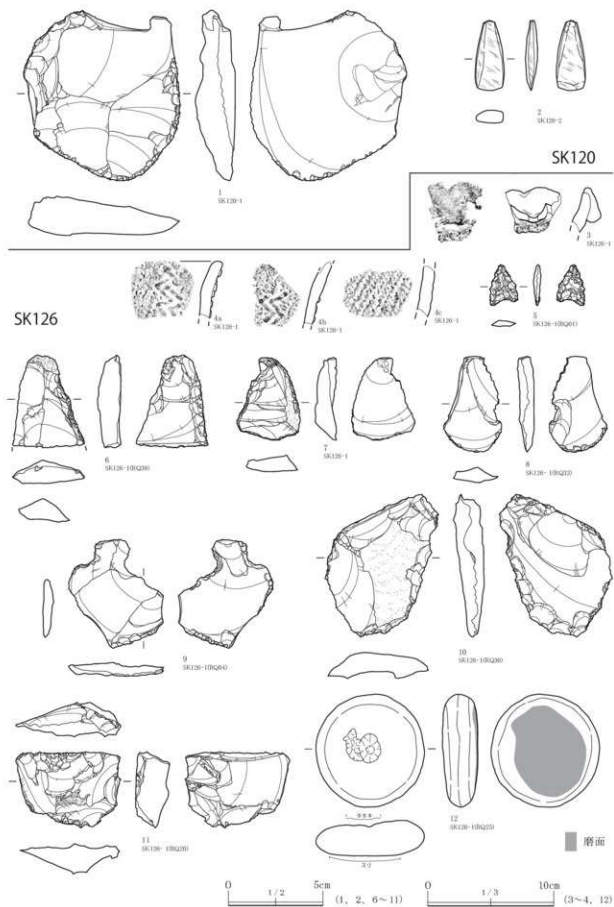
SKP168 土層注記

| 層 | 土色 | 土性 | 粘性 | 固さ | 混入物 |
|---|-------------|--------|-----|----|-------------|
| 1 | 褐色(10TR4/6) | 粘土質シルト | やや強 | 中 | φ5~10cmの縄5% |

第80図 西区：SK167・170・181土坑、SKP155・157・166・168柱穴様ピット



第81図 西区:SK111・114・115・118・119・120土坑出土遺物



第 82 図 西区:SK120・126 土坑出土遺物

[時期] 出土遺物から縄文時代前期初頭と考えられる。(赤星)

SK170 (第80図、図版37-1・2)

[位置・検出状況] NA60グリッドに位置する。IV層下部で褐色土の楕円形プランを確認した。立ち上がりを確認するため半載したところ、IV層下部を掘り込んでいることが観察されたため遺構と判断した。

[概要] 平面は長径1.7m、短径1.18mの楕円形である。確認面からの深さは0.19mであり、底面は平坦で、中央部がやや凹む。壁面は急に立ち上がる。遺構周辺及び遺構の壁面や底面は礫層の礫が露出する。

[堆積土] 単層で、Ⅲ層由来土と思われる褐色粘土質シルト、炭化物、焼土粒、小礫を含む。明瞭な人為堆積の痕跡が認められないため自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[時期] 検出層位及び堆積土の特徴から縄文時代の遺構であるが、詳細な時期は不明である。(赤星)

SK181 (第80図、図版37-3・4)

[位置・検出状況] MT63グリッドに位置する。IV層下部を掘り下げ中に褐色土の楕円形のプランを確認した。プラン縁辺一部には拳大の礫が並んでいた。

[概要] 平面は長径0.94m、短径0.55mの楕円形である。確認面からの深さは0.24mで、底面は平坦である。壁は比較的急に立ち上がる。

[堆積土] 褐色土の単一層である。IV層下部及びV層を掘り込んでいるため、IV層下部由来の黄褐色土粒とV層由来の小礫を多く含んでおり、人為的な埋戻しと思われる。

[出土遺物] 1層からIV～V群とみられる土器1個体(第83図6)、縄文土器片10点が出土した。そのほかに、底面北端から石鉄(同図7)、剥片1点が出土した。

[時期] 出土遺物から縄文時代後期以降と考えられる。

[所見] 遺構縁辺に拳大の礫が並んでいるが、本土坑に伴って人為的に配置されたものかどうかは断定できない。底面が平坦であり、底面から石鉄が出土していることから土坑墓の可能性も考えられる。(安田)

(6) 溝跡

SD129 (第84図、図版37-5~7)

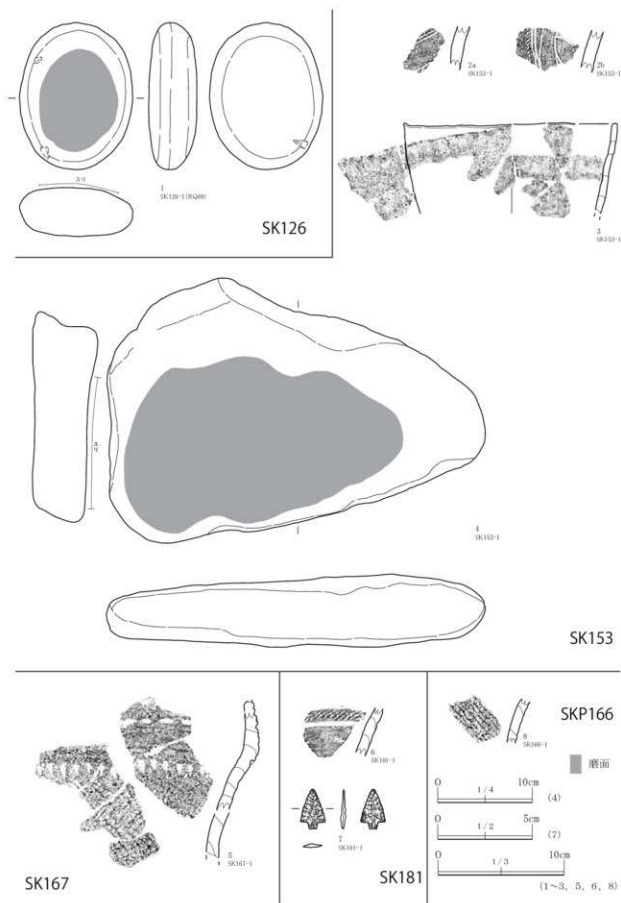
[位置・検出状況] MQ58グリッドに位置する。IV層上部でにぶい黄褐色土の溝状プランを確認した。立ち上がりを確認するために土層ベルト2本残し掘削した。土層断面観察からIV層上部を掘り込んでいるのが確認できたため遺構と判断した。

[概要] 平面形は長径2.13m、短径0.7mである。確認面からの深さは0.15mで、底面は丸く、中央部がやや深い。壁面はやや急に立ち上がる。

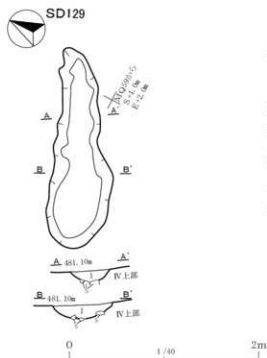
[堆積土] 単層で、にぶい黄褐色シルトにIV層土塊、炭化物、焼土粒、小礫を含むため、人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 1層から石核(第85図1)、UF1点、剥片6点が出土した。

[時期] 出土遺物から縄文時代の遺構と考えられるが、詳細な時期は不明である。(赤星)



第83図 西区:SK126・153・167・181土坑、SKP166柱穴様ピット出土遺物



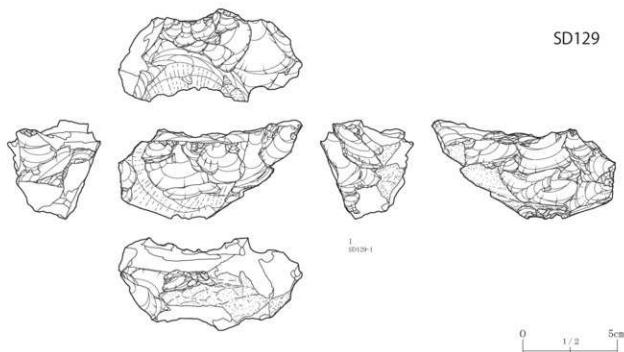
SD129 土層法記

| 層 | 土色 | 土性 | 結性 | 固さ | 混入物 |
|---|------------------|-----|-----|----|---|
| 1 | にぶい黄褐色 (10YR5/3) | シルト | やや強 | 中 | φ1~5mmの青磁土粒5~7%、φ1~2mmの黒土粒2%、φ1mm未満の焼土粒7%以下、φ1mmの小礫1% |

第84図 西区：SD129 溝跡

(7) 柱穴様ピット (第80図、図版36-6~8)
 柱穴様ピットは4基確認された。SKP168柱穴様ピットはSK167土坑と重複し、これより古いことから、遺構の時期は縄文前期初頭以前と考えられる。SKP166柱穴様ピットは覆土からⅡ群土器片 (第83図8) が出土したため、遺構の時期は縄文時代前期以降と考えられる。SKP155、SKP157は検出層位から縄文時代の遺構と考えられる。 (安田)

SD129



第85図 西区：SD129 溝跡出土遺物

(8) 遺構外出土遺物

西区の調査では遺構外から、縄文土器18ℓコンテナ34箱分、剥片石器類8,683点、礫石器類270点が出土した。遺物は平坦面1（第20図）の西半部に特に集中していた。この範囲ではI層からの出土が多く、徐々に出土点数は少なくなるもののIVa層まで遺物が包含される。

①土器（第86～119図、図版42～67）

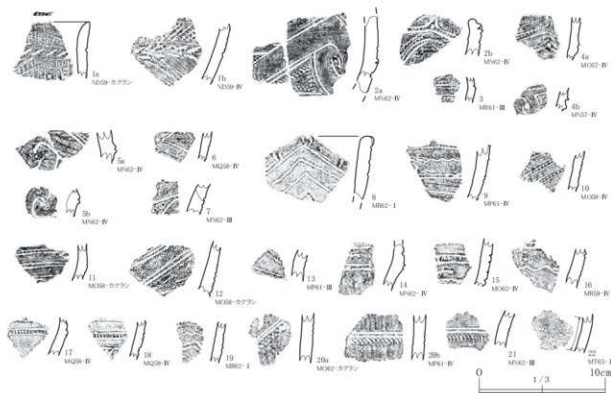
西区で出土した土器は、縄文時代早期中葉（I群A類）から弥生時代終末期（VIII群D類）まで広範にわたった。報告にあたっては、整理作業の過程でまとめられた同一個体数と、時期判断が可能だった口縁部破片数を合算し、個体数とした。以下、分類順に概要を記載する。なお、個別資料の詳細については観察表を掲載した（第19表）。

I群 縄文時代早期に属する土器

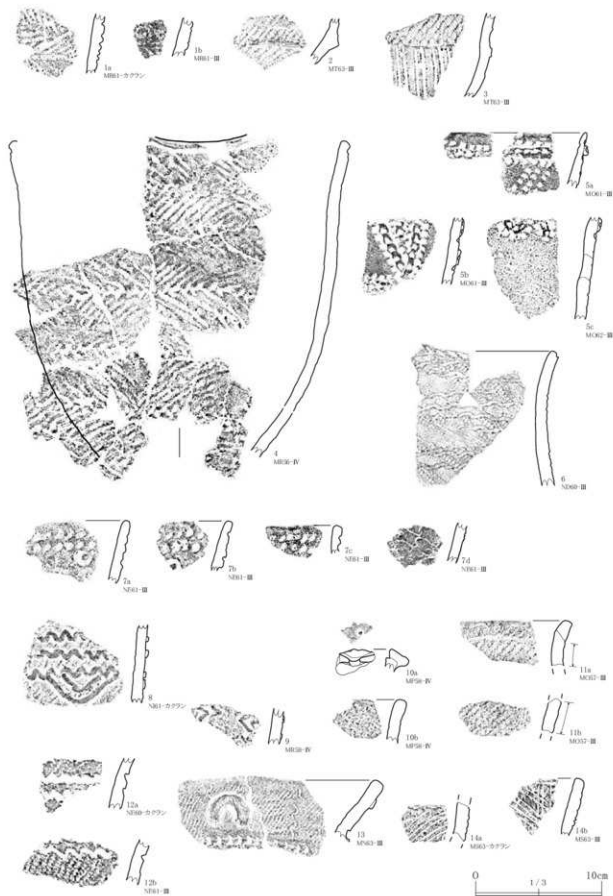
A類 貝殻腹縁圧痕と沈線により施文する土器で、早期中葉に属する。

A2類（第86図2～21）21個体を確認し、その全てを掲載した。沈線によりモチーフを描き、これに沿うように貝殻腹縁文が施文されるものが主で、主描線となる沈線には1本引き（6～8）、1本引きによる2本1単位（2、10）、半裁竹管状の工具による2本1単位（20・21）など様々なパターンが認められる。第86図2aや4a、5aでは、文様の入り組み部に突起と刺突が認められる。

A4類（第86図1）1個体が出土した。貝殻腹縁文を地紋にした上に細い沈線で区画する。1aは内削ぎ状の口縁部で、口唇にも貝殻腹縁文が認められる。1bは胴下半部とみられ、沈線で区画された文様帯下端に矢羽根状に貝殻腹縁の連続圧痕がめぐる。文様帯より下は器表面がよく磨かれる。



第86図 西区：遺構外出土土器（1）I群 早期



第 87 図 西区：遺構外出土土器（2）Ⅱ群 前期

II群 縄文時代前期に属する土器

A類 (第87図1) 縄圧痕で文様を構成する土器で、前期初頭に属する。1bには棘手状のモチーフが確認できる。胴上半部の破片と思われる。

B類 (第87図2・3) 口縁部文様帯の下端に明瞭な段が認められるもの。3には0段多条の原体による斜行縄文が認められる。

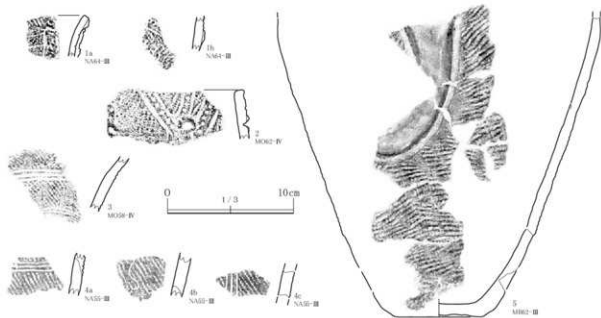
C類 (第87図4) 結束羽状縄文を全面に施文する土器で、前期前葉に属すると思われる。口縁部直下に沈線が一条巡る。一個体分とみられる土器片がまとめて出土した。

D類 (第87図5・6) 口唇や粘土紐の上に刻み目や刺突が加えられる土器で、前期前葉に属する。5は薄く潰した粘土紐の上とその両脇に、角張った棒状工具による刺突列が加えられる。地文には燃糸文が施される。6はやや外反する口縁部に刻み目が認められる。

E類 (第87図7) 爪形や円管状の連続刺突文が認められる土器で、前期前葉に属する。口唇はやや丸みを帯びる。7dは同一個体の可能性が高い胴部破片で、燃糸文が確認できる。

F類 (第87図8・9・10・12) 粘土紐や沈線によって鋸歯状のモチーフを描く土器で、前期中葉から後葉に属する。8では単一の粘土紐によって、9では短い粘土紐を貼り合わせることで、12は比較的幅の広い沈線それぞれモチーフを描いている。10は口縁部破片で、10aに鋸歯状装飾帯が確認できるため、本分類に含めた。

G類 (第87図10・11・13・14) 大木6式に相当すると考える土器をまとめて扱った。11はやや外反する口縁部を有す土器で、地文に斜行縄文が施される他には文様は認められない。口縁部は折り返しによって成形されるが、器表面に僅かに段が残り、口縁に平行して巡る沈線のような効果をもたらしている。器形からはIII群に含まれる可能性も考えられたが、胎土の特徴がII群土器と共通していたことから、ここに分類した。13は大きく開く口縁部破片で、U字状の粘土の貼り付けと爪形の刺突列のほか、縦位回転で施文された地文縄文と結節部回転文が確認できる。14bは口縁部破片で、半葎竹状の工具による縦や斜めの沈線が一面に施される。



第88図 西区：遺構外出土土器(3) III群 中期～後期初頭

Ⅲ群 縄文時代中期から後期初頭に属する土器

A類 (第88図1) 口縁部文様帯に粘土紐による区画を有するもので、1個体のみを確認した。円筒上層式土器に似るが、粘土紐上には刻み目と円管状の刺突、区画内には沈線文が描かれるなど、様相を異にする。

B類 (第88図3・4) 地文縄文に3本1組の沈線による施文が認められる土器で、中期中葉に属する。3は外反する頸部破片である。4は地文縄文と沈線文の施文後に器表面を撫で、平滑に整えている。

C類 (第88図5) 隆帯で区画されたU字やJ字となる文様内部に磨り消しを施す土器で、中期末葉に位置づけられる。

D類 (第88図2) 内傾する口縁部に2本1対の沈線でモチーフを描く土器で、中期末葉から後期初頭に位置づけられる可能性が高い。沈線間には列点が、沈線文の交点にはボタン状の貼り付けが見える。

Ⅳ群 縄文時代後期前葉に属する土器

A類 口縁直下で外反する器形で、胴部には縦に展開する文様を沈線で描くもの。磨り消しの有無で細分した。

A1類 (第89図1～3) 沈線文に磨り消しが伴わないものである。胴部には2～3条の沈線によって垂下する弧線文や渦文が施される。頸部は無文帯となる。

A2類 (第89図4～5) 沈線文に磨り消しが施されるもので、4は2条の沈線によってモチーフが描かれ、5は口縁部から文様が展開する。

B類 (第89図6～13、第90図1～7) 器形はA類に似るが、胴部に沈線で描かれる文様は横に展開するもの。沈線文には磨り消しが施される。第89図10は磨り消しが施された方形文、第90図3は沈線間に縄文が残されたクランク文である。第90図1～7には文様間や沈線の始点終点に円形刺突が施される。

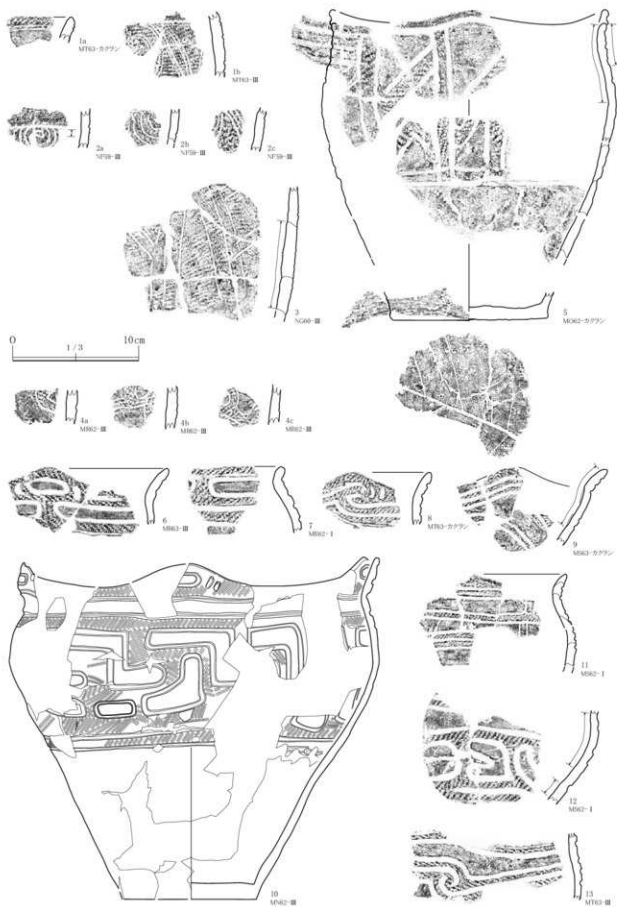
C類 (第90図8～16) 口縁部で強く外反する器形のもので、多重沈線文や連続刺突文を有する。8、9は口縁～頸部に見られる斜位の多重沈線文の始点に爪形の連続刺突がつく。また、8は口縁の波頂部が突起状になり、リング状の沈線が内面まで巡る。11、12は口縁部付近の破片で、刺突が充填される。15は口縁部が無文、16は口縁部が縄文のみとなる。10は文様要素から本分類に入れた。

Ⅴ群 縄文時代後期中葉に属する土器

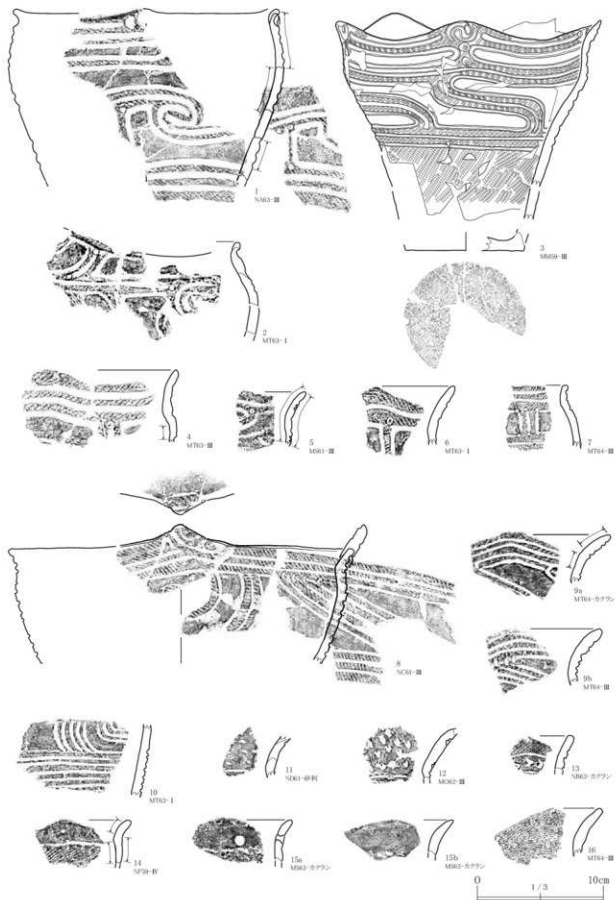
A類 平口縁で胴部に曲線的な入組磨消縄文を描くもので、器形によって細分した。

A1類 (第91図、第92図1) 頸部にくびれが認められないもので、第91図1は文様帯がJ字状の縄文部と無文部で構成される。第91図2と第92図1は半月状の無文部とJ字状の無文部で構成される。また第91図1・2は口縁部に地文が施されているが、第92図1の口縁部は無文である。

A2類 (第92図2～4) 頸部で強くくびれるもの。2は口唇が肥厚し、口縁部から頸部にかけて無文部が広がる。体部にはJ字状の縄文部がみられる。3は口縁部から頸部にかけて地文が施され、口縁部には1条の沈線がめぐる。体部には対向する弧線状文で構成された入組文を描き、その内側



第 89 図 西区：遺構外出土器（4）IV群 後期前葉

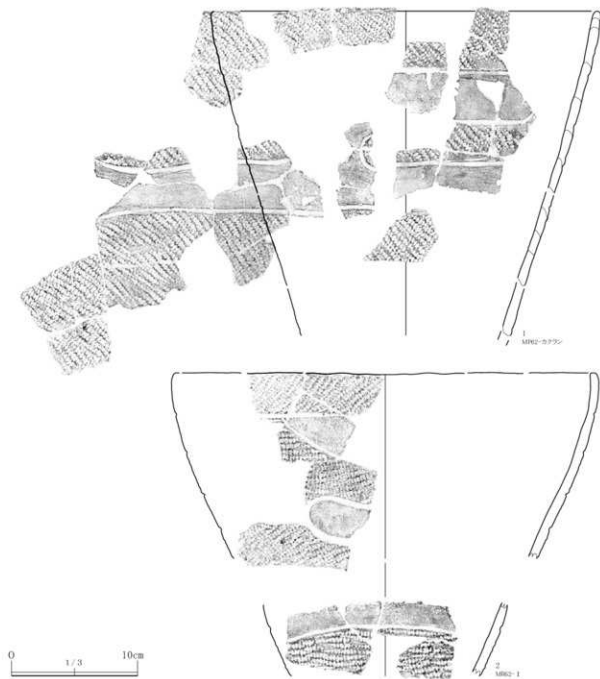


第90図 西区：遺構外出土土器(5) IV群 後期前葉

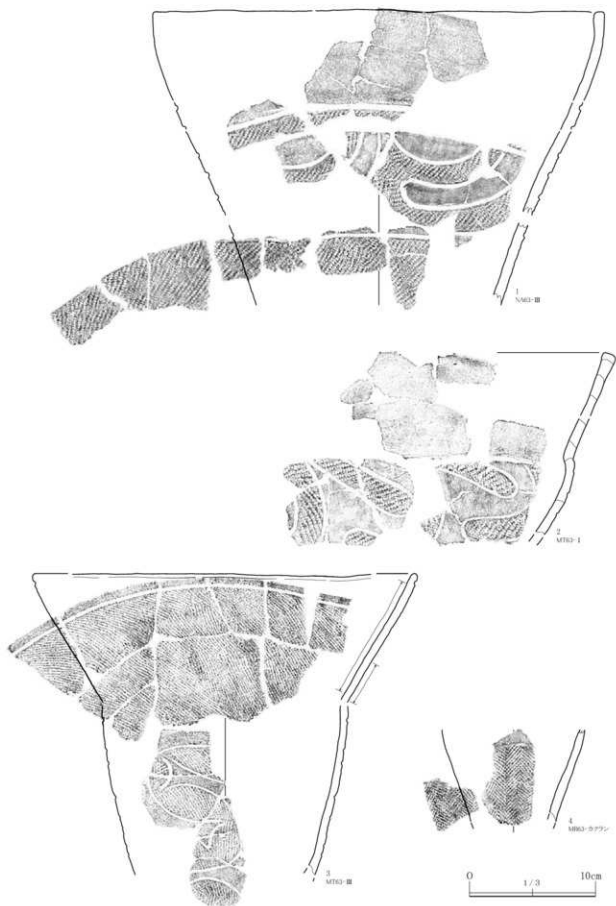
には縄文が施文される。4は口縁～頸部の形状が不明だが、3の体部器形と似ていることから本文類に入れた。縦位の羽状縄文で、一部に磨消が確認できる。

B類 (第93図) 口縁部に精巧な裝飾把手を有するもの。所謂、華燭土器が含まれる。ほとんどが破片資料であり、文様などは部分的にしかわからないが、口縁部から体部にかけて文様が施されており、3には入組文、1、8には入組文が崩れたアメーバ状文などが確認できる。また1、4、5、6は沈線に沿って円形刺突列が施される。2、4、6は耳状、7は帽子状の裝飾把手である。8は筒状の器形はA2類とも似るが、描かれた文様から本文類に含めた。

C類 大波状口縁を有するもので、器形と文様で細分した。



第91図 西区：遺構外出土器(6) V群 後期中葉

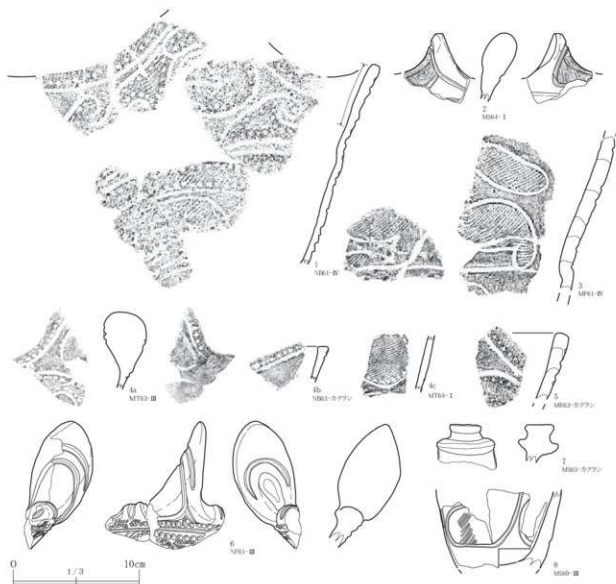


第92図 西区：遺構外出土土器（7）V群 後期中葉

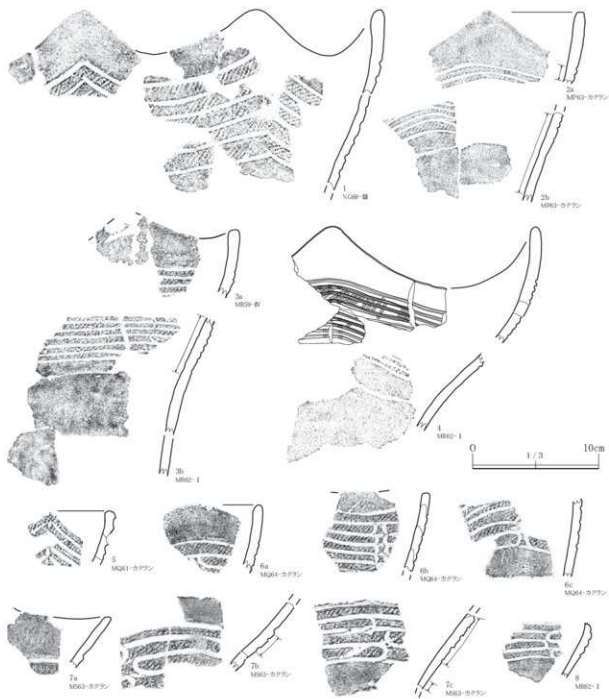
C1類 (第94図) 頸部でゆるやかにくびれる器形で、口縁部は無文、頸部から胴部には平行沈線文を有するもの。平行沈線文の範囲にのみ地文縄文が施される。3、6、7、8は平行沈線を区切る縦方向の沈線(弧線)が、4、5では縦方向に連続する刺突が施されている。

C2類 (第95図) 頸部で強くくびれる器形で、口縁部は無文、胴部には縄文帯を有するもの。1～6は無文部が幅広いためC1類から分離したが、体部には平行沈線文が施されていた可能性もある。1は大波状口縁で頂部が山形に尖るが、2～5、7は丸みを帯びる。7は口唇が肥厚し、頸部に縄文帯が巡る。

C3類 (第96図) 口縁部と頸部に刻目帯を有するもので、口唇が肥厚するものが多い。1～6は口縁部と頸部に1段の刻目帯が巡る。1、4、5は刻目帯が外側に貼り出す。7～12は口縁部と頸部に2段の刻目帯が巡る。7、9、10、11、12の口縁部刻目帯では、沈線で上下段に区画した後、上下段にそれぞれ縦の刻目を施すが、8では先に縦の刻目を施してから、上下段に区画する横沈線を施している。7を除き、口縁部から体部に施文されるモチーフ内には羽状縄文が施文される。



第93図 西区：遺構外出土土器(8) V群 後期中葉



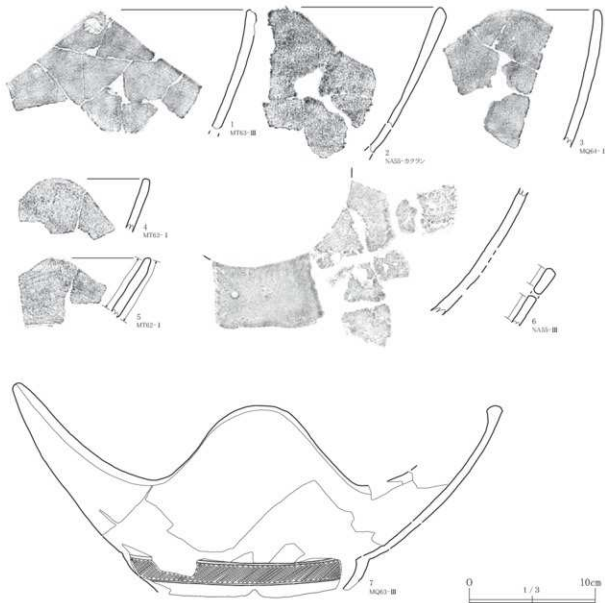
第94図 西区：遺構外出土土器（9）V群 後期中葉

C4類 (第97図1、2) 口縁部と頸部に縄文帯を有するもので、口唇は肥厚する。口縁部に一条の沈線が巡り、縄文帯が作出される。文様モチーフ内は羽状縄文が施文される。

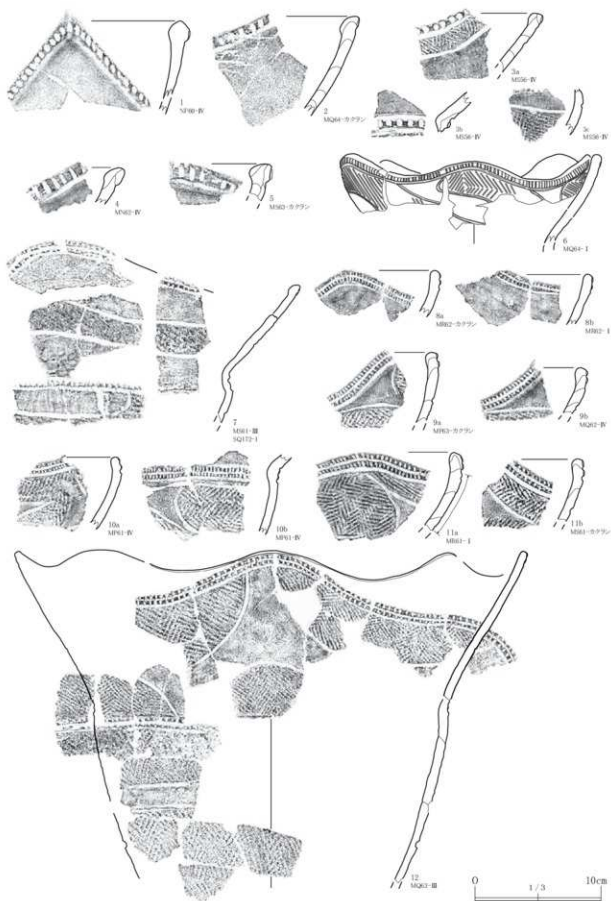
C5類 (第97図3) 口縁部全面に縄文が確認できるもの。口唇は肥厚する。また、縄文の一部は羽状となっている。

D類 (第97図4、5) 地文の上に多重沈線文が施されるもので、4はLR縄文に斜めの多重沈線が施されている。5は羽状縄文が施文された後に、3～5条の多重弧線文が描かれる。

深鉢以外の器種 (第98図) 1、2、3はV群の鉢である。1は体部に平行沈線文がめぐり、底面には敷物圧痕（飛びごじ目）がみられる。2も底面に敷物圧痕（ごじ目）がみられる。3は体部に斜沈線が施文されている。4～8は壺・注口土器である。9～11は器種が不明だが、文様と器形から本分類に入れた。



第95図 西区：遺構外出土土器 (10) V群 後期中葉



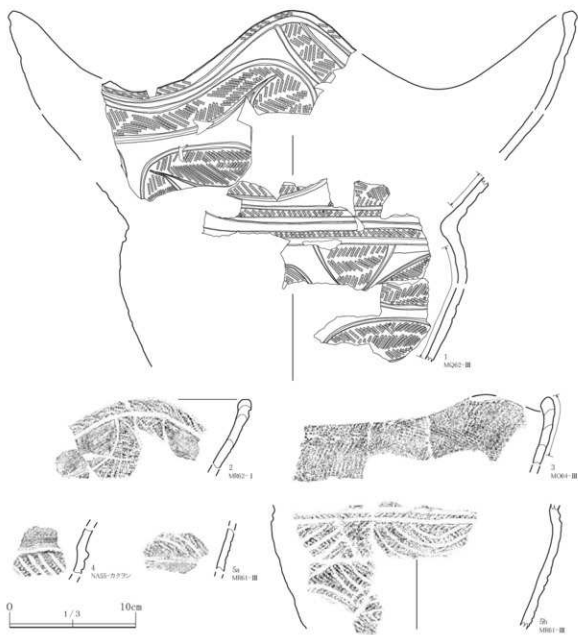
第96図 西区：遺構外出土土器（11）V群 後期中葉

VI群 縄文時代後期後葉に属する土器

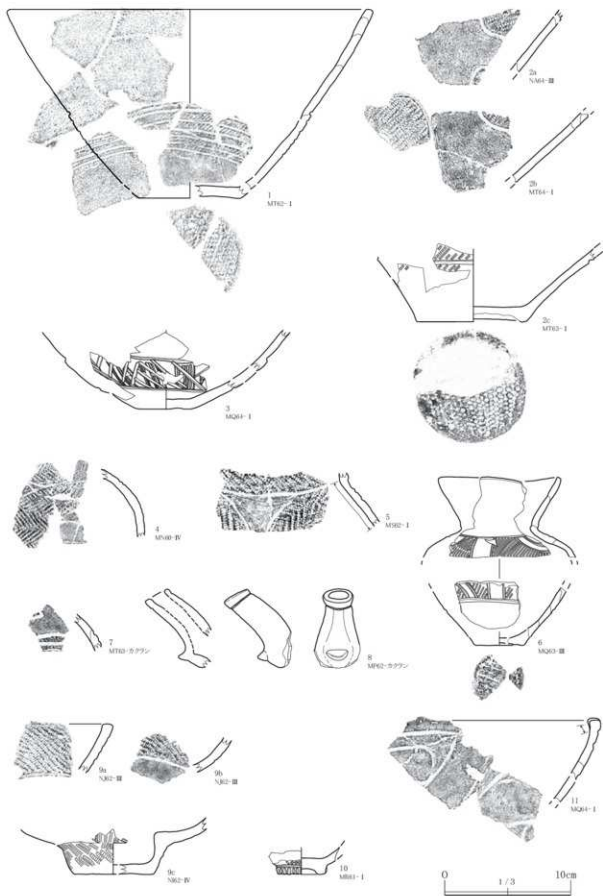
A類 内面が肥厚する口唇部を有し、器面には沈線による区画やモチーフが描かれるもの。区画内は矢羽状に縄文が充填される。文様によって細分した。

A1類 (第99図) 比較的幅の狭い縄文帯で襷掛けなどのモチーフを描くもの。1は頂部で二又に分かれる突起が付いている。2は頂部が二又に分かれる大・小の突起が付いている。6は口縁部に指でつまんだような背の低い突起と親指状突起が付いている。4は比較的大きな三角状の突起と頂部が二又に分かる小突起が付いている。

A2類 (第100図1～9) 横走る幅の狭い縄文帯によって無文帯が形成されるもの。9は8の口縁部と類似しているため本分類に含めた。



第97図 西区：遺構外出土土器(12) V群 後期中葉



第98図 西区：遺構外出土土器(13) V群 後期中葉

A3類 (第100図10) 口縁直下や頸部にわずかに無文帯を残し、器面全体に羽状縄文を施すもの。10は指でつまんだような山状の突起が付き、口縁部に2条の沈線がめぐる。

B類 貼瘤が多用されるもので、器形と文様構成から細分した。

B1類 (第101図1) 大波状口縁を有するもの。1は三角状の大波状口縁で細い縄文帯でモチーフが描かれている。

B2類 (第101図8～19) 平口縁を有し、器面に描かれた入組帯状文などのモチーフ内に貼瘤を多用するもの。10、11、13、18は沈線の上に瘤が、8、9、16は縦長の瘤が、15は横長の瘤が付く。10、11、12では前に張り出すような突起が付く。

B3類 (第101図2～4) 平口縁を有し、器面に描かれた入組文内部に櫛歯状沈線が確認できるもので、磨消手法が用いられている。2は大波状口縁または三角状の突起が付いていた可能性が高い。また頂部で二又になる2個一対の突起が付いており、器面には前に張り出すような瘤が付く。

B4類 (第101図5～7) 平口縁を有し、器面には格子目状沈線文が確認できるもの。5は口縁直下と頸部には前に張り出すような瘤が、文様帯には格子目状沈線文が施文される。

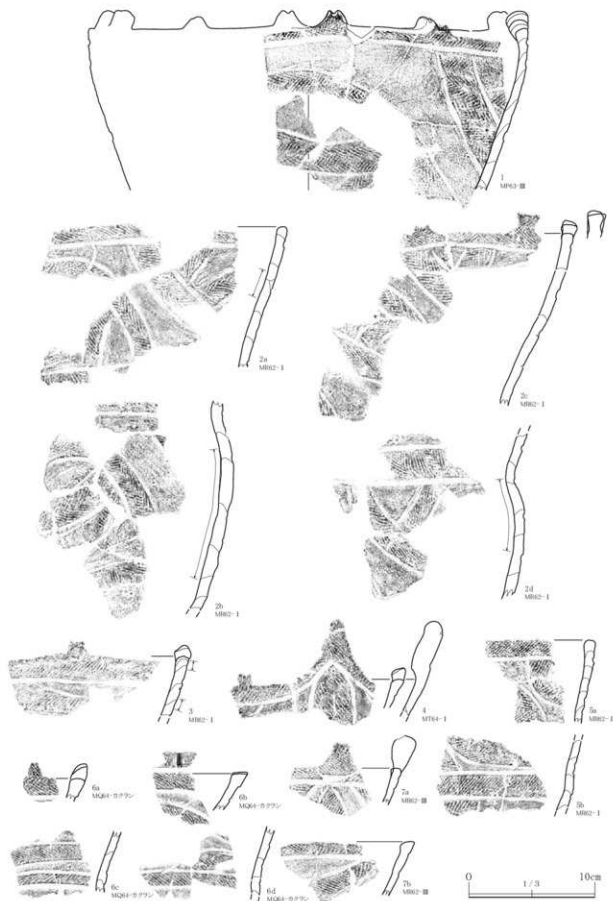
C類 (第102図1～9) 入組文等のモチーフに刻目を充填するもので、平口縁に小振りの突起が施されるものが主となる。1～7は入組帯状文などの幅の細い文様帯に刻目が充填される。8、9は紐状の粘土に刻みが増えられ、瘤が連続するような効果が生きている。

D類 (第102図10～18) 口縁部に頂部が肥厚する台形突起を有し、器面には入組帯状文が描かれるもの。10、12、13は突起の基部に三叉文が施される。16と17は文様帯内に刻目が施されているが、VI群C類よりも刻みの間隔が狭くなっている。18は口縁部が欠損しているが胴部文様が10と類似しているため本分類に入れた。

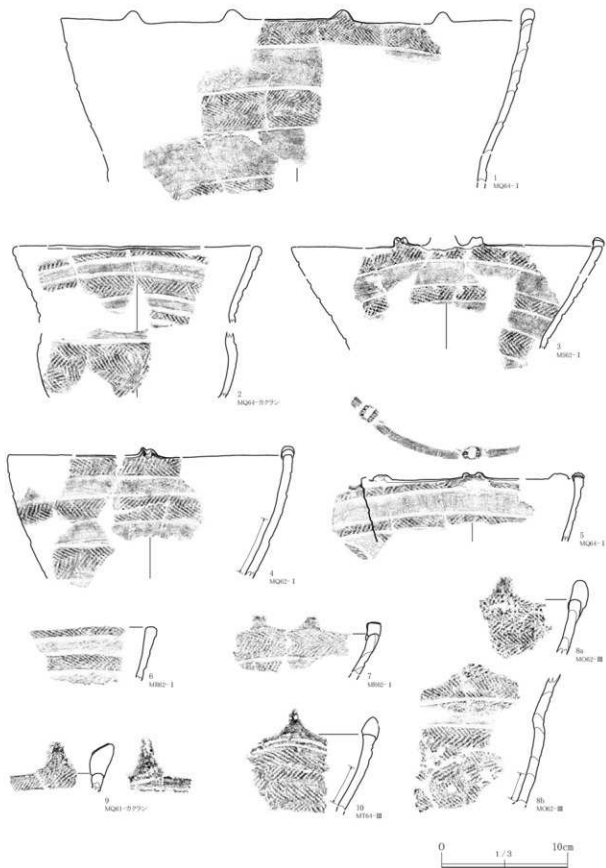
E類 (第103図4、5) 入組帯状文が分離、あるいは縦や横と連結しているもの。4は平口縁で器厚がうすく、前に張り出した小ぶりの突起が付く。幾何学状入組文が施される。5は入組帯状文の連結部が離れている。

F類 (第103図1～3) その他、後期後葉に属すると目されるものを一括した。1、2は文様の要所に貼瘤が付くもので、1は小ぶりの瘤を中心に細い縄文帯が展開する連結帯状文が施されている。2は小ぶりの瘤から弧線状の沈線が展開する。3は貼瘤の頂部が比較的平坦でボタン状のものである。

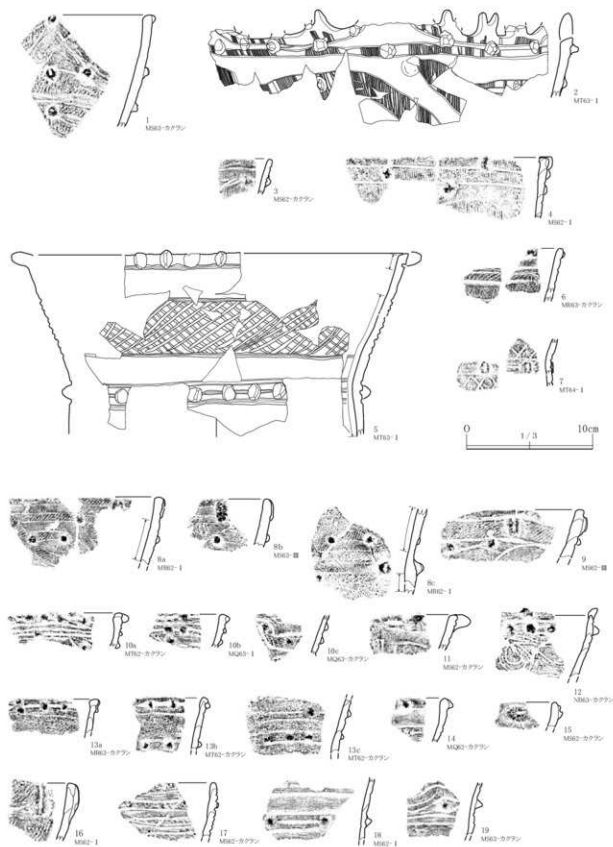
深鉢以外の器種 (第103図6～22) 6はVI群の浅鉢で、細い縄文帯の上に小ぶりの瘤と縦長の瘤が付く。8～21はVI群の壺・注口土器である。壺は11～14で貼瘤が確認できる。7～10は幅の狭い縄文帯のモチーフが施されている。15は無文の徳利形の壺である。器形自体は後期中葉からみられるが、無文化が進んでいることから後期後葉と判断した。注口は16～19で貼瘤が確認できる。20、21は無文の注口部である。16、18、19は注口破損部にアスファルトが付着しており、補修の痕跡と考えられる。22は香炉形土器である。



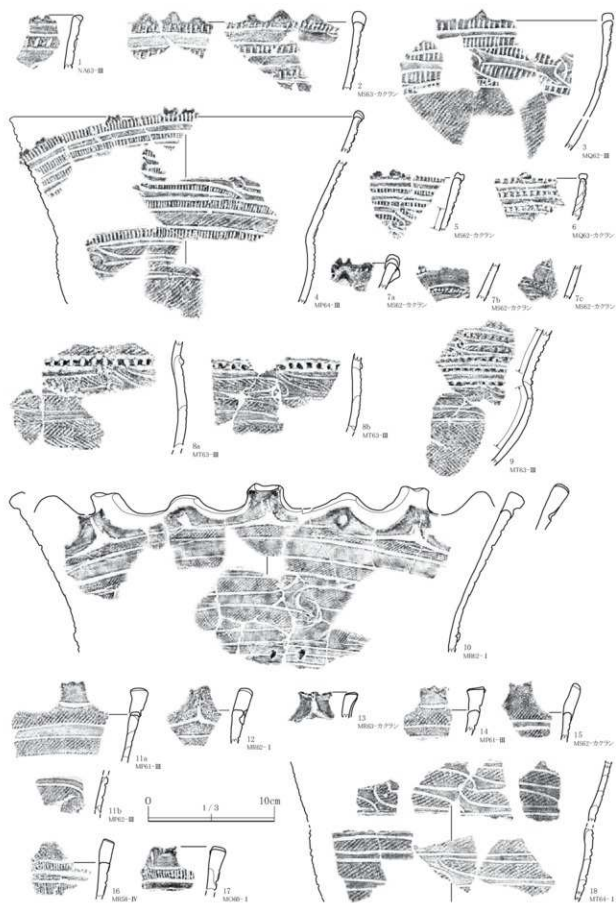
第99図 西区:遺構外出土土器(14) VI群 後期後葉



第100図 西区：遺構外出土土器（15）VI群 後期後葉

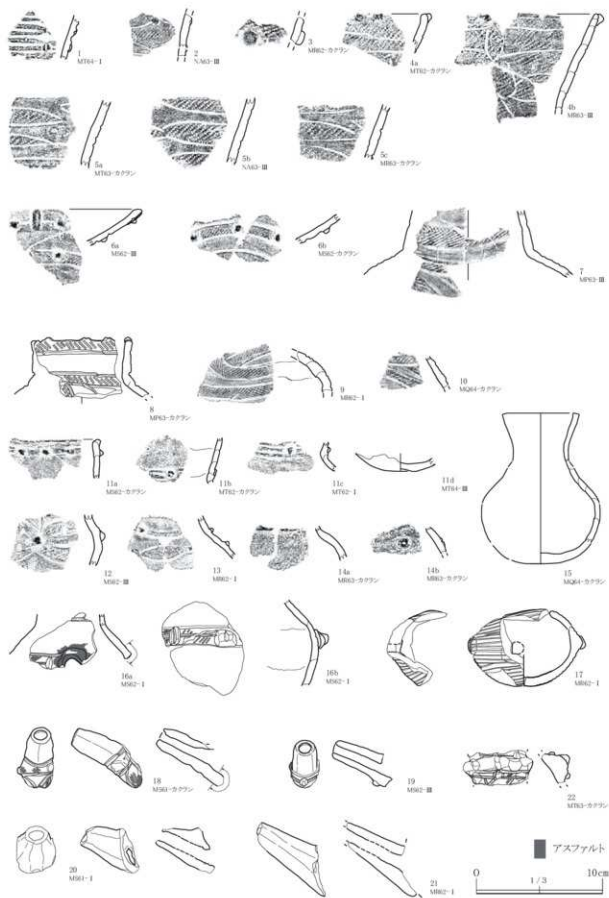


第101図 西区：遺構外出土土器（16）VI群 後期後葉



第102図 西区：遺構外出土土器 (17) VI群 後期後葉

第3章 調査の方法と成果



第103図 西区：遺構外出土土器(18) VI群 後期後葉

VI群 縄文時代晩期に属する土器

A類 (第104図1～5) 深鉢の括れ部に短沈線を有するもので、晩期初頭に属する。口縁には大小の突起が交互に配置される。突起はVI群段階に比しやや薄手となる。4と5は頸部文様帯に入組帯状文と短沈線が施されている。3は短沈線の上に幅の狭い刻目が施されている。2は口縁突起部中央に小ぶりの貼瘤が付くもので、5と類似するため本分類に入れた。1は頸部文様帯に三叉文と弧状線文が施されている。短沈線は認められないが、突起の形状や文様から本分類に含めた。

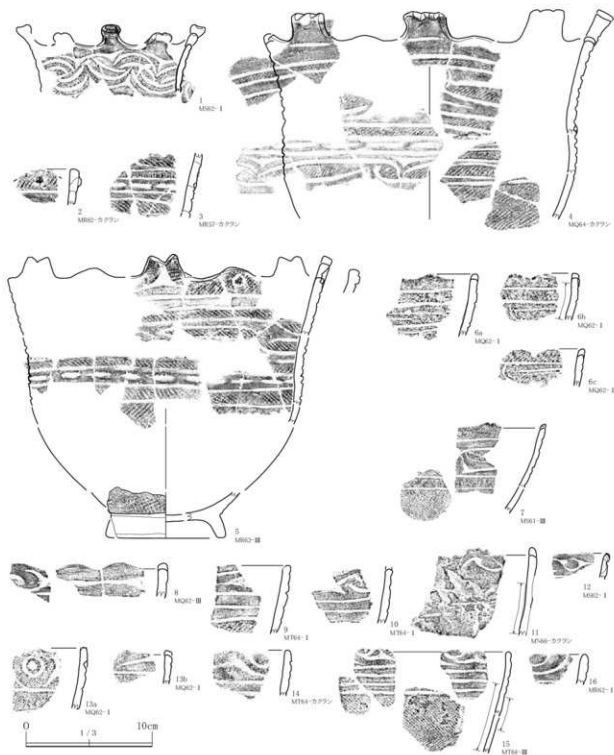
B類 (第104図6～15、第105図) 小波状口縁、あるいは平口縁に控えめな突起を有するもので、晩期初頭～前葉に属する。口縁部や頸部には三叉文や、やや崩れた入組帯状文が描かれる。第104図6、7には入組帯状文、8、11、12には三叉文、13には魚眼状三叉文、14～16には口縁部直下に弧状線文が施されている。第105図1～3は台付浅鉢で、1は口縁部に2条の沈線がめぐり、X字状の把手が付く。内外面には赤色顔料が付着している。3は口縁部に三叉文が施され、一段の帯状文がみられる。4は無文でミガキが顕著である。第105図5～9は注口、もしくは壺と思われるもので、5は口縁部に入組文が施文されており、突起状底部となる。7も同様の底部形態である。9は肩部破片で外面に膜状の赤色顔料が付着している。10は胴部が「く」字状に張る赤彩壺で、頸部から胴部には三叉文や菱形文が施文されている。外面は全面に、内面は口縁部から頸部まで赤色顔料が付着している。11は注口土器で、口縁部に小ぶりの突起が付く。体部には節の小さい縄文が施文され、注口部を中心に同心円状に沈線がめぐり、注口部先端は摩滅している。12は無文の注口土器で底部が丸底になる。

C類 (第106図、第107図) 羊歯状文や羊歯状文が形骸化した刺突列、平行沈線を有するもので、晩期前葉に属する。第106図1～20は深鉢で口縁部にはB突起が付き、篋で刻みを入れ立体的に作出された漣状線や小波状線が施されている。8～10は羊歯状文が平行化したもの、11は簡易な列点だけ施されているもの、12～20は平行沈線だけのものである。口縁部形態から本分類に入れた。11のみ頸部が屈折する。第107図1～4は鉢でいずれもB突起が施されており、口縁部文様帯と体部の間に2条の沈線がめぐり、1と2はB突起が密に配列されている。第107図5は壺あるいは注口土器、6、7は注口土器である。7は注口部付け根にアスファルトによる補修痕が認められる。

D類 (第108図1～5) 口縁部から頸部に刺突列や細かな刻み目を有するもので、晩期中葉に属する。胴部には雲形文なども描かれる。1、2は鉢である。2は口縁部に刻み目列、体部に雲形文が施されている。また体部に穿孔がみられる。1は外面の摩滅が著しく文様・地文は不明瞭だが、刻み目列が確認できる。また外面・内面に漆と思われる膜状付着物がみられる。付着物の色調は外面にふい赤褐色、内面に黒色である。3～5は浅鉢で、口縁直下に刻み目列が施される。4、5は体部に雲形文が描かれる。

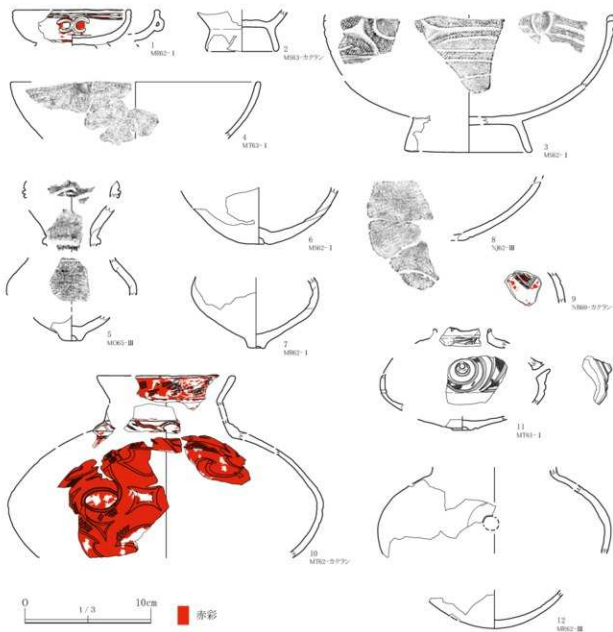
E類 (第108図6～20) 工字文や四字文が描かれるもので晩期後～末葉に属する。6～10は鉢である。6、8は横位の平行沈線に縦位の沈線が加えられる。口縁部内面に1条の沈線が巡る。7は粘土粒貼り付け後に沈線の挟りによって2つの小突起が作出されるもので、口唇部に刻み目、口縁部内面に1条の沈線がめぐり、9、10は変形四字文が施され、口唇部に刻み目、口縁部内面に1条の沈線がめぐり、11～18は四字文を有する浅鉢・台付浅鉢で、14～18は台部が残存する。19、20は壺であり、19は四字文に刺突列が施されている。沈線内に赤色顔料が一部残存している。

F類 (第109図1～11) 口唇に刻み、口縁内面に沈線を有するもので、平行沈線文は描かれるもの

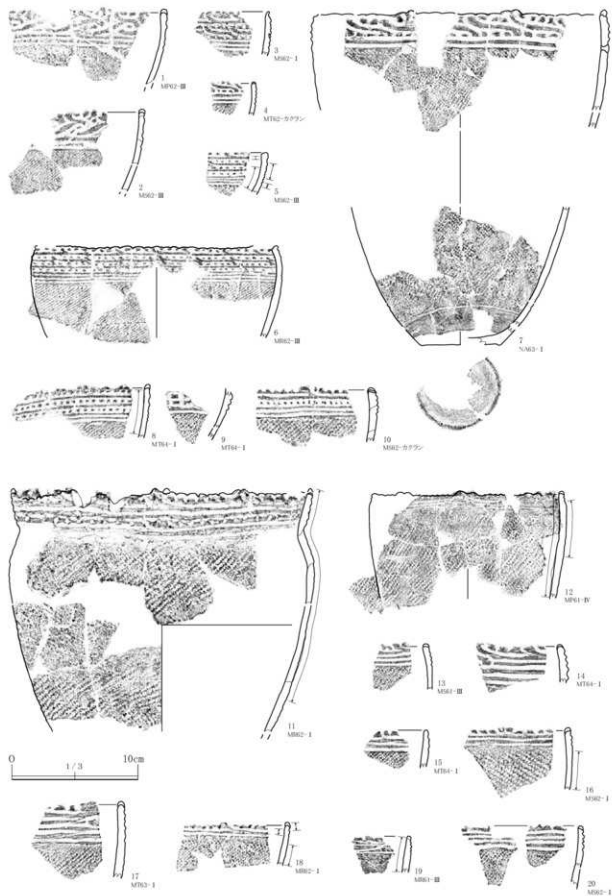


第104図 西区：遺構外出土土器（19）Ⅶ群 晩期

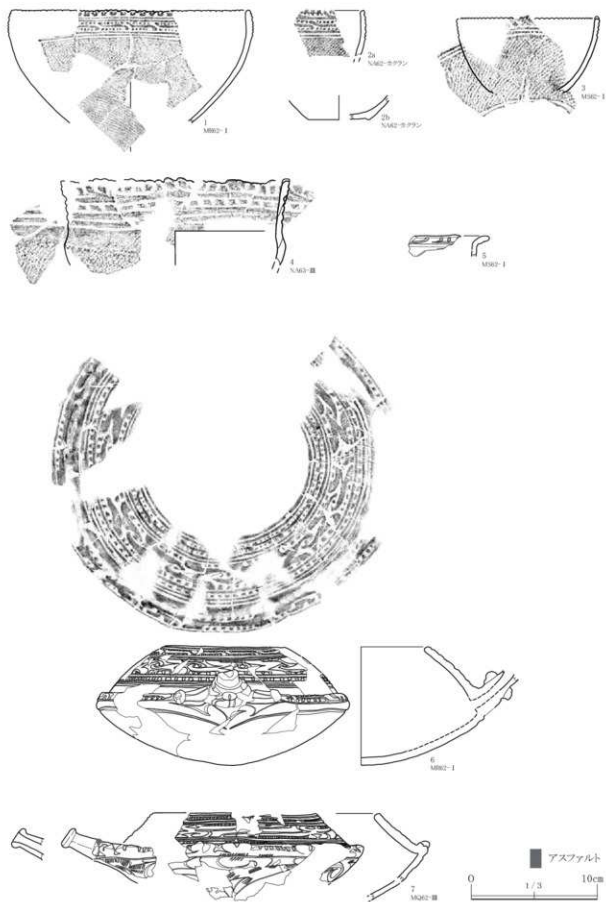
の、他の文様要素が少なく時期決定の決め手に欠ける。晩期後～末葉に属する可能性が高い。1～6は深鉢である。5は5条の平行沈線がめぐり、上から4本目の沈線内には浅い刺突列が施されている。6は口縁部が無文で、屈折した頸部から下には平行沈線が描かれる。沈線の間には一列のみ、器面に対して斜めの角度に刺突が施されている。1、2は口唇が外傾し、刻みが施されている。口縁～頸部は無文で、頸部は比較的丸みを帯びる。3は口縁部が欠損しているが、体部には縄文が施され、口縁～頸部に押し引いたような沈線文が施されている。4は口唇に刻み目が施され、口縁部は無文、頸部から体部上半まで平行沈線がめぐる。7～9は鉢である。平行沈線が巡るもので、7、8は口唇部に刻み目が施され、頸部は湾曲する。8、9は口縁部内面に1条の沈線がめぐる。10は浅鉢である。口縁部～頸部にかけて丸みを帯び、口縁部内面に1条の沈線が施されている。11は台部で外面に削りが施されている。内面には成形時の指頭痕がみられる。



第105図 西区：遺構外出土土器（20）Ⅶ群 晩期

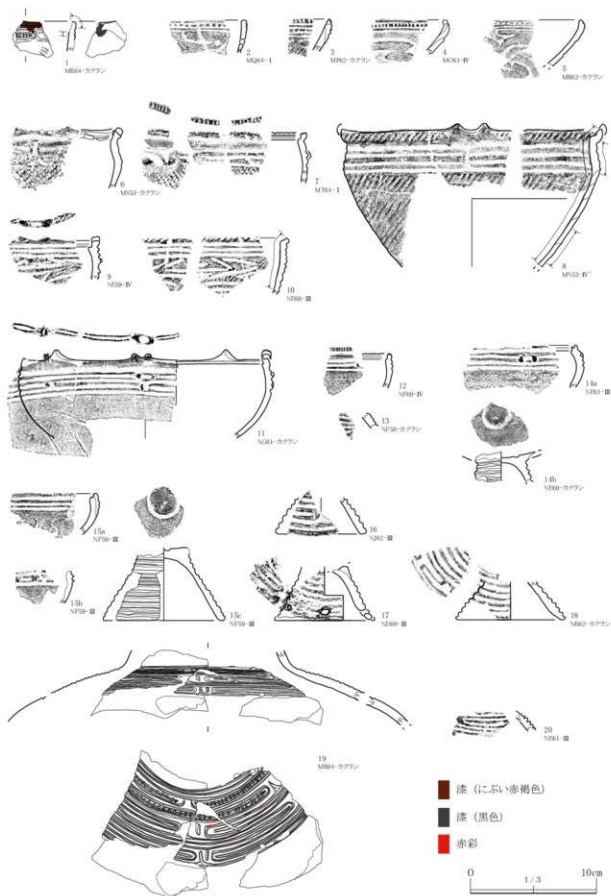


第106図 西区：遺構外出土土器(21) VII群 晩期



第107図 西区：遺構外出土土器（22）Ⅶ群 晩期

第3章 調査の方法と成果

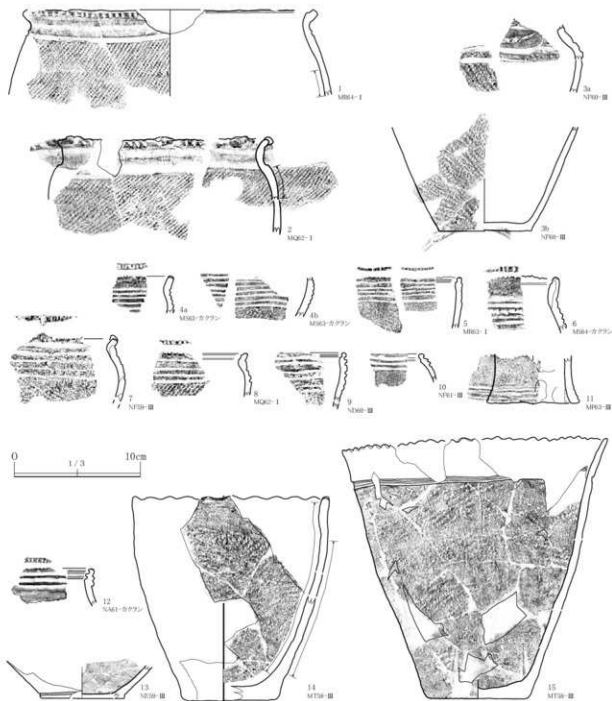


第108図 西区:遺構外出土土器(23) VII群 晩期

Ⅶ群 弥生時代に属する土器

A類 (第109図14、15) 小波状口縁で口縁部に無文帯を有するもの。胴部には細く、撚りの弱い原体による地文縄文が施される。14、15は小波状口縁で口縁部が無文、体部に縄文が施される。15は頸部に沈線がめぐる。14と15は遺構外出土であるが、出土地点が同じで、共存性が高い資料である。

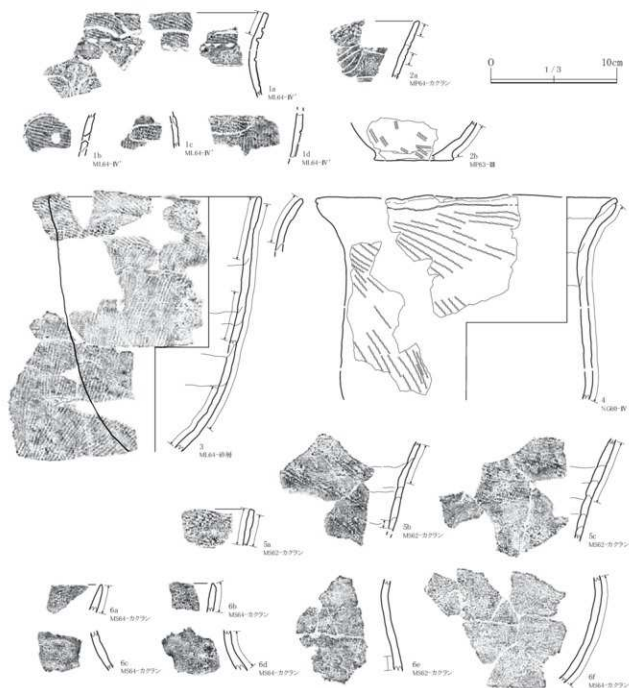
B類 (第109図12) 口唇に刻みを施し、口縁部内外面に巡らせた幅広の平行沈線で立体的な仕上がりになっているもの。12は深鉢または鉢で比較的幅広の沈線がめぐる、口縁部内面に2条の沈線がめぐる。



第109図 西区：遺構外出土土器 (24) Ⅶ～Ⅷ群 晩期～弥生

C類 (第110図1、2) 沈線文や刺突でモチーフを描くもの。1は平口縁で、口縁部には上向きの連弧文が施され、平行して刺突列が並ぶ。文様帯は頸部から体部にも広がっており、楕円形の沈線文もみられる。焼成後穿孔がみられる。2は文様の展開は完全にはわからないが、重菱形文のような文様が展開すると思われる。同一個体と思われる底部も出土している。

D類 (第110図3～6) 地紋のみが施される深鉢で、胴部がやや張るもの。薄手で器壁の整え方が甘く輪積み痕跡が明瞭に残る。3は地文の向きが口縁部は斜位～横位、体部は縦位である。頸部に少しの段が付き、器壁の厚さは一定せず、粗雑な成形である。4、5は地文の向きが口縁部は横位、体部



第110図 西区：遺構外出土土器 (25) Ⅷ群 弥生

は斜位である。燃糸の幅は比較的広い。5は器壁の厚さは一定せず、粗雑な成形である。4は口縁部がラッパ状に開き、体部下半が少し膨らむ。6は地文の向きが口縁部、体部ともに横位である。口縁部が少し外傾し、頸部から体部にかけてで肩になる。頸部は無文となる。

その他(第109図13)鉢または浅鉢の底部で、1条の沈線がめぐる。赤褐色の胎土を有する。胎土と器形が他の時期に当てはまらなかったため本分類に入れた。

Ⅹ群 文様要素が少なく、詳細な時期の特定には至らなかった土器(縄文～弥生)

A類 器形や文様に特徴のあるもので、特徴毎に細分した。

A1類 (第111図1～6) 縄圧痕が施され、口縁部あるいは頸部に無文帯を有するもの。6以外は口縁部と頸部の境に縄圧痕が施されている。口縁部は1が無文帯のみで、他は縄文帯と無文帯が巡る。同様の類例は鹿角市の大湯環状列石や由利本荘市の智者鶴遺跡などにみられる。これら類例と器形の観点から縄文後期前葉～中葉に属すると思われる。

A2類 (第111図7) 頸部のくびれが強く、口縁部が直線的に外反するもの。7と第93図1は遺構外出土であるが、同一地点からの出土で、共存性が高い資料である。また7の器形は第92図3と類似している。以上の観点から7は縄文後期中葉に属すると思われる。

A3類 (第111図8～10) 小波状口縁を有するもの。10の口縁は器面に対して斜めの角度で小波状が作り出されている。縄文晩期初頭～前葉に属する可能性がある。

A4類 (第111図11～16) 沈線が巡るもの。11～13、16は口唇部に刻みが施されている。器厚が比較的薄いものが多い。縄文時代晩期中葉～末葉に属する可能性がある。

A5類 (第111図17、18) 口縁部に無文帯を有し、頸部がくびれるもの。胴上半部がやや張る。

A6類 (第112図1～6) その他。1は口唇部まで縄文が施される。2、3は口縁部が肥厚する。4～6は無文部があり、5は屈曲部が肥厚する。

B類 (第112図7～11) 地文に櫛歯状工具による沈線文が施されるもの。口縁部が内湾するものが多い。10は口縁部に瘤状の突起が付く。

C類 (第112図12～17) 無文のもの。器面調整が粗雑で、粘土組織み上げ痕が顕著に確認できる。

D類 地文縄文のみ施されるもので、縄文の種類によって細分した。

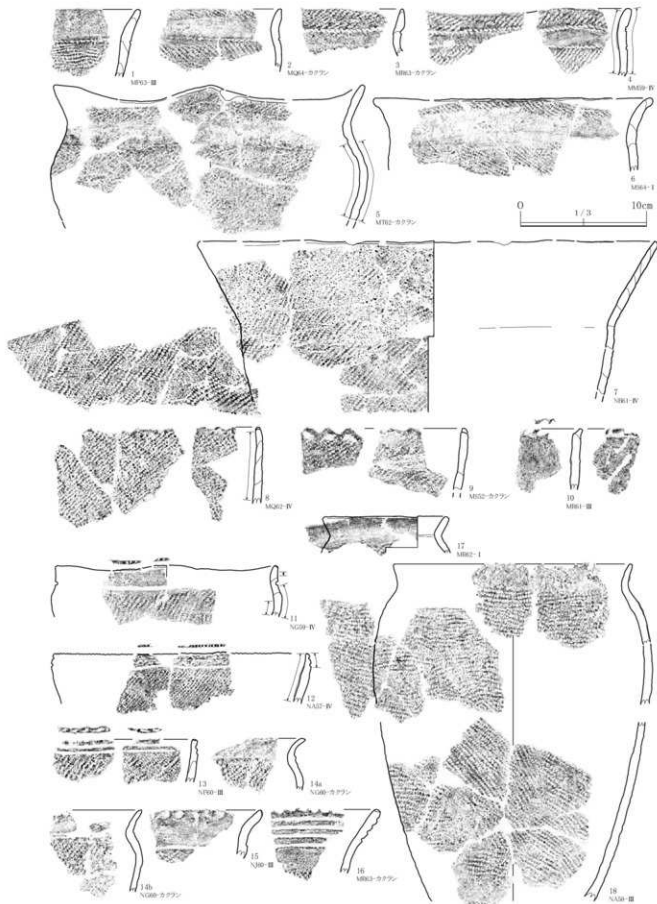
D1類 (第113図) 羽状縄文が施されるもの。1～3は口縁部が内湾する。1は補修孔がみられる。3は調整が丁寧で口唇部・内面にミガキが施されている。4～6は口縁部が外傾する。7～13は口縁部が比較的垂直に立ち上がるものである。11は補修孔がみられる。13は鉢である。

D2類 (第113図14) 付加条の縄文が縦位に施されるもの。

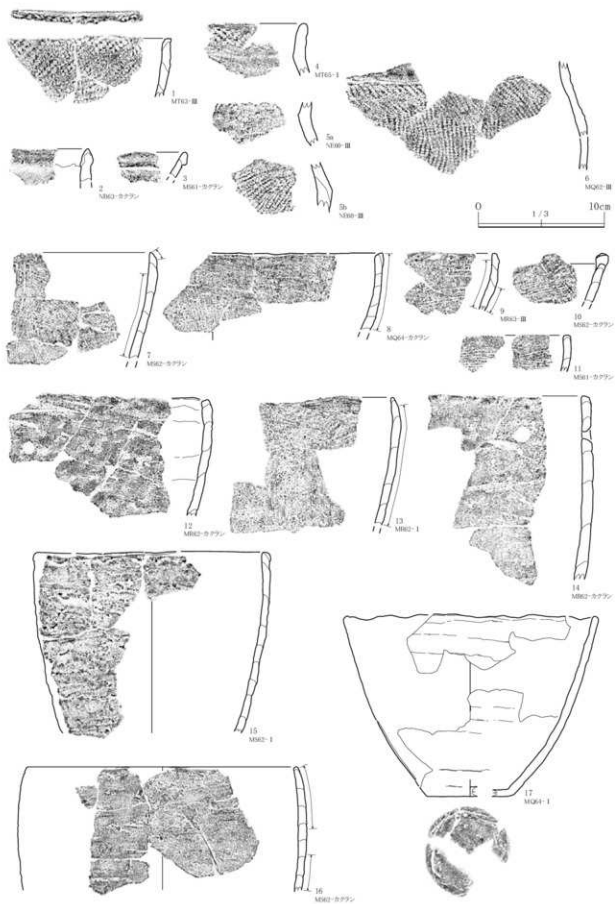
D3類 (第114図、第115図、第116図1～8) 斜行縄文が施されるもの。第114図は口縁部が内湾するものである。5は1対の補修孔がみられる。10は内面成形時の指頭痕がみられる。1も口縁部外面に成形時の指圧痕と思われる凸凹がみられる。第115図は口縁部が外傾するものである。15は口縁部外面に焼成時のハジケがみられる。7は外面に縄の繊維痕がみられる。第116図1～8は口縁部が比較的垂直に立ち上がる。

E類 底部資料

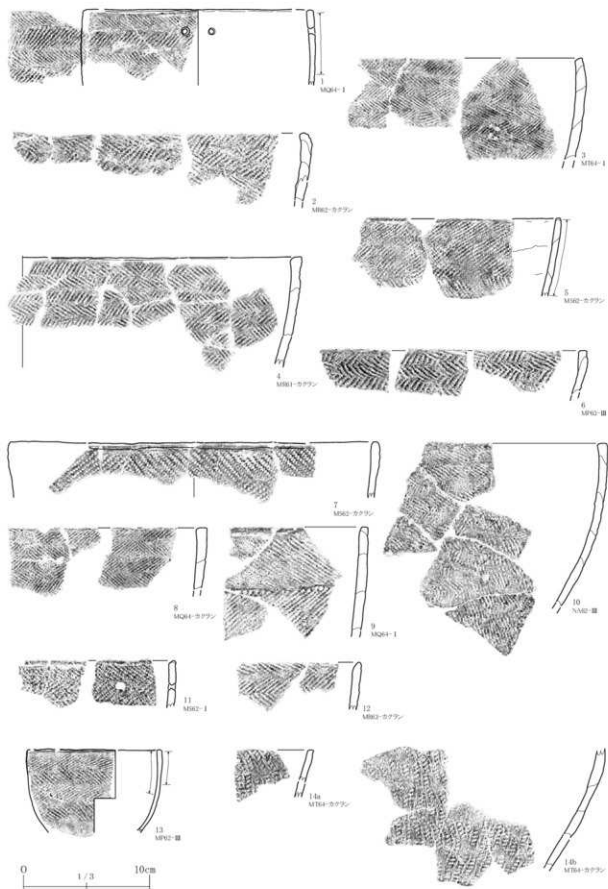
E1類 (第116図9、10) 上げ底となるもの。縄文時代晩期の可能性がある。



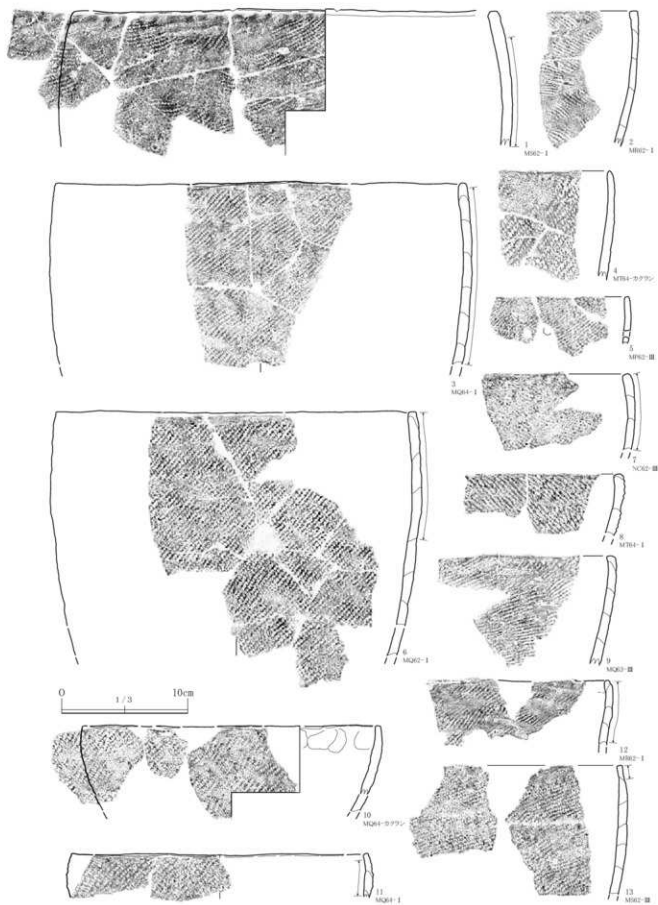
第111図 西区：遺構外出土土器(26)区群 相製



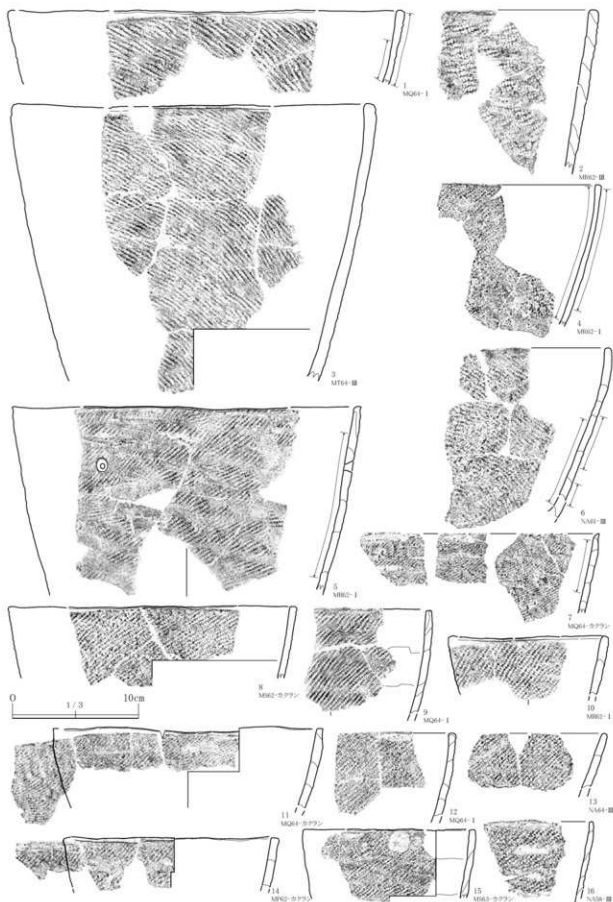
第112図 西区：遺構外出土土器（27）区群 粗製



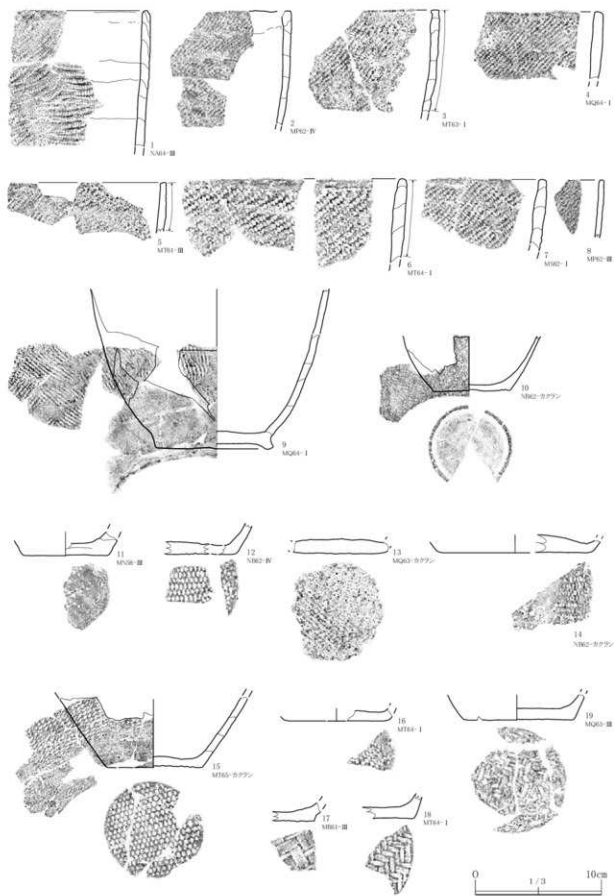
第113図 西区：遺構外出土土器(28) 区群 粗製



第114図 西区：遺構外出土土器(29) 区群 粗製

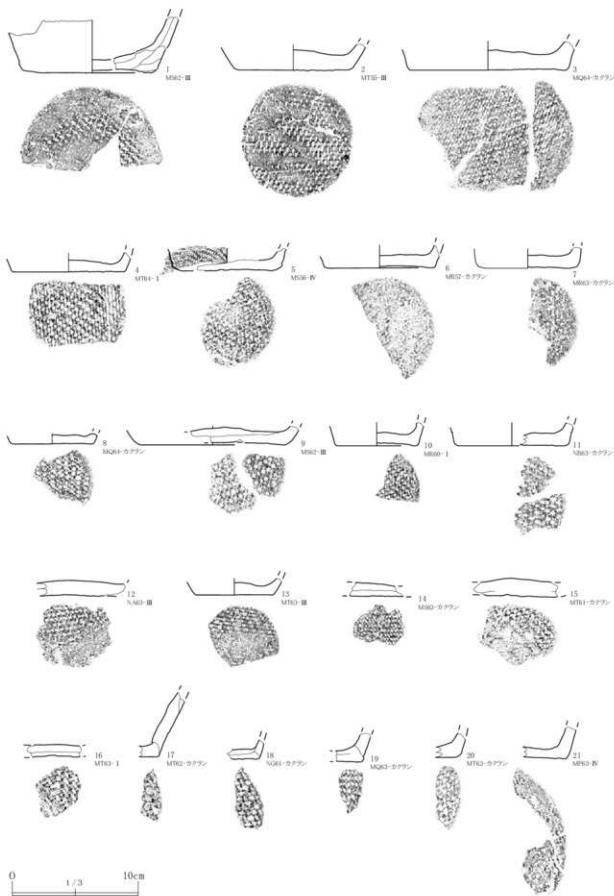


第115図 西区：遺構外出土土器（30）区群 相製

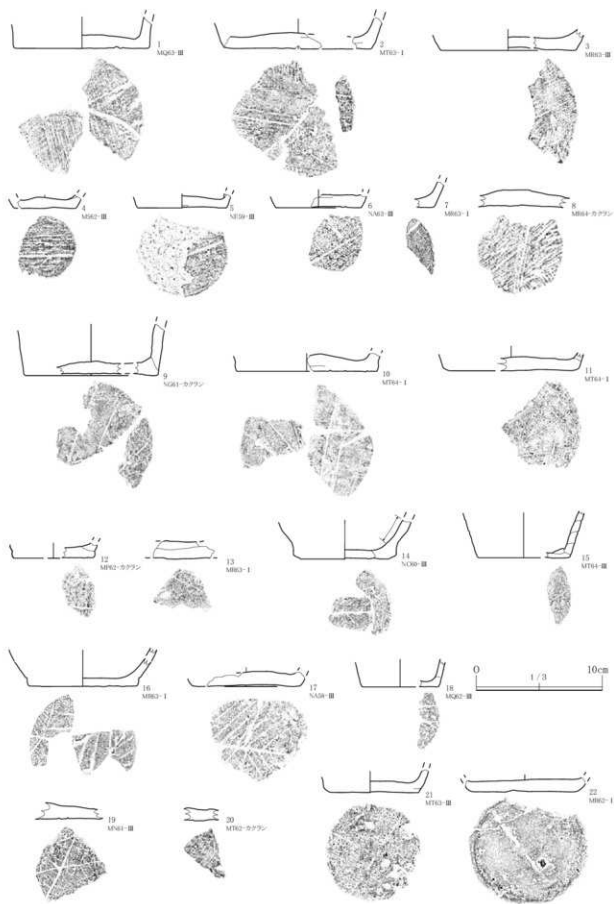


第116図 西区：遺構外出土土器(31) 区群 粗製

第3章 調査の方法と成果



第117図 西区：遺構外出土土器（32）区群 相製



第118図 西区：遺構外出土土器(33) 区群 相製

E2類（第116図11～19、第117図、第118図）敷物圧痕のあるもので、52個体が確認されている。文様が残されていないため時期判断は難しいが、多くは縄文後期～晩期に属する資料と思われる。

本分類以外に詳細な時期のわかる資料が7個体確認されており（第89図5、第90図3、第98図1・2・6、第161図4・5）、敷物圧痕のある土器は合計59個体となる。木葉痕は平行葉脈のもの（第118図1～8）と、網状葉脈のもの（第118図9～22、第89図5、第90図3、第161図4・5）がみられる。編物痕はござ目（1越え・1潜り・1送り）（第116図11～15、第98図2）、2本飛び飛びござ目（1越え・2潜り・1送り）（第117図1～21、第98図1・6）、2本飛び網代（第116図17）、3本飛び網代（第116図18）、波形網代編み？（第116図19）が確認できる。

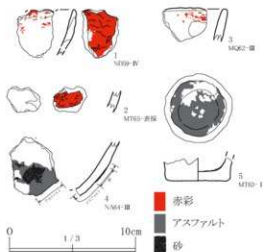
詳細な時期がわかる資料は少ないが概観してみると、縄文時代のうち後期前葉は木葉痕2個体（第89図5、第90図3）、後期中葉はござ目1個体（第98図1）、2本飛びござ目2個体（第98図1、第98図6）、古代は木葉痕2個体（第161図4・5）である。縄文時代だけに絞って圧痕の種類をみると、木葉痕25個体（内、平行葉脈9個体、網状葉脈16個体）、編物痕33個体（内ござ目9個体、2本飛びござ目21個体、2本飛び網代1個体、3本飛び網代1個体、波形網代編み？1個体）である。木葉痕よりも編物痕の方が若干多い。木葉痕の中では平行葉脈のものよりも網状葉脈のものが多い。編物痕をみると2本飛びござ目が最も多く、トクラ遺跡の特徴であるといえる。

付着物が確認された土器

赤色顔料付着土器（第119図1～3）1と2は膜状付着物が内面に確認できるものである。1は外面にも付着痕が残っている。付着物は茶褐色である。いずれも漆と思われるが赤色顔料が混ざられている可能性がある。3は口唇部と外面に赤色顔料が付着しており、ルーペによる肉眼観察では膜状ではなく粉末状の付着物が確認できたことから、漆が混ざられている可能性は低いと思われる。

アスファルト付着土器（第119図4、5）4は外面と断面にアスファルトが付着している。外面にはアスファルトの上から砂粒が付着している。土器の補修のための付着またはアスファルトすくい取るヘラなどに使われた可能性がある。5は小型の土器底部で、内面にアスファルトが1.5mm以上の厚さで付着している。アスファルトの運搬・保管容器

の可能性が考えられる。



第119図 西区：遺構外出土土器（34）
赤色顔料・アスファルト付着土器